千葉県教育振興財団調査報告第658集

千原台ニュータウンXXVIII

― 市原市野馬堀遺跡（2）・ナキノ台遺跡（上層）　―

平成23年3月

独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

千原台ニュータウンXXⅧ

― 市原市野馬堀遺跡（2）・ナキノ台遺跡（上層）　―

序　　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第658集として，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の千原台地区土地区画整理事業に伴って実施した市原市野馬堀遺跡（2）・ナキノ台遺跡（上層）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，縄文時代から奈良・平安時代にかけての集落跡のほか，草刈古墳群の一部など多数の遺構・遺物が検出され，この地域における原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　赤　羽　良　明

凡　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による千原台地区におけるニュータウン建設計画（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書に収録したのは，千葉県市原市押沼字野馬堀736（現市原市ちはら台東２丁目）ほかに所在する野馬堀遺跡（遺跡コード219－001）及び市原市押沼字水堀江592（現市原市ちはら台南４丁目）ほかに所在するナキノ台遺跡（遺跡コード219－015）の資料である。ただし，本書で扱うのはナキノ台遺跡のうち「千葉県教育振興財団調査報告第580集　千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－」で既に刊行されている下層の調査成果以外の，上層の調査成果分の資料である。また，野馬堀遺跡は既に一部を報告しているため，野馬堀遺跡（２）として報告する。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の経緯と組織・担当者は第Ⅰ部・第Ⅱ部ともに各第１章第１節に記した。

5　本書の執筆は，第Ⅱ部第２章第１節・第２節のうち，竪穴住居・炉穴を主とした部分を上席研究員小林清隆，石器類を上席研究員 田島 新が行った。それ以外の執筆と編集は主席研究員 加藤正信が行った。また，編集と校正には宮　文子の協力を得た。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社，市原市教育委員会ほか多くの方々から御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

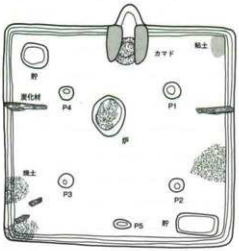
　第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「蘇我」（昭和59年発行）（N-54-19-15-２）

8　本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標値については日本測地系で表記している。

9　図版１の航空写真は，昭和45年に撮影された財団法人日本地図センター発行の写真を使用している。

10　本書に掲載した遺構等の番号は，原則として調査時に使用したものをそのまま踏襲した。

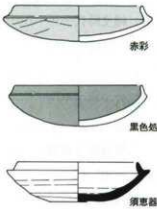
11　挿図中のスクリーントーン等の用例は下記に示したとおりを原則としている。但し，個々に特殊な用例は各図に添付した。



P1～P4　主柱穴
P5　梯子穴
貯　貯蔵穴

・土器
▲土・石製品（玉）
■金属製品

K 撹乱



本文目次

第Ⅰ部　野馬堀遺跡（2）
第1章　はじめに…… 3
第1節　調査の概要…… 3
1　調査の経緯…… 3
2　調査方法と経過…… 3
第2節　遺跡の位置と環境…… 4
1　遺跡の位置と周辺地形…… 4
2　野馬堀遺跡と周辺の遺跡…… 4
第2章　検出した遺構と遺物…… 7
第1節　縄文時代…… 7
1　土坑・炉穴…… 7
2　出土遺物…… 9
第2節　平安時代…… 15
1　竪穴住居…… 15
第3節　まとめ…… 15

第Ⅱ部　ナキノ台遺跡（上層）
第1章　はじめに…… 19
第1節　調査の概要…… 19
1　調査の経緯…… 19
2　調査方法と経過…… 19
第2節　遺跡の位置と環境…… 21
1　遺跡の位置と周辺地形…… 21
2　ナキノ台遺跡と周辺の遺跡…… 21
第2章　検出した遺構と遺物…… 26
第1節　縄文時代…… 26
1　竪穴住居…… 26
2　炉穴…… 26
3　陥穴…… 35
4　土坑…… 35
5　遺構外出土遺物…… 41
第2節　古墳時代…… 91
1　竪穴住居…… 91
2　方墳…… 135

3　溝状遺構……141
4　遺物集中地点……141
5　遺構外出土遺物……141
第3節　奈良・平安時代以降……145
1　竪穴住居……145
2　方形区画墓……146
3　地下式土坑……156
4　塚……159
5　溝状遺構……162
6　そのほかの遺構……163
7　遺構外出土遺物と時期不明遺物……174
第3章　まとめ……176
第1節　縄文時代……176
第2節　古墳時代……177
第3節　奈良・平安時代以降……178

第Ⅲ部　補　遺
第1章　押沼第2・大六天遺跡……199
第1節　押沼第2・大六天遺跡……199
1　押沼第2・大六天遺跡について……199
2　出土遺物補遺……199
報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第Ⅰ部　野馬堀遺跡（2）
第1図　野馬堀遺跡・ナキノ台遺跡と周辺の主な遺跡……5
第2図　野馬堀遺跡周辺地形図……8
第3図　野馬堀遺跡（2）遺構分布及びグリッド配置……9
第4図　縄文時代土坑・炉穴……10
第5図　縄文土器（1）……11
第6図　縄文土器（2）……12
第7図　縄文土器（3）……13
第8図　1号竪穴住居（005）……14
第Ⅱ部　ナキノ台遺跡（上層）
第9図　ナキノ台遺跡遺構分布及びグリッド配置……24
第10図　縄文時代遺構分布……25
第11図　085竪穴住居……27
第12図　炉穴（1）……28
第13図　炉穴（2）……29
第14図　炉穴出土遺物（1）……30
第15図　炉穴出土遺物（2）……31
第16図　炉穴出土遺物（3）……32
第17図　陥穴（1）……36

第18図　陥穴（2）…… 37
第19図　陥穴（3）…… 38
第20図　陥穴（4）…… 39
第21図　陥穴（5）・土坑…… 40
第22図　陥穴出土遺物 …… 41
第23図　遺構外出土土器数量分布（1）…… 42
第24図　遺構外出土土器数量分布（2）…… 43
第25図　遺構外出土土器数量分布（3）…… 44
第26図　遺構外出土土器数量分布（4）…… 45
第27図　遺構外出土土器数量分布（5）…… 46
第28図　遺構外出土土器数量分布（6）…… 47
第29図　遺構外出土土器（1）…… 48
第30図　遺構外出土土器（2）…… 49
第31図　遺構外出土土器（3）…… 50
第32図　遺構外出土土器（4）…… 51
第33図　遺構外出土土器（5）…… 52
第34図　遺構外出土土器（6）…… 53
第35図　遺構外出土土器（7）…… 54
第36図　遺構外出土土器（8）…… 55
第37図　遺構外出土土器（9）…… 56
第38図　遺構外出土土器（10）…… 57
第39図　遺構外出土土器（11）…… 58
第40図　遺構外出土土器（12）…… 59
第41図　遺構外出土土器（13）…… 60
第42図　遺構外出土土器（14）…… 61
第43図　遺構外出土土器（15）…… 62
第44図　遺構外出土土器（16）…… 63
第45図　遺構外出土土器（17）…… 64
第46図　遺構外出土土器（18）…… 65
第47図　遺構外出土土器（19）…… 66
第48図　遺構外出土土器（20）…… 67
第49図　遺構外出土土器（21）…… 68
第50図　遺構外出土土器（22）…… 69
第51図　遺構外出土土器（23）…… 70
第52図　遺構外出土土器（24）…… 71
第53図　遺構外出土土器（25）…… 72
第54図　遺構外出土土器（26）…… 73
第55図　遺構外出土土器（27）…… 74
第56図　遺構外出土土製品 …… 74
第57図　遺構外出土石器数量分布（1）…… 76
第58図　遺構外出土石器数量分布（2）…… 77
第59図　遺構外出土石器（1）…… 78
第60図　遺構外出土石器（2）…… 79
第61図　遺構外出土石器（3）…… 80
第62図　遺構外出土石器（4）…… 81
第63図　遺構外出土石器（5）…… 82
第64図　遺構外出土石器（6）…… 83
第65図　遺構外出土石器（7）…… 84
第66図　遺構外出土石器（8）…… 85
第67図　遺構外出土礫数量分布（1）…… 86
第68図　遺構外出土礫数量分布（2）…… 87
第69図　遺構外出土礫数量分布（3）…… 88
第70図　遺構外出土礫数量分布（4）…… 89
第71図　古墳時代遺構分布 …… 90
第72図　068竪穴住居（1）…… 92
第73図　068竪穴住居（2）…… 93
第74図　069竪穴住居…… 95
第75図　070竪穴住居（1）…… 96
第76図　070竪穴住居（2）…… 97
第77図　071竪穴住居（1）…… 98
第78図　071竪穴住居（2）…… 99
第79図　072A・B竪穴住居（1）……100
第80図　072A・B竪穴住居（2）…… 101
第81図　073A・B竪穴住居（1）……102
第82図　073A・B竪穴住居（2）…… 103
第83図　074竪穴住居……106
第84図　075竪穴住居（1）……107
第85図　075竪穴住居（2）……108
第86図　076竪穴住居（1）……109
第87図　076竪穴住居（2）……110
第88図　076竪穴住居（3）……111
第89図　077竪穴住居……112
第90図　078竪穴住居（1）……114
第91図　078竪穴住居（2）……115

第92図　078竪穴住居（3）……116
第93図　078竪穴住居（4）……117
第94図　078竪穴住居（5）……118
第95図　079竪穴住居……119
第96図　080竪穴住居（1）……120
第97図　080竪穴住居（2）……121
第98図　081竪穴住居……122
第99図　082竪穴住居……123
第100図　083竪穴住居……126
第101図　084竪穴住居（1）……127
第102図　084竪穴住居（2）……128
第103図　087竪穴住居……129
第104図　088竪穴住居……130
第105図　089竪穴住居（1）……132
第106図　089竪穴住居（2）……133
第107図　091竪穴住居（1）……134
第108図　091竪穴住居（2）……135
第109図　063方墳（1）……136
第110図　063方墳（2）……137
第111図　064方墳……138
第112図　097方墳（1）……139
第113図　097方墳（2）……139
第114図　066溝状遺構出土遺物……141
第115図　遺物集中地点……142
第116図　遺構外出土遺物……143
第117図　奈良・平安時代以降遺構分布……144
第118図　033竪穴住居……145
第119図　002・003方形区画墓……146
第120図　010方形区画墓……147
第121図　038方形区画墓……148
第122図　065方形区画墓……149
第123図　090方形区画墓（1）……150
第124図　090方形区画墓（2）……151
第125図　093方形区画墓……152
第126図　094方形区画墓……153
第127図　096方形区画墓（1）……154
第128図　096方形区画墓（2）……155
第129図　地下式土坑……157
第130図　草刈44号墳（塚）……158
第131図　溝状遺構（1）……160
第132図　溝状遺構（2）……161
第133図　溝状遺構出土遺物……161
第134図　奈良・平安時代土坑……162
第135図　土坑（1）……164
第136図　土坑（2）……165
第137図　土坑（3）……166
第138図　土坑（4）……167
第139図　土坑（5）……168
第140図　土坑（6）……169
第141図　土坑（7）……170
第142図　土坑（8）……171
第143図　土坑（9）……172
第144図　そのほかの遺構……173
第145図　遺構外出土遺物……174
第146図　出土銭貨……175

第Ⅲ部　補　遺
第147図　押沼第2・大六天遺跡出土遺物……200

表　目　次

第Ⅱ部　ナキノ台遺跡（上層）
第1表　竪穴住居一覧……179
第2表　縄文時代炉穴一覧……179
第3表　縄文時代陥穴一覧……180
第4表　土坑類一覧……181
第5表　土製品一覧……182
第6表　石器一覧……183
第7表　石製品・玉類一覧……186

第8表　金属器一覧……187
第9表　銭貨一覧……188
第10表　動・植物遺体一覧……188
第11表　土器観察表……189

写真図版目次

第Ⅰ部　野馬堀遺跡（2）
図版1　野馬堀（ナキノ台）遺跡周辺航空写真（昭和45年撮影）
図版2　遺跡風景・1号竪穴住居・001～003・010・011B
図版3　遺構等出土土器・縄文土器（1）
図版4　縄文土器（2）・縄文土器（3）

第Ⅱ部　ナキノ台遺跡（上層）
図版5　遠景（航空写真）
図版6　第1次（台地北側）・第2次調査区（台地南側）
図版7　085竪穴住居・炉穴（1）
図版8　炉穴（2）
図版9　陥穴（1）
図版10　陥穴（2）
図版11　陥穴（3）・土坑（1）
図版12　土坑（2）
図版13　縄文時代包含層遺物出土状況
図版14　古墳時代竪穴住居（1）
図版15　古墳時代竪穴住居（2）
図版16　古墳時代竪穴住居（3）
図版17　古墳時代竪穴住居（4）
図版18　古墳時代竪穴住居（5）
図版19　古墳時代竪穴住居（6）
図版20　古墳時代竪穴住居（7）
図版21　古墳時代竪穴住居（8）
図版22　方墳（1）
図版23　方墳（2）
図版24　方墳（3）・溝状遺構
図版25　奈良・平安時代竪穴住居・方形区画墓（1）
図版26　方形区画墓（2）
図版27　地下式土坑・塚・溝状遺構
図版28　縄文土器（1）
図版29　縄文土器（2）
図版30　縄文土器（3）
図版31　縄文土器（4）
図版32　縄文土器（5）
図版33　縄文土器（6）
図版34　縄文土器（7）
図版35　縄文土器（8）
図版36　縄文土器（9）
図版37　縄文土器（10）
図版38　縄文土器（11）
図版39　縄文土器（12）
図版40　縄文土器（13）
図版41　土製品（1）・石製品・石器（1）
図版42　石器（2）
図版43　石器（3）
図版44　古墳時代土器（1）
図版45　古墳時代土器（2）
図版46　古墳時代土器（3）
図版47　古墳時代土器（4）
図版48　古墳時代土器（5）
図版49　古墳時代土器（6）
図版50　古墳時代土器（7）
図版51　土製品・石製品（玉類）・手捏ね土器類
図版52　土製支脚・鉄製品ほか

第Ⅲ部　補　遺
図版53　押沼遺跡群出土遺物

第Ⅰ部　野馬堀遺跡（2）

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯

本調査は，独立行政法人都市再生機構による千原台土地区画整理事業に伴い実施された。市原市の千原台地区及び千葉東南部地区の区画整理事業地内の遺跡については，その周辺地区でも多数の遺跡が存在していたため，当然多数の遺跡の存在が把握され，さらに未確認の遺跡の存在が予想されたため，事前に把握された事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果，可能な限り公園，緑地として現状保存に努める一方で，現状保存の困難な部分については記録保存の措置を講ずることとなった。記録保存に当たり，財団法人千葉県教育振興財団が委託を受け，昭和53年度から発掘調査を行い，成果が報告書として多数刊行されてきている。

今回報告する野馬堀遺跡は，造成地内の幹線道路の建設に伴って発見された遺跡で，昭和53年度に道路の南側部分が第1次調査として3,800㎡調査され，旧石器時代石器の検出をはじめ，縄文時代土坑18基，平安時代の竪穴住居1軒が調査されている[注1]。今回報告の野馬堀遺跡（2）は，幹線道路の北側に残った部分を昭和60年3月（昭和59年度事業）に調査を実施し，その後平成19年度～平成22年度に整理作業を行い報告書刊行に至った。

2　調査方法と経過

発掘調査は，対象地の表土をソフトローム層上面まで全面除去後に検出された遺構の調査を行った。その結果，縄文時代の土坑5基，炉穴3基，平安時代の竪穴住居1軒を検出し調査した。上層遺構の調査終了後，旧石器時代確認調査グリッドを設定し掘削したが遺物は検出されなかったため調査を終了した。

発掘調査は下記のとおりで実施した。

昭和59年度

組　織　調査部長　鈴木道之助　　班長　古内　茂

担当者　主任調査研究員　小宮　孟

内　容　本調査　2,000㎡

調査期間　昭和60年3月1日～3月31日

整理作業の実施ならびに担当者は以下のとおりである。

平成19年度

組　織　調査研究部長　矢戸三男　　所長　折原　繁

担当者　上席研究員　小林清隆

内　容　記録整理の一部

平成20年度

組　織　調査研究部長　大原正義　　所長　折原　繁

担当者　上席研究員　小林清隆

内　容　記録整理の一部～接合・復元

平成21年度（重点遺跡整理促進事業）

組　織　調査研究部長　及川淳一　　所長　折原　繁
担当者　主席研究員　石倉亮治　　上席研究員　宇山文治
　　整理技術員　平井真紀子
内　容　実測・拓本～写真撮影・トレースの一部

平成22年度

組　織　調査研究部長　及川淳一　　所長　白井久美子
担当者　主席研究員　加藤正信
内　容　写真撮影の一部，トレースの一部～挿図・図版作成，原稿執筆～報告書印刷・刊行

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と周辺地形（第１・２図，図版１）

野馬堀遺跡は，千原台ニュータウン造成地域の中心からやや東側，市原市ちはら台東２丁目・３丁目（旧市原市押沼字野馬堀736）ほかに所在し，千葉市街地から南東へ約12km，下総台地南部を西に向かって流れる村田川の河口から７kmほど上流の，北側には村田川から貫入する谷津田を望む緩傾斜の標高40m～45mの台地上縁辺部に立地する。村田川に面する丘陵縁辺部の草刈遺跡群の北側に，千葉市と市原市の境界を分かつ谷津田の浸食谷が西から東方向に入り込んでおり，その浸食谷の最奥部に近い部分に面する台地の北側部分に遺跡は立地している。この谷に北面する遺跡は谷の開口部の村田川に近い方からは市原市草刈遺跡，中永谷遺跡，川焼台遺跡，鵜牧遺跡，ナキノ台遺跡，ばあ山遺跡，野馬堀遺跡と続き，更に谷の最奥部には押沼大六天遺跡ほかの押沼遺跡群が位置する。谷の北側に当たる千葉市側の台地周辺はゴルフ場の開発が早い時期に行われ，遺跡の詳細な内容は不明な部分が多いが，それらの中ではやや奥まったところに位置する大膳野南貝塚（遺跡）は貝塚として比較的よく知られている。ほかには長堀（北・東・西）遺跡，油戸瓦窯跡，居原ノ山遺跡などがあげられる。野馬堀遺跡は谷の最奥部に近い遺跡立地であることから，河川に面する草刈遺跡群の様な濃密な基幹的大規模大集落とは様相が異なり，地形を利用した特殊な遺跡の比率が高く，台地や谷の傾斜を利用した製鉄遺跡が検出された押沼大六天遺跡や油戸瓦窯跡，大膳野南貝塚などのほかは，小規模な遺跡が多いようである。

２　野馬堀遺跡と周辺の遺跡（第１図，図版１）

野馬堀遺跡は，散村ともいうべききわめて小規模な集落遺跡であるが近隣の遺跡には，先述の基幹的な大規模大集落の草刈遺跡群とそれに続く川焼台遺跡が所在し，旧石器時代から縄文時代・弥生時代を経て古墳・奈良・平安時代に至るまでの遺構が累積し，特に草刈遺跡に至ってはほぼ遺跡の所在する台地全体を調査できた好例であり，遺構総数7,000基を数え，その内竪穴住居約4,000軒，古墳180基という夥しい数である。それらの中で主体となる遺構は，縄文時代中期の貝塚と環状集落，弥生時代中期・後期の環濠集落，古墳時代の集落群と古墳群，奈良・平安時代の集落と村落内寺院とみられる掘立柱建物跡などがあげられ複合遺跡の典型例の観を呈する。草刈遺跡に続く川焼台遺跡は，村田川に沿ってわずかに上流に入るが草刈遺跡に類似する複合遺跡で旧石器時代から縄文時代早期以降の遺構群・遺物が検出されている。縄文時代早期の陥穴・炉穴，中期の竪穴住居・小竪穴が検出されている。集落遺跡としては弥生時代後期の竪穴住居67軒と古墳時代前期から後期の竪穴住居329軒が検出され，弥生時代の方形周溝墓も検出された。遺物としては古墳時代前期の竪穴住居から小銅鐸が計２点出土している。古墳は草刈遺跡の古墳群の

1．野馬堀遺跡　2．ナキノ台遺跡　3．中永谷遺跡　4．草刈六之台遺跡　5．草刈遺跡　6．草刈1号墳　7．川焼瓦窯跡
8．鶴牧遺跡　9．鶴牧古墳群　10．川焼台遺跡　11．ばあ山遺跡　12．草刈33号墳　13．押沼遺跡群　14．椎名崎古墳群
15．富岡古墳群　16．御塚台遺跡　17．ムコアラク遺跡　18．六通神社南遺跡　19．六通金山遺跡　20．太田法師遺跡
21．大膳野北遺跡　22．バクチ穴遺跡　23．大匠浅間様古墳　24．大匠遺跡　25．潤井戸西山遺跡　26．潤井戸潤ヶ台遺跡群
27．中潤ヶ広遺跡　28．下鈴野遺跡　29．潤井戸小谷1号墳　30．潤井戸遺跡群　31．下野遺跡群　32．鹿ノ原遺跡

第1図　野馬堀遺跡・ナキノ台遺跡と周辺の主な遺跡

支群をなし25基の古墳が検出されている。奈良・平安時代は８世紀から９世紀にかけての小集落であるが，川焼瓦窯跡で製作された上総国分寺の創建期瓦製作集団に関連するものであろう。村田川に沿ってさらに上流には鵜牧遺跡（古墳群）が所在し調査が実施されている。現在整理作業中で，川焼台遺跡より台地平坦部が狭くなるが弥生時代後期，古墳時代前・後期の集落が調査されている。近々報告書が刊行される予定である。

内陸部に入り込むと台地の平坦面が狭小になる地形的制約から小規模な遺跡が多くなる傾向で，やや内陸寄りの中永谷遺跡では，遺跡の立地する台地の面積が約15,000㎡で，その中に旧石器時代遺物集中地点，縄文時代早期の土坑，古墳時代後期の竪穴住居131軒・円墳２基ほかが検出され，古墳時代後期の集落が開発の進展により台地の内陸部へ展開していく過程を表している。ナキノ台遺跡はやや内陸部に入り込む遺跡で，旧石器時代の遺物が出土し，縄文時代の小集落・炉穴，古墳時代を主体とし，奈良・平安時代にかけての集落が検出された[注2]。旧石器時代の遺物・遺構については既に報告がなされ，立川ローム層下部～立川ローム層最上部にかけて多数の石斧を含む文化層や，角錐状石器やナイフ形石器に多量の礫群を伴う文化層など全４枚の文化層を確認している。それ以外の上層の調査成果は，本報告書に掲載した。

一番近接するばあ山遺跡は，台地の中央部を削平されてしまっていたが，旧石器時代遺物の出土，縄文土器片，古墳時代の竪穴住居４軒，円墳１基が検出され，古墳時代には狭小な台地上にも小規模な集落遺跡が展開していたことがうかがわれる。押沼遺跡群は旧石器時代の遺物の検出は多いもののそれ以降のものは急激に減少し，その一部分の押沼大六天遺跡の奈良・平安時代の製鉄遺構のような，農業生産ではなく特殊な生産遺跡の存在が知られるだけになり通常の活動拠点としての集落の存在がきわめて希薄になってしまう。

注１）小久貫隆史　1980　『千原台ニュータウン１　（野馬堀遺跡・ばあ山遺跡・他）』（財）千葉県文化財センター

注２）田島　新　2007　『千原台ニュータウンXIII』　－市原市ナキノ台遺跡（下層）－（財）千葉県教育振興財団

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　縄文時代

１　土坑・炉穴

縄文時代の遺構は，土坑５基と炉穴３基（重複）が検出された。土坑は楕円形の形状で，掘り込みは浅い皿状である。炉穴は３基以上が重複し，焼土の炉床が複数検出された。

００１（第４図，図版２）

楕円形状の土坑で，長軸1.5m，短軸1.0m，深さ0.3mを測る。ほぼ東西方向に長軸が位置し，底面は東側で約0.1mの高さに一段高くなっている。遺物は図示できるようなものは出土していない。

００２（第４図，図版２）

楕円形状の土坑で，長軸1.55m，短軸1.2m，深さ0.35mを測る。遺物は図示できるようなものは出土していない。

００３（第４図，図版２）

ほぼ円形の土坑で，直径0.7m，深さ0.35mを測る。遺物は図示できるようなものは出土していない。

００９（第４図）

長楕円形状の土坑で，長軸1.55m，短軸0.9m，深さ0.35mを測る。遺物は図示できるようなものは出土していない。

０１０（第４・５図，図版２）

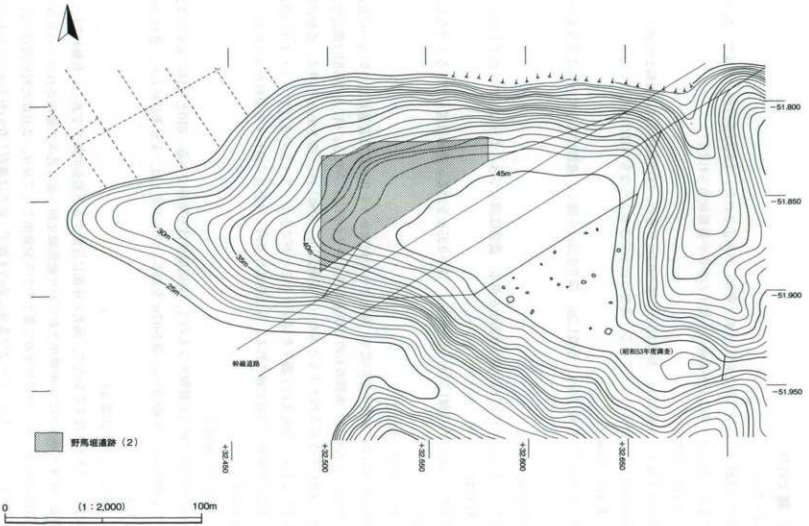
後述の011A・011Bと重複する炉穴で，検出された炉床から全体的には５基以上の炉穴の存在がうかがわれる。010としたものは，南側のもので炉床の焼土が２か所認められる。011との新旧は確認できなかった。形状は長楕円形を基本形とするとみられ，長軸2.0m，短軸1.1m，深さ0.9mを測る。遺物は覆土中から少量出土しており，条痕文の土器片を図示することができた。３～５の３点で，３・４は口縁部片で内外に横行するやや細めの条痕が施される。５は胴部片で内・外面共に斜行する条痕がみられる。３点共に繊維を胎土に含んでいる。

０１１Ａ（第４図，図版２）

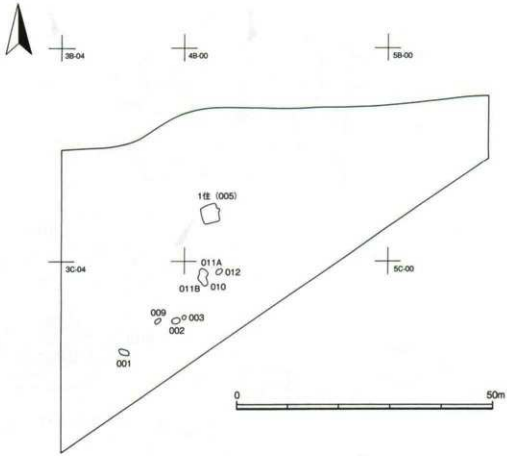
前述の010・011Bの炉穴と重複するもので，新旧関係は不明確である。010と同様に基本形は長楕円形とみられ，長軸2.65m，短軸0.95m，深さ0.7mを測る。炉床の焼土は，１か所認められ，遺物は011Bと併せて後述する。

０１１Ｂ（第４・５図，図版３）

前述の010・011Aと重複する炉穴で，両者の中間に位置する不整形の炉穴である。長軸約2.4m，短軸約1.9mを測る。炉床の焼土が２か所検出されており最低限２回の掘り込みで使用されたものとみられる。遺物は，前述の011A・011B両者を含めて覆土中から少量出土しており，２点は比較的遺存が良く形状を含めて図示することができた。１・２は条痕文系の土器で，底部は遺存しないが尖底になるものとみられる。１はやや緩やかな砲弾形の形状で，口唇部が僅かに緩く外反し内面にわずかに肥厚する。外面上半は横行の条痕文，中位以下は縦方向の縄文が施され，内面は上半はほぼ横行，中位以下は斜行の条痕が施される。２は１よりやや締まりのきつい砲弾形状で，１同様に口唇部はごくわずかに外反する。外面はほぼ



第２図　野馬堀遺跡周辺地形図



第３図　野馬堀遺跡（２）遺構分布及びグリッド配置

縦方向のやや粗い条痕，内面は上半は横行の条痕，下半以下は斜行の条痕が施される。１・２共に胎土に繊維と白色の粒子を含んでいる。

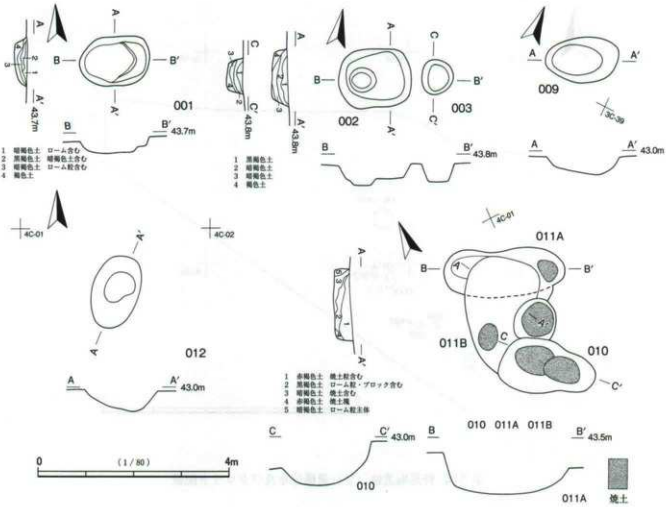
０１２（第４図）

楕円形状の土坑で，長軸1.5m，短軸1.0m，深さ0.45mを測る。遺物は図示できるようなものは出土していない。

２　出土遺物（第５～７図，図版３・４）

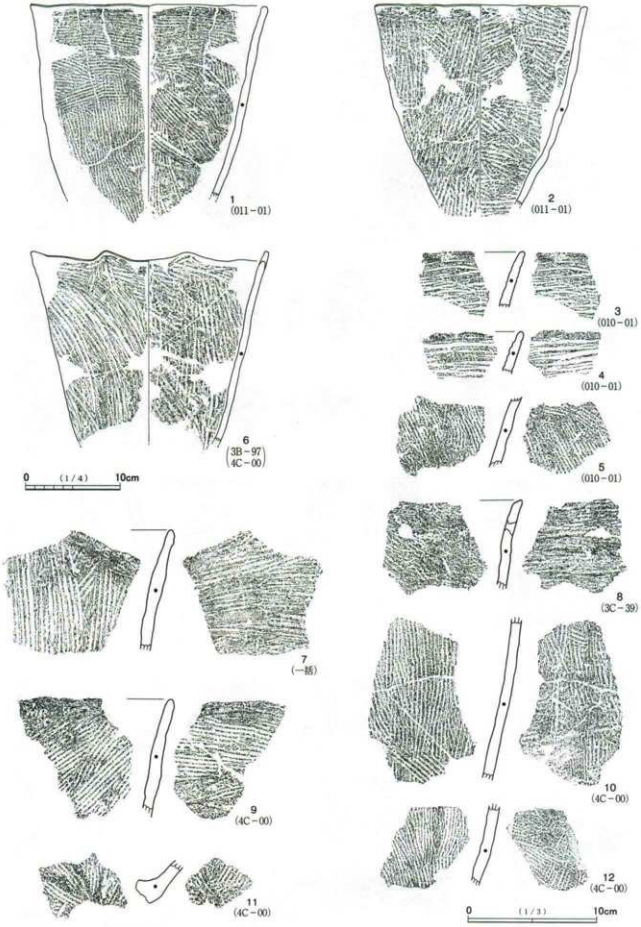
遺跡から出土した縄文土器のうち１～５は遺構出土の条痕文系の土器で遺構の項で先述した。６以下はグリッド出土の土器で，そのうち６～26は早期の条痕文系のものである。胎土に繊維を含み，７～９は口縁部片で，７は波状口縁で，８は口唇部近くに補修孔が１か所穿孔されている。11は丸底尖底の底部破片で，13・17～25は口縁部片，26は丸底尖底の底部破片である。14は内面にススの付着が認められる。20は小波状の口縁部片である。

27～41は前期の破片で，27・28は口縁部で斜行の縄文が施されている。29～31は粗い斜行の縄文が施され，30・31は外面にススの付着がみられる。32～35は諸磯ａ式のラッパ状に開く口縁部の破片で，口唇近くに半截竹管の４条の横行沈線の区画があり，その下は地文に粗い縦方向の縄文の上から半截竹管の曲線で構成される木の葉文が施される。33～35は外面にススの付着がみられる。36～38は黒浜式の波状口縁の破片で，胎土に繊維の混入がみられる。39・40は胴部の破片で縄文の地文に区画の平行沈線，竹管の円形刺突文が施される。41は底部の破片で外面に縄文が斜行する。

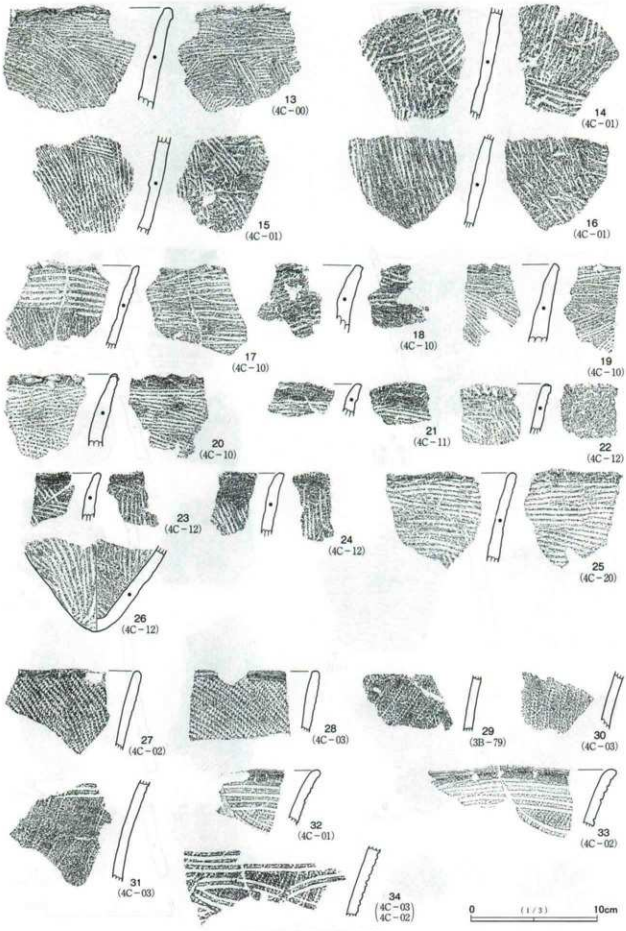


第4図 縄文時代土坑・炉穴

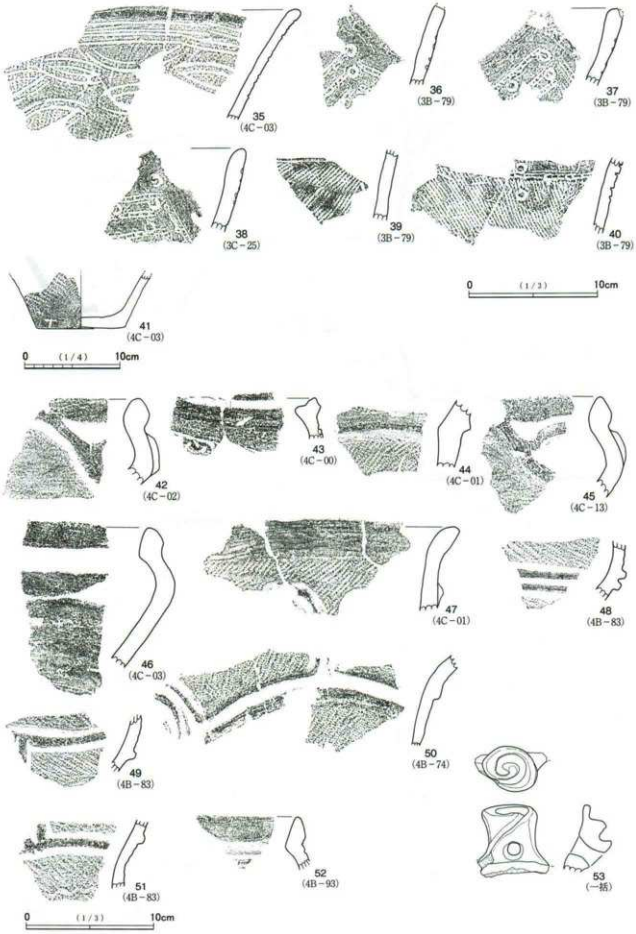
42～53は中期の加曽利E式期のものである。42・43・45・46・47・52は口縁部片で幅の広い隆帯に区画されるもの（42・45・46），沈線に区画されるもの（48・49・51・52），口唇部が無文となるもの（47·52），クランク状文（49·51）のものがあげられる。53は口縁部上の把手の破片で，基部が有孔で口唇部上の沈線は波頂部では渦巻化している。


1
(011－01)
2
(011－01)
3
(010－01)
4
(010－01)
5
(010－01)
6
(3B－97)
(4C－00)
0 (1/4) 10cm
7
(一括)
8
(3C－39)
9
(4C－00)
10
(4C－00)
11
(4C－00)
12
(4C－00)
0 (1/3) 10cm

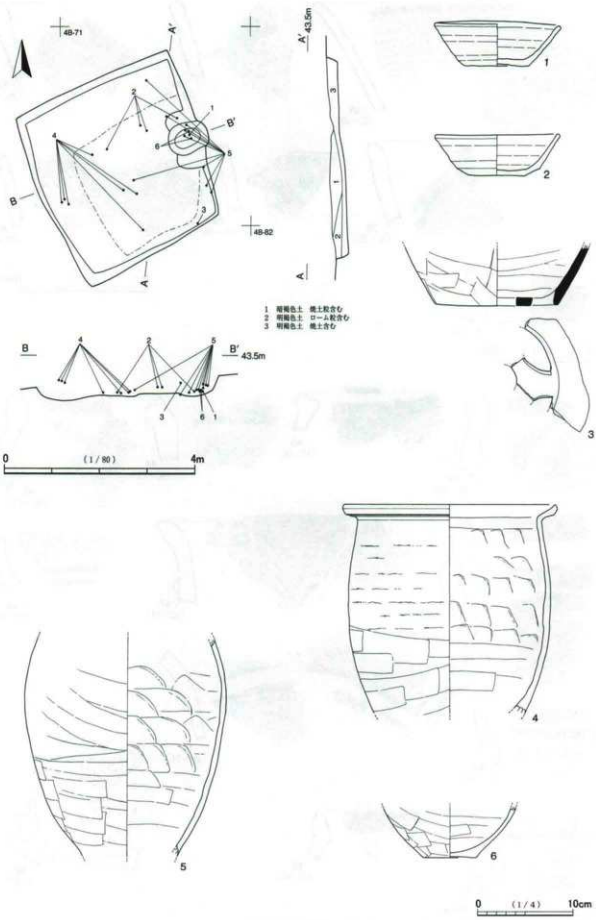
第５図 縄文土器（１）


13
(4C-00)
14
(4C-01)
15
(4C-01)
16
(4C-01)
17
(4C-10)
18
(4C-10)
19
(4C-10)
20
(4C-10)
21
(4C-11)
22
(4C-12)
23
(4C-12)
24
(4C-12)
25
(4C-20)
26
(4C-12)
27
(4C-02)
28
(4C-03)
29
(3B-79)
30
(4C-03)
31
(4C-03)
32
(4C-01)
33
(4C-02)
34
(4C-03)
(4C-02)
0
(1/3)
10cm

第6図 縄文土器（2）


35
(4C－03)
36
(3B－79)
37
(3B－79)
38
(3C－25)
39
(3B－79)
40
(3B－79)
0 (1/3) 10cm
41
(4C－03)
0 (1/4) 10cm
42
(4C－02)
43
(4C－00)
44
(4C－01)
45
(4C－13)
46
(4C－03)
47
(4C－01)
48
(4B－83)
49
(4B－83)
50
(4B－74)
51
(4B－83)
52
(4B－93)
53
(一括)
0 (1/3) 10cm

第７図 縄文土器（３）



第８図　１号竪穴住居（005）

第2節　平安時代

1　竪穴住居

1号竪穴住居（005）（第8図，図版2・3）

調査区内唯一の竪穴住居である。カマドを有する正方形状の住居でカマドの方角を主軸とすると，主軸はN－63°－Eを測り，東傾した方向の竪穴住居である。主軸長は3.7mのほぼ正方形で，掘り込みの深さは0.4mを測る。壁の立ち上がりはやや緩やかで，床面はカマドの前面の空間に硬化面が認められる。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されていない。覆土は焼土を少し含む自然堆積土である。

遺物は床面近くに比較的多く認められ，カマド内からも検出されている。6点を図示することができた。1・2は土師器の坏で底部は回転糸切りである。1はほぼ完形で，口径13.1cm，器高4.5cm，底径6.8cmを測る。2は口径13.0cm，器高4.3cmで1とほぼ同法量で，底部は回転糸切り後周縁のみヘラケズリがなされている。3は須恵器の甑の底部片である。4～6は土師器の甕で4は口縁部を含む上半部，5は胴部，6は底部周辺のみの遺存である。6は外面に山砂が付着し出土位置もカマドの燃焼部からであり器掛口に懸架されていたものの破片とみられる。

第3節　まとめ

上記のように，全体的には非常に高密度な遺構分布をみせる千原台地区の遺跡群の中にあって，非常に密度の低い遺構分布状況の野馬堀遺跡である。旧石器時代石器，縄文時代早期の土器群，陥穴，炉穴，平安時代の竪穴住居の検出が調査成果のすべてである。村田川際の草刈遺跡，川焼台遺跡などに比してきわめて密度の低い遺構の分布状況といえる。一方さらに内陸の押沼遺跡群では，本遺跡より更に遺構の分布が薄くなる状況を示す。川縁の猛烈ともいえる土地の再利用による遺構の激しい重複をみると内陸部での開発度合いの低いことがあまりにも奇異に感じられ，調査成果からは内陸部まで開発の手の及びにくい地理条件と社会情勢が想起されるが，単純には肯首しがたいほど遺跡内容が異なる。近隣の草刈遺跡などにみられる大集落は，おそらく村田川に接する沖積低地を生産基盤とする集落であったことから，耕地から隔たる内陸部には入り込みにくく，集落が飽和に近い状況に及んでも，内陸部へは容易に集落開発の手が及ばずにいたことはなかなか納得しがたい事実である。

関連文献

小久貫隆史　1980『千原台ニュータウン1（野馬堀遺跡・ばあ山遺跡・他）』（財）千葉県文化財センター
小久貫隆史ほか　1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡A区（第1次調査）・鶴牧古墳群・人形塚』（財）千葉県文化財センター
高田　博ほか　1986『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B区）』（財）千葉県文化財センター
小林清隆ほか　1990『市原市草刈貝塚』（財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1991『千原台ニュータウンⅣ　中永谷遺跡』（財）千葉県文化財センター
小林信一　1993『千原台ニュータウンⅤ－押沼第1遺跡K地点－』（財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1994『千原台ニュータウンⅥ－草刈六之台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
花島理典・田井知二・西野雅人　1995「市原市草刈遺跡出土の卜骨について」『研究連絡誌』第43号（財）千葉県文化財センター
田井知二　1997『千原台ニュータウン7　－草刈1号墳－』（財）千葉県文化財センター
伊藤智樹ほか　2003『千原台ニュータウンⅧ　－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）－』（財）千葉県文化財センター
黒沢　崇　2003『千原台ニュータウンⅨ　－市原市押沼第1・第2遺跡（上層）－』（財）千葉県文化財センター
島立　桂　2003『千原台ニュータウンⅩ　－市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）－』（財）千葉県文化財センター
大谷弘幸ほか　2004『千原台ニュータウンⅪ　－市原市草刈遺跡（C区・保存区）－』（財）千葉県文化財センター

黒沢　崇ほか　2004『千原台ニュータウンXII　－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』(財)千葉県文化財センター
田島　新　2005『千原台ニュータウンXIII　－市原市草刈遺跡（西部地区旧石器時代）－』(財)千葉県文化財センター
市原市文化財センター　2005『第20回遺跡発表会要旨』(財) 市原市文化財センター
小林清隆ほか　2006『千原台ニュータウンXIV　－市原市草刈遺跡（D区・E区）－』(財)千葉県教育振興財団
田島　新　2006『千原台ニュータウンXV －市原市押沼大六天遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団
大村　直ほか　2006『市原市南岩崎遺跡』　市原市教育委員会
白井久美子　2007『千原台ニュータウンXVI　－市原市草刈遺跡（G区・古墳群）－』(財)千葉県教育振興財団
小林清隆・麻生正信　2007『千原台ニュータウンXVII　－市原市草刈遺跡（K区）－』(財)千葉県教育振興財団
田島　新　2007『千原台ニュータウンXVIII　－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団
小林清隆　2007『千原台ニュータウンXIX　－市原市草刈遺跡（J区）－』(財)千葉県教育振興財団
田島　新　2008『千原台ニュータウンXX　－市原市押沼第1遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2009『千原台ニュータウンXXI　－市原市川焼台遺跡（上層）－』(財)千葉県教育振興財団
田島　新　2010『千原台ニュータウンXXII　－市原市押沼第2遺跡（下層）・川焼台遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2010『千原台ニュータウンXXIII　－市原市草刈遺跡（H区）－』(財)千葉県教育振興財団
田島　新ほか　2010『千原台ニュータウンXXIV　－市原市鵜牧遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団

第Ⅱ部　ナキノ台遺跡（上層）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯

本調査は，独立行政法人都市再生機構による千原台地区土地区画整理事業に伴い実施された。千原台地区及びその周辺では多数の遺跡が存在していたため，事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果，可能な限り公園，緑地として現状保存に努める一方で，現状保存の困難な部分については記録保存の措置を講ずることとなった。財団法人千葉県教育振興財団が委託を受け昭和53年度から発掘調査を行い，成果が報告書として刊行されている。

今回報告するナキノ台遺跡は，昭和57年度に全域の確認調査と遺跡の北側を主とした部分の本調査，58年度に遺跡の南側を主とした部分の本調査を行い，旧石器時代の石器集中地点をはじめ，縄文時代から近世にわたる遺構と遺物が検出されている。このうち旧石器時代については既に報告書が刊行されている。（参考　㈶千葉県教育振興財団　2007『千原台ニュータウンⅩⅧ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』）下層調査の成果の詳細は報告書に譲るとして，概要のみここに記す。石器の集中地点が45か所，単独出土地点14か所，竪穴状遺構１基，焼土遺構１基，土坑１基，炭化物集中地点６か所を検出し，分析・検討の結果調査の結果，４枚の文化層に区分している。４枚の文化層は下層から第１文化層，立川ローム層第２黒色帯（Ⅶ～Ⅸ層）で土坑，炭化物集中地点６か所，焼土遺構が検出されている。第２文化層は，立川ローム層ハードローム層（Ⅵ層下部～Ⅶ層），第３文化層は，立川ローム層ハードローム層（Ⅴ層下部），第４文化層は，立川ローム層ソフトローム層（Ⅲ層下部）で竪穴状遺構が検出されている。

上層遺構については，縄文時代早期の撚糸文期・条痕文期の包含層・礫群，陥穴49基，炉穴12基，縄文時代前期の竪穴住居１軒，古墳時代中期～後期の集落跡（竪穴住居23軒），方墳３基，奈良・平安時代の竪穴住居１軒，方形区画墓９基などが検出され，遺物は縄文時代早期・前期・中期の土器・石器，古墳時代の土師器・須恵器，古墳副葬品の玉類，鉄製品，奈良・平安時代の土師器・須恵器が検出された。平成19年度からは整理作業を開始し，今回の報告書の刊行に至った。

２　調査方法と経過（第９図）

本遺跡の調査対象面積は41,000㎡に及んだ。発掘調査を行うに当たり，国家座標（日本測地系）を基準として範囲全域にグリッドを設定した。40m×40mの大グリッドを設け，４m×４mの小グリッドに100分割した。大グリッドは西から東に向けA・B・C･･･，北から南に向け１・２・３･･･とし，小グリッドは，北西隅から南東隅へ00から99までの番号を付け，それぞれを組み合わせてグリッドの番号を表示している。

上層確認調査では，41,000㎡の調査区全域の約10％について，トレンチやグリッドを設定し，精査を行い遺構や遺物の確認を行った。下層については，上層遺構の検出されなかった部分はそのままローム層中まで人力で精査を行い，遺物の検出に努め，上層遺構の検出された部分は調査終了後に，確認グリッドを追加設定し下層の遺物の検出に努めた。

確認調査の結果に基づき，上層・下層共に遺構の検出された部分・遺物の濃密な部分に対し本調査を実施することとし，まず上層遺構の調査のために表土を除去し検出された遺構・遺物の調査を行った。その

後，下層については確認調査で遺物を検出した層の近くまで上部のローム層を除去し，その後人力により遺物・遺構などの検出を行った。

このほか，遺構図面の作成や遺構に帰属しない遺物の取上げに当たっては，40m大グリッドを4m×4mのグリッドに100分割した小グリッドを基本単位として行っている。

調査の結果，縄文時代から平安時代にわたる竪穴住居23軒（縄文時代1軒，古墳時代21軒，奈良・平安時代1軒）のほか，古墳時代後期の方墳3基，奈良・平安時代の方形区画墓9基が検出された。

千原台地区の調査の大半を占める草刈遺跡の発掘とその整理作業の進捗を主眼として発掘調査計画並びに整理計画を策定し進めていく中で，比較的面積の狭く遺構・遺物の少ないその他の遺跡の整理作業について，草刈遺跡の合間に随時挿入して実施し報告書の刊行を目指した。そういった状況の中で旧石器時代（下層）とそれ以降の遺構類（上層）について，分離して整理作業を行うことが整理体制上無駄が少なく効率的であったことから，上層遺構（縄文時代以降）と下層遺構（旧石器時代）に分けて実施した。基本計画に基づいて本遺跡も，旧石器時代の遺構・遺物とそれ以外の上層遺構の整理作業を分けて実施し報告書の刊行までを行い下層遺構については既に整理作業が終了し，報告書が刊行されている。（財千葉県教育振興財団　2007『千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』）

整理作業は，平成19年度から，遺物の水洗・注記，分類・選別，接合・復元を年度計画によって進めた。平成21年度は，重点遺跡整理作業促進事業によって遺物の実測・拓本，トレース，写真撮影，遺物の観察表の作成を行った。平成22年度からは挿図作成，原稿執筆など，本格的に報告書作成作業へと移行した。この作業の中で，重点遺跡整理促進事業によって作成した遺物実測図と遺物観察表の編集も並行して実施し，報告書の刊行に至った。

発掘調査及び整理作業の実施内容・担当者は，以下のとおりである。

発掘調査

昭和57年度

組　織　調査部長　白石竹雄　　班長　三森俊彦

担当者　調査研究員　上守秀明・小林清隆・澤野　弘

内　容　確認調査　41,000㎡のうち　上層4,100㎡/41,000㎡，下層628㎡/21,000㎡

本調査　上層5,865㎡/21,000㎡，下層7,314㎡/21,000㎡

昭和58年度

組　織　調査部長　白石竹雄　　班長　三森俊彦

担当者　調査研究員　上守秀明・渡邊修一

内　容　本調査　上層20,000㎡/20,000㎡，古墳1基，下層2,608㎡/20,000㎡

整理作業

平成19年度

組　織　調査研究部長　矢戸三男　　所長　折原　繁

担当者　上席研究員　小林清隆

内　容　記録整理の一部

平成20年度

組　織　調査研究部長　大原正義　　所長　折原　繁

担当者　上席研究員　小林清隆

内　容　記録整理の一部～接合・復元

平成21年度（重点遺跡整理促進事業）

組　織　調査研究部長　及川淳一　　所長　折原　繁

担当者　上席研究員　宇山文治

整理技術員　平井真紀子

内　容　実測・拓本～写真撮影・トレースの一部

平成22年度

組　織　調査研究部長　及川淳一　　所長　白井久美子

担当者　主席研究員　加藤正信　　上席研究員　小高春雄

内　容　写真撮影の一部，トレースの一部～挿図・図版作成，原稿執筆～報告書印刷・刊行

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と周辺地形（第１図，図版１・５・６）

ナキノ台遺跡は，千原台ニュータウン造成地域の中心からやや東側，市原市ちはら台南４丁目13番地（旧市原市押沼字水堀江592）ほかに所在し，千葉市街地から東南へ12km，下総台地南部を西に向かって流れる村田川の河口から７kmほど上流の，標高40m～50mの右岸台地に立地する。

遺跡の周囲に目を転じると，北側には東西方向に向かって長く延びる「茂呂谷津」が広がっている。この谷は，かつて上総国と下総国との国境をなしており，このラインは現在でも千葉市と市原市との行政境として継承されている。また，この「茂呂谷津」では数か所にわたってボーリング調査が実施され，厚く堆積した泥炭層とその直上からのイネプラントオパールの検出から，谷津部湿地化の過程と比較的早い段階での水田化が指摘される。また，遺跡の南側と西側には，村田川によって形成された広大な沖積平野を一望に見渡すことができ，西には東京湾を挟んで富士山も望むことができる。この村田川による沖積平野の周辺には後述のように多くの遺跡が点在し，重要な生活基盤集落を形成している。

２　ナキノ台遺跡と周辺の遺跡（第１図）

千原台地区の遺跡の中でその根幹を占め，周辺地区を含めた中で基幹集落たる草刈遺跡からは総数7,000基を数える遺構が検出された。このうち竪穴住居は約4,000軒，古墳は180基に及ぶ。その内容は，旧石器時代から中・近世にわたる大複合遺跡であり，主な遺構としては縄文時代中期の貝塚と環状集落，弥生時代中期・後期の環濠集落，古墳時代の集落群と古墳群，奈良・平安時代の集落と村落内寺院と考えられる掘立柱建物などである。次に，草刈遺跡を中心とした村田川中流域における弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺跡を取り上げ，それらについて概観することとしたい。

弥生時代以降，村田川中流域に本格的に遺跡が出現するようになるのは，弥生時代中期になってからである。中期の宮ノ台期には，草刈遺跡・大厩遺跡・大厩浅間様古墳下層遺跡・潤井戸西山遺跡，下流域の菊間遺跡・菊間手永遺跡・菊間深道遺跡などの拠点的集落が出現する。これらの集落はいずれも村田川の沖積平野を望む位置に形成され，市原条里制遺跡で検出された同期の水田跡が示すように開析谷の出口付近を中心に水田開発が行われたものと考えられる。草刈遺跡の宮ノ台期の遺構は，台地西端部のＦ区において確認され，竪穴住居と環濠などが検出されている。上述したほかの遺跡においても環濠が伴い，近接

して環濠集落が営まれている。弥生時代後期になると新たに草刈六之台遺跡や川焼台遺跡，鵜牧遺跡などの集落が出現し，谷奥部への集落の進出・拡散傾向が認められる。この傾向は草刈遺跡においても認められ，中期には台地西側先端部分に限定されていた住居が，遺跡の東側へと拡大する状況が看取される。また，後期の竪穴住居の軒数は中期に比較して爆発的に増大する。

次の古墳時代前期には，集落範囲は弥生時代後期と大きな違いはみられないものの，竪穴住居軒数は飛躍的に増加する。前期後半から中期にかけて，草刈１号墳や大厩浅間様古墳・大厩二子塚古墳・新皇塚古墳・高野前古墳といった首長クラスの墳墓が造営されるようになる。古墳時代後期には再び集落域の拡大が認められ，千原台地区においても中永谷遺跡・ナキノ台遺跡などのように，より谷奥部の地域でも集落が営まれるようになるほか，隣接する千葉東南部地区においてもこの時期になり遺跡数の増加傾向が指摘できる。

奈良・平安時代になると草刈遺跡周辺の状況は大きく変化する。それまで営まれていた集落の多くが姿を消すか規模を縮小するようになり，草刈遺跡においても竪穴住居軒数は大幅に減少する。また，この頃千原台地区における生産基盤の変化も認められるようになり，川焼瓦窯跡における国分寺所用瓦の生産，押沼遺跡群における鉄生産のように農業以外の生産業が活発に行われるようになる。

草刈遺跡に続く川焼台遺跡は，村田川に沿ってわずかに上流に入るが草刈遺跡に類似する複合遺跡で旧石器時代から縄文時代早期以降の遺構群・遺物が検出されている。縄文時代早期の陥穴・炉穴，中期の竪穴住居・小竪穴が検出されている。弥生時代後期の竪穴住居67軒と古墳時代前期から後期の竪穴住居329軒が検出され集落が営まれていたことが十分うかがえる。弥生時代の方形周溝墓も検出されている。遺物としては古墳時代前期の竪穴住居から小銅鐸が２点出土している。古墳時代の古墳は草刈遺跡の古墳群の支群をなし25基の古墳が検出されている。奈良・平安時代は８世紀から９世紀にかけての小集落であるが，川焼瓦窯跡で製作された上総国分寺の創建期瓦製作集団に関連するものであろう。村田川に沿ってさらに上流には鵜牧遺跡（古墳群）が所在し調査が実施されている。川焼台遺跡より台地平坦部が狭くなるが弥生時代後期，古墳時代前・後期の集落が調査されている。現在整理作業中で，近々報告書が刊行される予定である。

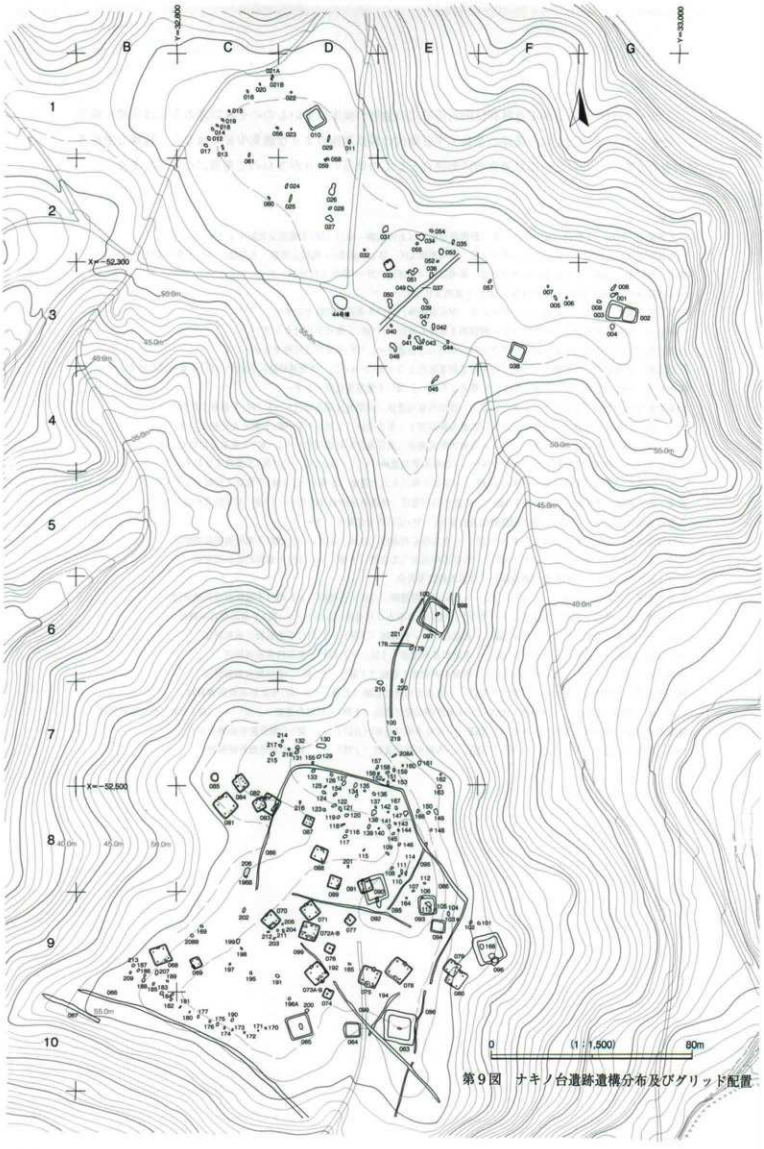
谷奥部に入り込むと台地の平坦面が狭小になる地形的制約から小規模な遺跡が多くなる傾向で，やや内陸寄りの中永谷遺跡では，遺跡の立地する台地の面積が約15,000㎡で，その中に旧石器時代遺物，縄文時代早期の土坑・遺物，古墳時代後期の竪穴住居131軒・円墳２基ほかが検出され，古墳時代後期の集落が開発の進展により台地の内陸部へ展開していく過程を表している。今回報告のナキノ台遺跡も同様に，谷奥部に入り込む遺跡で，旧石器時代の遺物が検出され，縄文時代の小集落・炉穴，古墳時代を主体とする，奈良・平安時代にかけての集落が検出されている。旧石器時代の遺物・遺構については既に報告がなされ，立川ローム層下部～立川ローム層最上部にかけて多数の石斧を含む文化層や，角錐状石器やナイフ形石器に多量の礫群を伴う文化層など全４枚の文化層を確認している。（㈶千葉県教育振興財団　2007『千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』）それ以外の上層の調査成果は，本報告書に掲載した。

更に内陸部に位置するばあ山遺跡は，台地の中央部を削平されてしまっていたが，旧石器時代遺物の出土，縄文土器片，古墳時代の竪穴住居４軒，円墳１基が検出され，野馬堀遺跡と共に，散村ともいうべききわめて小規模な集落遺跡である。古墳時代後期には狭小な台地上にまで小規模な集落遺跡が展開してい

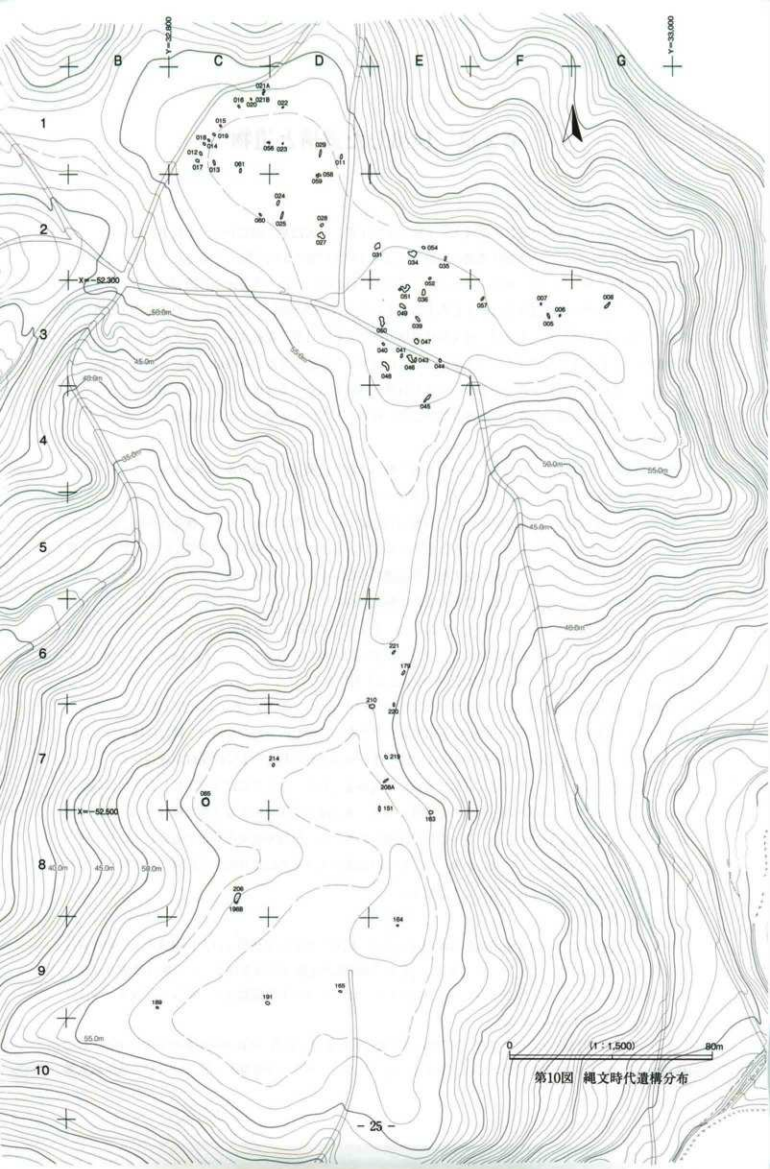
たことがうかがわれる。押沼遺跡群は旧石器時代の遺物の検出は多いもののそれ以降のものは急激に減少し，その一部分の押沼大六天遺跡の奈良・平安時代の製鉄遺構のような農業生産ではなく，特殊な生産遺跡の存在が知られるだけになり通常の活動拠点としての集落の存在がきわめて希薄になってしまう。

関連文献

小久貫隆史　1980『千原台ニュータウン１（野馬堀遺跡・ばあ山遺跡・他）』（財）千葉県文化財センター
小久貫隆史ほか　1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡A区（第１次調査）・鵜牧古墳群・人形塚』（財）千葉県文化財センター
高田　博ほか　1986『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（B区）』（財）千葉県文化財センター
小林清隆ほか　1990『市原市草刈貝塚』（財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1991『千原台ニュータウンⅣ　中永谷遺跡』（財）千葉県文化財センター
小林信一　1993『千原台ニュータウンⅤ－押沼第１遺跡Ｋ地点－』（財）千葉県文化財センター
白井久美子ほか　1994『千原台ニュータウンⅥ－草刈六之台遺跡－』（財）千葉県文化財センター
花島理典・田井知二・西野雅人　1995「市原市草刈遺跡出土の卜骨について」『研究連絡誌』第43号（財）千葉県文化財センター
田井知二　1997『千原台ニュータウン７　－草刈１号墳－』（財）千葉県文化財センター
伊藤智樹ほか　2003『千原台ニュータウンⅧ　－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）－』（財）千葉県文化財センター
黒沢　崇　2003『千原台ニュータウンⅨ　－市原市押沼第１・第２遺跡（上層）－』（財）千葉県文化財センター
島立　桂　2003『千原台ニュータウンⅩ　－市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）－』（財）千葉県文化財センター
大谷弘幸ほか　2004『千原台ニュータウンⅪ　－市原市草刈遺跡（Ｃ区・保存区）－』（財）千葉県文化財センター
黒沢　崇ほか　2004『千原台ニュータウンⅫ　－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』（財）千葉県文化財センター
田島　新　2005『千原台ニュータウンⅩⅢ　－市原市草刈遺跡（西部地区旧石器時代）－』（財）千葉県文化財センター
市原市文化財センター　2005『第20回遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター
小林清隆ほか　2006『千原台ニュータウンⅩⅣ　－市原市草刈遺跡（Ｄ区・Ｅ区）－』（財）千葉県教育振興財団
田島　新　2006『千原台ニュータウンⅩⅤ　－市原市押沼大六天遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団
大村　直ほか　2006『市原市南岩崎遺跡』　市原市教育委員会
白井久美子　2007『千原台ニュータウンⅩⅥ　－市原市草刈遺跡（Ｇ区・古墳群）－』（財）千葉県教育振興財団
小林清隆・麻生正信　2007『千原台ニュータウンⅩⅦ　－市原市草刈遺跡（Ｋ区）－』（財）千葉県教育振興財団
田島　新　2007『千原台ニュータウンⅩⅧ　－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団
小林清隆　2007『千原台ニュータウンⅩⅨ　－市原市草刈遺跡（Ｊ区）－』（財）千葉県教育振興財団
田島　新　2008『千原台ニュータウンⅩⅩ　－市原市押沼第１遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2009『千原台ニュータウンⅩⅩⅠ　－市原市川焼台遺跡（上層）－』（財）千葉県教育振興財団
田島　新　2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅡ　－市原市押沼第２遺跡（下層）・川焼台遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団
蜂屋孝之ほか　2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅢ　－市原市草刈遺跡（Ｈ区）－』（財）千葉県教育振興財団
田島　新ほか　2010『千原台ニュータウンⅩⅩⅣ　－市原市鵜牧遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団



第9図　ナキノ台遺跡遺構分布及びグリッド配置



第10図 縄文時代遺構分布

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　縄文時代（第10図）

ナキノ台遺跡では，縄文時代の遺構として竪穴住居１軒，炉穴12基，陥穴49基，土坑１基を調査し，分布状況を第10図に示した。調査区北側の台地上では縄文時代早期の炉穴と陥穴が集中しており，同地区からは礫群も検出されている。周辺の遺跡に比べ陥穴が比較的多いのは，当遺跡を特徴づける点といえる。

遺物は，遺構やその周辺部から出土した土器や土製品，石器のほかに，量は少ないが縄文時代以外の遺構覆土の出土分が加わる。土器は，縄文時代早期の撚糸文系，貝殻・沈線文系，条痕文系土器がそれぞれ集中箇所を違えて出土している。土製品は，土器片錘が主な遺物である。石器は，磨石・敲石・石皿・凹石・石核・剥片などが出土しているが，中でも石斧が18点を超え，多数出土している点が注目される。このほかに，調査区北側で礫群が確認されているが，資料の大半は火を受けて変色し破砕していた。

１　竪穴住居（第１表）

調査区南側，台地西側の縁辺部において単独で検出された。縄文時代前期後半に属すると考えられる。

０８５（第11図，図版７・29）〈7C－93・94グリッド〉

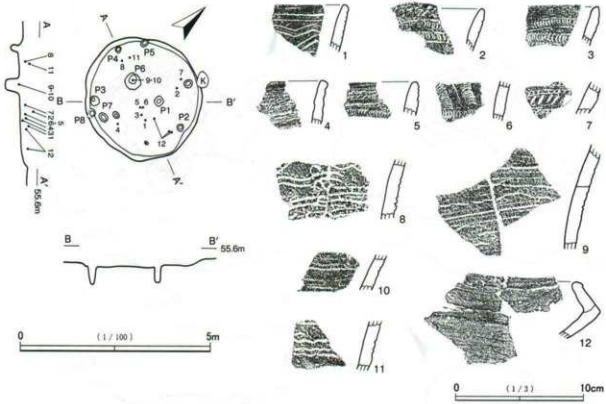
平面形態はほぼ円形で，断面図Ａ－Ａ’方向に長径は3.1m，短径は3.0mである。掘り込み面が削平されているためか，壁面の立ち上がりはそれほど急ではない。検出面からの深さは中央部で約25cmである。覆土は分層されず，ローム粒や少量の焼土粒，炭化物を含む暗褐色土の堆積が確認されている。人為的に比較的短時間で埋め戻されているようである。炉は検出されていない。ピットは11か所で確認されており，そのうち柱穴と考えられるものはＰ１，Ｐ２，Ｐ３，Ｐ４，Ｐ５である。南東側の頂点が欠如した不整五角形状の配置となり，住居の形状に対してバランスが悪い。床面からの深さは，Ｐ１が43cm，Ｐ３が46cm，Ｐ４が20cm，Ｐ６が40cmで，それ以外のピットの深さは不明である。

遺物は，縄文時代前期後半の土器片が主に覆土上層から出土している。80点ほど出土したが，図示したものは12点である。Ｐ６覆土上層からも10点ほどまとまって出土していたものの，接合には至らなかった。９と10はＰ６からの出土で，そのほかは住居の覆土中の出土である。１には沈線が施される。１～12は諸磯式と考えられる。この内２～６には連続爪形文が施される。４と５には沈線が押し引き状に引かれており，接合はしないものの同一個体の可能性がある。８は隆線と沈線による文様で構成され，縦位に連続して円形の刺突文が観察できる。９～11には沈線が施される。色調や焼成の状況が近似しており，同一個体と思われる。内外面ともに風化が激しい。12は口縁部が大きく外に張り出して口唇部が内折した器形で，口縁直下に焼成前の穿孔を施した土器である。

２　炉穴（第２表）

炉穴は，調査区北側の台地平坦部から縁辺部にかけて12基が集中して検出された。遺構覆土や炉穴周辺からは条痕文系の土器が多く出土している。周辺に同時期の遺構は検出されず，炉穴群は単独で存在する。遺構確認面での掘り込みが浅いものが多くみられたが，いずれも燃焼部を１か所ないし複数持つことから，炉穴と判断するに至った。

なお，本遺跡の12基の炉穴のうち，027を除いた比較的近接する11基（031・034・036・039・041・046・047・048・049・050・051）の炉穴群については，炉床中の焼土についてサンプル採集し，定方位資料の残留磁気測



第11図 085竪穴住居

定を実施し，その結果が既に（財千葉県教育振興財団 2010『千原台ニュータウンXXIV －市原市鶴牧遺跡（下層）－』）の第４章補遺の第４節に「ナキノ台遺跡炉穴焼土およびⅨ層中で検出された焼土遺構の残留磁気」として掲載されており詳細はそれに譲る。そのなかで会田信行氏は残留磁気の測定値がやや集中するとした８点（034・048－各２点，039・041・046・051－各１点）の資料は，各炉穴の焼土形成時のものである可能性が高いと指摘している。

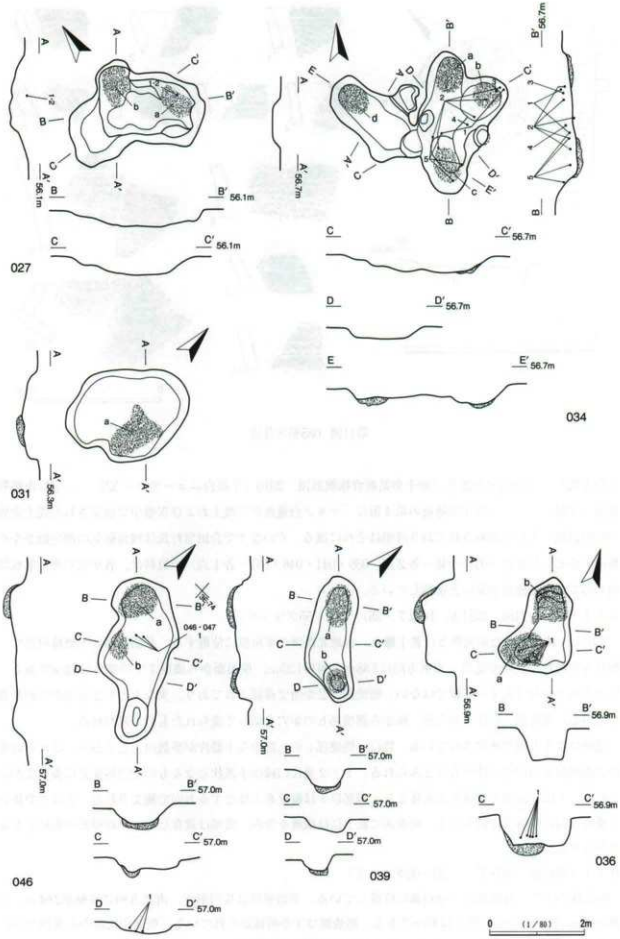
０２７（第12・14図，第11表，図版７・28）〈2D－55グリッド〉

集中して検出された炉穴群とは若干離れ，台地北西側の平坦部に位置する。平面形態は不整楕円形で，掘り方の規模は長軸が北西－南東方向に2.88m，短軸1.25m，検出面から底面までの深さは42cmである。壁の立ち上がりはあまり明確ではない。燃焼部は２か所で確認されており，少なくとも２基の炉穴が重複している。燃焼部ａに伴う炉穴が，後から燃焼部ｂの炉穴を切って造られたものと思われる。

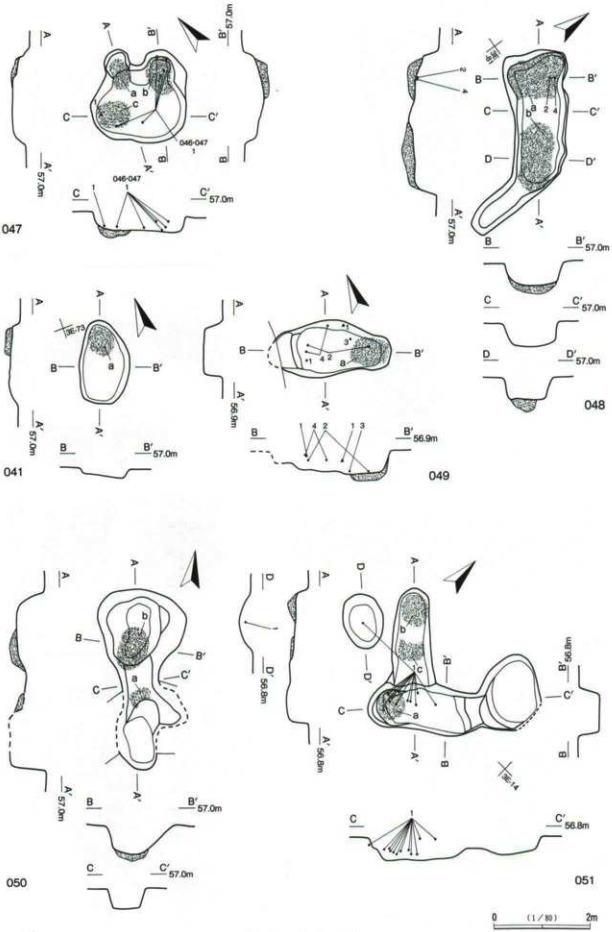
遺物は覆土上層で確認されている。特に，燃焼部ａの上部から土器片が多数出土しており，これらの遺物は燃焼部ａの炉穴に伴うものとみられる。１・２共に口縁は小波状となるもので内外面共に条痕文がみられる。１は口縁近くは横位を主体とし，胴部以下は縦位を主体とする方向で施文される。２はやや傾いた横位方向に条痕文が施される。両者共に胎土には繊維を含み，底部は遺存しないが砲弾形の形状となるとみられる。

０３１（第12図，図版７）〈2E－60グリッド〉

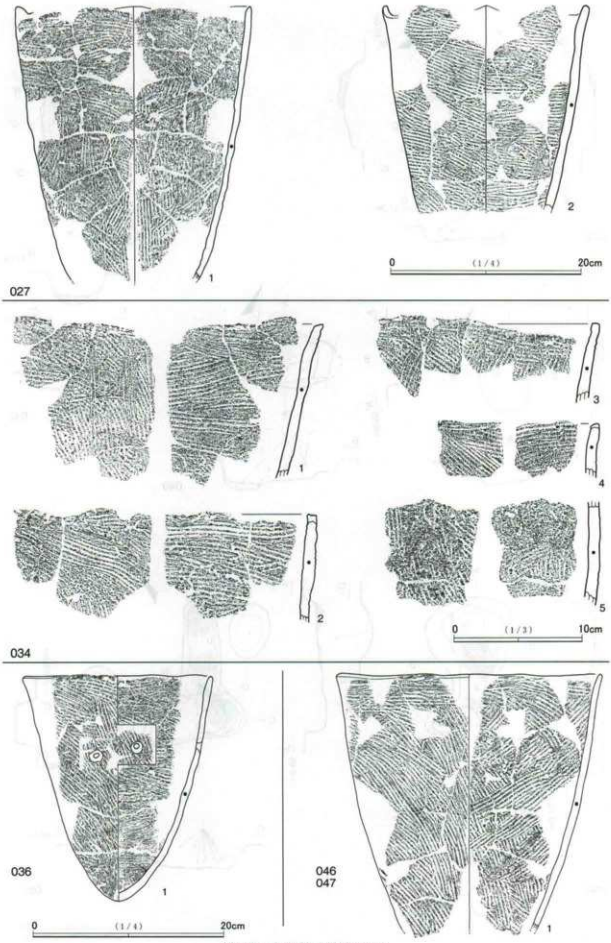
炉穴群の中で，台地北側の縁辺部に位置している。平面形態は楕円形で，南北方向に長軸が2.64m，短軸0.98m，検出面からの深さは40cmである。燃焼部は１か所確認されている。底面中央部から東側にかけて被熱面を検出した。遺物は出土していない。



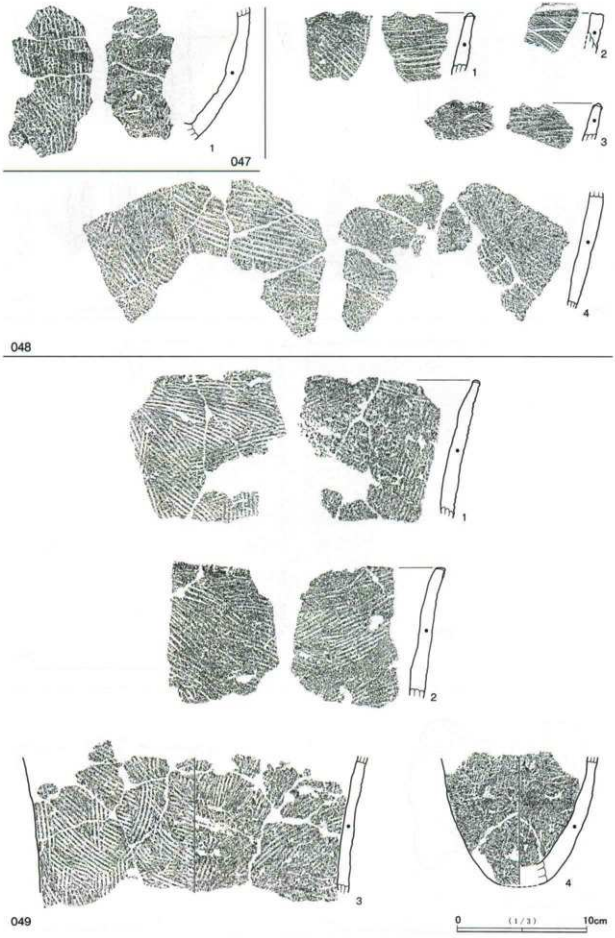
第12図　炉穴（1）


047
041
048
049
050
051
046-047
SE-T3
SE-14
57.0m
56.9m
56.8m
0 (1/80) 2m

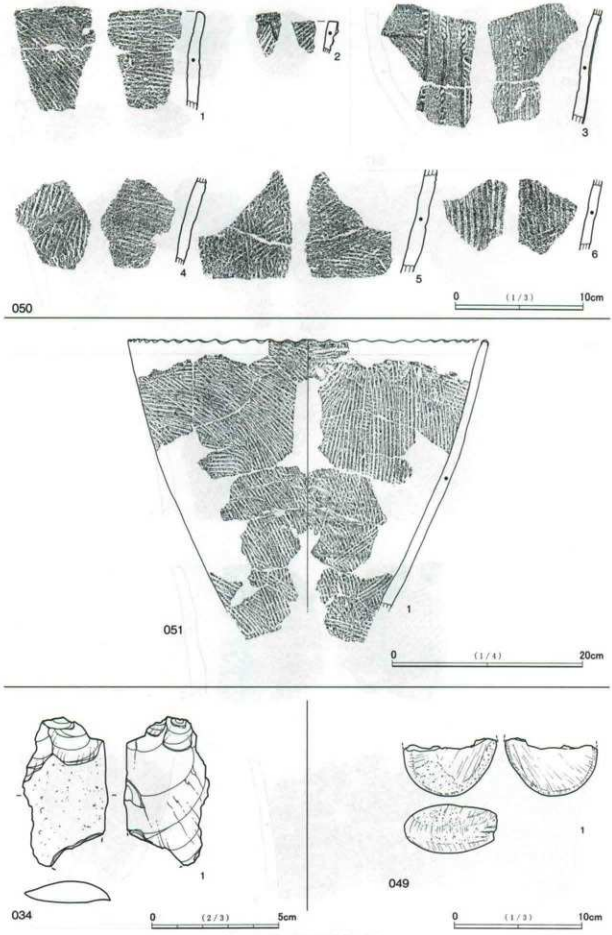
第13図　炉穴（2）



第14図　炉穴出土遺物（1）



第15図　炉穴出土遺物（2）



第16図　炉穴出土遺物（3）

０３４（第12・14・16図，第６表，図版７・29・41）〈2E－74グリッド〉

台地北側の縁辺部に位置する。平面形態は不整形で，東西方向に3.36m，南北方向に3.00m，検出面からの深さは約30cmである。掘り込み面を削平されていたことが影響したためか，壁の立ち上がりはあまり明瞭に確認できない。燃焼部は４か所存在していることから，少なくとも４基の炉穴が重複するものとみられる。調査時の所見によると，燃焼部ａ，ｂ，ｃに伴う炉が燃焼部ｄの炉を切るように造られているが，燃焼部ａ，ｂ，ｃの詳細な新旧関係は不明である。

遺物は土器片が覆土中層で出土しており，燃焼部ｂとｃの炉穴に伴うものとみられる。５点が図示できた。１～５すべて内外面共に条痕文が施され，１～４は小波状を呈する口縁部である。覆土中よりホルンフェルス製の二次加工剥片が１点出土している（第16図034－１）。一面に自然面が残り小礫から剥離され調整されたものとみられる。

０３６（第12・14図，第11表，図版７・28）〈3E－15グリッド〉

台地北側の平坦部に位置する。平面形態は不整楕円形で，南北方向に1.92m，東西方向に1.50m，検出面からの深さは約60cmである。壁の立ち上がりは明確で，掘り込みも深く，遺存状態は比較的良好である。燃焼部は２か所存在している。調査時所見によると，燃焼部ａとｂの床面から20cm上部には焼土と灰が堆積し，炭化物も含まれていたことから，比較的長期にわたる使用が考えられる。

遺物は燃焼部ａの焼土層から茅山期の尖底土器が１点出土している。１は丸底尖底の条痕文土器である。ほぼ砲弾状の形態で遺存度は高く，胴部に焼成後の孔が２か所外面から穿たれている。胎土には繊維を含む土器である。

０３９（第12図）〈3E－34グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は不整楕円形で，北西－南東方向に長軸が2.54m，短軸が0.58m，検出面からの深さは約35cmである。燃焼部は２か所で確認されているが新旧関係は不明である。調査時所見によると，燃焼部ａとｂの上部には焼土が堆積していた。これらの焼土から，それぞれ土器片が数点出土しているが，時期を明確に示すものでなかったため図示しなかった。

０４１（第13図，図版８）〈3E－73グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は楕円形で，北東－南西方向に長軸が1.66m，短軸が0.80m，検出面からの深さは約20cmである。燃焼部は１か所確認されている。調査時の所見によると，上部に焼土が堆積していた。遺物は遺構に伴うものはない。

０４６（第12・14図，第11表，図版８・28）〈3E－73グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は不整楕円形で，北西－南東方向に長軸が3.36m，短軸が0.66m，検出面からの深さは約40cmである。燃焼部は２か所で確認されているが，新旧関係は不明である。

遺物は覆土下層から土器片が数点出土している。１は底面付近から出土し，北東へ約５m離れた場所に位置する047炉穴の燃焼部ｂおよびｃ出土の破片とも接合している。（046・047）１は砲弾形状となる条痕文土器で。内外面共に条痕文が施される。胎土に繊維を含み，条痕は口縁部近くは横行し，胴部以下は斜位方向に施される。

０４７（第13～15図，第11表，図版８・28・29）〈3E－54グリッド〉

台地北側の平坦部中央，046炉穴の北東約５mに位置する。平面形態は不整楕円形で，北西－南東方向

に長軸が2.00m，短軸が1.98m，検出面からの深さは約40cmである。燃焼部は３か所で確認されている。調査時所見によると，燃焼部ａとｂの炉が，後から拡張して燃焼部ｃを切って造られたことが把握されている。しかしながら，燃焼部ｂとｃ上部から出土した土器が接合したため，この３か所の燃焼部は新旧関係はあるものの，それほどの時間をあけずに使用されていた可能性が考えられる。また，この土器は046炉穴の燃焼部ｂ付近から出土した土器（046・047－１）とも接合している。炉穴の使用時期の同時性がうかがわれる。

遺物は土器片が10点覆土中から出土し，その内６点が接合した。１は燃焼部ｂとｃ底面付近から出土し，046炉穴出土の破片と接合している。（第15図047－１）は条痕文の土器で外面には明瞭な条痕が縦位に，内面は不明瞭な条痕が縦位で一部に施されている。ほぼ球状断面に近いカーブを描き丸底尖底の底部近くの破片であろうか。

０４８（第13・15図，図版８・29）〈3E－71グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は不整楕円形で，長軸が4.00m，短軸が0.51m，検出面からの深さは約70cmである。掘り込みも深く，壁の立ち上がりも明瞭に認められる。燃焼部は２か所で確認されている。調査時の所見によると，燃焼部ａがｂを切って，後から造られていることが指摘されている。また，燃焼部ｂの方が若干深い位置に造られている点も注目したい。更に，燃焼部ａの上面から土器片が出土していることから，燃焼部ａが新しく造られたとみてよい。

遺物は土器片が数点ほど燃焼部ａ直上から出土し，その内４点を図示した。1～３は小波状の口縁部とみられ，４は胴部の破片である。１・３・４内外面共に条痕がみられ，２は外面に沈線で斜格子の文様がみられる。すべての土器の胎土に繊維が認められる。

０４９（第13・15・16図，第６表，図版８・29・41）〈3E－23グリッド〉

台地北側の平坦部に位置する。平面形態は楕円形で，西側の一部を後世の攪乱で壊されている。東西方向に長軸が約2.55m，短軸が0.70m，検出面からの深さは約50cmである。壁の立ち上がりは明瞭に認められる。燃焼部は，東側に１か所明瞭に残されているが，調査時の所見によると，破壊された西側にも一部壁が残存しており，被熱によるものと考えられる赤変箇所が確認されており，燃焼部の可能性が高い。東側燃焼部上面には，約15cmの灰や炭化物が混在した焼土の堆積が認められている。遺物は，この焼土層及び覆土中から出土している。

遺物は土器片が数点ほど覆土中から出土し，燃焼部直上出土の破片との接合する個体もみられる。１～４は条痕文の土器で，１・２は口縁部，３は胴部破片，４は底部破片である。内外面共に条痕がみられる。覆土中から流紋岩製の磨石片が出土している（第16図049－１）。やや扁平な円礫の稜に使用痕が残りほぼ半分に破損している。

０５０（第13・16図，図版８・29）〈3E－31・41グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は不整楕円形で，南北方向に長軸が3.63m，短軸が0.54m，検出面からの深さは約60cmである。燃焼部は２か所に残されている。調査時の所見によると，燃焼部ａには10cmほど焼土が堆積していた。燃焼部ａより南側の大半は攪乱を受けており，壁と底面は残存していなかった。外形を観察するかぎり，２つの楕円形の炉が端部を切り合って造られているようにみえるが，新旧関係は不明である。

遺物は土器片が覆土中より出土しているが，詳細な位置は不明である。その内６点を図示した。１～６

はすべて条痕文系土器で，内外面共に条痕文が施される。１・２は口縁部である。３は外面に縦方向に平行して３条の微隆起線を施し，微隆起線上に複数のキザミが入る。上部には直交する横方向の微隆起線が１条みられる。小片の２にも斜め方向や縦方向の微隆起線がみられる。６の外面の縦方向の条痕文はほかのものより太い貝殻条痕文で，内面も縦方向に施文されている。

０５１（第13・16図，第11表，図版８・28）〈3E－03・13グリッド〉

台地北側の平坦部中央に位置する。平面形態は，２つの長楕円形が端部で直交し，Ｌ字型に切り合っている。燃焼部は３か所に残されている。燃焼部ａに伴う長軸が3.59m，短軸が0.68m，検出面からの深さは約50cm，燃焼部ｂとｃに伴う炉は北西－南東方向に長軸が約2.00m，短軸が約1.00m，検出面からの深さは約25cmである。どちらの炉も，壁面が明瞭に確認された。調査時の所見によると，燃焼部ａの炉は，後から燃焼部ｂとｃの炉を切って造られている。燃焼部ｂには，灰の混在した焼土が約10cmの厚さで堆積していた。

遺物は，土器片や礫が各燃焼部付近より採集されている。特に燃焼部ａからの出土が多く，12点の土器片が，炉の西側に隣接する浅い皿状の掘り込みの土坑から出土した破片と接合している。１は，やや大きく逆ハの字状に開く条痕文土器である。口縁部は口唇に細かいキザミが多く施される。内外面共に条痕文が施され，胎土には繊維を含んでいる。底部は欠失している。

３　陥穴（第17～22図，第３・６表，図版９～11・29・41）

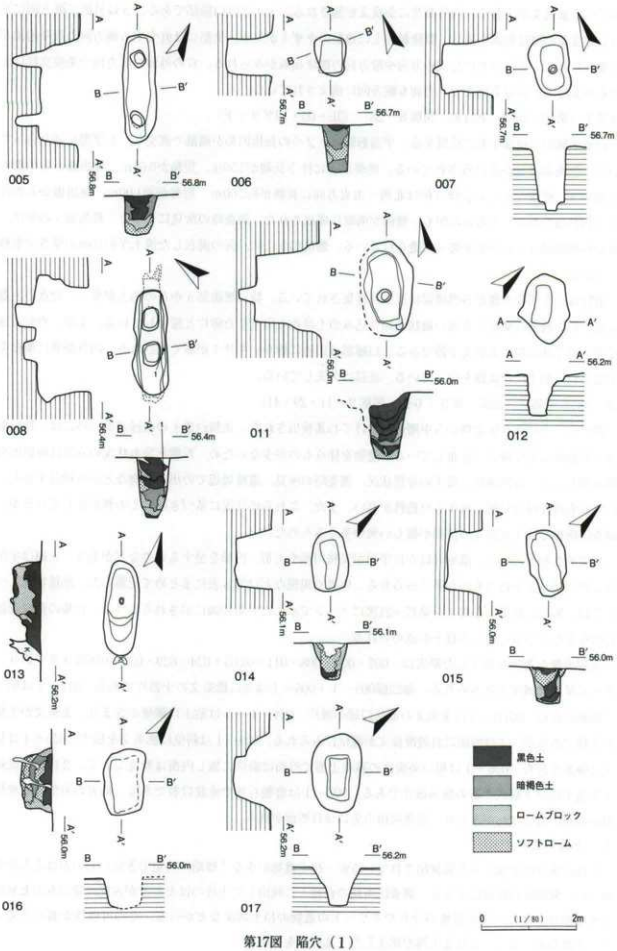
陥穴は，主に調査区北側から中間部にかけて49基検出された。北側台地上の西縁辺部以外には，特に集中する箇所はなく疎らに分布している。遺物を伴うものが少ないため，形態と分布状況のみでは時期の判断が難しいが，検出層位，覆土の堆積状況，調査時の所見，遺構周辺での出土遺物などから検討すると，いずれも縄文時代早期に属する可能性が高い。また，これらの状況に基づき陥穴との判断をしているが，調査区南側では土坑群との区別が難しい例が多くみられた。

形態的な特徴として，溝形のほかに平面が長楕円形や方形，円形を呈するものなどがあり，底面は平坦なものやピットを持つものが多くみられる。位置や規模などは第３表にまとめて記載した。堆積状況については，陥穴に特徴的な覆土を第17～21図にトーンで示した。第10図に示されるように，台地の西縁辺部に列をなして分布している様子が認められる。

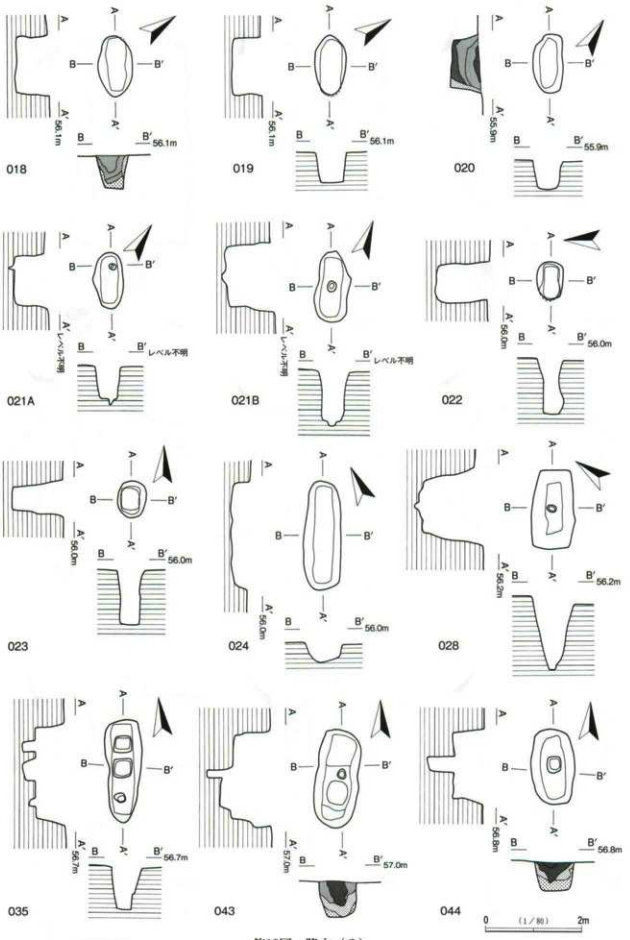
実測可能な遺物を出土した陥穴は，005・006・008・011・021B・024・029・035・056の９基であり，すべて早期に属するとみられる。第22図005－１・006－１は共に撚糸文の土器片である。011－１は胎土に繊維を含む。021B－１は条痕文の波状口縁の破片，024－１～５は胎土に繊維が含まれ，条痕文が主体の文様であるが，４は内面に貝殻腹縁文が縦位にみられる。029－１は斜位に撚糸文を施す，035－１は胎土に繊維を含む。056－１は粗い条痕文の繊維土器で外面は斜位に施し内面は無文である。２は横に沈線文を施す田戸下層式土器の胴部破片である。008－１は磨製石斧で流紋岩製である。蛤刃の刃部には使用痕か細かい刃こぼれがみられ，表裏両面中央には自然面が残る。

４　土坑（第４表）

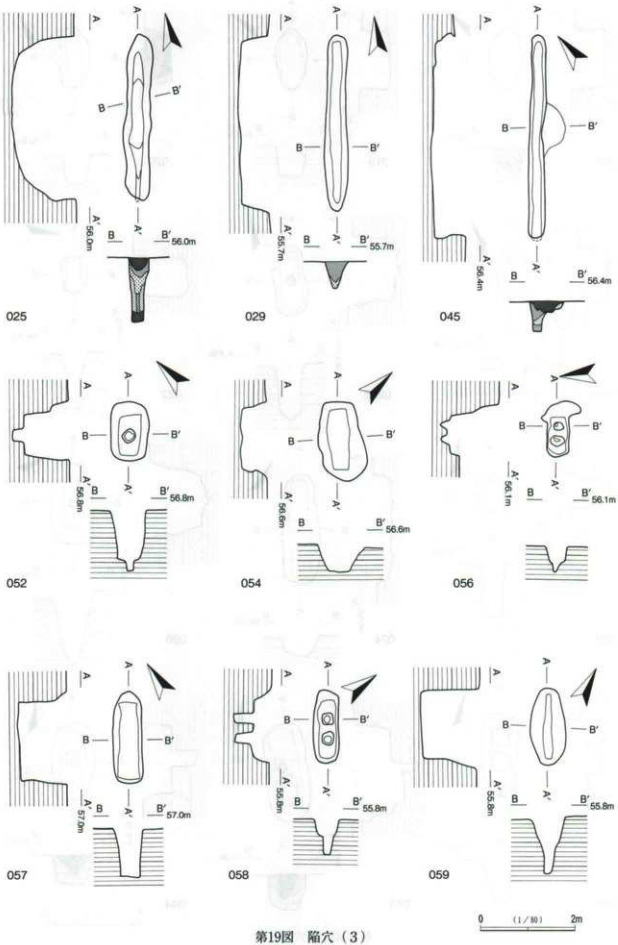
土坑は調査区全域から多数検出されているが，出土遺物が少なく時期が決定できないものがほとんどであった。発掘時の所見によると，調査区南側の台地上に検出した土坑のほとんどが古代以降のものと判断されており，また，周辺遺構の分布やグリッドの遺物の出土状況などからも，その可能性が高いと考えた。そのため，ここでは縄文土器が出土した１基のみを扱った。


005
006
007
008
011
012
013
014
015
016
017
黒色土
暗褐色土
ロームブロック
ソフトローム
0
(1/80)
2m

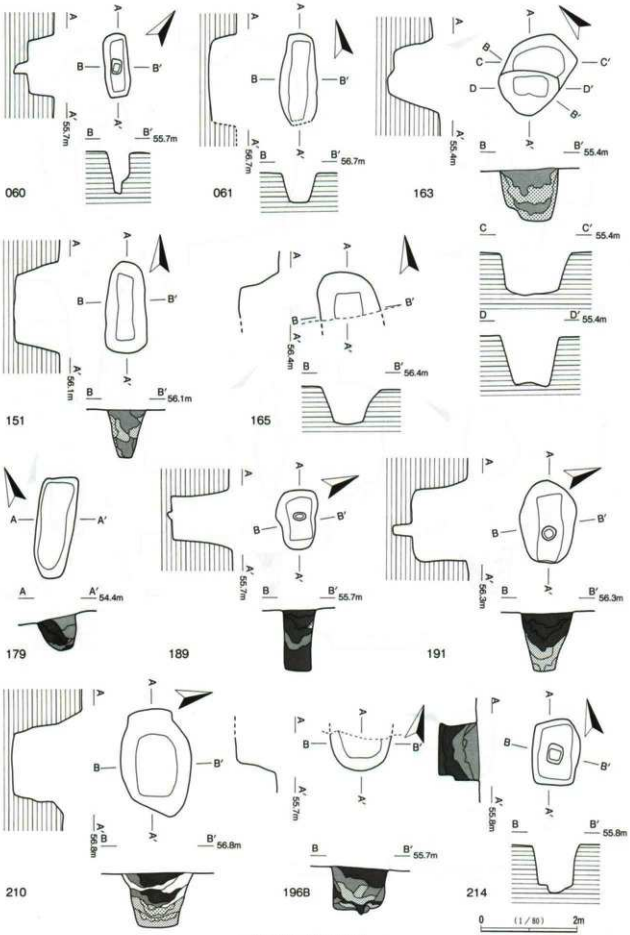
第17図　陥穴（1）


018
A
A′
B
B′
56.1m
019
A
A′
B
B′
56.1m
020
A
A′
B
B′
55.9m
021A
A
A′
B
B′
レベル不明
021B
A
A′
B
B′
レベル不明
022
A
A′
B
B′
56.0m
023
A
A′
B
B′
56.0m
024
A
A′
B
B′
56.0m
028
A
A′
B
B′
56.2m
035
A
A′
B
B′
56.7m
043
A
A′
B
B′
57.0m
044
A
A′
B
B′
56.8m
0
(1/80)
2m

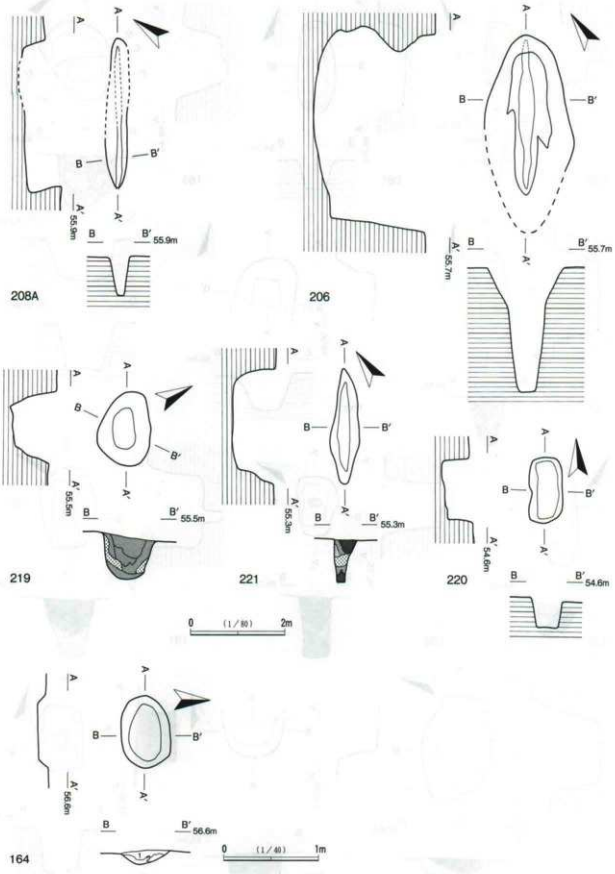
第18図　陥穴（2）


025
A
A'
B
B'
A'
B
B'
56.0m
029
A
A'
B
B'
A'
B
B'
55.7m
045
A
A'
B
B'
A'
B
B'
56.4m
052
A
A'
B
B'
A'
B
B'
56.8m
054
A
A'
B
B'
A'
B
B'
56.6m
056
A
A'
B
B'
A'
B
B'
56.1m
057
A
A'
B
B'
A'
B
B'
57.0m
058
A
A'
B
B'
A'
B
B'
55.8m
059
A
A'
B
B'
A'
B
B'
55.8m
0
(1/80)
2m

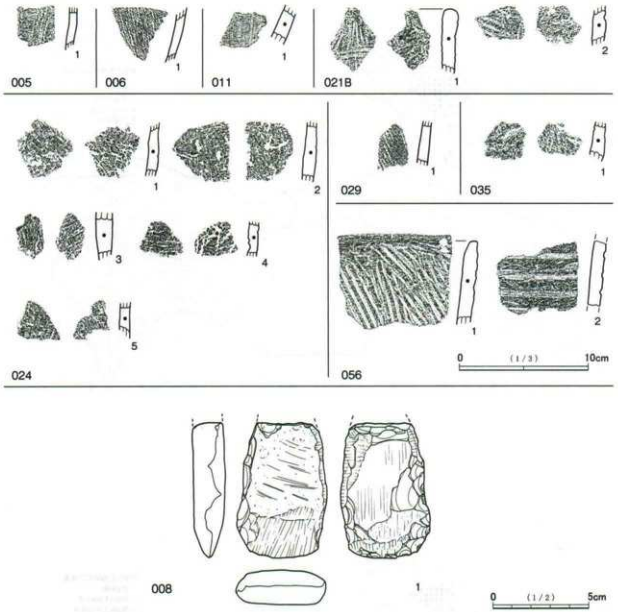
第19図　陥穴（3）


060
A
A'
B
B'
55.7m
061
56.7m
163
55.4m
C
C'
D
D'
151
56.1m
165
56.4m
179
54.4m
189
55.7m
191
56.3m
210
56.8m
196B
214
55.8m
0
(1/80)
2m

第20図　陥穴（4）


208A
206
219
221
220
164
A
A′
B
B′
55.9m
55.7m
55.5m
55.3m
54.6m
56.6m
0 (1/80) 2m
0 (1/40) 1m

第21図　陥穴（5）・土坑



第22図　陥穴出土遺物

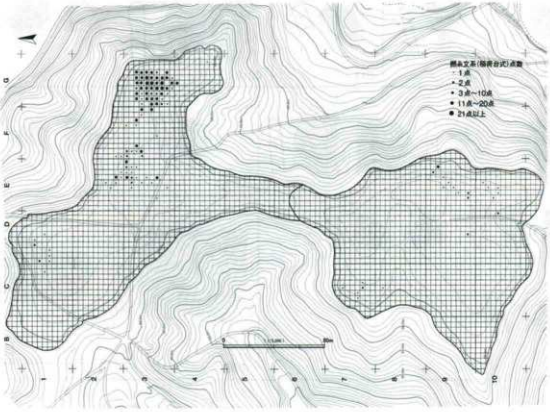
164（第21図）〈9E－02グリッド〉

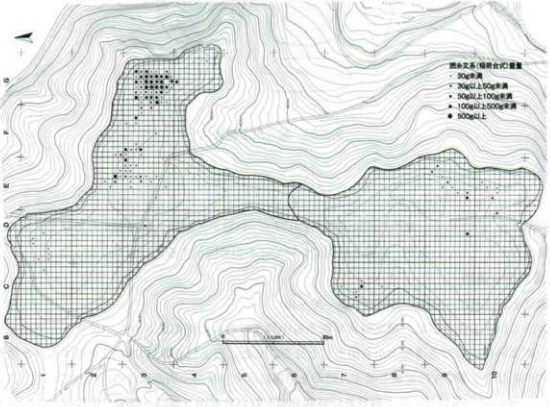
平面形態は楕円形である。東西方向に長軸が約0.73m，短軸が約0.5m，検出面からの深さは約30cmである。縄文土器が出土しているが，詳細な時期については不明で図示するには至らなかった。

5　遺構外出土遺物

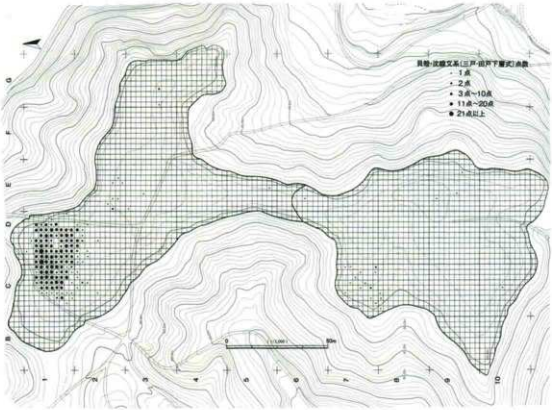
（1）縄文土器（第23～55図，図版13・28・30～40）

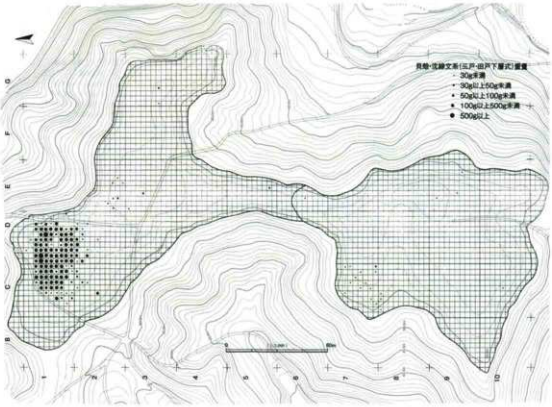
調査区から出土した土器は，縄文時代早期から中期までのものが確認された。グリッドで出土した分に加え，縄文時代以外の遺構覆土から出土した分を併せた。出土総点数は5,000点を超すものと思われるが，無文の胴部や底部破片は対象とせず，時期を明確に示す口縁部や胴部破片のみ扱っている。ここでは約4,300点，86kgの土器に対して，観察及び時期分類を行い分布図（第23～28図）を作成した。以下に概要を掲載するが詳細な分類表は省略し，個々の遺物の掲載に努めた。



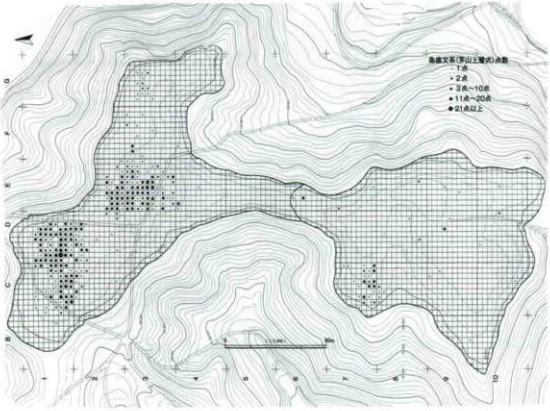


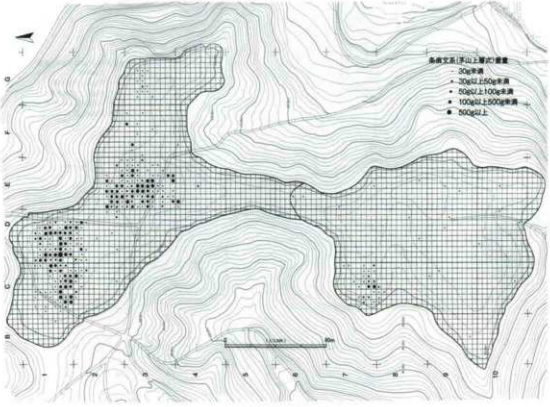
第23図　遺構外出土土器数量分布（1）



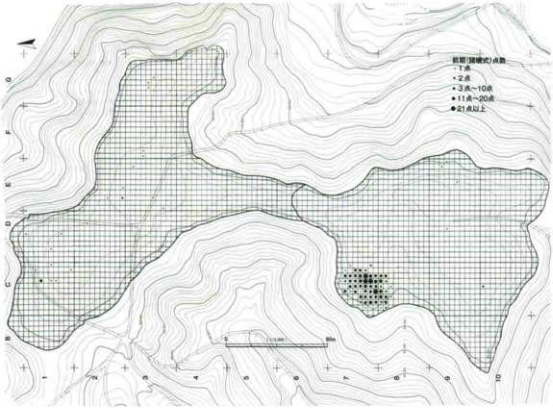


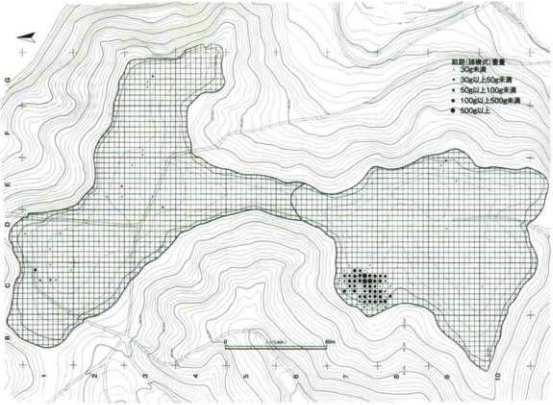
第24図　遺構外出土土器数量分布（2）



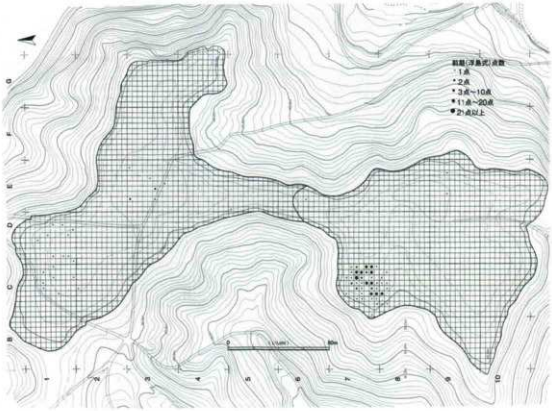


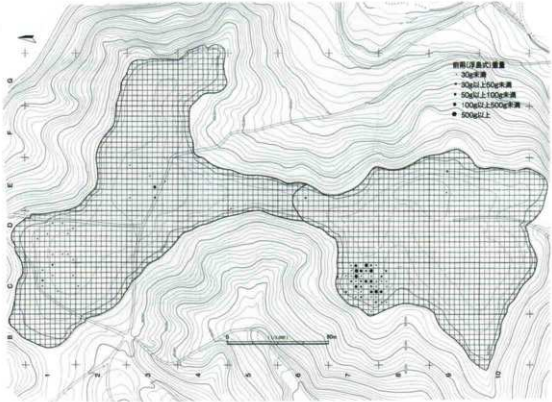
第25図　遺構外出土土器数量分布（3）



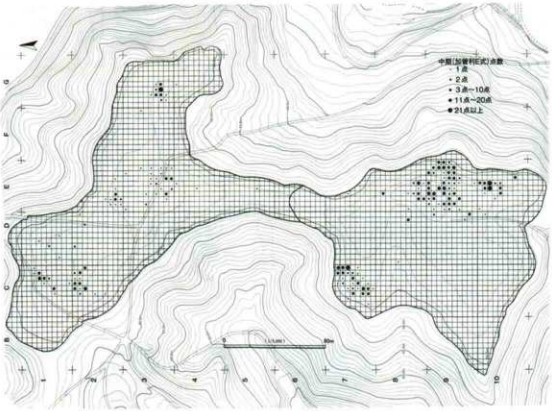


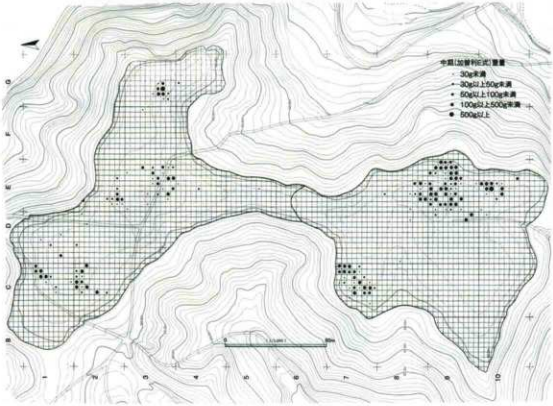
第26図　遺構外出土土器数量分布（4）



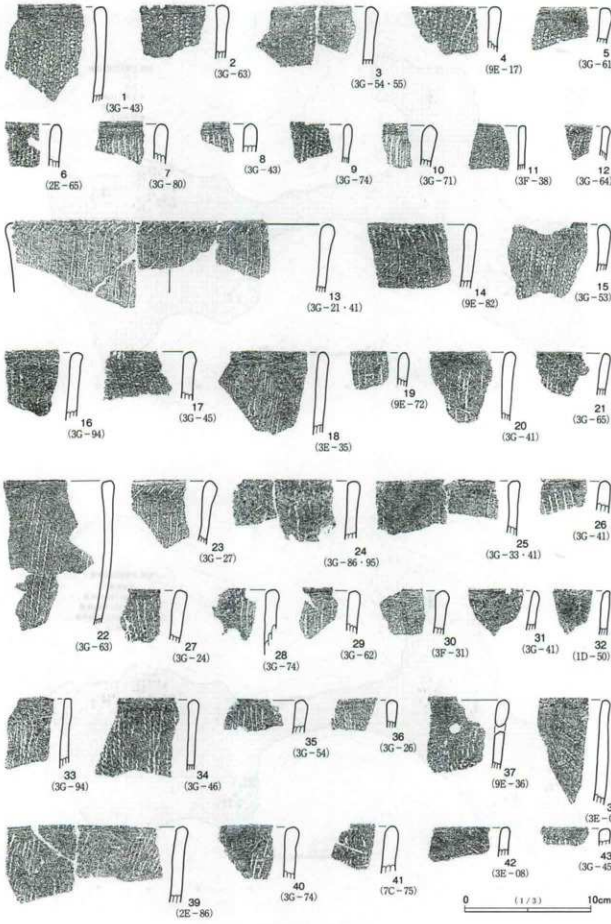


第27図　遺構外出土土器数量分布（5）

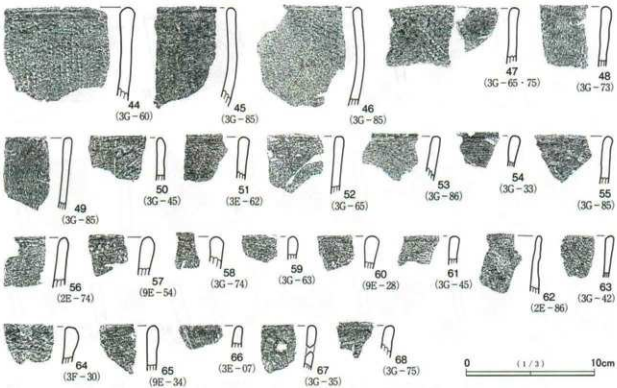




第28図　遺構外出土土器数量分布（6）



第29図　遺構外出土土器（1）



第30図　遺構外出土土器（2）

第1群　早期の土器（第29図1～第46図505，図版30～36）

第1類　撚糸文系土器（第23図，第29図1～第31図113，図版30・31）

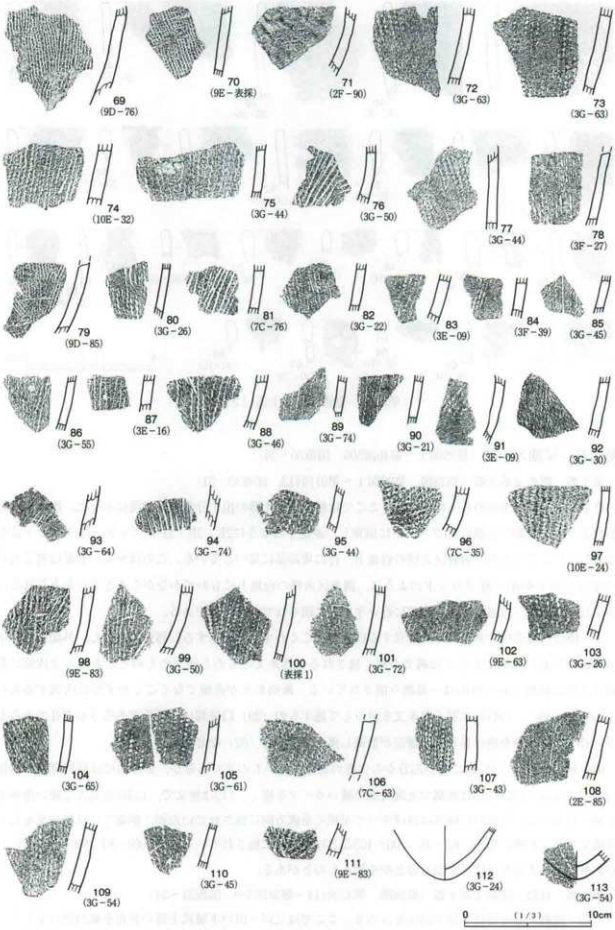
撚糸文系土器は全体の6％を占める。ここでは稲荷台式土器の出土分布を第23図に示した。図にも明らかなように，該期の土器は3Gグリッドに偏重し，連続するように2E・3E・3Fグリッド，1Dグリッドにも分布していることから，調査区北側の台地上，特に東端部に集中している。このほかに，数量は劣るものの7Cグリッドや9D・9Eグリッドのように，調査区南側の台地上にもわずかながらまとまりがみられる。いずれの出土も，台地突端の縁辺部に近い平坦面に限られているようである。

1～68は口縁部片である。ほぼ直立する口縁部にごくわずかに肥厚する口唇を主体とし，外面口唇直下からほぼ垂直に撚糸文もしくは縄文が粗く施される。撚糸文のものと縄文のものとがある。全体的に器面は丁寧に研磨されて外面は一部磨り消されている。断面形状が直線でなくごくわずかに内湾するもの（22・45・46），口唇部に別の撚糸文を斜行して施すもの（23）口縁部に補修孔であろうか穿孔のあるもの（37・67），やや趣の異なる口縁部が暫減し薄くなるもの（62）などがあげられる。

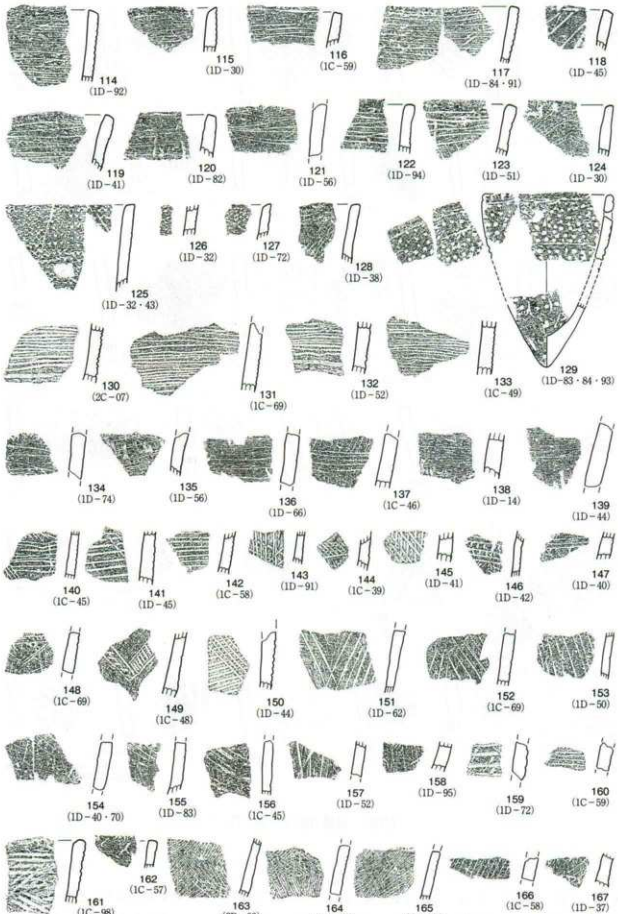
69～102は胴部片で口縁に近い部分から尖底の底部に近いものまであるが，基本的には砲弾形状の胴部の一部である。112・113は底部で丸底尖底の緩いカーブを描く。112は無文で，113は底部まで粗い撚糸文が施されている。先述の口縁部はほぼすべてが粗く垂直方向に施されていたが，胴部片には撚糸文もしくは縄文の施文が粗いもの（82～91，100～105など）と，密に施されているもの（69～81，92～99など）とがあり，その方向もほぼ垂直なものとやや傾くものとがある。

第2類　貝殻・沈線文系土器（第24図，第32図114～第38図359，図版31～34）

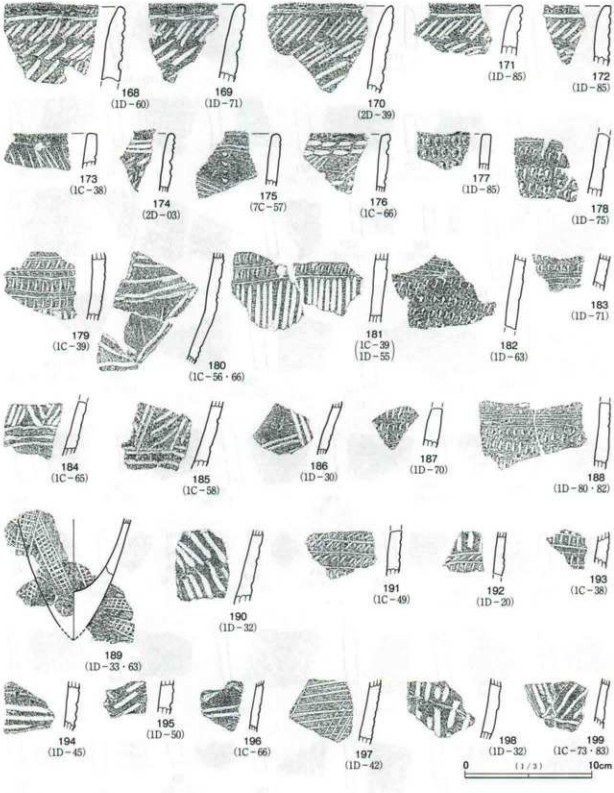
貝殻・沈線文系土器は全体の25％を占める。ここでは三戸・田戸下層式土器の分布を第24図に示した。前の撚糸文系土器と同じく，ほとんどが北側台地に分布しているものの，ここでは台地北端の1C・1Dグ



第31図　遺構外出土土器（3）

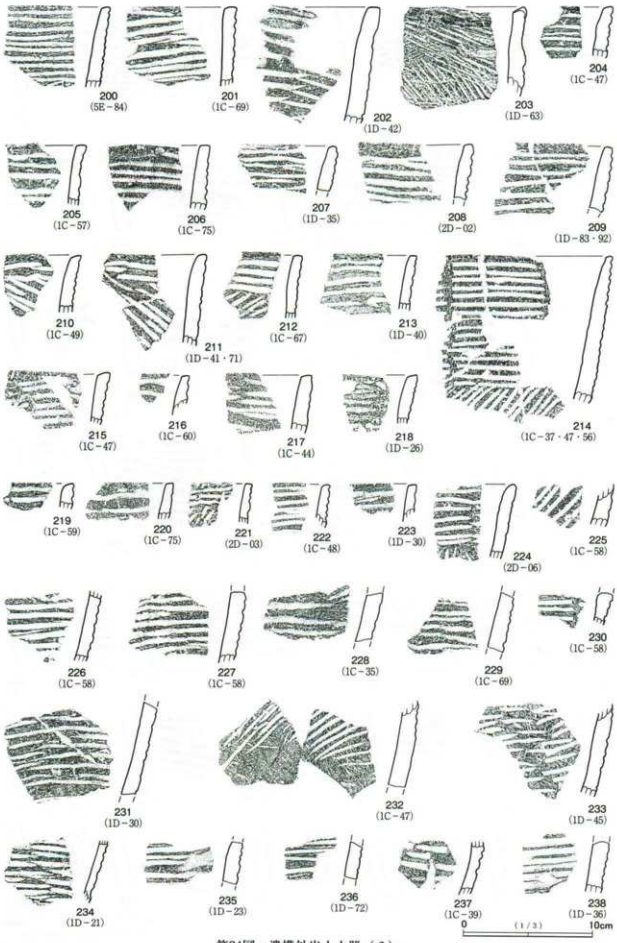


第32図　遺構外出土土器（4）

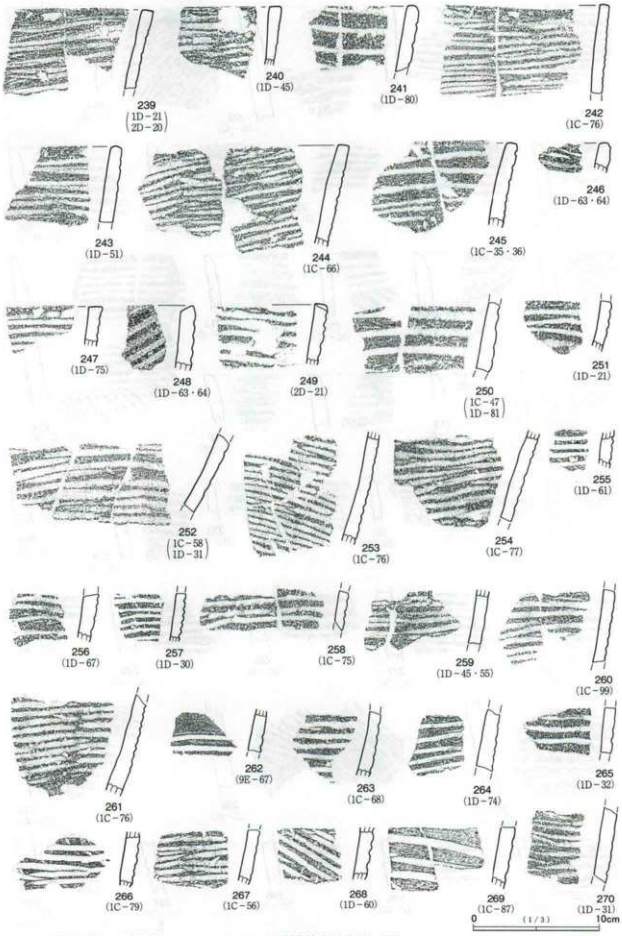


第33図　遺構外出土土器（5）

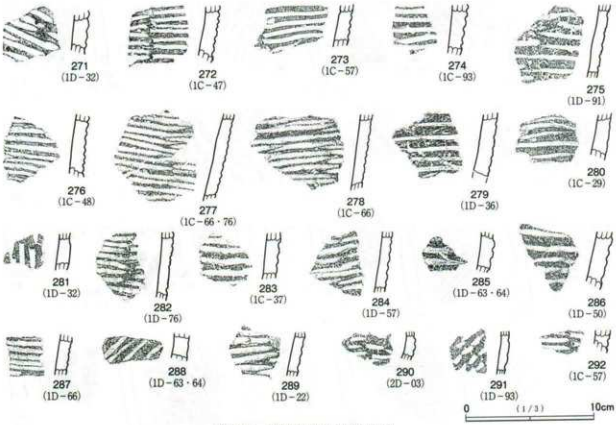
リッドに強く集中している。このほかには，2Eグリッドと7Cグリッドにわずかながらまとまってみられる。台地突端部の縁辺付近ではあるが，撚糸文系土器の分布とは違って，平坦面にも広く分布していることがわかる。陥穴の分布とも一部重なっているものの，明確に関連があるとはいい難い。



第34図　遺構外出土土器（6）



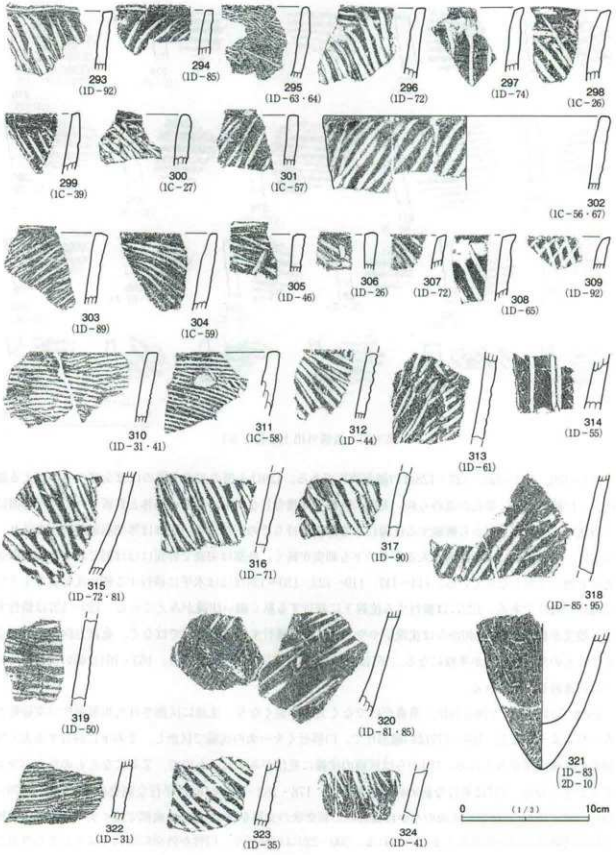
第35図　遺構外出土土器（7）



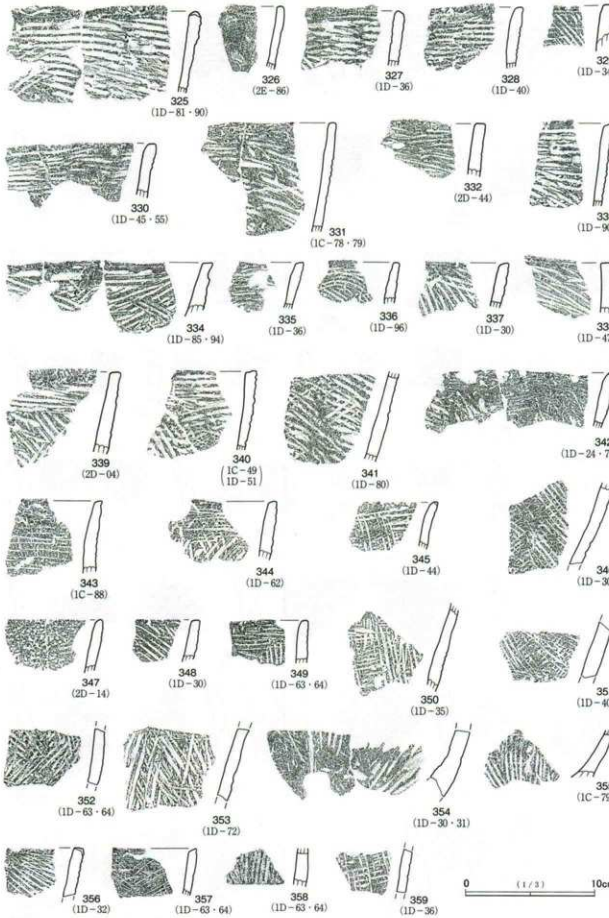
第36図　遺構外出土土器（8）

114～120，122～125，127・128は口縁部破片である。129は小型の尖底土器のほぼ全容のうかがえる破片で，口縁部近くに穿孔が認められ，尖底の底部とは接合しないものの同一個体と判断された。口唇部は半円状で，外面は上位から断続する沈線による区画を持ちその下部に粗いがほぼ等間隔に刺突がなされ，途中に一本の沈線による区画が入るがその下も刺突が続く。底部は尖底で外面はほぼ同じ傾きで，内面が丸みを増して厚くなっている。114～117，119～123，130～139はほぼ水平に横行する細い沈線文を主とする部位の破片である。123には横行する沈線下に斜行する粗く細い沈線がみえている。125～127は横行する貝殻文が施される。140からは沈線がやや太めになり横行するものだけではなく，垂直方向や斜行し交叉するものなど方向性が多様になる。161は168以下と同様に沈線が太くなり，163・164は細い沈線がくの字状に連続して描かれる。

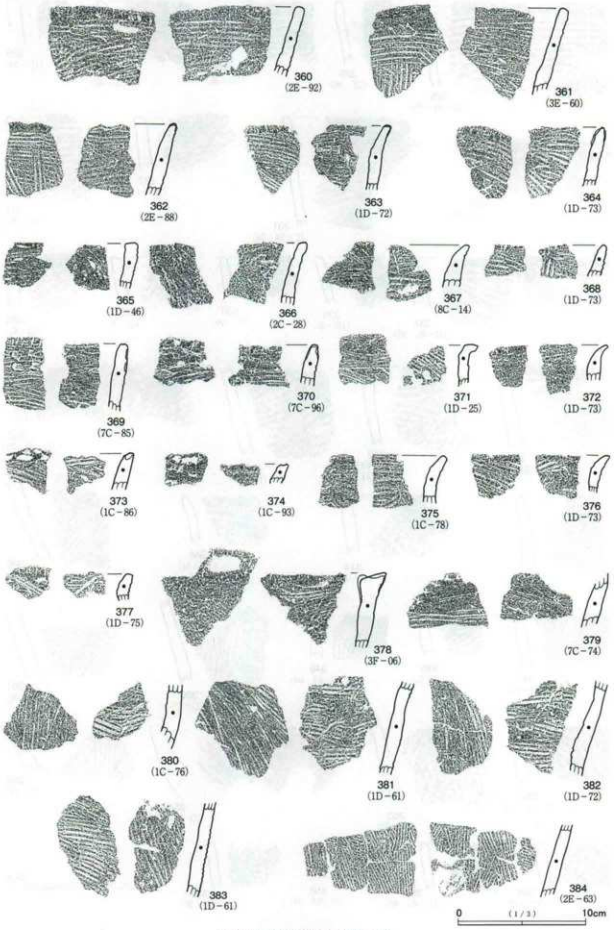
168からは沈線の方向も斜位・垂直だけでなく太く・短くなり，沈線に区画された爪形刺突の文様帯がみられるようになる。168～177は口縁部片で，口唇近くを一条の沈線で区画し，その下に斜行する太くて短めの沈線文帯がみられる。174からは区画の沈線に変化がみられるもので，２条になるものなどバラエティが多くなる。177は平行な斜めの連続刺突文，178・182・187・188は平行な刺突状の文様帯，179・181・191・193などは平行沈線のなかに縦方向の刺突状の文様を施す。189は底部で細く尖り，外面には梯子状の沈線の文様が底部近くまでみられる。200～224は口縁部で，口唇が外面に流れるようにならされている。ほぼ口唇部から横方向に平行な太めのくっきりした条線が走り，その下には同様な条線が斜行して施されている。225以下も同様な文様の胴部片である。239～248の口縁部は直線的に平坦な口唇で，ほぼ平行な横行する太めの条線だが彫りがやや甘い条線である。249～287は同様なやや彫りの浅い横行する条線の文様である。290～292は条線の単位が短くなり，斜行するものもみられる（291）。



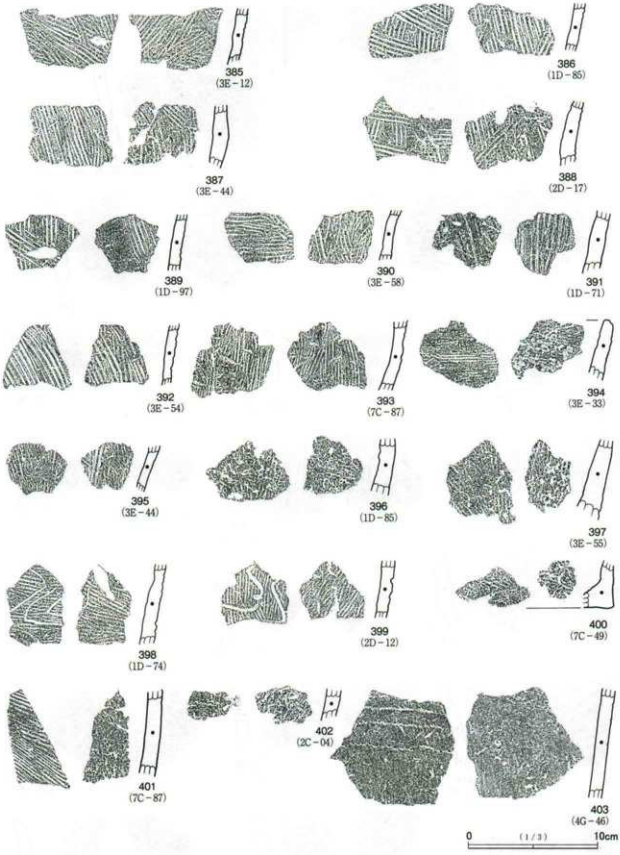
第37図　遺構外出土土器（9）



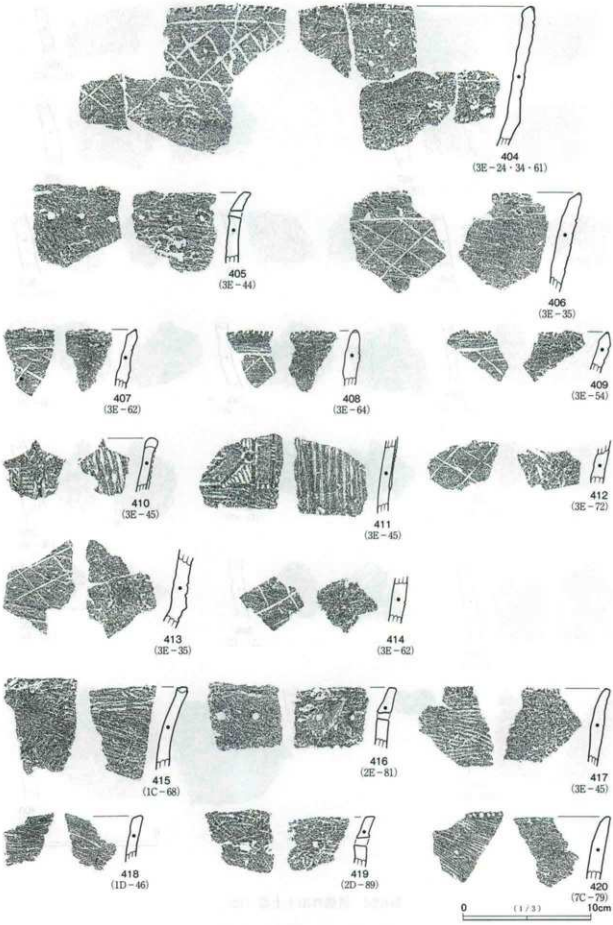
第38図　遺構外出土土器（10）



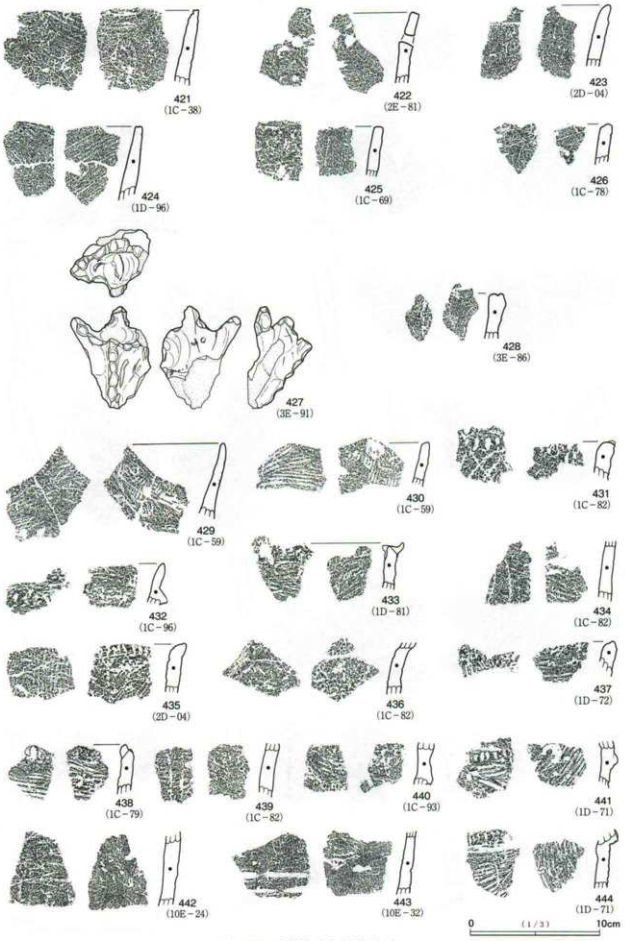
第39図　遺構外出土土器（11）



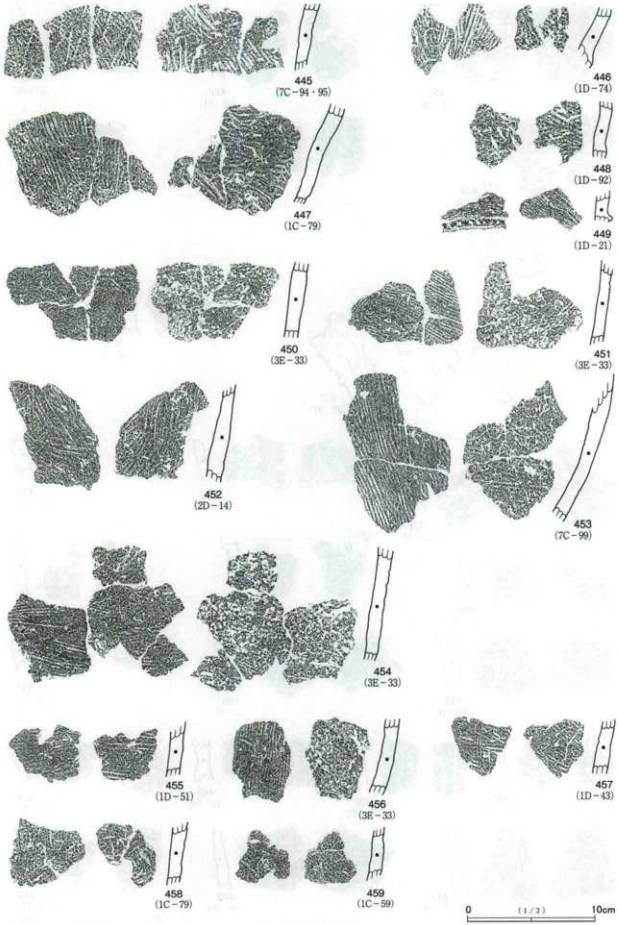
第40図　遺構外出土土器（12）



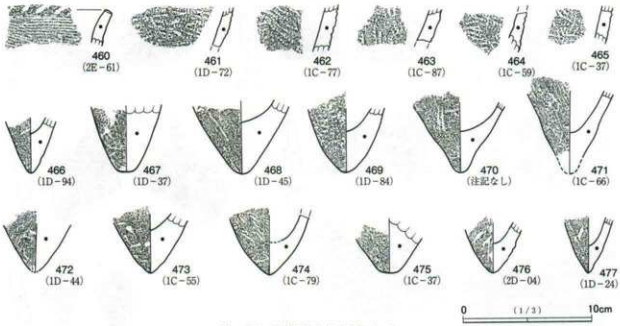
第41図　遺構外出土土器（13）



第42図　遺構外出土土器（14）



第43図　遺構外出土土器（15）



第44図　遺構外出土土器（16）

293～311の口縁部片は，口唇が平坦で斜行する沈線で太さもややムラがあり，一部は格子状に交叉している（309）。310・311は条線が細めで条痕文に近い。312～320，322～324は縦・横あるいは斜行して粗い沈線を施す胴部破片，321は尖底部である。325，327～340，342～345，347～349，356・357は口縁部で，条痕文状の不規則な沈線を縦・横あるいは斜行して施す。325・342・356は口唇部にキザミを施す。326は無文の口縁部で，外面に指頭圧痕を残す。346，350～353，358・359は条痕文状の斜行沈線を施す胴部破片，354・355は尖底部付近の破片である。

第3類　条痕文系土器（第25図，第39図360～第46図505，図版34～36）

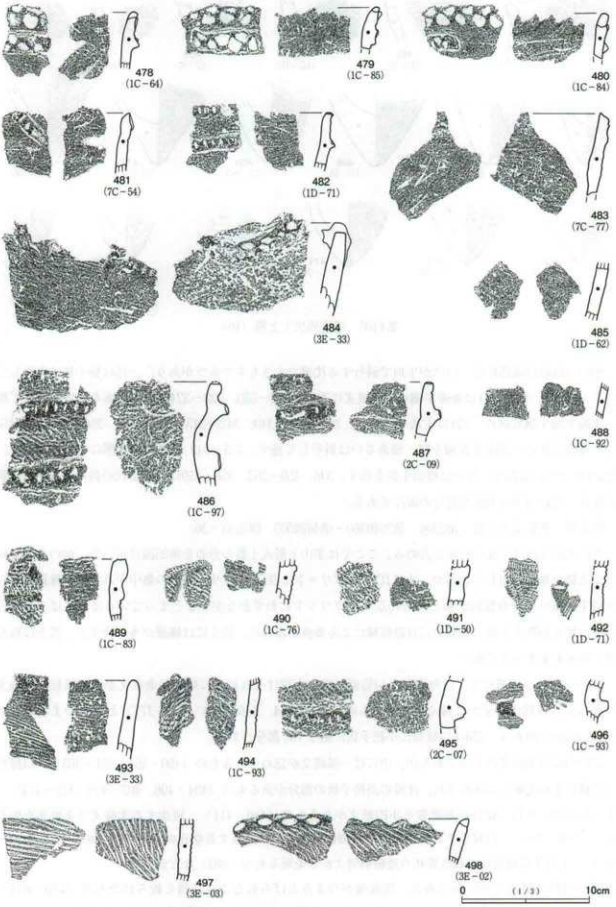
条痕文系土器は全体の21％を占める。ここでは茅山上層式土器の分布を第25図に示した。前の2例と同じく北側台地に分布しているが，主に1C・1Dグリッドと2E・3Eグリッドへの集中がみられ，縁辺部から内側平坦部への分布傾向が強くみられる。7Cグリッドにわずかながらまとまっているほかには，南側台地上に数点が散在する。表裏共に貝殻腹縁による条痕がみられ，胎土には繊維が多く含まれ，器表は肌が粗く焼成もあまり良くない。

360～378は口縁部片で，内外面とも口唇部に空白を設けそれ以下に細めの条痕文がほぼ横行して施文される。口唇部はわずかに薄く外反するもの（362～364，366～378，370～377）と，そのままのもの（365・369）があり，378は口唇部に小把手状に肥厚する部分がある。

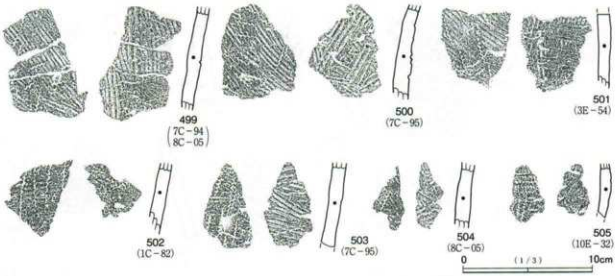
379～465は条痕文の主体であるが，中には一部縄文が認められるもの（450・451，461～465），口縁部下に横行する沈線文に区画され，沈線の斜格子状の部分があるもの（404・406，407～409，412～414），小さいキザミを持つ縦位の細隆帯と小円形文があるもの（410・411），屈曲する沈線文で条痕文を切るもの（398・399），口縁部下に外面から一定間隔で横方向に連続する穿孔のあるもの（405・416・419・422），平行する横位の半裁竹管状の連続刺突文が3条廻るもの（403）などがある。

466～477は底部片で尖底である。底部端がつまみ上げられたように細く絞られたもの（470・471・477），逆に丸めるようにされたもの（467・469・475）があるが，比較的鋭角なものが多い。

478～505は早期後葉～末期にかけての東海系とみられる土器片である。出土グリッドをみると1C・



第45図　遺構外出土土器（17）



第46図　遺構外出土土器（18）

1D・2Cグリッドと7Cグリッドからの出土で貝殻・沈線文期もしくは条痕文期の出土範囲の一部として重なるようであり，該期の特異な流入・搬入品とみることができよう。

478～484は，口唇部が小波状の連続で口縁部下には貼り付けられたつまみのある隆帯が連続して廻る。口唇部と隆帯上にはつまみが連続する土器の一群である。東海地方の早期後葉の上ノ山式とみられる。

486・487・489は，口唇部に小さい刻みがあり，口縁部外面に２段以上の粘土紐を貼り付けてあり，破片が小さいため貼り付けの状況がよくは分からないが，やや傾きを持って斜めに貼り付けられているようで，螺旋状になるようである。貼り付けの粘土紐上にも刻みがみられる。486は貼り付けの部分で段を持って大きく波打つような断面を示す。貼り付けの中間帯は地文に細かい縄文が施される。490～505も同様な土器群の胴部片とみられ，498は口縁部片で口唇部は連続したつまみで479・480に似る。これらも東海系早期末の入海式に当たるものとみられる。

第２群　前期の土器（第47図506～第51図614，図版36～38）

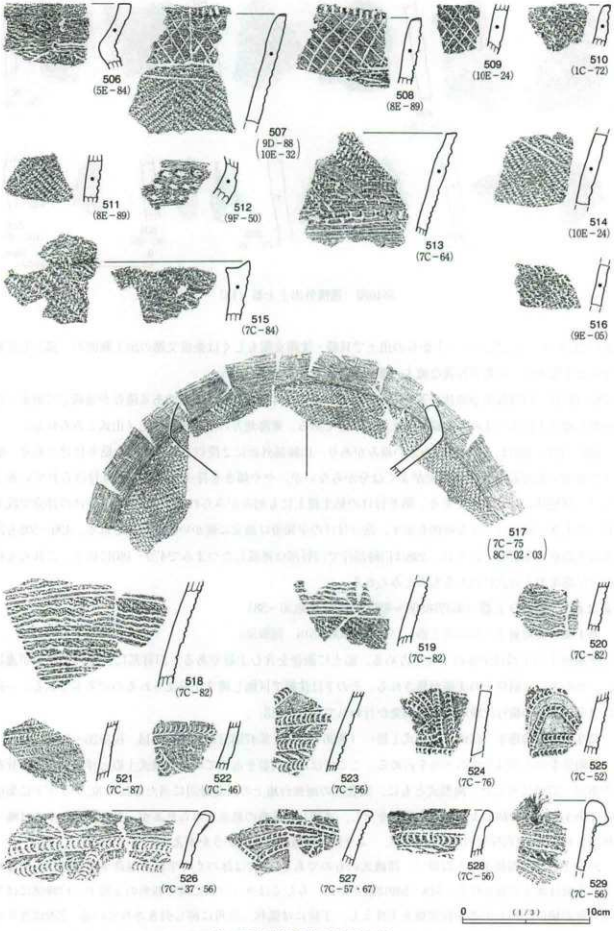
第１類　前期前半（黒浜式土器）（第47図506～516，図版36）

前期前半の土器は全体の１％を占める。胎土に繊維を含む土器である。口唇部に沈線のキザミが連続し，その下には斜格子の沈線が施される。その下は沈線で区画し縄文が施文されるのが基本である。一部には半截竹管の横行沈線の途中で刺突が行われている（513）。

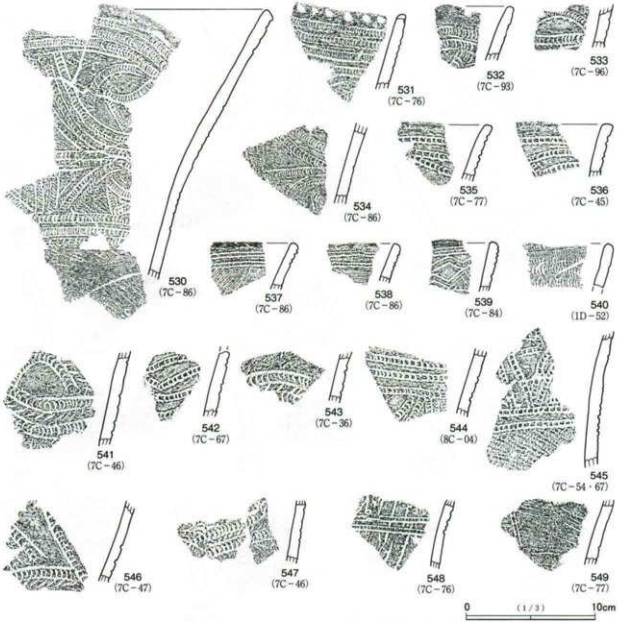
第２類　前期後半（諸磯・浮島式土器）（第26・27図，第47図517～第51図614，図版36～38）

前期後半の土器は全体の16％を占める。ここではほぼ同数を占めている諸磯式土器と浮島式土器の分布を第26・27図に示した。両型式ともに，調査区の南側台地上の西北縁辺に当たる7C・8Cグリッドに集中して出土し，ほぼ同じような分布状況を示し，連続した活動の結果とみられるが，量的な観点からは唯一検出された085竪穴住居の時期と合致し，より活発な活動の状況がうかがえる。

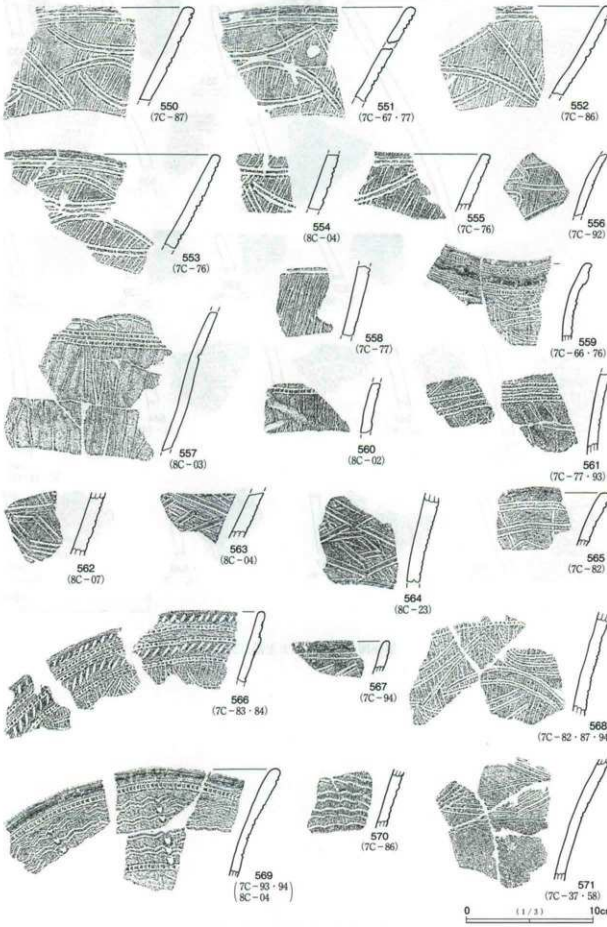
517～549は前期後半の土器群で，諸磯式のものである。517は鉢のくの字状に屈曲する部分で上位は無文，下位は縄文が施される。518～549は緩やかに，もしくはラッパ状に開く器形の土器で，口縁部には半截竹管の横位の押し引き平行沈線を主体とし，下位には弧状，三角に押し引きされている。529は波状の口縁片で，531は口唇部に小波状がみられる。530以下は半截竹管の平行沈線の押引文を直線・弧状を組み



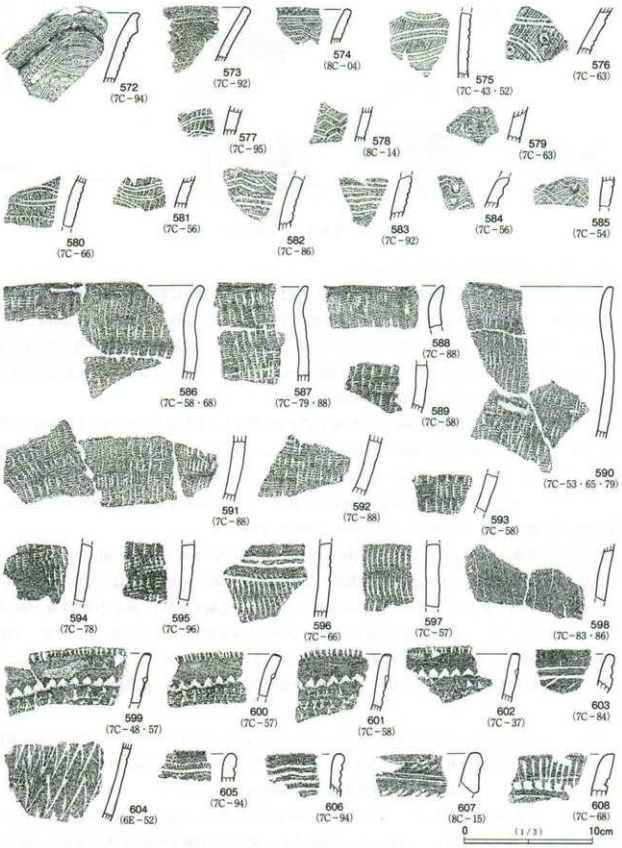
第47図　遺構外出土土器（19）



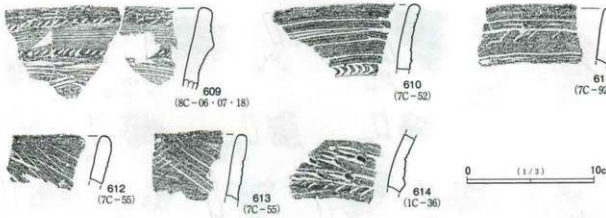
第48図　遺構外出土土器（20）



第49図　遺構外出土土器（21）



第50図　遺構外出土土器（22）



第51図　遺構外出土土器（23）

合わせている。540は連続爪形文が平行する。

550～614は貝殻文を特徴とする浮島式で，550～585はラッパ状に開く器形の土器で，半截竹管の平行沈線を弧状に引くものや（550～557，559），菱形に引くもの（562～565），両者を組み合わせたもの（568），横位に平行した連続した押し引きをするもの（557～561），沈線を波状に繰り返し施文するもの（569・570・574）などがある。一部に波状口縁となるもの（572）もみられる。いずれも地文に縦位の貝殻沈線文や貝殻腹縁文がみられ，551は穿孔が認められる。

586～608は貝殻文の土器群で，586～595は口縁部直下から連続して押し引きしたような貝殻腹縁文が明瞭に認められ，596～598は貝殻の押圧による腹縁文がみられ，そのうち596は胴部に３条の沈線が横行している。599～602は貝殻の波状腹縁文と口唇の縦沈線のキザミ，三角刺突文や半截竹管の連続押引文で施文される。609～614は，半截竹管の横方向の沈線を主体とし，一部に斜行する沈線や爪形文がみられる。

第３群　中期の土器（第52図615～第55図691，図版38～40）

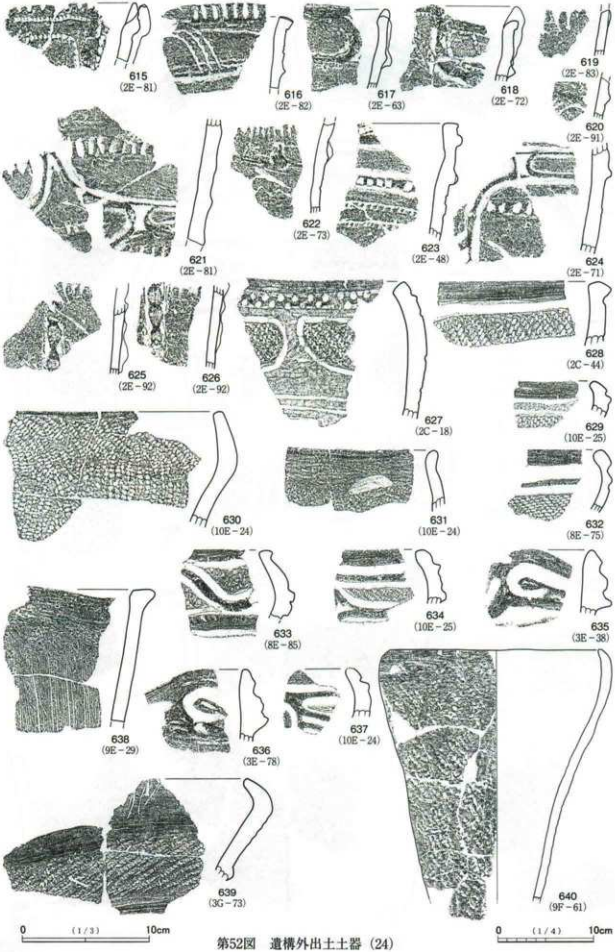
第１類　中期前半（阿玉台式土器）（第52図615～626・第55図687～690，図版38～40）

中期前半の土器は全体の２％を占める。数量が揃わなかったため，分布の図化はしていない。615～626，687～690は阿玉台式土器である。小波状の口縁や平縁のものと両者がある。貼り付けの隆線と隆起線に角押文が施されたもの（623），胴部に縦位のキザミの入った隆起線文が認められる（625・626）。口縁部近くに隆起線によって区画するもの，半截竹管の平行押引文がみられるもの（623）などがみられる。

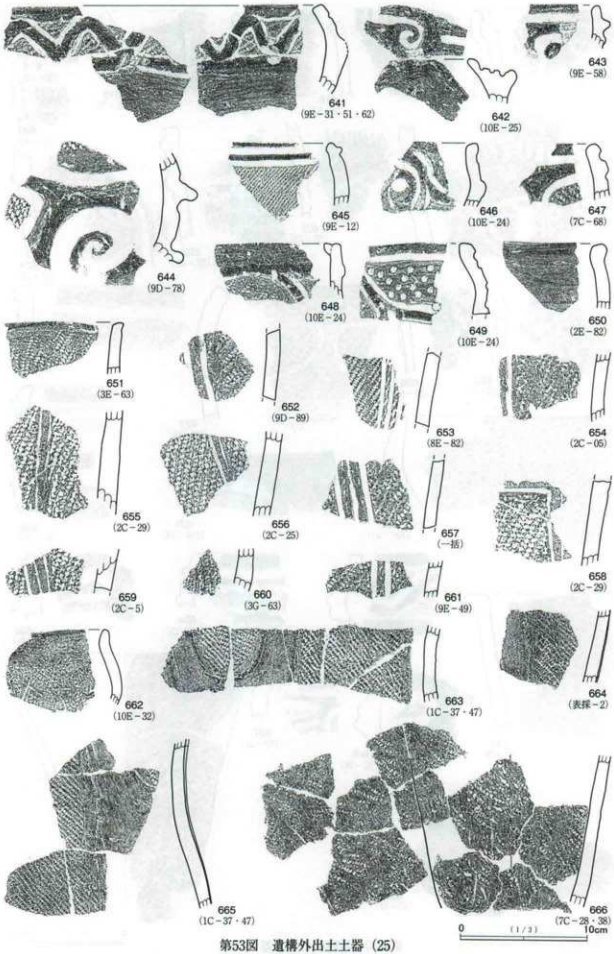
第２類　中期後半（加曽利Ｅ式土器）（第28図，第52図627～第54図686，第55図691，図版28・39・40）

中期後半の土器は全体の28％を占める。ここでは加曽利Ｅ式土器の分布を第28図に示した。出土の総量や密度は低くなるものの広範な分布範囲を示し，1C・1D・2C・2E・3E・3G・7C・9E・9F・10Eグリッドとほかの時期のすべての出土範囲以上に広範な分布状況を示す。

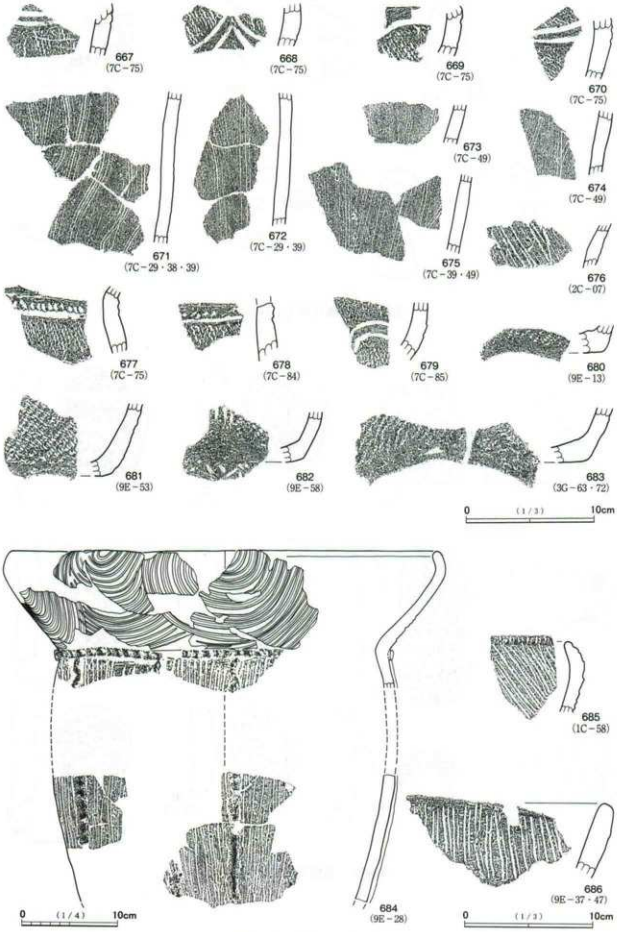
キャリバー形状の深鉢を主体とし，なかには口縁部が大きく段を持って屈曲し外反する重弧文のやや大型のもの（684）などもみられる。沈線による区画によって縄文と磨消縄文の長楕円形の文様を区画するものを基本とするが，口唇部には無文帯があるものと刺突文が施されるもの（627）がみられる。胴部は縦位の複数沈線文による区画で縄文と磨消縄文の無文帯を区画している。地文は縄文が主体であるが，一部には細い条線によるもの（638・671～675），撚糸文によるもの（667～670，677～679）もみられる。幅の広い隆起帯で渦巻文を表現したもの（635・636，642～644）もある。



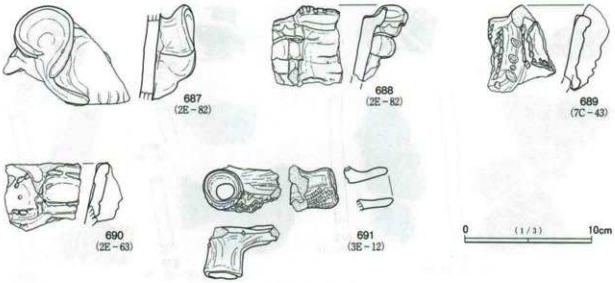
第52図　遺構外出土土器（24）



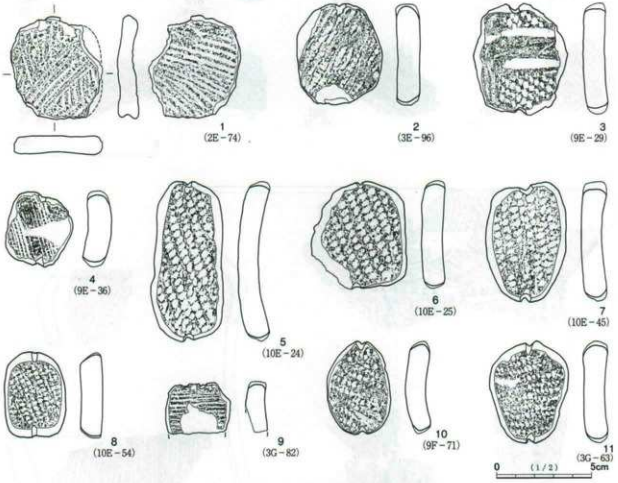
第53図　遺構外出土土器（25）



第54図　遺構外出土土器（26）



第55図　遺構外出土土器（27）



第56図　遺構外出土土製品

口縁部は平縁が多く，波状になるものはここではきわめて少数である（635・636・642）。

（2）土製品（第56図，第5表，図版41）

1は表裏ともに条痕文が認められる。縄掛けの切り欠きの部分が不明瞭である。2，5～8，10・11は縄文を施す胴部破片，3は縄文と太沈線，4・9は条線文を施す胴部破片を利用しており，切り欠きも明瞭で典型的な土器片錘の形態を示す。

（3）石器類（第57～70図，第6表，図版42・43）

旧石器時代に属する可能性がある石器が数点上層から出土しているため，縄文時代の石器と併せて第59図1～4へ掲載した。縄文時代の石器については，以下で器種ごとに取り上げていきたい。

加工石器類（第59図1～4，第6表，図版43）

1は頁岩製の削器である。長さ108.1㎜，重さ59.6gを測り，旧石器時代の遺物の可能性もあろう。2は折断された頁岩製の石刃で，長さ38.5㎜，重さ13.2gを測る。3・4は二次加工剥片で，3は凝灰岩製の長さ32.6㎜，重さ3.7gを測る。4はトロトロ石（黒色緻密質安山岩）製で，長さ34.2㎜，重さ2.6gを測る。以上1～4は先述のとおり，旧石器時代に属する可能性がある。

石鏃（第59図5～8，第6表，図版43）

5～8が石鏃である。5は安山岩製で長さ29.2㎜，重さ1.7gを測り，6～8は黒曜石製で6は長さ24.2㎜，7は26.7㎜，8は22.4㎜で，5はほぼ完形，6～8は脚の部分を破損する。

削器（第59図9，第6表，図版43）

9は黒曜石製の削器である。長さ41.2㎜，重さ8.6gを測る。

石錐（第59図10，第6表，図版43）

10はホルンフェルス製の石錐である。長さ53.4㎜，重さ37.4gを測る。

楔形石器（第59図11～15，第6表，図版43）

11～15は楔形石器である。11は黒曜石製で，長さ26.5㎜，重さ2.1gを測る。12はホルンフェルス製で長さ20.6㎜，重さ4.0gを測る。13はチャート製で23.7㎜，重さ7.5gを測る。14は頁岩製で27.8㎜，重さ5.8gを測る。15は安山岩製で長さ33.2㎜，重さ18.3gを測る。

二次加工剥片（第59図16・第60図17，第6表，図版43）

16・17は二次加工剥片である。16は安山岩製で長さ46.7㎜，重さ15.2gを測る。17は黒曜石製で長さ29.7㎜，重さ17.1gを測る。

剥片（第60図18，第6表，図版43）

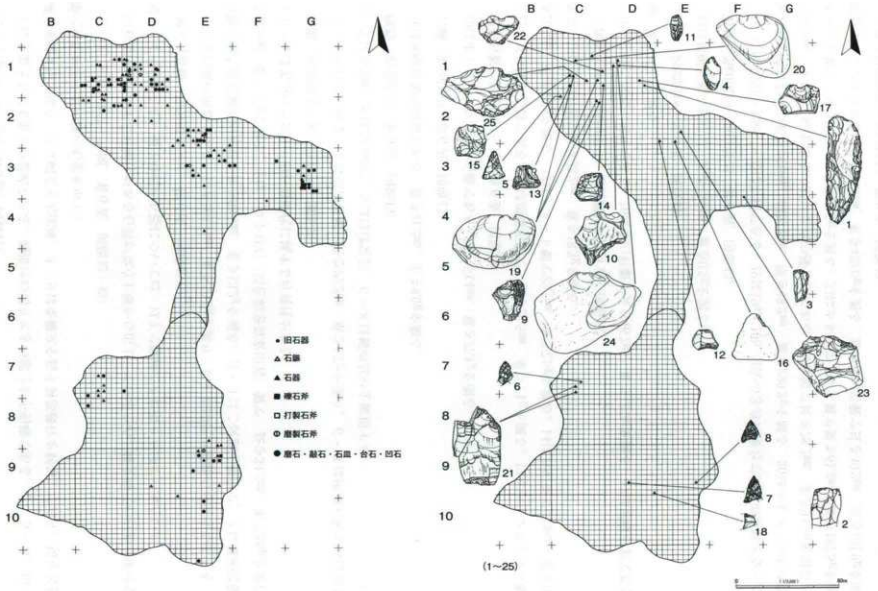
18は黒曜石製の剥片で，長さ15.8㎜，重さ0.5gを測る。

石核（第60図19～第61図25，第6表，図版43）

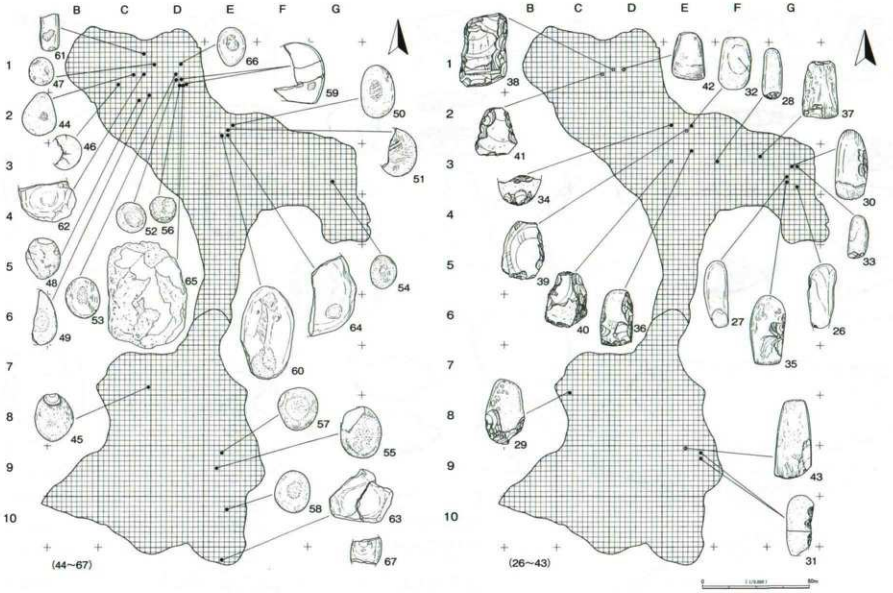
19（19a＋19b＋19c）～25は石核である。19は19a，19b，19cの3点の接合で大型の石核となった。凝灰岩製で，接合後の長さ49.6㎜，幅57.8㎜，厚さ48.2㎜，重さ299.2gを測る。20はホルンフェルス製で長さ61.0㎜，重さ255.8gを測る。21は2点の接合品である。頁岩製で長さ78.2㎜，重さ94.4gを測る。22はチャート製で，長さ29.6㎜，重さ13.6gを測る。23はホルンフェルス製で長さ61.2㎜，重さ187.5gを測る。24もホルンフェルス製で長さ83.4㎜，重さ422.0gを測る。25は安山岩製で長さ49.2㎜，重さ101.9gを測る。

石斧（第62図26～第63図43，第6表，図版42）

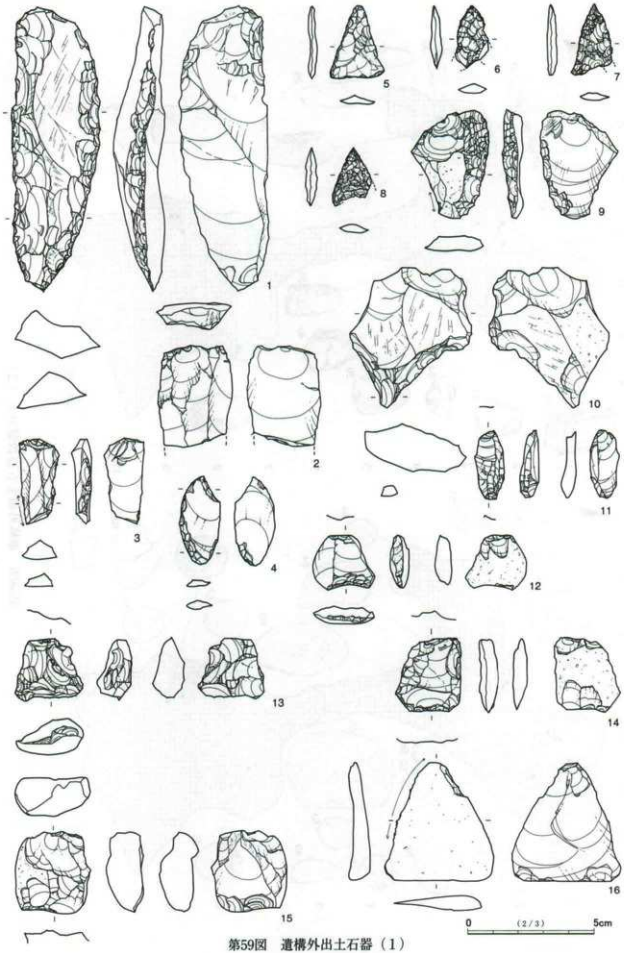
石斧類は26～37が礫石斧，38～41が打製石斧，42・43が磨製石斧である。26は緑色凝灰岩製，長さ85.2



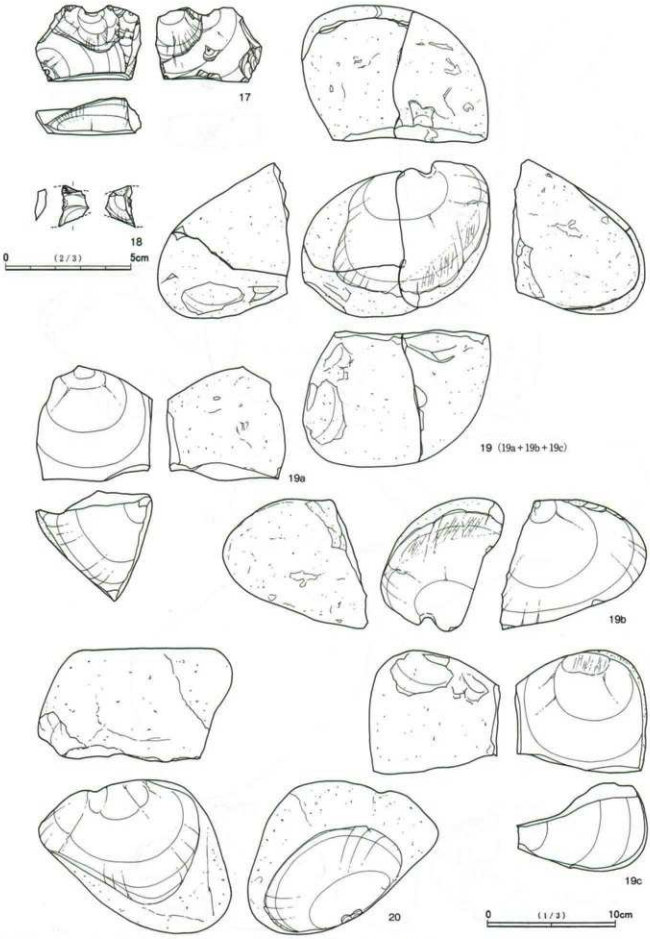
第57図　遺構外出土石器数量分布（1）



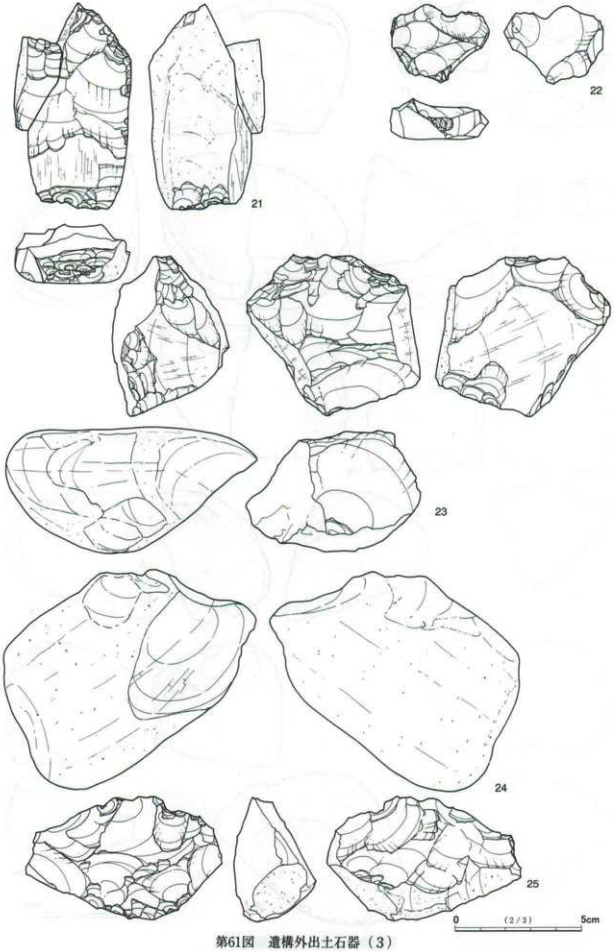
第58図　遺構外出土石器数量分布（2）



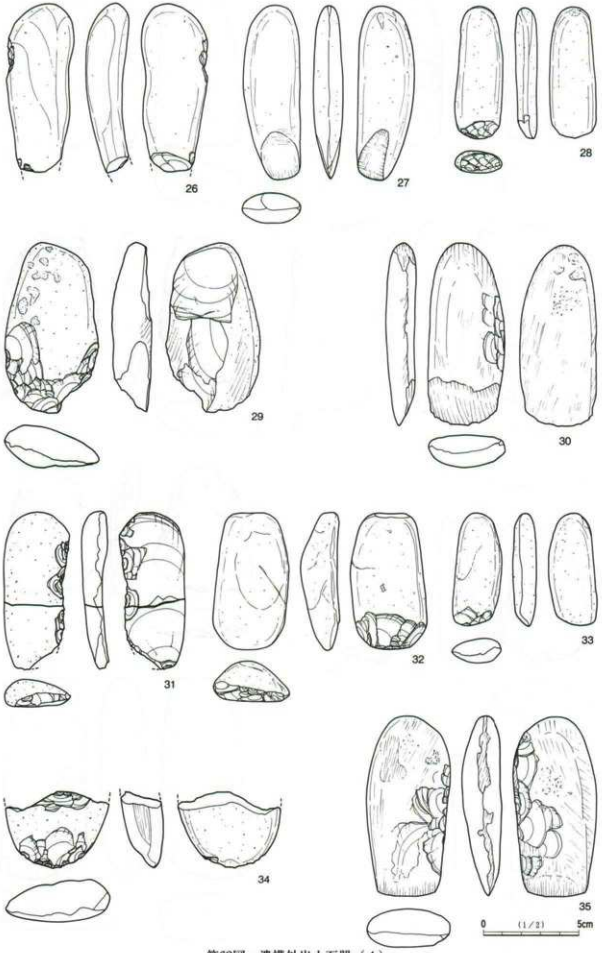
第59図　遺構外出土石器（1）



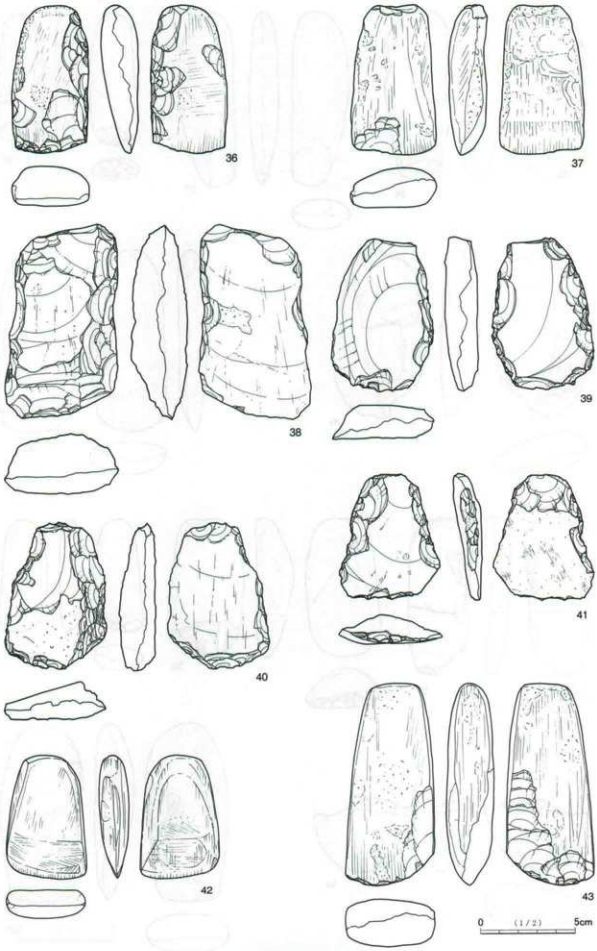
第60図　遺構外出土石器（2）



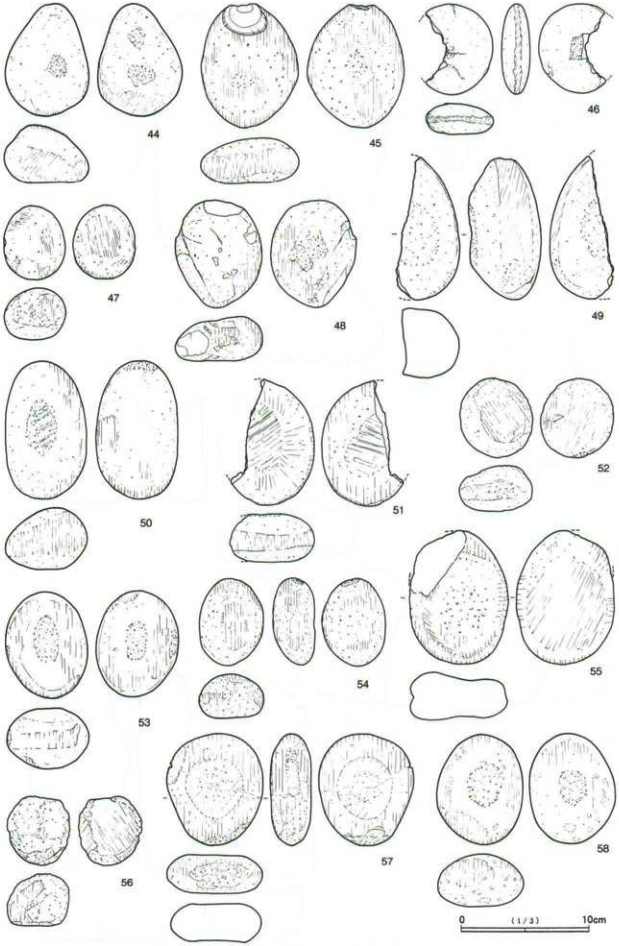
第61図　遺構外出土石器（3）



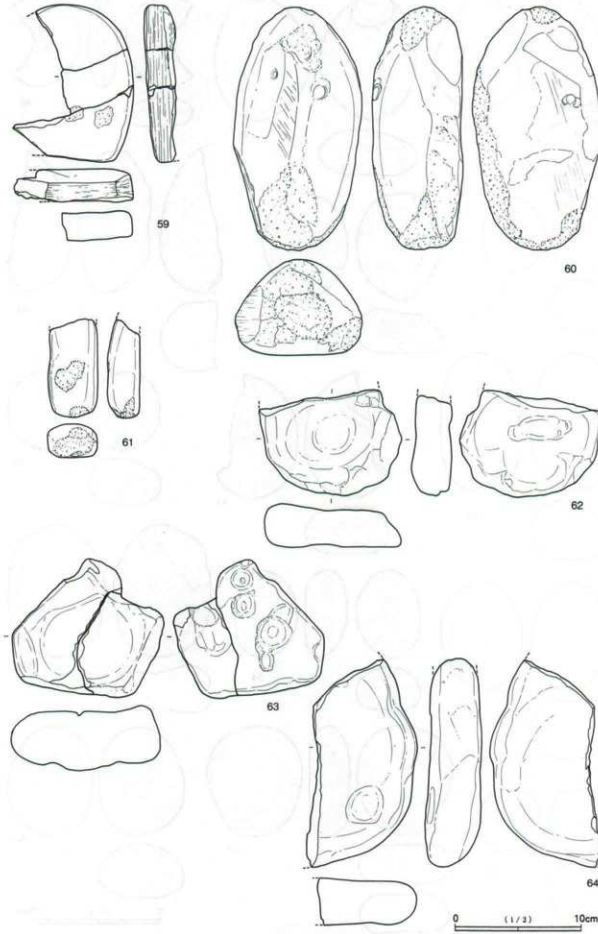
第62図　遺構外出土石器（4）



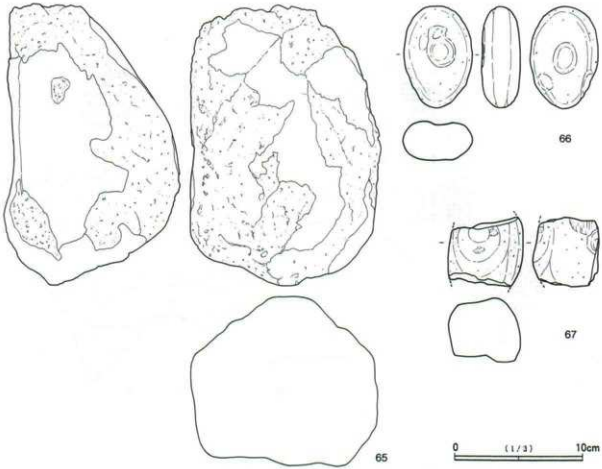
第63図　遺構外出土石器（5）



第64図　遺構外出土石器（6）



第65図　遺構外出土石器（7）



第66図　遺構外出土石器（8）

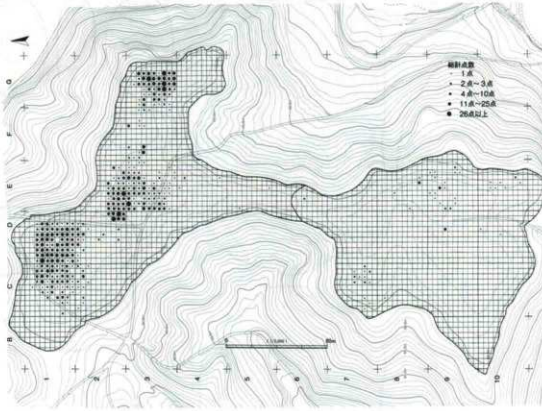
㎜で基部に一部欠損がある。27も緑色凝灰岩製で，長さ87.7㎜，重さ59.3gの完形品である。28は砂岩製で長さ66.8㎜，刃部に欠損がある。29はホルンフェルス製で長さ85.7㎜，刃部を中心に欠損がある。30もホルンフェルス製，長さ91.8㎜，重さ86.3gの完形品である。31は砂岩製のもので隣接するグリッド出土の２点が接合した。長さ79.4㎜を測る。32は緑色凝灰岩製で長さ69.6㎜，重さ78.0gの完形品である。33はホルンフェルス製で，長さ56.8㎜を測る。34もホルンフェルス製で，長さ39.6㎜の刃部の破片である。35～37は緑色凝灰岩製の完形品で，35は長さ92.2㎜，重さ123.2g，36は長さ75.4㎜，重さ94.0g，37は長さ75.2㎜，重さ111.0gを測る。

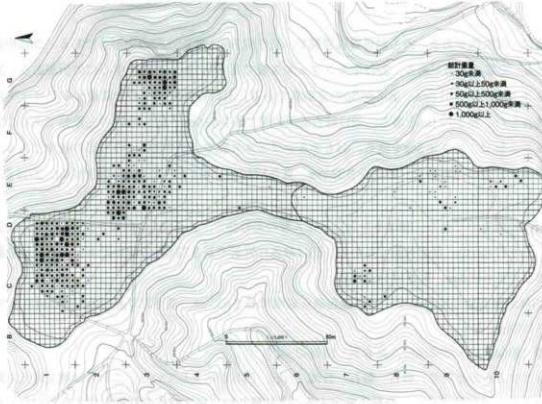
38～41は打製石斧である。38はホルンフェルス製の完形品で，長さ98.3㎜，重さ229.8gを測る。39は砂岩製で，長さ77.8㎜で一部を欠損している。40は緑色片岩製で長さ73.8㎜の破片である。41は緑色凝灰岩製の完形品で長さ63.8㎜，重さ47.1gを測る。

42・43は磨製石斧の完形品で，42は緑色凝灰岩製で長さ63.7㎜，重さ75.7g，43は砂岩製の長さ103.2㎜，重さ190.4gを測る。

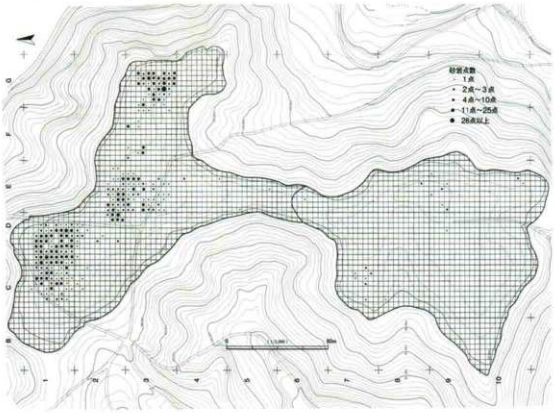
礫石器（第64図44～第66図67，第６表，図版42・43）

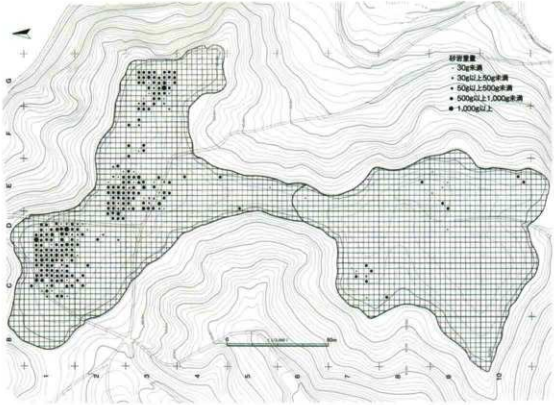
礫を素材とする石器として，磨石，敲石，石皿，台石，凹石が出土している。これらは縄文時代以降にも使用されていた可能性が高く，時期を断定することは難しい。縄文時代の石器も含まれるかもしれないが，他時期の遺構出土の礫石器の大部分はグリッド出土分にはせず，その遺構に帰属するものとして扱っ



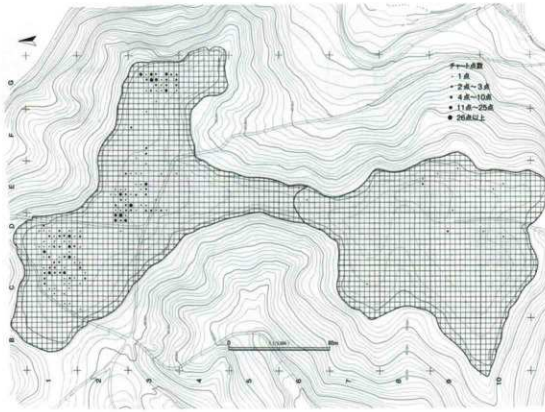


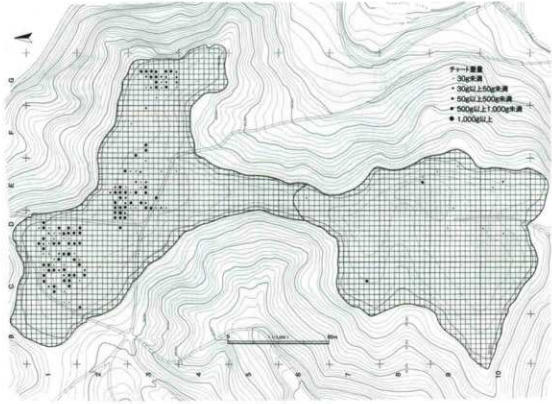
第67図　遺構外出土礫数量分布（1）



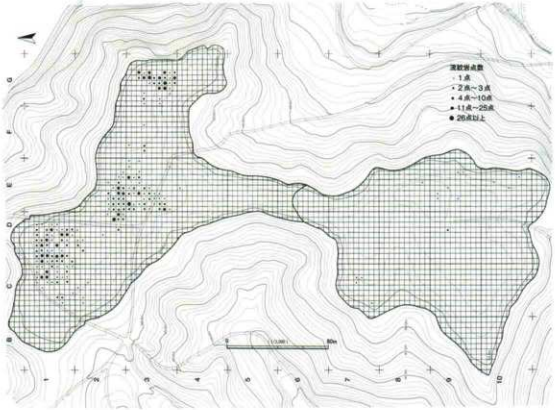


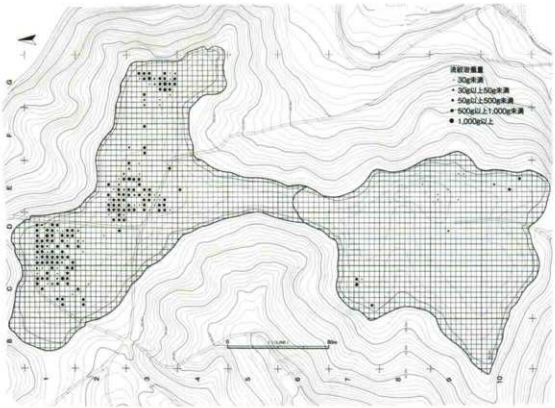
第68図　遺構外出土礫数量分布（2）



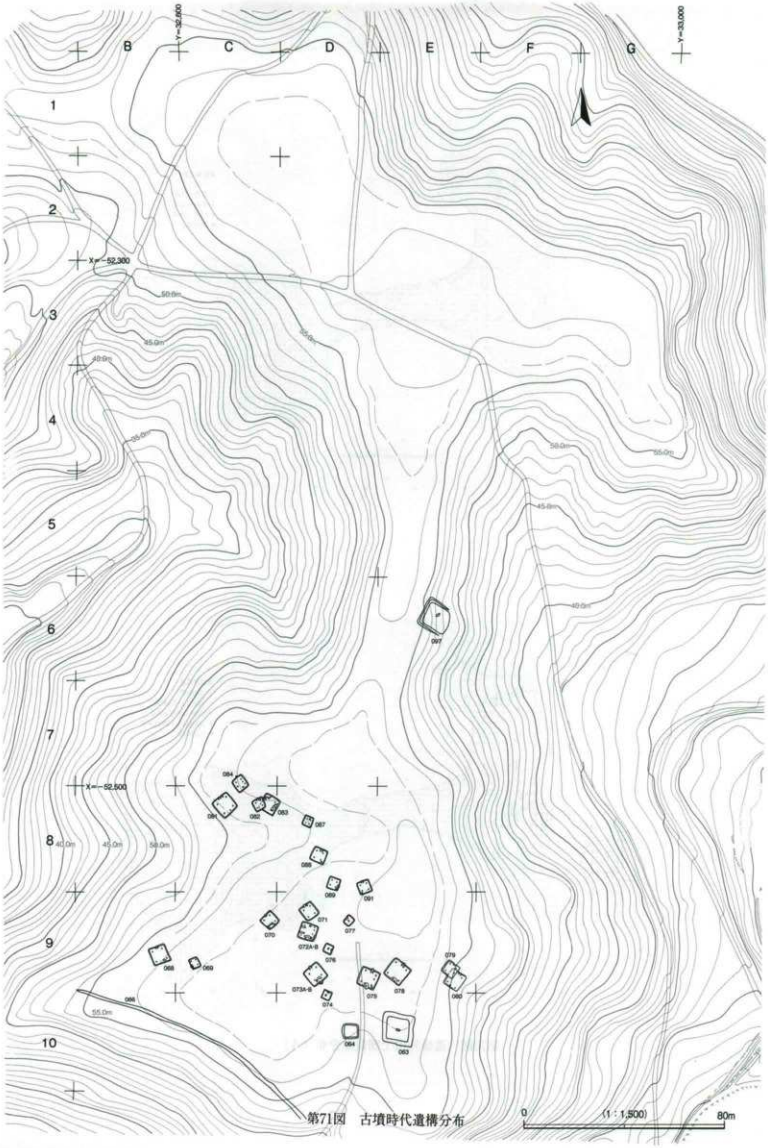


第69図　遺構外出土礫数量分布（3）





第70図　遺構外出土礫数量分布（4）



第71図　古墳時代遺構分布

た。44～59が磨石，60・61が敲石，62～64が石皿，65が台石，66・67が凹石である。
44～59の磨石は比較的大型品が多く，石材は砂岩製が44・46，48～50，53・58・59で，59はやや隔たった3グリッドから出土した3点が接合した。45・47・51・54・55は流紋岩製である。52・56・57は安山岩製である。

60・61は敲石で，60は重さ1,825.6gの大型品である。61は砂岩製で小型品である。62・63・64の3点は石皿の破片で，62は黒色緻密安山岩（トロトロ石）製で風化している。63は凝灰岩製，64は頁岩製で緩い擂鉢状の一部分の形状を呈し，更に両者とも凹石としても使用された小孔がいくつか認められる。65は台石で，長さ211.3mm，重さ6,000gの大型品である。66・67は凹石で，66は凝灰岩製で長さ76.5mm，67は安山岩製で長さ52.4mmを測る。

礫（第67～70図）

礫はグリッドで出土した分に加え，縄文時代以外の遺構覆土から出土した分を併せた。出土総点数が約2,500点，重さ11kgの礫に対して，観察及び石材分類を実施した。観察は主に，焼成痕と破砕について行っている。被熱による変色，例えば，礫の表面や断面の赤化あるいは黒化が認められる資料や，ひび割れや剥落が観察された資料が該当するものと考えている。それから，破砕についても，被熱に伴うものと考えられるが，上記の観察項目の詳細は掲載しなかった。石材分類は肉眼での観察に基づき行った。

第67～70図には総計（第67図）と主な石材のグリッド別出土状況をまとめた。出土傾向は石材ごとに若干異なるが基本的にはほぼ同様で，礫群が調査区北側の台地上で大きく3つのブロックに分かれ，ブロック内でも広く展開する様子がみられた。

注）

（1）会田信行　2010　「ナキノ台遺跡炉穴焼土およびⅨ層中で検出された焼土遺構の残留磁気」『千原台ニュータウンXXIV－市原市鵜牧遺跡（下層）－』（財）千葉県教育振興財団

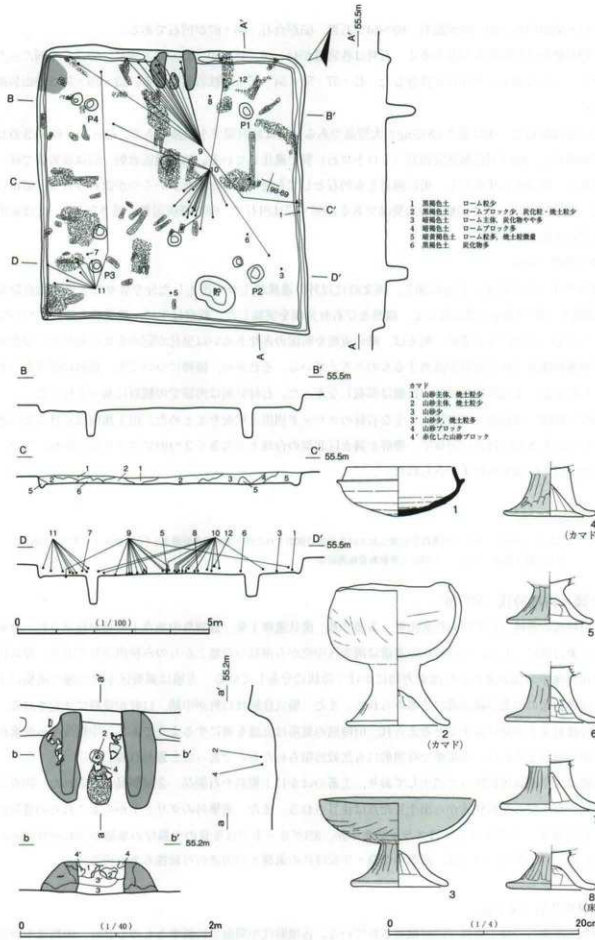
第2節　古墳時代（第71図）

古墳時代の遺構として竪穴住居23軒，方墳3基，溝状遺構1条，遺物集中地点1地点が確認され，分布状況を第71図に示した。この時代の遺構は調査区中央から南側の台地上からのみ検出されており，竪穴住居は南台地平坦部の北西から南東方向にかけて帯状に分布している。方墳は調査区中央の痩せ尾根に1基，南側台地の南東の縁辺部に2基みられる。また，竪穴住居は12軒が中期，11軒が後期に比定される。方墳は後期後半以降に属すると考えられ，同時期の集落は立地を異にするようである。中期後半～後期前半が中心時期とみられ，小規模で時間的にも比較的限られたものであったと思われる。

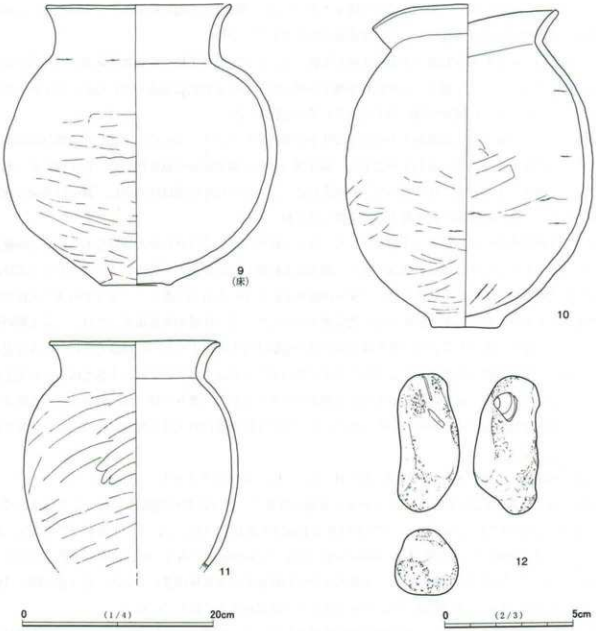
遺物は大半が住居に伴って出土しており，土器のほかに土製品や石製品，金属製品がみられた。70点を超す臼玉が1軒の竪穴住居から出土した点は注目される。また，遺構外のグリッドからもこれらの遺物が出土しており，7Cグリッドではスラグの集中が，8Bグリッドでは多量の土器片の集積がそれぞれ認められている。スラグについては，後節の奈良・平安時代の遺構との関連の可能性もあり得る。

1　竪穴住居（第1表）

調査区南側の台地平坦部で23軒検出されている。古墳時代中期前半に属するものが2軒，中期後半が10軒確認され，台地縁辺部付近に点在している。後期前半は8軒，後期後半は2軒確認されており，南側台



第72図　068竪穴住居（1）



第73図　068竪穴住居（2）

地中央部に入り込む西谷を回避しながら，台地平坦部を北西から南東方向に斜めに横断するように分布する。一定の場所に密集しながらも住居同士の切り合いはきわめて稀である。

０６８（第72～73図，第６表，図版14・41・44）〈9B－58・68グリッド〉

南側台地の南西縁辺部に位置し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。本住居と069竪穴住居の２軒は，竪穴住居群と40mほど離れて分布している。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸7.0m，短軸6.9m，壁高は16cm～50cmである。掘り込み面は削平されているが，壁面はほぼ垂直に立ち上がっていることが確認できた。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されているが，南東・南西・北西主柱穴では，ピットが２基ずつ重複しており，建て替えが行われた可能性が高い。ほかに，竪穴中央部に深さ約20cmのピットが２基みつかっており，補助柱穴と思われる。また，竪穴住居南東隅の貯蔵穴についても２基分の重複が調査時に確認されている。貯蔵穴内部にはローム粒や炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

カマドは北壁中央に位置し，袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び両袖内側は部分的に被熱により赤化している。煙道部は検出されていない。

竪穴覆土はローム粒を含む暗・黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を非常に多く含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材や焼土が竪穴中央から放射状に分布しているが，南東隅では全く検出されていない。住居廃棄時に火を受けている可能性が高い。

遺物はカマド付近と竪穴南部分を中心に土器片が多数出土している。この内，図化した遺物は須恵器坏身1点，高坏7点，甕3点，敲石1点である。高坏はいずれも脚部が短く裾が開いた，富士山に似た形態であり，内外面に赤彩が施されるものが多数を占める。3～8の高坏坏部は内外面に，脚部は外面に赤彩が施される。これらは古墳時代中期後半に位置づけられる。

カマド燃焼部内からは高坏2・4が出土した。高坏2はカマド内で伏せられた状態であったことが確認されている。稜のない半球体様の坏部を持ち，脚部は比較的長く裾が開いている。また，これらの高坏はいずれも燃焼部直上での出土ではなく，カマド内堆積土直上からのものであった。カマド周辺からは高坏8と甕9が床面で，敲石12が床面から浮いた状態で出土している。住居中央部東寄りでは，土製支脚の破片が床面から浮いて出土している。東壁溝上からは須恵器坏身1が出土した。口径はそれほど大きく無いが，高坏2と共に該期の特徴を示すものとして注目される。このほかに，いずれの土器も床面から若干浮いてはいるものの，焼土粒や炭化物を多く含む層から出土していた。甕9・10・11の外面は黒みを帯びており，二次的な被熱痕が認められていることからも，竪穴住居廃絶後の上屋の焼却に伴い土器も遺棄されたものと考える。

069（第74図，第6・8表，図版14・41・44・52）〈9C－61・71グリッド〉

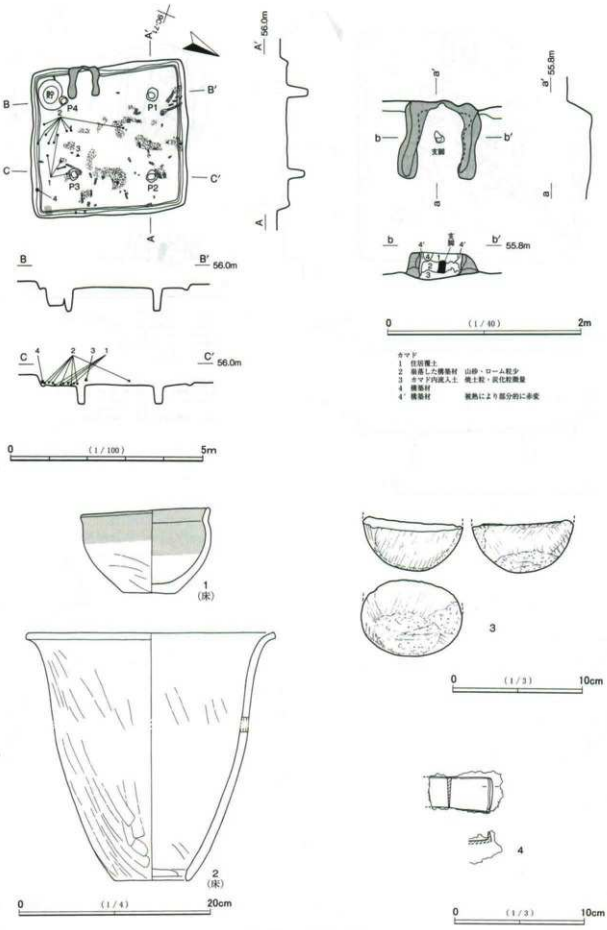
南側台地の南西縁辺部付近，068竪穴住居の東隣に位置し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。本住居と068竪穴住居の2軒は，竪穴住居群と40mほど離れて分布している。平面形態は方形で，北東－南西方向に短軸3.9m，長軸4.1m，壁高6cm～24cm，小型の住居である。壁面はやや外側へ傾いて立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されている。竪穴南西隅には貯蔵穴が確認されており，内部にはローム粒を主体とした暗褐色土が堆積している。

カマドは西壁南寄りに位置し，袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は検出されなかった。

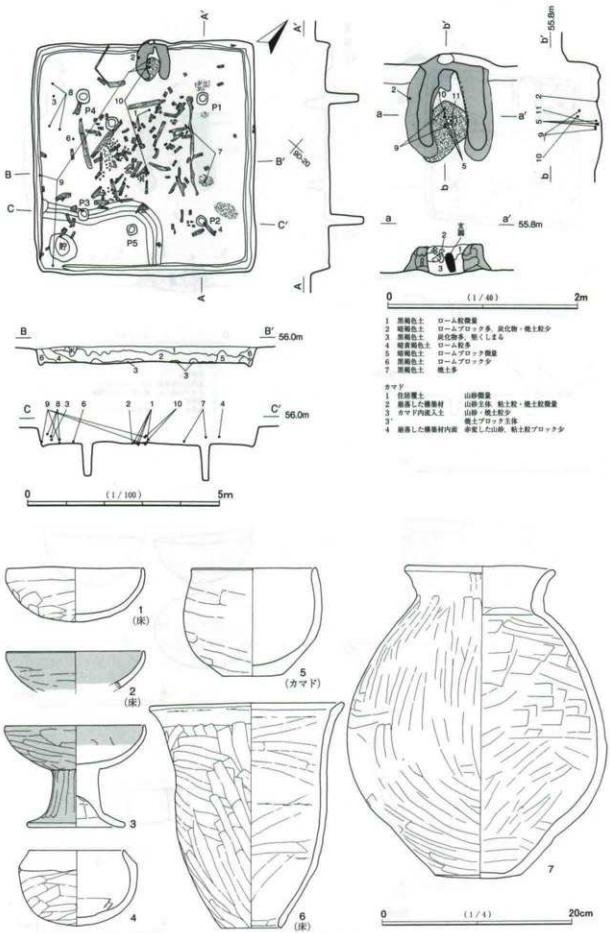
竪穴覆土はローム粒が混在した暗黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を含む層の堆積が確認されている。また，あまり明瞭には残存していないものの，床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に認められ，それに伴い焼土が分布しているが，貯蔵穴のある住居西部分ではほとんど検出されていない。住居廃棄時に火を受けている可能性がある。

図化した遺物は鉢，甑，磨石，鉄製品が各1点で，竪穴南壁付近に分布が偏ってみられる。

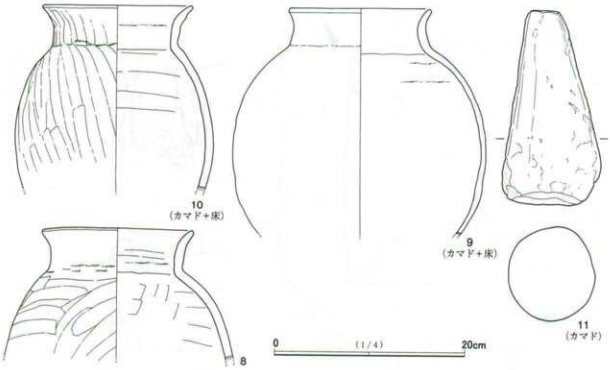
カマド燃焼部内の堆積土上では，土製支脚の一部破損品1点が直立して出土した。南壁付近からは，鉢1と甑2が床面上で，磨石3が床面からやや浮いて出土している。鉢1には内面から口唇部外面にかけて赤彩が施されている。鉢1の内外面及び甑2の外面には部分的に黒く煤けたような二次的な被熱痕が認められ，竪穴廃絶・焼失時に投棄されたものと考えられる。そのほか，南壁溝上では鉄製品4が出土した。使い減りした鎌である可能性が高く，刃部は直線的な形態である。



第74図　069竪穴住居



第75図　070竪穴住居（1）



第76図　070竪穴住居（2）

０７０（第75・76図，第５表，図版14・15・44・52）〈9C－29・39グリッド〉

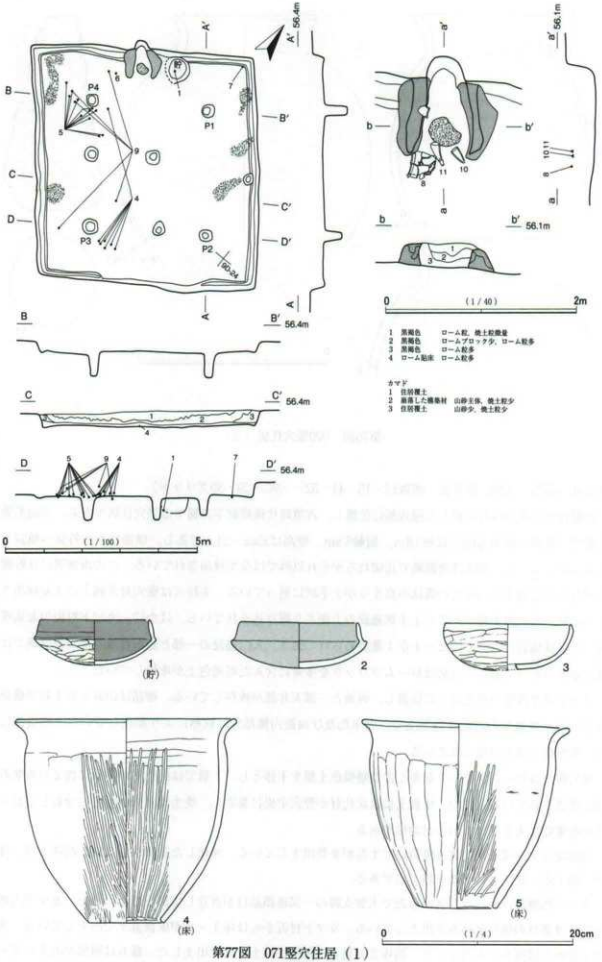
南側台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸5.8m，短軸5.8m，壁高は35cm～51cmである。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝は南側隅で途切れるがそれ以外では全て検出されている。この南側隅には貯蔵穴を囲むように高さ５cmほどの弧状の高まりが土手状に廻っている。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されているが，その内１基は，この土手状施設の上面より掘り込まれている。ほかに，カマド対面の北東壁付近，土手状施設の内側ではピットが１基認められており，入口施設の一部と思われる。竪穴南側隅では貯蔵穴がみつかっており，内部はロームブロックを多量に含んだ暗褐色土が堆積していた。

カマドは北西壁やや北寄りに位置し，両袖と一部天井部が残存している。袖部は山砂と粘土粒で構築されている。燃焼部内の幅は約35cmで，火床部及び両袖内側部分は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。

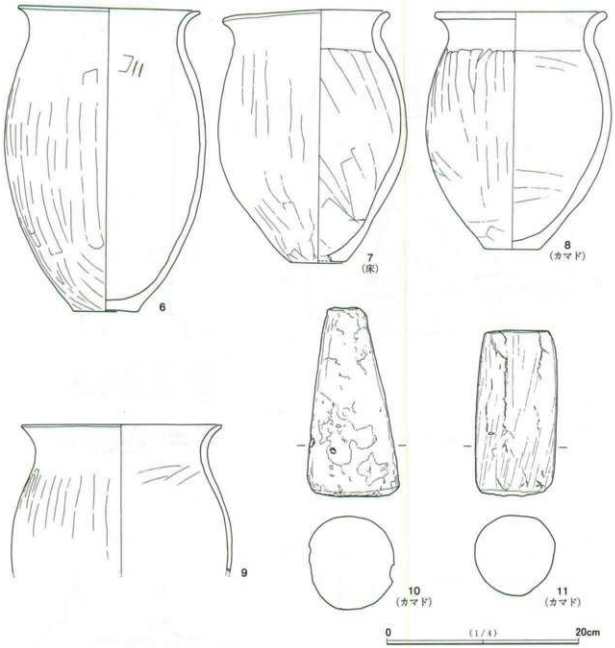
竪穴覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土層を主体とし，下層では炭化物が多量に含まれる層の堆積が確認されている。また，床面上には炭化材が竪穴中央に集中し，焼土は北東壁付近に分布しており，住居廃棄時に火を受けている可能性がある。

遺物はカマド周辺及び北西壁沿いで土器が多数出土している。図化した遺物は坏２点，高坏１点，鉢２点，甑１点，甕４点，土製支脚１点である。

カマド燃焼部内からは，底面付近で土製支脚の一部破損品11が直立して出土した。また，カマド内堆積土中には甕９の破片と鉢５が出土している。カマド付近からは坏１・２が床面直上で出土している。南西壁付近からは甑６が床面直上で，高坏３と甕８は壁際堆積土上面で出土した。甑６は胴部があまり張り出



第77図 071竪穴住居（1）

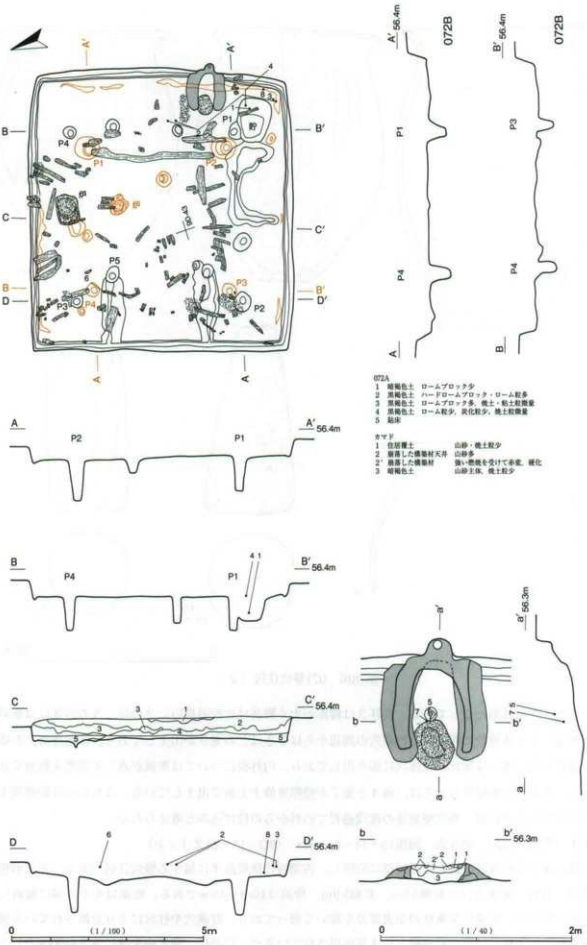


第78図　071竪穴住居（2）

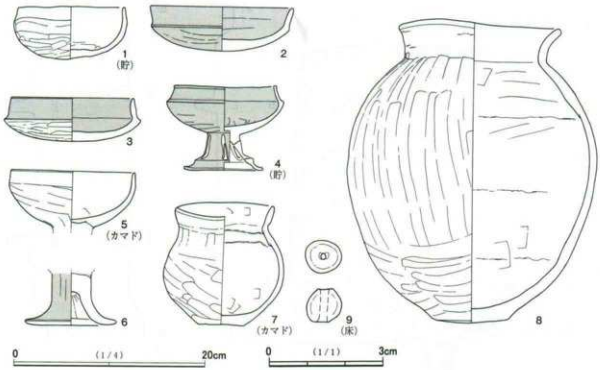
さずスマートな外形となっている。高坏3は脚部が太く脚高は比較的高い。2の坏，3の高坏には赤彩が施される。土手状施設で囲まれた貯蔵穴の周辺からはさきほどの甕9が出土しており，南西壁溝上の破片とも接合した。甕9は胴部が球体状に張り出しており，内外面については摩滅が激しく調整を観察できなかった。また，北東壁付近からは，鉢4と甕7が壁際堆積土上面で出土している。これらの壁際堆積土から出土している土器は，竪穴廃棄後の埋没過程での外からの投げ込みと考えられる。

071（第77・78図，第5表，図版15・44・45・52）〈9D－13・23グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸5.9m，短軸5.9m，壁高は10cm～43cmである。壁面はやや外側に傾斜し立ち上がっている。壁溝は南東壁の中央部分を除いて廻っており，貯蔵穴や柱穴により分断されている箇所もみられる。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されているが，ほかに，竪穴中央部に深さ約50cmのピットが2基，北東壁際で深さ約30cmのピットが1基みつかっているが，補助柱穴と思われる。竪穴北西壁では



第79図 072A・B竪穴住居（1）



第80図　072A・B竪穴住居（2）

貯蔵穴が検出され，内部にはローム粒を多く含む暗褐色土の堆積が確認されている。

カマドは北西壁中央に位置し，袖部は山砂と粘土粒で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒を含む黒褐色土層を主体としている。これは貼床に由来するものと思われる。また，床面上には壁際で小規模に焼土の堆積も確認された。

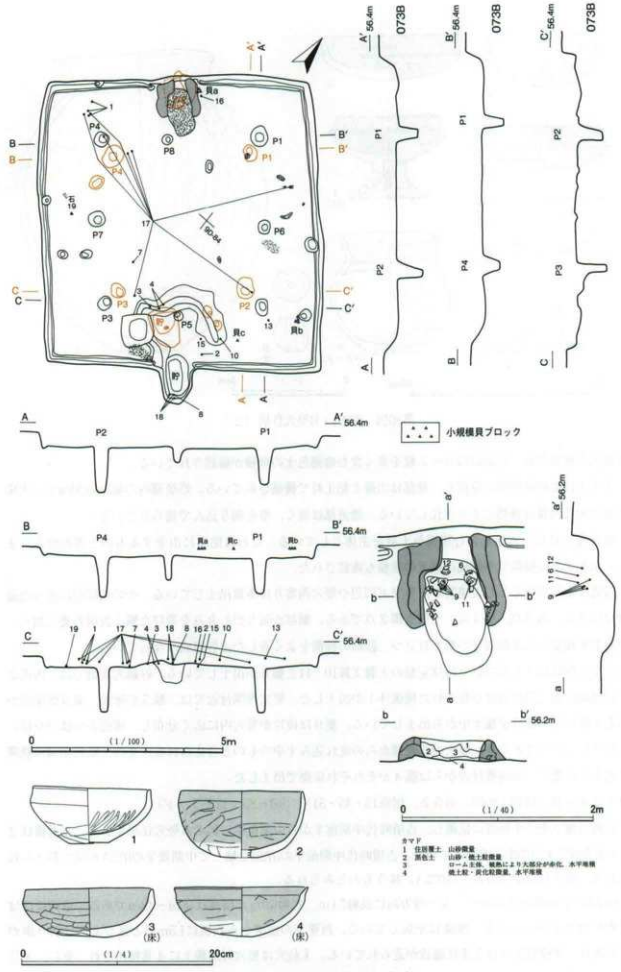
遺物は土器を中心とした遺物が，カマド周辺や竪穴西寄りに多数出土している。その内図化に至った遺物は坏３点，甑２点，甕４点，土製支脚２点である。胴部が張り出し丸みを帯びた甑と長胴の甕に加え，須恵器を模倣した土師器坏の数も目立つ。該期の特徴をよく表した土器組成となっている。

カマド内堆積土上面では，ほぼ完形の土製支脚10・11と甕８が出土している。貯蔵穴底面では，内面から口縁部外面に黒色処理が施された模倣坏１が出土した。竪穴西隅付近では，甑５が床面，甕９が床面から若干浮いて，甕６が覆土中から出土している。甕９は破片が竪穴内に広く分布し，床面からはやや浮いて出土していることから，竪穴の北西側からの流れ込み土中のものと考えられる。また，竪穴北隅の壁溝付近からは甕７，南西壁付近からは甑４がそれぞれ床面で出土した。

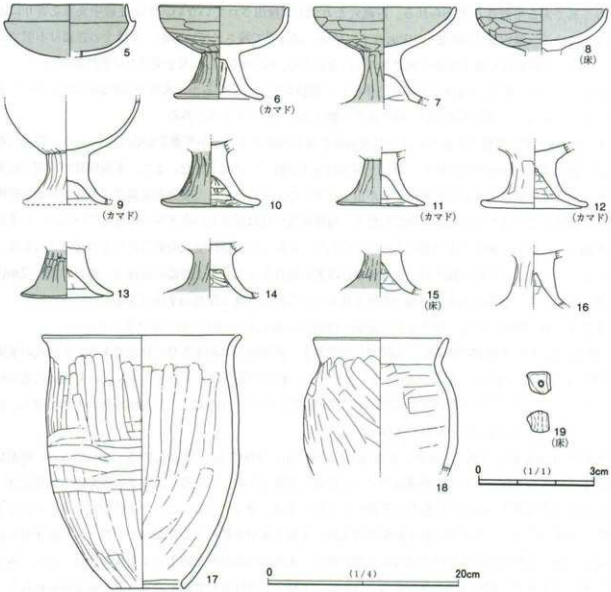
０７２Ａ・Ｂ（第79・80図，第５表，図版15・45・51）〈9D－33・43グリッド〉

南側台地中央の平坦部に位置し，古墳時代中期前半から中期後半に属する竪穴住居である。本遺構は２軒の住居072Aと072Bが重複していた。古墳時代中期前半の072Bを壊して中期後半の072Aが建て替えられており，出土した遺物の大半は072Aに伴うものとみられる。

072Aの平面形態は方形で，東－西方向に長軸7.1m，短軸6.9m，壁高は18cm～43cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は全周している。西壁下の壁溝から内側に1.5mほど延びる間仕切り溝が２条あり，南壁付近には土手状施設が造られている。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出され，更に，主柱穴間には東列に２基，南列に１基の補助柱穴がある。ほかにカマド対面には間仕切り溝に伴いピットがみ



第81図 073A・B竪穴住居（1）



第82図　073A・B竪穴住居（2）

られるが，入口施設の一部と思われる。竪穴南東隅には貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内部にはロームブロックが主体となり堆積しており，一部上層では焼土ブロックがレンズ状に堆積している。カマドは東壁南寄りに位置し，袖部は山砂で構築されている。遺存状態はあまり良好ではない。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。竪穴覆土は多量のローム粒を含む黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に分布しているが，東・南壁付近ではあまり検出されていない。また，小規模な焼土の堆積も確認されている。住居廃棄時に火を受けている可能性が高い。

072Bの平面形態及び規模は072Aと変わらないが，072Aと反時計回りに90°主軸方向が変わる。南－北方向に6.9m，直交する方向に7.1m，壁高は約50cm，072Aより深く掘り込まれていた。壁面は外側に傾斜し立ち上がっている。壁溝は東壁以外ではあまり明確に検出されておらず，南・北壁ではほんの一部が残されているのみである。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出され，主柱穴間には北列に2基，東列に1基の補助柱穴がある。ほかに，主柱穴列の外側に2基のピットが検出されており，この内南側のものは入口施

設の一部である可能性が考えられる。貯蔵穴とカマドは検出されていない。炉は住居中央部北寄りに設置されている。竪穴覆土は072Aの床面直下に10cm～20cm厚で残されているが，堆積土の詳細は不明である。床面上に炭化材や焼土などが確認されていないため，072Bに関して火を受けた可能性は低い。

遺物はカマドや貯蔵穴周辺で土器を主体として遺物が出土しているが，大部分は072Aに伴うものと考えられる。図化した遺物は坏３点，高坏３点，甕２点，土製小玉１点である。

072Aのカマド内堆積土上面からは，伏せられた状態の高坏５と，小型甕７が出土している。貯蔵穴からは，底面より約20cm上方で坏１，覆土上層で高坏４が倒立して出土した。また，平面位置が不明ではあるが，竪穴内床面直上からは土製小玉９が出土している。このほかに，竪穴南東隅では須恵器坏蓋を模倣した土師器坏２・３とやや丸みを帯びた甕８，西壁付近では脚部の太い高坏６が出土しているが，いずれも床面から約20cm～30cm上方で取り上げられており，これらの土器は竪穴廃棄に伴うものと考えられる。２・３・４・６には赤彩が施され，４は脚部に涙形の透孔を５孔もつ土師器の高杯で，脚部の裾に段が作り出されている。全体に古式須恵器の形態を模しているが調整は土師器の手法である。

０７３Ａ・Ｂ（第81・82図，第５・７・10表，図版16・45・51）〈9D－83・84グリッド〉

南側台地中央の平坦部に位置し，古墳時代中期後半～後期前半に属する竪穴住居である。住居内の東隅を192・193土坑に切られ，北東壁が099溝と接する。これらの遺構はいずれも，本住居の廃棄後に造られている。また，ここでも２軒の住居073Aと073Bが重複していた。Bを壊してAが建て替えられており，出土した遺物の大半はAに伴うものとみられる。

073Aの平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸7.4m，短軸7.4m，壁高は19cm～36cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝はカマドと貯蔵穴を除き全周している。南壁下の壁際から内側には，高さ５cmほどの弧状の高まりが貯蔵穴を囲むように土手状に廻っている。この土手状施設を壊してピットが掘り込まれている。覆土中に焼土が少量含まれ，土製支脚や多量の土器片が出土した。検出面が明らかではないが，本住居に伴うものではないと思われる。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出され，更に，各主柱穴間には１基ずつ補助柱穴がみられる。ほかに，主柱穴列の外側や壁溝上にピットが６基みられるが，用途は不明である。南壁には，外側に張り出した貯蔵穴が検出されている。この貯蔵穴内部にはローム粒を含む茶褐色土が主体となって堆積しており，一部焼土粒を含む層も確認されている。カマドは北西壁中央部に位置し，袖部は山砂と粘土で構築されている。遺存状態は良好で，両袖と一部天井部が残存している。燃焼部内の幅は約60cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は検出されていない。竪穴覆土はロームを多く含む黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物が多く含まれる。床面上には小規模な焼土の堆積が確認されている。住居廃棄時に火を受けている可能性が高い。

073Bの平面形態，規模，主軸方向はAと変わらない。壁高は約40cmで，073Aよりわずかに深く掘り込まれていた。壁面の立ち上がりはあまり明確に捉えられていない。壁溝は検出されていない。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されている。ほかに，主柱穴列の外側に３基のピットが検出されており，この内，東壁側のものは入口施設の一部である可能性が考えられる。貯蔵穴もこの付近の東壁中央で検出されている。カマドは対面の北西壁中央で検出されている。右袖のみが残存し，山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約30cmで，火床部及び内袖は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。竪穴覆土は073Aの床面直下に５cm～10cm厚で残されているが，堆積土の詳細は不明である。床面上に硬化面の広がりが認められたが，炭化材や焼土などは確認されていない。073Bに関して火を受けた可

能性は低い。

遺物はカマドや貯蔵穴周辺に土器が集中しているが，大部分は073Aに伴うものと考えられる。図化した遺物は坏5点，高坏11点，甑1点，甕1点，石製小玉1点である。3か所からごく小規模な貝ブロック（a・b・c）が検出されている。aのみ上層からの出土で，b・cは下層からとされる。各貝ブロックは第10表の通りである。種同定ができうる状況ではないため，分析は不可能であった。ハマグリやアサリなどの二枚貝を主体としている。

073Aのカマド内堆積土上では，高坏6・9・11・12が直立した状態で出土している。いずれも脚部が短く裾が開いている。貯蔵穴周辺からは坏3・4と高坏8・15が床面直上で，坏2，高坏10，甕18が床面から若干浮いてみつかっている。西壁付近からは石製小玉19が床面直上でみつかっている。また，出土位置が不明であるが，竪穴内からは土製支脚の破片と土製小玉が1点ずつ出土している。そのほかに，竪穴中央部では覆土中に須恵器を模倣した土師器坏5，竪穴西隅では坏1と胴部が丸みを帯びた甑17が壁際の堆積土中から出土しており，これらは竪穴埋没過程で廃棄されたものと思われる。坏2～5，高坏6～8，10・11，13～15は赤彩が施されている。

073Bに伴う貯蔵穴内およびその周辺からは，土器片が数点と土製支脚の破片が1点出土しているが，図化はしていない。

074（第83図，図版16・45）〈10D－04・05グリッド〉

南側台地中央の平坦部，073A・B竪穴住居の南東隣に位置し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北東－南西方向に長軸3.7m，短軸3.4m，壁高25cm～39cm，小型の住居である。壁面はやや外側へ傾いて立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴やピットは検出されていない。竪穴南隅には貯蔵穴が確認されているが，内部の堆積状況は不明である。また，炉跡は竪穴中央西寄りに位置し，楕円形の浅い窪みに焼土が堆積している。

カマドは北壁やや東寄りに位置する。あまり良好に遺存しておらず，人為的に破壊された可能性について調査時所見で指摘されている。袖部は山砂と粘土で構築されていたようで，明確な袖部は残存していないが，右袖の下部には構築材の一部が集中していた。火床部は被熱により赤化している。煙道部も検出されなかった。

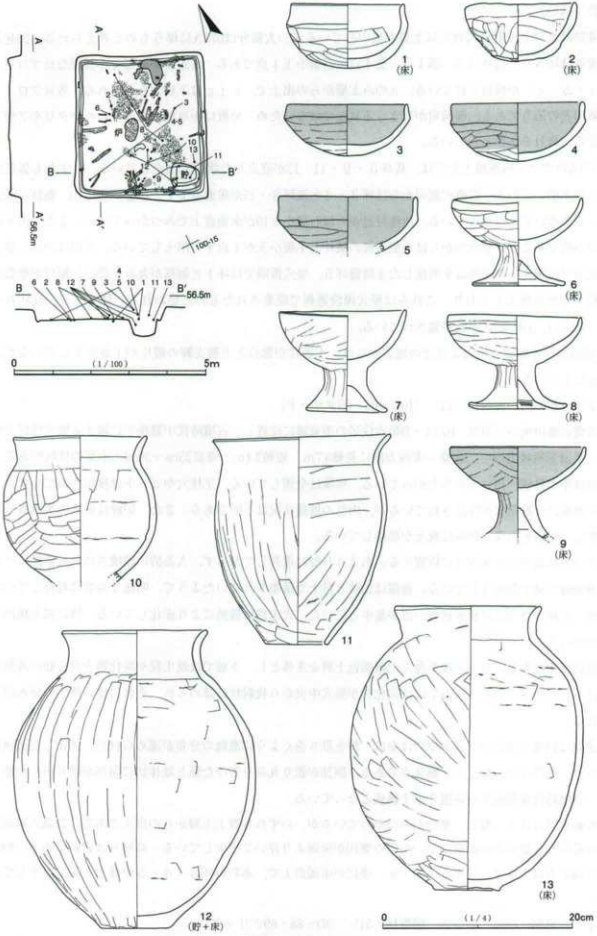
竪穴覆土は多量のローム粒を含んだ暗褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を含む層の堆積が確認されている。また，床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に認められ，それに伴い焼土の分布がみられる。

遺物は貯蔵穴周辺の土器集中のほかに，炉を取り巻くように遺物の分布が認められた。図化した遺物は坏5点，高坏4点，甑1点，甕3点である。胴部が張り丸みを帯びた甑と球体状に胴部が張り出した甕など，古墳時代後期後半の特徴を示す構成となっている。

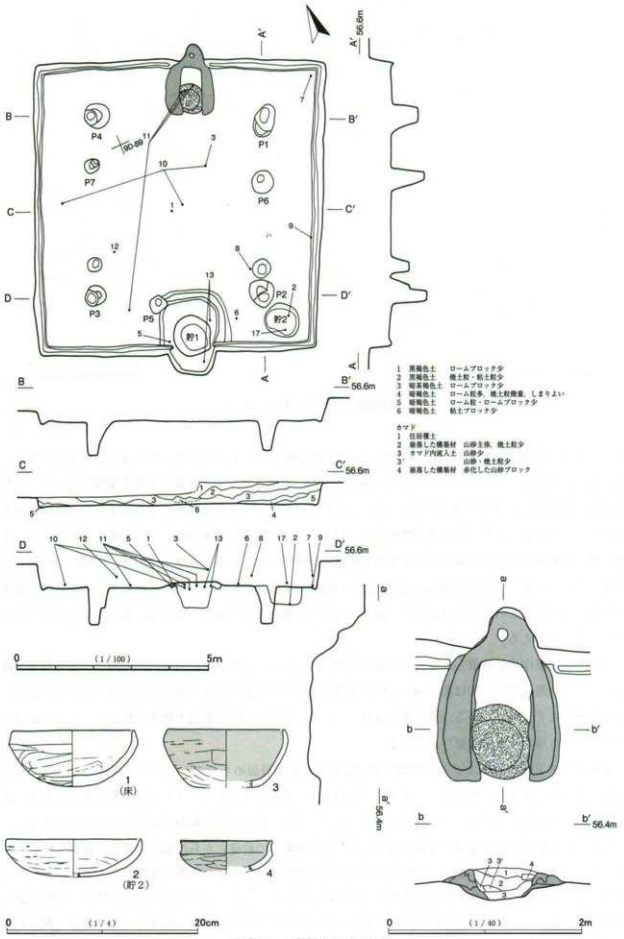
貯蔵穴では坏1，甑11，甕12がみつかっているが，いずれも覆土上層からの出土である。貯蔵穴周辺からは高坏9と甕13が床面直上で，小型の甕10が床面より浮いて出土している。高坏9は赤彩である。炉の周辺部からは，坏2，高坏6・7・8，甕12が床面直上で，赤彩の坏3・4・5が覆土上層で出土している。

075（第84・85図，第5表，図版16・51）〈9D－88・89グリッド〉

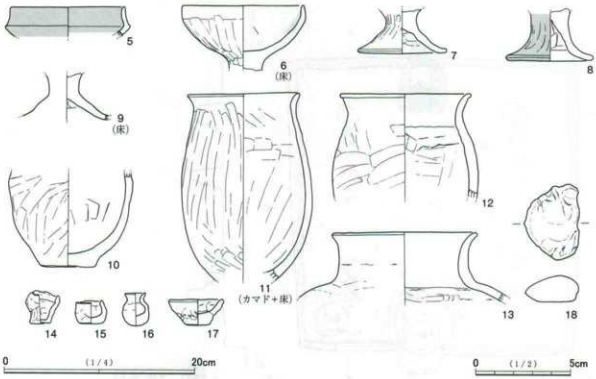
南側台地中央の平坦部やや東寄りに位置し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。平面形態は方



第83図　074竪穴住居



第84図　075竪穴住居（1）



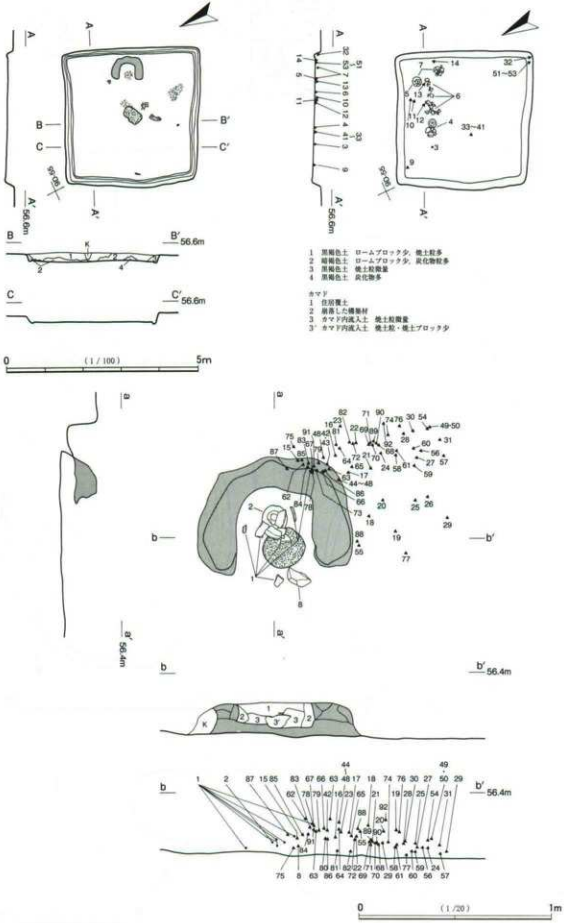
第85図　075竪穴住居（2）

形で，北東－南西方向に長軸7.6m，短軸7.4m，上面が削平されていたため，壁高は0㎝～63㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がっていることが確認できた。壁溝はカマドと貯蔵穴を除き全周している。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されているが，全ての主柱穴でピットが2基ずつ重複していたことが確認されており，建て替えが行われた可能性が高い。ほかに，主柱穴間には東西列に2基の補助柱穴がある。また，竪穴南東隅と南壁やや東寄りの2か所で貯蔵穴が検出されている。南壁のものは，外側に張り出した貯蔵穴となっており，この周囲に高さ5㎝ほどの弧状の高まりが土手状に廻っている。この張り出し部内の貯蔵穴は50㎝ほどの掘り込みがあり，西側に梯子穴が確認されており，入口部に近接する貯蔵穴であったことがうかがえる。

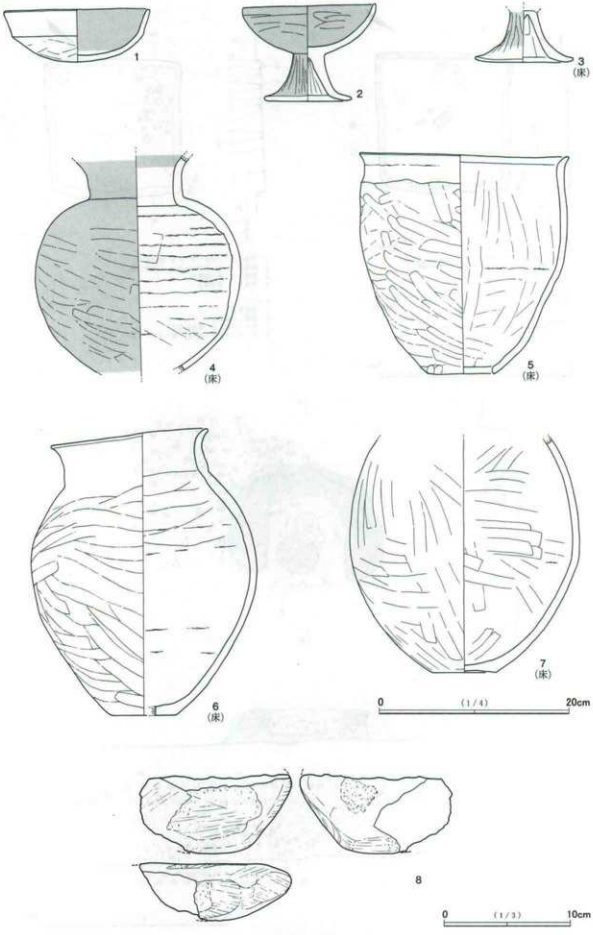
カマドは北壁中央に位置し，袖部は山砂で構築されている。遺存状態は良好で，両袖と一部天井部が残存している。燃焼部内の幅は約60㎝で，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。竪穴覆土はロームブロックを含む暗茶褐色土層を主体とし，下層では焼土粒を多く含む層の堆積が確認されている。

遺物はカマド燃焼部内と2基の貯蔵穴周辺に土器片が多数認められた。この内，図化した遺物は坏5点，高坏4点，鉢1点，甕3点，ミニチュア土器3点，手捏ね土器1点，スサ入り土製品1点である。内外面に赤彩を施された坏3～5や高坏8が4点ある。また，脚部が短く裾が広がる高坏も認められる。

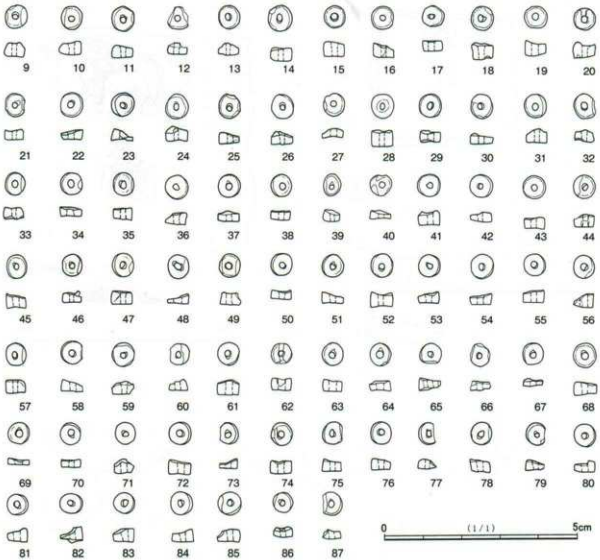
カマド内堆積土上では長胴の甕11が出土した。竪穴南東隅の貯蔵穴からは底面で坏2，覆土上層で手捏ね土器17が出土している。また，南壁で張り出した貯蔵穴付近からは須恵器を模倣した土師器坏5と甕13がみつかっており，入口部周辺からは床面で高坏6が出土している。竪穴中央床面から坏1，東壁周溝から高坏9が出土している。そのほかに，床面から20㎝以上上方からは坏3，高坏7・8，甕12，覆土上層からはミニチュア土器14～16とスサ入り土製品18が出土しているが，これらの土器は竪穴埋没過程での流



第86図　076竪穴住居（1）



第87図　076竪穴住居（2）



第88図　076竪穴住居（3）

入土からのものとみられる。

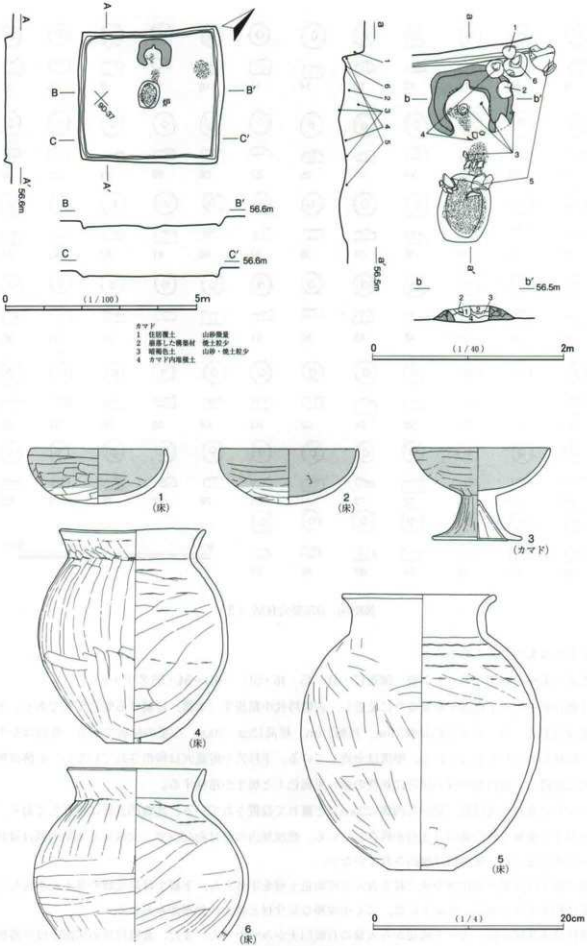
076（第86～88図，第6・7表，図版17・41・45・46・51）〈9D－54・55グリッド〉

南側台地中央の平坦部やや東寄りに位置し，古墳時代中期後半（末葉）に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，東－西方向に長軸3.6m，短軸3.4m，壁高12cm～20cm，小型の住居である。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。炉跡は竪穴中央に位置し，楕円形の浅い窪みに粘性の強い黒褐色土と焼土が堆積する。

カマドは東壁中央付近，壁から内側に20cmほど離れて設置されている。比較的良好に遺存しており，山砂と粘土で構築された袖部と土台が残存している。燃焼部内の幅は約40cmで，火床部と両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は検出されていない。

竪穴覆土は多量の炭化物や焼土粒を含んだ暗褐色土層を主体とし，下層では炭化物や焼土粒を含む比率が更に増すようである。床面上には，ごく小規模な炭化材と焼土の分布がみられる。

遺物は本住居では，カマド周辺から大量の石製臼玉がみつかった。また，北壁付近の床面では土器数点が一列に並んだ状態で出土した。図化した遺物は坏1点，高坏2点，壺1点，甑1点，甕2点，磨石1



第89図　077竪穴住居

点，石製臼玉79点である。

カマド内堆積土上からは，赤彩の坏１，伏せられた状態の赤彩の高坏２，磨石８が出土している。坏１は口径が大きく底面が丸い。また，東壁付近からカマド右脇にかけて石製臼玉79点が集中して分布し，一部は竪穴中央部や南隅の床面にも広がって出土している。臼玉はいずれも作りが粗雑で，丁寧な仕上げが施されていないものばかりであった。これらの臼玉の中に未成品は確認されていない。

また，北壁付近床面直上の土器は，カマドに近いものから順に，甕７，甑５，甕６，赤彩の壺４・高坏３が整然と一列に並んでいたことが確認されており，おそらく直立していたものと思われる。高坏の坏部は高く，脚部は短く裾が広がる。球体状の壺や胴部が張り出しやや丸みを持つ甑や甕は該期の特徴を顕著に示している。いずれの土器も床面からの出土であり，本住居から得られた遺物は廃棄後の埋没過程に流れ込んだものとは異なる。

０７７（第89図，図版17・46）〈9D－26・27グリッド〉

南側台地中央の平坦部に位置し，古墳時代中期後半（末葉）に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸3.8m，短軸3.4m，壁高16cm～28cm，小型の住居である。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝は全周している。ここも主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。炉跡は竪穴中央に位置し，楕円形の浅い窪みに焼土が堆積する。

カマドは北西壁中央付近，壁から内側に15cmほど離れて設置されている。燃焼部内の幅は約45cmで，火床部と両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は検出されていない。

竪穴覆土は少量の焼土粒を含んだ暗褐色土層を主体とし，下層では炭化物や焼土粒を多量に含む層の堆積が確認されている。床面上には，ごく小規模な焼土の分布がみられる。

遺物はカマド周辺に土器が集中している。図化した遺物は坏２点，高坏１点，甕３点である。坏は底部から口縁部にかけて丸みを持ち，高坏は脚部が短く細い。甕は胴部が張り出し丸みを帯びている。

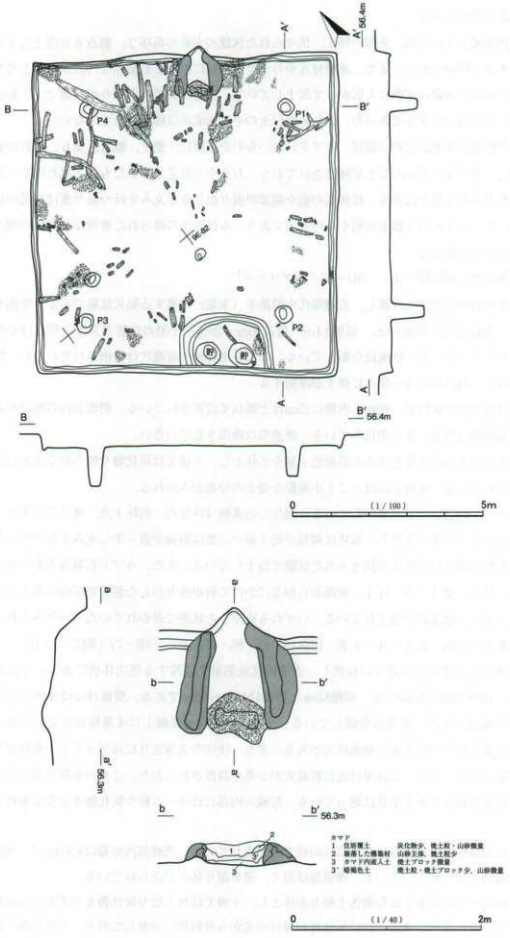
カマド燃焼部内では高坏３が伏せられた状態で出土している。また，カマド右袖後方から竪穴北東隅にかけては，坏２，甕４・６，坏１，頸部から胴部にかけて肩が張り出した甕５が床面に並んで出土した。坏１・２，高坏３は赤彩が施されている。いずれも直立した状態で置かれていたものとみられる。

０７８（第90～94図，第５・６・８表，図版18・41・46・47・52）〈9E－72・82グリッド〉

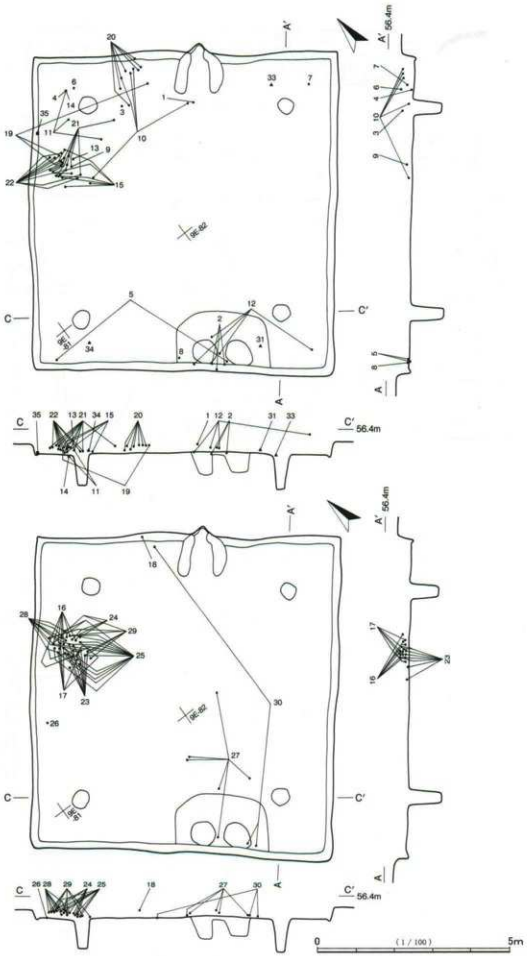
南側台地中央の平坦部東寄りに位置し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北東－南西方向に長軸8.1m，短軸8.0m，壁高は13cm～35cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっていることが確認できた。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されている。このほかに，主柱穴間には西列に１基の補助柱穴がある。また，住居中央南寄りにはピットが１基検出しているが用途は不明である。また，南西壁付近に貯蔵穴が２基分設置されており，これらを取り巻くように高さ５cmほどの弧状の高まりが土手状に廻っている。貯蔵穴内部にはローム粒や炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

カマドは北東壁中央に位置し，袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約60cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒を多く含む褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物をわずかに含む層の堆積が確認されている。また，床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に分布しており，これに伴い焼土の分布が確認されている。

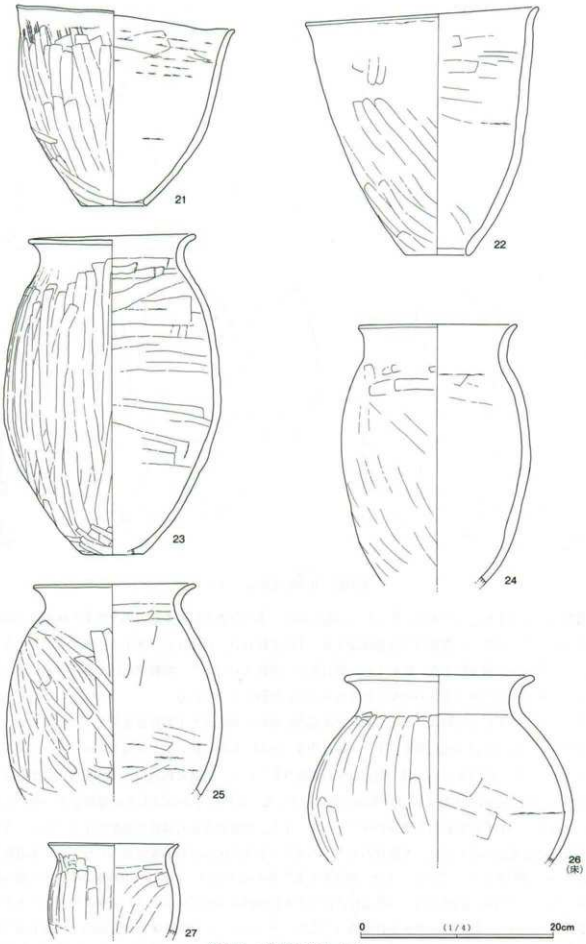


第90図　078竪穴住居（1）

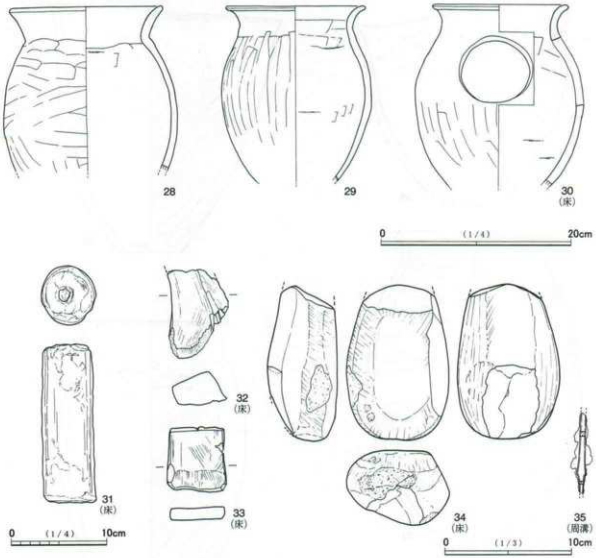


第91図　078竪穴住居（2）

第92図　078竪穴住居（3）



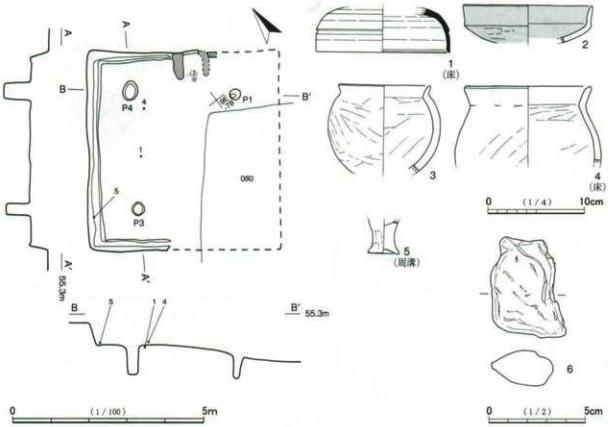
第93図　078竪穴住居（4）



第94図　078竪穴住居（5）

遺物は土器を主体として大量に出土しているものの，多くは西壁付近からの出土であり床面からのものは少なかった。図化した遺物は須恵器坏蓋1点，土師器坏6点，高坏4点，椀1点，鉢2点，壺1点，甑4点，甕11点，土製支脚1点，磨石1点，砥石2点，鉄鏃1点である。短脚の高坏や甑と長胴の甕の数が目立つ。丸みを帯びタタキ目の観察される甑も該期の特徴を示している。

カマドから出土した遺物は，煙道部から燃焼部内にかけて10点ほど土器片が堆積土上で出土している。カマド周辺からは左側に須恵器坏蓋1，土師器坏4，鉢14，右側に砥石33が床面上でみつかっている。坏2・4・5・7，高坏8・9・11，椀12は赤彩が施されている。貯蔵穴周辺の土手状施設内側からは，模倣坏5，甕30，完形の土製支脚31が床面で出土している。西壁付近からは大量の遺物がみつかっているが，床面からのものは磨石34と甕26のみであった。また，西壁周溝からは鉄鏃35が出土している。古墳時代後期の鉄鏃基部の突起には，寸胴状のものからスカート状に広がる形態変化がみられるが，本遺構のものはその中間形態を示している。また，西壁やや北寄りの地点では，約50cm×100cmの範囲に土器の集中がみられた。この内，甑21には，口縁部付近にタタキ目が観察されている。これはタタキ後にヘラナデで調整されたため，上部のみにタタキ目が残ったものとみられる。いずれも床面から10cm～20cm上方での出土であり，竪穴中央から壁面にかけて，壁際堆積土上に傾斜分布する様子が認められ，竪穴廃棄後の流れ



第95図　079竪穴住居

込み土に伴う物と考えられる。

079（第95図，第5表，図版18・51）〈9E－67・77グリッド〉

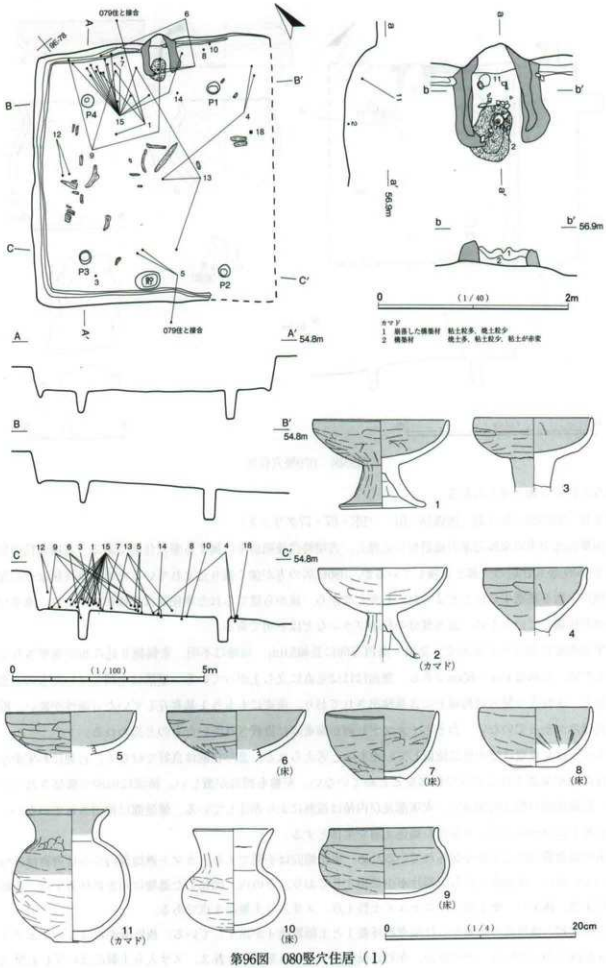
南側台地中央の東縁辺部の緩斜面に立地し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。古墳時代中期後半の080竪穴住居の一部と重複しているが，080住居の方が深く掘り込まれているため，本住居はその北西隅の上面を破壊するにとどまった。しかしながら，後から建てられた本住居は東側が削平され，東半分の壁が損壊していたため，該当部分の住居プランなどは不明である。

平面形態はおそらく方形で，北東－南西方向に長軸5.0m，短軸は不明，東側掘り込み面が削平されているため，壁高は0cm～62cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は全周していたものと思われる。主柱穴は竪穴対角線上に3基検出されており，南東にももう1基存在していた可能性が高い。貯蔵穴はみつかっていない。おそらくカマド対面か南東隅に設置されていたものと思われる。

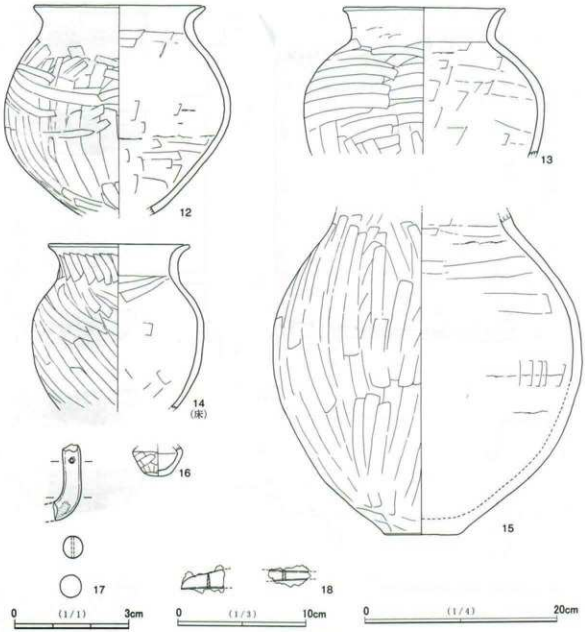
カマドは北東壁ほぼ中央に位置していたものと考えられる。遺存状態は良好ではなく，右袖はわずかな残存部分が確認されたのみで原形をとどめていない。左袖も損傷が激しい。袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び内袖は被熱により赤化している。煙道部は検出されていない。竪穴覆土はロームブロックを含む褐色土層を主体とする。

遺物は遺構のほぼ半分を切られているため，出土傾向は不明である。カマド燃焼部内からは遺物はみつかっていない。床面直上から土器片が少量出土しており，その内，図化した遺物は須恵器坏蓋1点，土師器坏1点，鉢1点，甕1点，ミニチュア土器1点，スサ入り土製品1点である。

主柱穴列内側付近の床面からは須恵器坏蓋1と土師器甕4が出土している。西壁溝からはミニチュア土器5がみつかっている。そのほか，赤彩の模倣坏2，丸みを帯びた鉢3，スサ入り土製品はいずれも竪穴



第96図 080竪穴住居（1）



第97図　080竪穴住居（2）

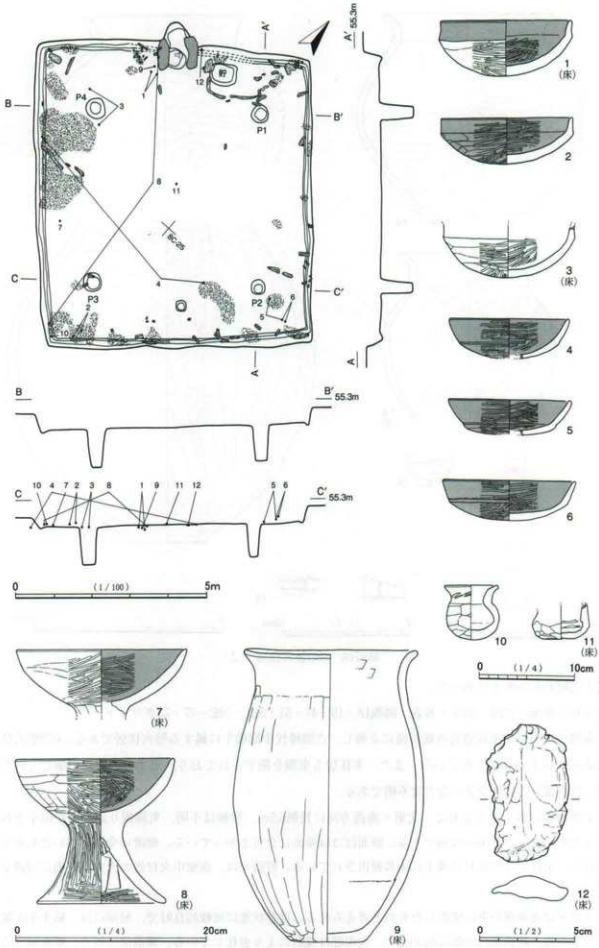
覆土上層からの出土であった。

０８０（第96・97図，第５・８表，図版18・19・47・51・52）〈9E－77・78グリッド〉

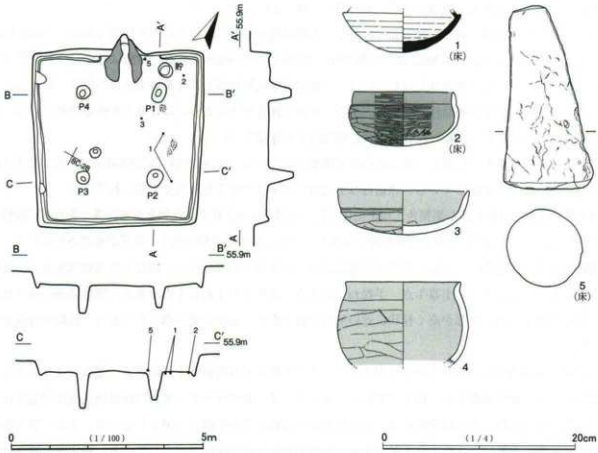
南側台地中央の東縁辺部の緩斜面に立地し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。079竪穴住居に北西隅の上面を切られている。また，本住居も東側を削平されており，東半分の壁が損壊していたため，該当部分の住居プランなどは不明である。

平面形態はおそらく方形で，北東－南西方向に長軸6.5m，短軸は不明，東側掘り込み面が削平されているため，壁高は０cm～27cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は全周していたものと思われる。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されている。貯蔵穴は，南壁中央付近のカマド対面に設置されている。

カマドは北東壁中央に位置したものと考えられる。遺存状態は比較的良好で，袖部には，粘土を主原料としている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。



第98図　081竪穴住居



第99図　082竪穴住居

竪穴覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土層を主体とし，下層では焼土粒を非常に多く含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が部分的にみられる。

遺物はカマド周辺から土器を中心に多量に出土している。その内，図化した遺物は高坏６点，鉢３点，壺２点，甕４点，ミニチュア土器１点，土製勾玉１点，鉄製刀子１点である。坏が無く鉢が目立ち，短脚の高坏が多数を占め，小型の壺も出土していることから，これらの土器は古墳時代中期後半と位置づけられる。

カマド燃焼部内では，伏せられた状態の高坏２と小型の甕11のほかに土器片が十数点出土した。カマド周辺では左袖付近に土器の偏重が認められるが，この内，床面直上からのものは高坏６，鉢７・９のみである。高坏１や甕15は床面から20cmほど浮いた状態で確認されており，重複する079竪穴出土分と接合する個体もあることから，住居廃棄後の流れ込みと考えられる。カマド右袖付近では鉢８，小型壺10，甕14が床面で出土している。また，竪穴東壁付近では口径が小さく坏部の高い高坏４と刀子18が出土している。刀子は同一個体のものが２点みつかっているが，接合はできなかった。おおよその復元値となるが，刃渡りは約６cmと推定される。南壁付近からは高坏３・５が，西壁付近からは甕12が，それぞれ床面から浮いた状態で出土している。高坏１・３～６，鉢７～９，壺11の口縁部周辺は赤彩が施されている。遺構外出土分と接合する個体もあり，これらの土器は流れ込み土中からのものとみられる。このほかに，土製勾玉17が住居内から出土しているが，平面及び垂直位置は不明である。

０８１（第98図，第５表，図版19・47・48・51）〈8C－14・24グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，古墳時代後期後半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸7.7m，短軸7.3m，壁高は24cm～62cmである。壁面は外側にやや傾斜しながら立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されており，ほかに，主柱穴間には南列に１基の補助柱穴がある。また，北西壁付近やや東寄りには貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴内部にはローム粒や砂粒，炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。

カマドは北西壁中央に位置し，袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は竪穴外に40cmほど壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒を含む黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を非常に多く含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が壁際に分布し，それに伴い小規模な焼土の堆積が確認されている。

遺物の大部分が壁際にみられ，竪穴中央部にはほとんど出土していない。図化した遺物は坏６点，高坏２点，甕１点，ミニチュア土器１点，手捏ね土器１点，スサ入り土製品１点である。黒色処理が施された浅い坏が多数を占め，脚部が高く柱状に近い形態を持つ高坏と長胴の甕が出土しており，該期の特徴を良く示している。

カマド燃焼部内からは土器片が１点出土した。カマド付近では模倣坏１，高坏８，甕９，スサ入り土製品12とほか２点が床面直上から出土している。１・２，４～６の坏と７・８の高坏は黒色処理が施されている。北西主柱穴付近からは模倣坏３，西壁付近からは高坏７が床面上で出土している。また，竪穴中央部からは手捏ね土器11，スサ入り土製品１点，不明土製品１点が床面で出土している。竪穴南西隅では模倣坏２とミニチュアの壺10が，南東隅では坏５・６が床面付近で出土している。そのほかに竪穴覆土中からは土製支脚の破片が３点出土している。

０８２（第99図，第５表，図版19・20・48・52）〈8C－17・18グリッド〉

南台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，古墳時代後期後半に属する竪穴住居である。古墳時代後期前半の083竪穴住居と一部重複する。083竪穴住居より深く掘り込んでおり，西隅を切って構築している。

平面形態は歪な方形で，北西－南東方向に長軸4.5m，短軸4.5m，壁高は27cm～45cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝はカマド付近で消えているが，それ以外は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されているが，ほかに，西列の主柱穴間内側にピットが１基認められる。また，竪穴北東隅には貯蔵穴が検出されている。

カマドは北西壁中央に位置し，袖部は山砂と粘土で構築されている。燃焼部内の幅は約40cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は竪穴外に40cmほど壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒を多量に含む茶褐色土層を主体とし，下層ではわずかに焼土粒を含む層の堆積が確認されている。床面上には小規模な焼土の堆積が検出されている。

遺物は竪穴中央から東寄りに偏ってみられる。その内，図化した遺物は須恵器坏身１点，土師器坏２点，鉢１点，土製支脚１点である。

カマド右袖付近からは，土製支脚の一部破損品５が床面上で出土している。また，詳細な出土位置が不明だが，カマド周辺から鉢４が出土している。東壁付近では須恵器坏身１と，口縁部から胴部にかけて肩のような張り出しが観察される土師器坏２が床面で，模倣坏３が覆土上層で出土している。２は内外面に黒色処理が，３・４には内外面に赤彩が施されている。

０８３（第100図，図版20・48）〈8C－19・29グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，古墳時代後期前半（初頭）に属する竪穴住居である。古墳時代後期後半の082竪穴住居に西隅を切られている。更に，住居内側の東壁付近を086溝にも切られているが，この溝の深さは20cmほどで浅かったため，住居施設は一部の壁を除きかなりの部分が遺存していた。

平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸6.5m，短軸6.5m，壁高は０cm～24cmである。壁面は外側に傾斜し立ち上がっている。壁溝は南壁中央で途切れているが，西隅が重複部分のため不明である。また，ごく浅い間仕切り溝が，西壁周溝から北壁周溝へ，北隅を囲むように主柱穴を挟みながら蛇行している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出されており，北列の主柱穴間には補助柱穴が１基ある。また，住居中央付近に２基，南東及び北東主柱穴列の外側に，それぞれ１基ずつのピットが認められるが用途は不明である。ほかに，南隅付近にみられる間仕切り溝を挟むように小規模なピットが２基みつかっている。カマド対面に当たる東壁中央には長楕円形の貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴内部にはローム粒や炭化物を含む褐色土が堆積している。また，高さ５cmほどの弧状の高まりが，この貯蔵穴を囲むように土手状に廻っている。

カマドは北西壁中央に位置している。082竪穴住居に切られており，右袖と焚口部の火床面のみが残存している。袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は不明，火床部及び内袖は被熱により赤化している。煙道部も破壊され検出されていない。

竪穴覆土はローム粒を多量に含む褐色土層を主体とし，下層では焼土粒を含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材がわずかにみられる。

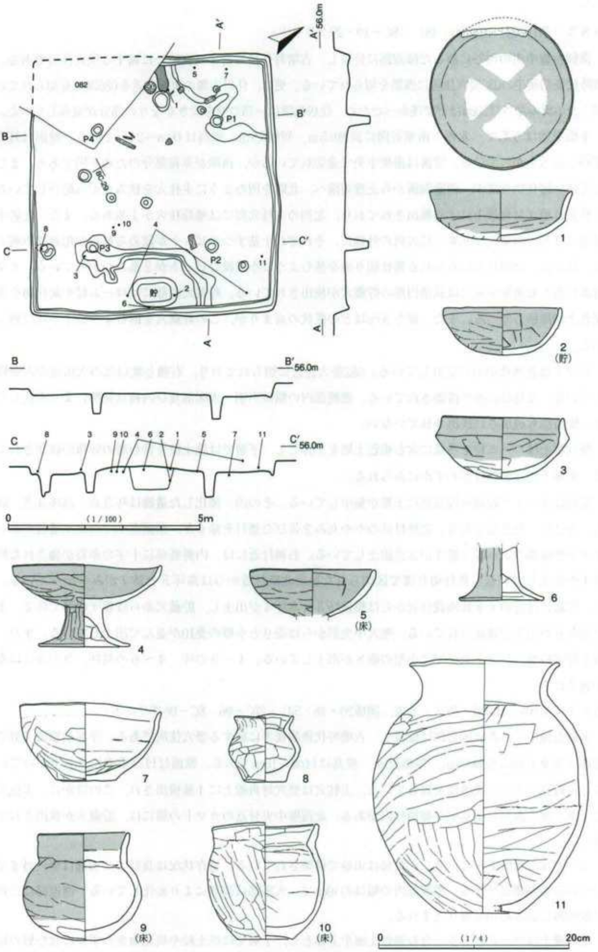
遺物はカマドと貯蔵穴周辺部に土器が集中している。その内，図化した遺物は坏３点，高坏３点，鉢１点，壺２点，甕２点である。北壁付近のやや丸みを帯びた甕11を除くと，床面直上での出土遺物が多い。カマド燃焼部内からは土器片が３点出土している。右袖付近には，内側底部に十字の赤彩が施された模倣坏１が出土している。間仕切り溝で区切られた竪穴北隅付近からは高坏５と鉢７がみつかっている。また，貯蔵穴付近の土手状施設付近からは模倣坏３と高坏４が出土し，貯蔵穴からは覆土中層で坏２，上層で高坏６の出土が確認されている。竪穴中央部からは壺９と小型の甕10が並んで出土している。また，南西主柱穴外側のピット上面では小型の壺８が出土している。１～３の坏，４～６の高坏，９の壺には赤彩が施される。

０８４（第101・102図，第５・８表，図版20・48・52）〈7C－96，8C－06グリッド〉

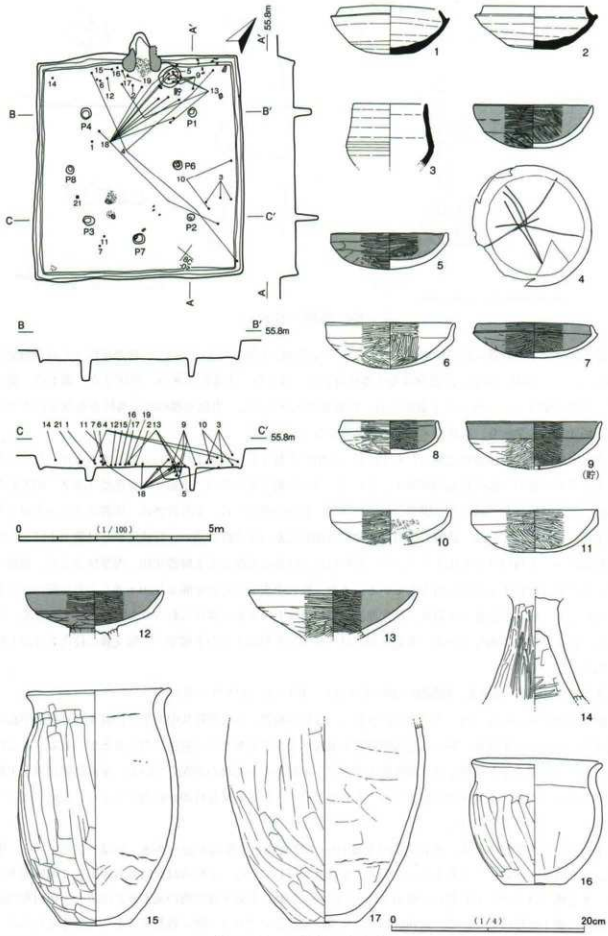
南側台地中央の西北縁辺部に位置し，古墳時代後期後半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸5.6m，短軸5.5m，壁高は14cm～16cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっていることが確認できた。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出され，このほかに，主柱穴間には東・南・西列に１基ずつ補助柱穴がある。北西壁中央付近のカマドの隣には，貯蔵穴が検出されている。

カマドは北西壁中央に位置し，袖部は山砂で構築されている。遺存状況は良好で，袖部は竪穴外まで延びているのが確認できる。燃焼部内の幅は約40cmで，火床部は被熱により赤化している。煙道部は三角形に竪穴外に長さ約70cm掘り込まれる。

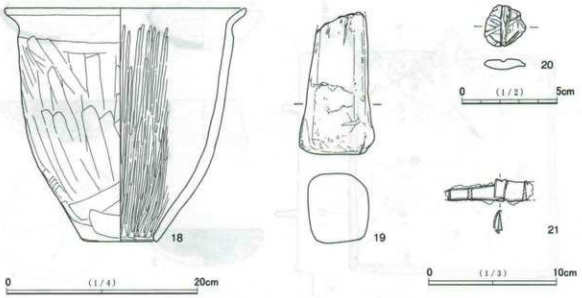
竪穴覆土はローム粒を多く含む褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物をわずかに含む層の堆積も部分的に確認されている。床面上には炭化材や焼土がカマド周辺と対面にごく小規模に分布している。



第100図　083竪穴住居



第101図　084竪穴住居（1）



第102図　084竪穴住居（2）

遺物はカマドと貯蔵穴周辺に集中しているが，大部分は床面から浮いており，壁際堆積土上面の出土分もあった。この内，図化した遺物は須恵器坏身２点，椀１点，土師器坏８点，高坏３点，甑１点，甕３点，土製支脚１点，スサ入り土製品１点，鉄製刀子１点である。黒色処理の坏や高坏が多数を占めている。坏４・５・７～９，高坏12・13は黒色処理がなされている。

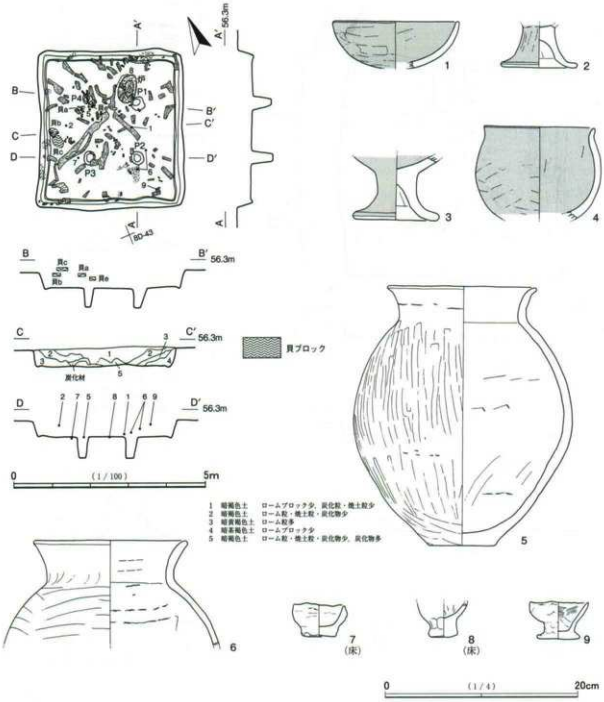
カマド燃焼部内には遺物は見当たらず，流入土中に土器片が１点含まれているのみであった。左袖付近からは土製支脚の一部破損品19が出土している。カマド周辺部からは，小振りの須恵器坏身２，須恵器を模倣した土師器坏６，高坏12，脚部の長い高坏14，長胴の甕15・17，小型の甕16，鉄製刀子21が床面より若干浮いて出土している。鉄製刀子21は端金具の部分である可能性が高い。貯蔵穴からは覆土中層～上層で模倣坏９，上層で坏５が出土している。東壁付近では須恵器椀３と土師器坏10，南壁付近では，模倣坏７・11が壁際堆積土上面から出土している。また，竪穴中央部からは床面より20cm近く上方で甑18が出土しているが，破片が広がっており，竪穴埋没過程にカマド付近から投げ入れられたものと考えられる。ほかに，出土位置が不明なものの，本遺構からはスサ入り土製品１点が下層で，土製支脚の破片２点が上層で出土している。

０８７（第103図，第10表，図版20・48・49・51）〈8D－32・33グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した縁辺部に位置し，住居の構造から古墳時代中期前半に属する可能性が高い竪穴住居である。本遺跡にみられる古墳時代の遺構のなかでもおそらく初期に当たると思われる。ところが，本住居で出土した遺物には古墳時代中期後半～後期前半の遺物が混在していた。垂直位置は覆土中層から上層に当たり，本来住居に伴っていたものではなく，住居廃棄後時間が経過してから，数回に渡って投棄されたものと考えられる。

平面形態は方形で，北東－南西方向に長軸4.0m，短軸3.8m，壁高８cm～29cm，小型の住居である。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に４基検出された。本遺構ではカマドや貯蔵穴は検出されていない。炉跡は北列主柱穴間の東寄りに位置し，楕円形の浅い窪みに焼土が堆積している。底面付近では赤変が確認されており，強い被熱痕であったと考えられる。

竪穴覆土はローム粒が多く，焼土粒や炭化物も若干含んだ暗褐色土層を主体とし，下層では炭化物をよ

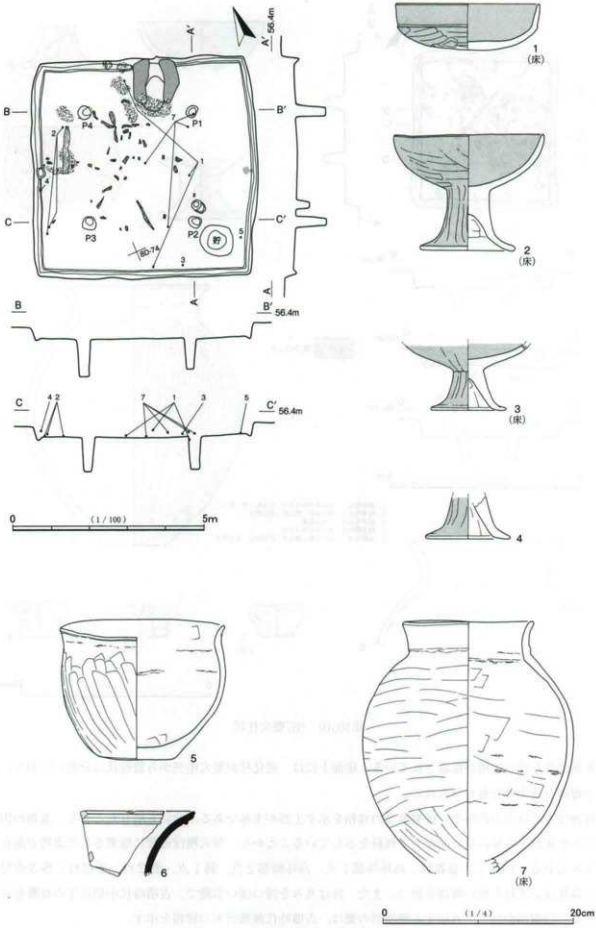


第103図　087竪穴住居

り多量に含む層の堆積が確認されている。床面上には，炭化材が竪穴中央から放射状に分布しており，ごく小規模な焼土の分布もみられる。

遺物は古墳時代中期後半～後期前半の様相を示す土器が主体である。前にも触れたとおり，遺物の出土レベルが床面から離れ壁に向かって傾斜を示していることから，竪穴埋没過程に廃棄された遺物が混在するとみられる。図化した遺物は，高坏坏部１点，高坏脚部２点，鉢１点，甕２点，手捏ね土器３点である。高坏はいずれも低い脚部を持つ。また，鉢は丸みを持つ深い形態で，古墳時代中期後半の特徴を示している。口縁部が高く，外反する倒卵形の甕は，古墳時代後期前半の様相を示す。

主柱穴P3付近からは手捏ね土器７，炉の側からは手捏ね土器８が床面近くで出土しているが，これら



第104図　088竪穴住居

の土器も後期の特徴を示しており，住居廃棄後に数度にわたって投棄されたものと考えられる。

このほかに，西側主柱穴列付近から西壁にかけて，ごく小規模ではあるが貝層が5か所で確認されている。覆土上層からの出土が4か所（a,b,c,e）と下層出土の土器5内の堆積土中より貝（d）が検出されている。各貝ブロックの規模は第10表のとおりである。いずれの貝ブロックもハマグリを主体とした内湾砂泥底の貝種で構成されている。このほか本遺構では，炭化種子が2か所で検出されている。

０８８（第104図，第5表，図版21・49）〈8D－63・64グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した緩辺部に位置し，古墳時代後期前半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，北東－南西方向に長軸5.9m，短軸5.6m，壁高は24cm～45cmである。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝はカマドを除き全周している。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されているが，東列主柱穴間の東南主柱穴付近には，深さ30cm程の浅いピットがみられる。このピットは重複していたことが確認されている。また，西壁中央の周溝上にもピットが1基検出されている。また，竪穴南東隅には貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴内部にはロームブロックを主体とし，焼土粒や炭化物をわずかに含む暗褐色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に位置し，袖部は山砂と若干の粘土で構築されている。燃焼部内の幅は約60cmで，火床部及び両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒，炭化物，焼土粒を多量に含む黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や小礫，粘土粒を含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が竪穴中央から放射状にわずかに分布している。ほかに，焼土の堆積がカマド周辺で検出されている。

遺物はカマドと貯蔵穴周辺，西壁付近の3か所で土器が集中している。土器の多くが住居内で広く接合しており，散乱した状態で出土している。この内，図化した遺物は坏1点，高坏3点，鉢1点，土師器甕1点，須恵器甕1点である。坏や高坏は全て赤彩を施されている。

カマド燃焼部内からは土器片が数点出土した。左袖付近には口径の大きな模倣坏1が出土している。竪穴中央部からはやや丸みを帯びた甕7が出土した。また，貯蔵穴付近からは須恵器甕の破片6が覆土中で，高坏3が床面で出土している。西壁付近では，脚部の形態が異なる高坏2・4が出土している。そのほかに，竪穴覆土中からは出土位置不明の土製品が1点得られている。

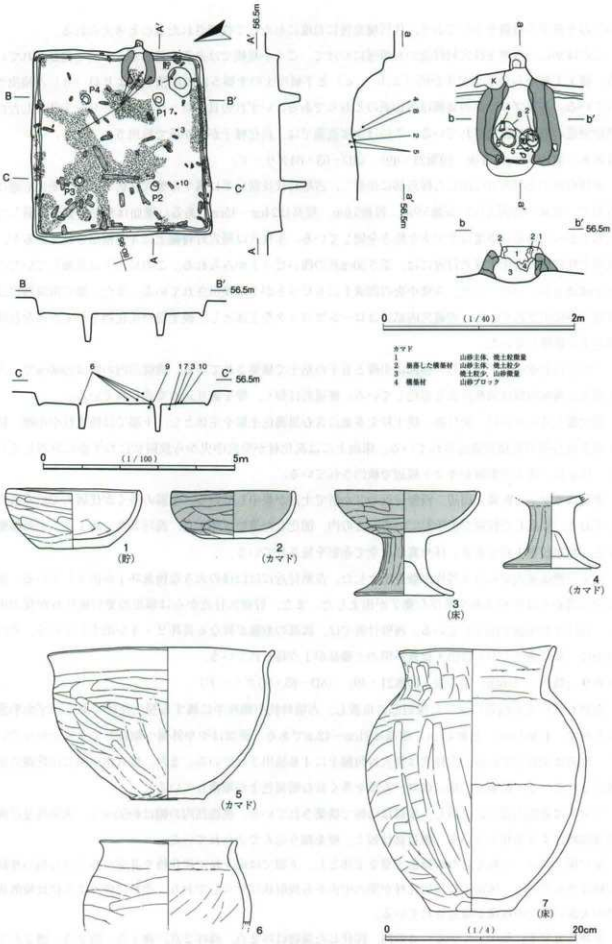
０８９（第105・106図，第5表，図版21・49）〈8D－85・95グリッド〉

南側台地中央の西谷に面した緩辺部に位置し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。平面形態は方形で，長軸4.8m，短軸4.7m，壁高は31cm～42cmである。壁面はやや外側へ傾斜して立ち上がっている。壁溝は全周している。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されている。また，竪穴南東隅には貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴内部にはローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。

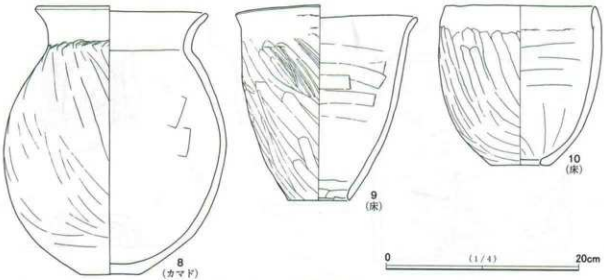
カマドは東壁南寄りに位置し，袖部は山砂で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，火床部及び両袖は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を掘り込んで造られている。

竪穴覆土はローム粒を含む暗褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を非常に多く含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に分布しており，それに伴うように比較的規模の大きい焼土の堆積が確認されている。

遺物はカマドに集中している。この内，図化した遺物は坏2点，高坏2点，鉢1点，甑2点，甕3点である。坏は底部が平らで深いものが目立つ。坏2，高坏3・4は赤彩が施されている。



第105図　089竪穴住居（1）



第106図　089竪穴住居（2）

カマド燃焼部内左側には高坏4と甕8，右側には重なった状態で坏2と鉢5が直立して堆積土上面から出土した。また，不明土製品3点もカマド内から出土しており，これらの土器と一連のものと思われる。カマド前面には甕6が出土している。ほかに，カマド内からは土製支脚の破片3点が堆積土中に出土している。貯蔵穴覆土上層では坏1が出土している。竪穴南壁付近からは，甕7，高坏3，甑9・10が床面で出土している。

091（第107・108図，第5・7表，図版21・41・49・50・51）〈8D－98・99グリッド〉

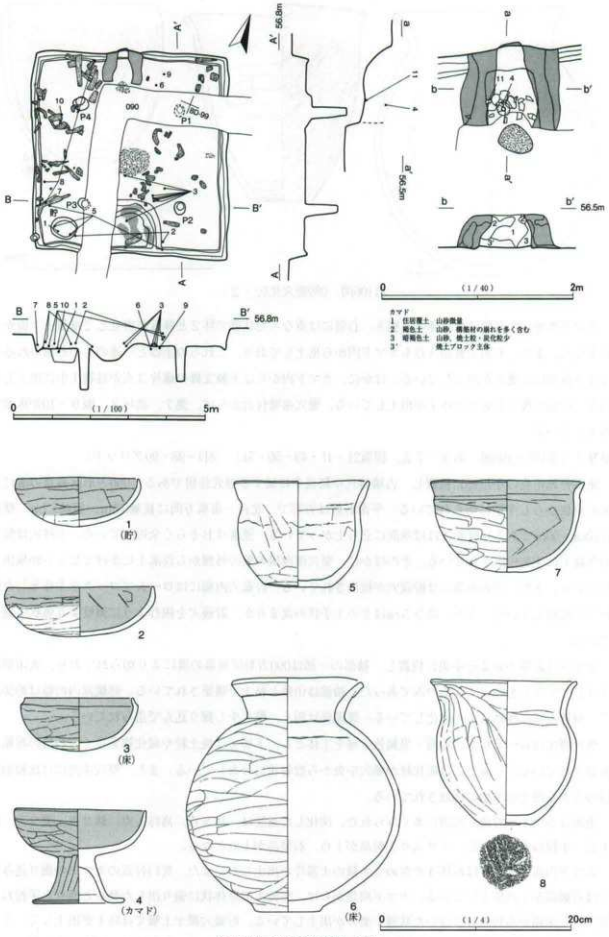
南側台地中央の平坦部に位置し，古墳時代中期後半に属する竪穴住居である。090方形区画墓の溝に住居の東側からL字型に切られている。平面形態は方形で，北西－南東方向に長軸5.2m，短軸5.2m，壁高は10cm～50cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝はおそらく全周している。主柱穴は竪穴対角線上に4基検出されている。そのほかに，竪穴南西隅の壁の外側から周溝上にかけてピットが検出されている。また，竪穴南隅には貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴内部にはロームブロックを主体とした褐色土が堆積している。また，高さ5cmほどの土手状の高まりが，貯蔵穴を囲むように南壁より弧状に廻っている。

カマドは北壁のおよそ中央に位置し，袖部の一部は090方形区画墓の溝により切られており，火床部は辛うじてプランを確定できるのみであった。袖部は山砂と粘土で構築されている。燃焼部内の幅は約50cmで，両袖内側は被熱により赤化している。煙道部は短く，壁を少し掘り込んで造られている。

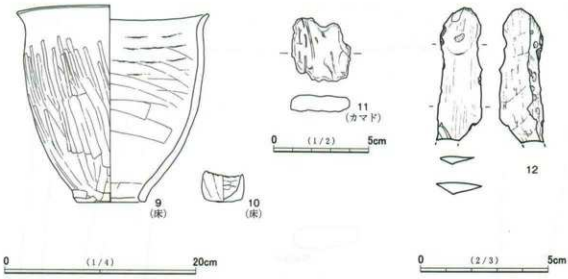
竪穴覆土はローム粒を含む暗・黒褐色土層を主体とし，下層では焼土粒や炭化物を多く含む層の堆積が確認されている。床面上には炭化材が竪穴中央から放射状に分布している。また，竪穴中央には比較的規模の大きな焼土の堆積が確認されている。

遺物はカマドと貯蔵穴周辺に多くみられた。図化した遺物は，坏3点，高坏1点，鉢2点，甕2点，甑1点，手捏ね土器1点と，スサ入り土製品が1点，石製品が1点となる。

カマド内流入土からは高坏4を含めて多数の土器片が出土した。また，焚口付近のカマドの掘り込み面では石製品が1点出土している。カマド周辺からは，床面上で球体状に張り出した甕6と甑9と手捏ね土器10が，床面から10cmほど浮いた状態で甕8が出土している。貯蔵穴覆土上層では坏1が出土している。また，貯蔵穴周辺部の土手状施設外側からは坏3が床面で出土している。そのほか，壁際からは坏2，鉢



第107図　091竪穴住居（1）



第108図　091竪穴住居（2）

5・7，底面に木葉痕を持つ甕8が堆積土中より検出された。坏1～3，高坏4，鉢7は赤彩が施されている。

2　方墳

調査区内には以前の遺跡分布調査の際に，農道脇に高さ約1mのわずかな盛土状の高まりが確認されており，草刈古墳群の一部として，草刈44号墳として認識されていた。今回の調査に当たり，44号墳を調査したところ古墳ではなく，近世以降の塚であることが確認された（草刈44号墳（塚））。しかし，それとは別にわずかな地表の盛り上がりが2か所確認され，古墳を想定して調査を実施したところ，わずかに残存する墳丘と周囲を廻る溝，埋葬施設，出土遺物などから古墳と判断された。一方，調査の際に墳丘は確認されなかったが表土を除去し調査を実施していった過程の中で，墳丘を失った古墳であると判断された遺構が1基あり，合わせて古墳時代の方墳3基が検出され調査された。3基のうち2基は調査区の南側台地上に位置し，1基は南北両台地間の鞍部平坦面から斜面にかけて位置し，古墳墳丘の存在を認識しにくい現地形であった。

063（第109・110図，図版22・23）〈10Eグリッド〉

調査区の南側台地上の中心から南東側に寄った傾斜面に近いところに位置している。調査前の観察では最高地点が標高57.15mを測り，見かけの直径8m～10mのわずかに楕円形の高さ約0.8mの土の高まりが観察され，現況実測により周囲が周溝状にわずかに窪んでいるのも確認された。その結果，直径12m程度の円墳と想定された。また，西側10mに064方墳が所在し，2基は関連を持って構築されたものと思われる。

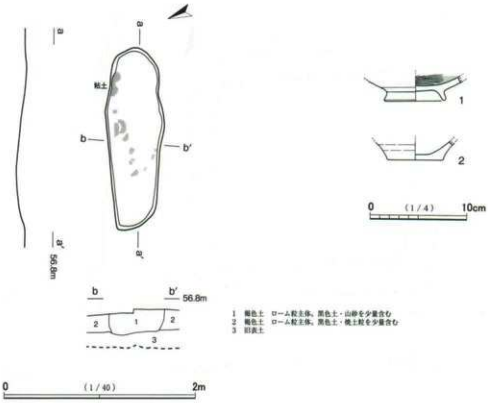
墳丘盛土は，旧表土面から上にローム粒を多く含む黒色土との混合土が厚さ最大約0.4m遺存していた。盛土の遺存量は少なく，遺存する範囲も南北約7.4m，東西約7.6mの方形の範囲であった。旧表土から周溝の内側の掘り込み開始部分までの幅約0.5m～1.0mの部分の表土は遺存せず，テラス状の平坦部を作出している。

周溝は内側の掘り込みから外側の立ち上がりまで1.6m～1.8mの幅で，深さ1.2m～1.4mに掘り込まれている。周溝の内側の平面形は，南北方向9.0m，東西方向9.2mでほぼ方形であるが，正確な正方形ではなくわずかに押しつぶされたように歪んだ近似正方形である。自然地形の傾斜が北西から南東方向にわずか

1 表土　Ⅱa層
2 暗褐色土　Ⅱb層
3 黒褐色土　黒色粒多、ローム粒・焼土粒を微量含む
4 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒少量、焼土粒を微量含む
5 黒褐色土　黒色粒多、ローム粒・焼土粒を微量含む
6 褐色土　黒色粒多、ローム粒・焼土粒を微量含む
7 褐色土　黒色粒少量、ローム粒を多量含む
8 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒含む
9 褐色土
10 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒・ブロック少量含む
11 褐色土
12 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒・ブロックを微量含む
13 暗褐色土　黒色粒・ローム粒多・ロームブロックを微量含む
14 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒・ブロック少量含む
15 褐色土　黒色粒微量・ローム粒多、小ロームブロックを少量含む
16 明褐色土　黒色粒少量、ローム粒を多、小ロームブロック少量含む
17 褐色土
18 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒を少量含む
19 黒褐色土　黒色粒多、ローム粒・焼土粒を微量含む
20 暗褐色土　黒色粒少量、ローム粒・ブロックを多量含む
21 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒少量、ロームブロックを多量含む
22 暗褐色土　黒色粒多、ローム粒・焼土粒を微量含む

第109図　063方墳（1）

0　(1/100)　5m



第110図　063方墳（2）

に傾斜していることから，構築時の縄張りの際に地形の傾斜によって形状が歪んでしまった可能性が考えられる。周溝外側の規模は南北12.3m，東西12.5mで，内側も含め数量的には比較的端正である。周溝断面は逆台形状で，底面はほぼ平坦に四周を廻り，場所による掘り方の深浅の差異はない。覆土は黒色土を多く含み，内側の墳丘からの流入を主とする自然堆積の状態が観察された。

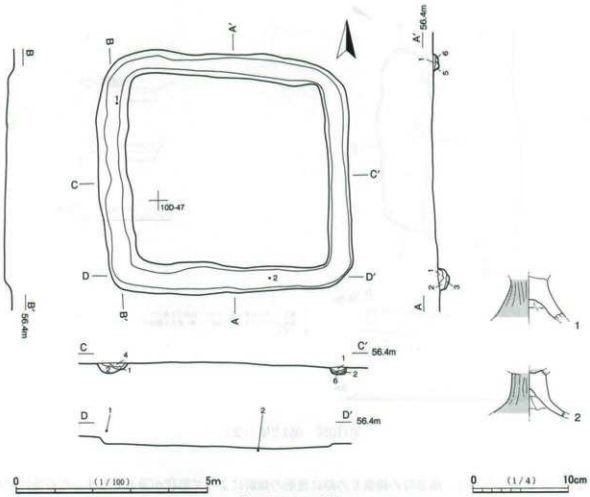
埋葬施設は墳丘の中央部分に東西に走る周溝とほぼ平行に構築され，表土除去後に掘り込みが確認されたので掘り込み開始面は既に削平されるか表土化されて確認できず，盛土中から掘り込まれ底面が旧表土にわずかに確認される状況で，検出された全長は1.80m，最大幅0.60m，最大深さ0.25mの長楕円形であった。埋葬施設覆土はローム粒を主体とし黒色土・山砂粒とわずかに粘土粒を含んでいたが，周辺の墳丘盛土との差異は少なく分別は容易ではなかった。床面には粘土のブロックが散漫に分布し棺の埋め戻し土に混入したものとみられる。棺部とその周囲の埋め戻し土との分別はできなかったが，木棺直葬と考えられる。埋葬人骨・副葬品は検出されなかった。

出土遺物は全体に少なく，周溝内からは１の高台付きの土師器坏の底部片と，２の土師器坏の底部片が出土している。１は内面に黒色処理がなされている。共に後世の混入である。

０６４（第111図，図版23）〈10Eグリッド〉

調査区の南側台地上の南端に近く位置する方墳で，東側10mには先述の063方墳が位置し，両者は何らかの関連を持って構築されたものとみられる。063に比して規模はかなり小振りで外径約６m前後と約半分の規模で，方向はほぼ東西・南北方向に向き同方向である。調査開始時には墳丘の存在は認識されず，表土除去の際に周溝が廻る遺構と認識され，その後古墳と判断された。

周溝は四周し周溝内側の内径は南北5.9m～6.1m，東西6.5m～6.7mとわずかに東西方向に長い正方形状



第111図　064方墳

である。周溝の幅は東側がやや狭く0.5mで，西側のやや広い部分で0.7mほどである。掘り込みの深さは非常に浅く約0.3m，覆土は自然堆積の状態を示し，周溝底は平坦である。

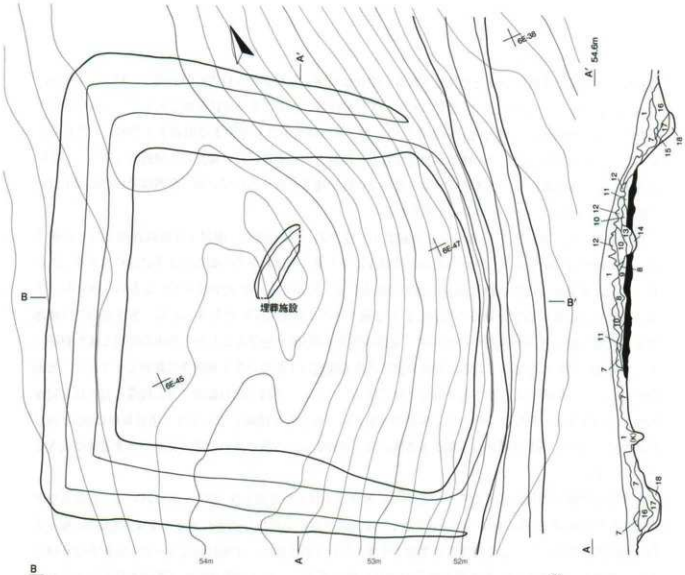
周溝内側には埋葬施設などの遺構は何も検出されず，本来構築されなかったか，当初墳丘の上位に構築されたものが削平されて消滅した可能性がある。

遺物は１・２の土師器高坏の脚部片が検出され，１は周溝西側覆土中，２は周溝南側覆土中の検出である。ともに外面に赤彩が施される。

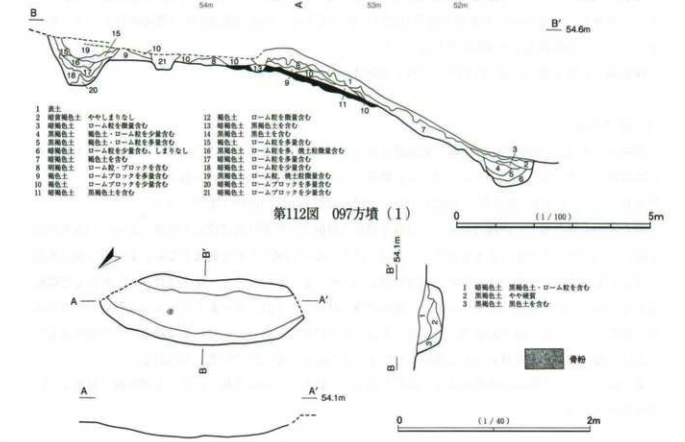
０９７（第112・113図，第10表，図版23・24）〈6Eグリッド〉

南北両調査区の間の痩せ尾根上鞍部の東向き斜面に位置する古墳で，現況では台地平坦部ではなく東向きの傾斜面に位置しておりやや特異な存在である。調査開始時にわずかに盛土状の高まりが確認され，詳細な地表観察により周溝とみられるわずかな窪みがみられ，それにより方墳を想定して調査を実施した。見かけより比較的平坦な地形が墳丘下に存在し，３方向に周溝が廻りほぼ中央に埋葬施設が検出されたことから，わずかに墳丘を遺存する方墳と判断された。東側には奈良・平安時代以降の098溝が存在し，位置的には本来の古墳周溝東辺に該当する位置に所在することから，本古墳の墳丘・周溝の存在を認識したうえで098溝が掘り込まれていることがうかがわれる。古墳の墳丘規模は先述の063とほぼ同規模とみられる。掘り込みの方向もほかの２基と異なり東西・南北方向とは傾き，Ｎ－35°－Ｅの方向に主軸を持つが，自然地形の傾斜に沿って周溝が平行・直交するように方向を定めて構築したものとみられる。

遺構東側が現在では斜面になり，周溝の東辺も谷下へ向かって下るため存在せず，降水・流水によって



第112図　097方墳（1）



第113図　097方墳（2）

浸食されて現在の状態になったと判断される。墳丘は周囲よりわずかに最大約0.6m高く，径は南北６m，東西４mほど確認され斜面方向へ盛土の流出が考えられる。盛土は小単位に分類されるローム層と黒色土を含む土層で構成され，最大約0.3m遺存していた。東の傾斜面にも途中まで旧表土とその上の墳丘盛土が遺存し，傾斜面を意識しての構築が想定される。南北方向の平坦に近い部分の土層断面でみると，特に北側墳丘端から周溝へはテラス状の平場を設けずに直接周溝を掘り込んでいる。南側は墳丘が周溝手前から消滅し２mほどのテラス状の平場がみられる。

周溝西辺はしっかりと深く掘り込まれ幅２m，深さ約1.2mを測る。南辺・北辺は西辺と同様に続くが，地形の傾斜が始まるあたりから周溝の外側線は変えずに内側線が外へ膨らむように認められることから，本来は直線的な内側の掘り込みが地山の流出によって消失し，形状が乱れているものとみられ，本来はほぼ正方形状に周溝を地形の傾斜に応じて掘り込んで構築していたとみられる。東西方向では確認できる周溝の掘り込みは西辺だけであり，東側は後世の098溝が延びることから地山の流出と溝の掘削によって東辺は失われたとみられる。周溝の掘り込みも溝底は平坦ではなく東向きに傾斜して下がり，地表の傾斜に応じて周溝をある深さまで掘り下げて構築している。東西方向の確認できた周溝の長さは北辺が9.0m，南辺が10.0mである。その先は現在の地山と同一面化して消滅してしまう。墳丘規模は063とほぼ同規模であるが，周溝の掘り込み幅が本遺構のほうが幅広で，古墳を眺めた際の見かけは本遺構が大きくみえたであろう。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央からやや北寄りに掘り込まれ主軸方向をＮ－55°－Ｅに向ける。形状はやや歪んだ長楕円形で主軸長2.1m，幅0.6mである。墳丘盛土途中から掘り込まれ旧表土を深さ約0.35m掘り込む。木棺直葬であったらしく周囲には黒色土を多く含む土層が廻り，中央は褐色土・ローム粒を含む層になる。埋葬施設中央のやや北東側に骨紛の認められる径７㎝～８㎝の部分があり埋葬人骨片とみられるが，それ以外の副葬品などは検出されなかった。

埋葬施設の項で述べた人骨片以外には出土遺物はない。

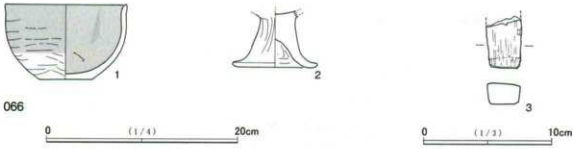
３　溝状遺構

調査区の南側の台地南端で平坦部と斜面部を区切るように延びる溝をここでは取り上げる。出土遺物が古墳時代のものであるので，ここでは一応古墳時代の溝として全測図中でのみ取り上げる。

０６６（第71・114図，第７表，図版24・41）〈９Ｂ・10Ｂ・10Ｃ・10Ｄ・11Ｄグリッド〉

調査区の南側台地上の南端に位置し，台地平坦部と斜面との境界付近に位置する溝である。台地平坦部と斜面との区画の溝であるかも知れない。西端では浅くなり消滅する形で終端となる。東端も台地斜面部へ連なり消滅する。全長は約105mで，幅は1.0m～1.5m，深さは約0.5mで，覆土はローム土を含んだ暗褐色土を主体とし自然流入土が主体である。溝底にみられる層の土は，ローム土を多く含み埋め戻された状態が観察されている。溝の断面はほぼ皿状・もしくは逆台形で，場所により底部は段を持って掘り込まれており，複数回にわたる埋め戻しと掘り直しによる溝の改修がなされているとみられる。

溝の覆土中から土師器の赤彩の鉢１，高坏の脚部２，砥石３が検出されている。１は内面・外面上半に赤彩がみられる。



第114図　066溝状遺構出土遺物

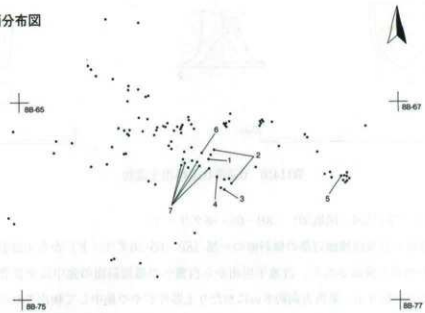
4　遺物集中地点（第115図，図版50）〈8B－65・66グリッド〉

調査区の南側台地の台地西側縁辺部の傾斜面の一部（8B－65･66グリッド）から土師器を主とし須恵器を含む土器の集中地点が検出された。台地平坦面から西側への緩傾斜面の途中に土器群の集中出土した部分があり，南北方向約４m，東西方向約８mにわたり土器片がやや集中して検出された。破片が主体であるがその点数は108点で，接合の結果図示できたのは７点である。台地上の後期集落の時期とほぼ同様で，集落は西側の斜面に対して環状に取り巻くような遺構の配置状況から，集落からの廃棄物として土器を西側の谷の斜面に廃棄したものとみられる。垂直分布では傾斜面に対して，ほぼ同一面上に平面的に散乱するような分布をしている。須恵器は小破片で図示できるようなものはなく，土師器の坏１，高坏１，高坏の坏部１，脚部１，甕１，小型甕１，椀１の計７点である。坏１，高坏２～４は赤彩が施される。

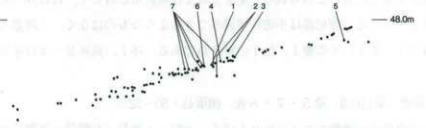
5　遺構外出土遺物（第116図，第５・７・８表，図版41・50～52）

遺構に伴わない古墳時代の遺物をここに取り上げる。土器・土製品・石製品・鉄製品があり，包含層からの出土である。１～３は土師器の土器で，１は高坏，２は赤彩の坏，３は赤彩の高坏脚部である。４は表採の土製小玉で径約８mm，５は表採の滑石製有孔円板で径約2.1cm，６～10は石製の砥石で６・８は砂岩製，７・９は凝灰岩製，10は粘板岩製である。11は鉄製品で袋状鉄斧である。全長6.3cm，幅4.8cm，厚みを増す刃部の上側を両端から折り曲げ袋状に着柄部を作出している。遺存状態は比較的良好で，刃部端に一部欠損がある。

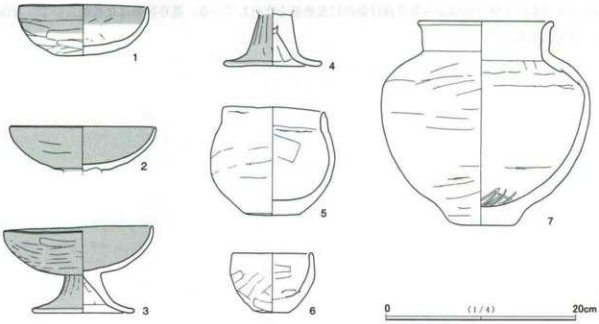
平面分布図



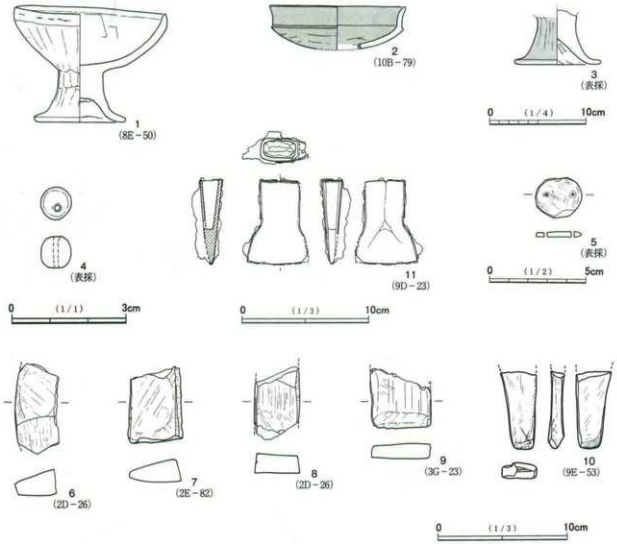
断面図



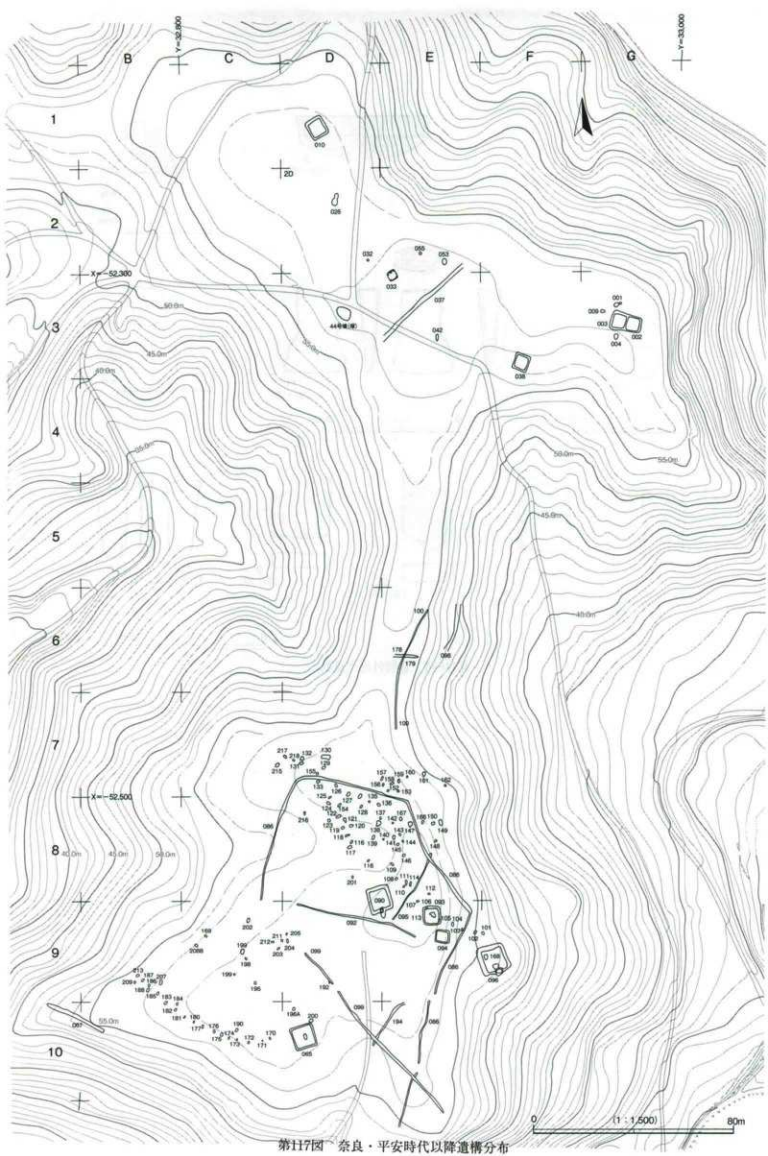
0 (1/80) 4m



第115図　遺物集中地点



第116図　遺構外出土遺物



第117図　奈良・平安時代以降遺構分布

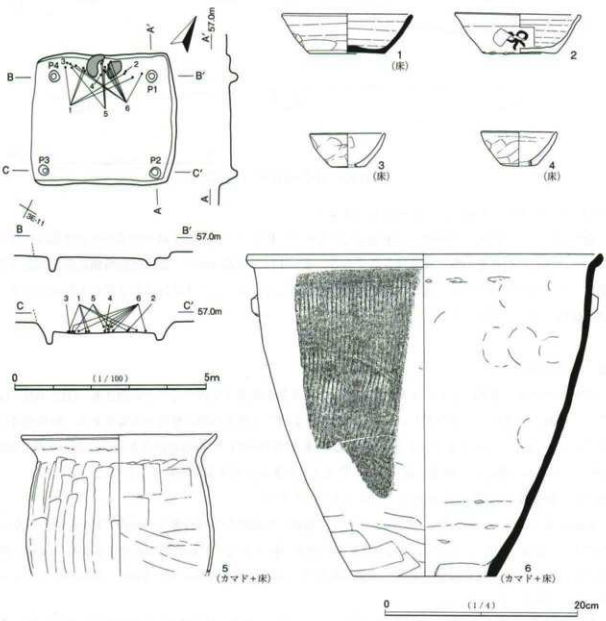
第３節　奈良・平安時代以降（第117図）

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居１軒，方形区画墓（奈良時代以降の方墳）が９基，地下式土坑２基が検出され，平安時代以降とみられる遺構は塚１基，溝状遺構10条，土坑が105基であった。

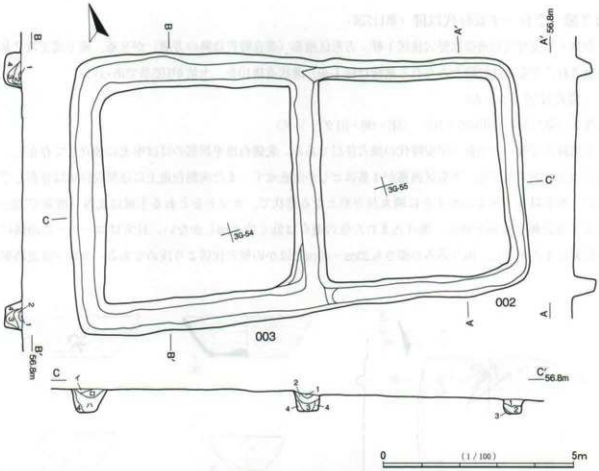
１　竪穴住居（第１表）

０３３（第118図，図版25・50）〈3E－00・01グリッド〉

本遺跡内で唯一の奈良・平安時代の竪穴住居である。北側台地平坦部のほぼ中央に独立して存在し，周囲には土坑が４基ほど，方形区画墓が４基ほどしか所在せず，また南側台地上には竪穴住居は存在していない。形態は正方形からわずかに隅丸長方形となる形状で，カマドをとおる主軸は北西－南東で3.2m，直交する長軸は3.8mを測る。掘り込まれた壁の遺存は低く約４cmしかない。柱穴はコーナーの四隅に近い位置に４本所在し，掘り込みの深さも20cm～40cmとほかの竪穴住居より浅めである。カマドは北西壁の



第118図　033竪穴住居



第119図　002・003方形区画墓

ほぼ中央に位置し，貯蔵穴・入口施設などはない。

遺物は，カマド内及びその周辺の床面近くに集中して出土している。1は須恵器の坏で底部はヘラケズリ，6は同じく須恵器の甑で底部は5孔である。2～4は土師器の坏で，2は体部外面に墨書の記号状の文字（判読不明）が書かれ，底部は回転糸切りがなされている。3・4はほぼ同法量の小振りの坏で，5は土師器の甕の上半部である。

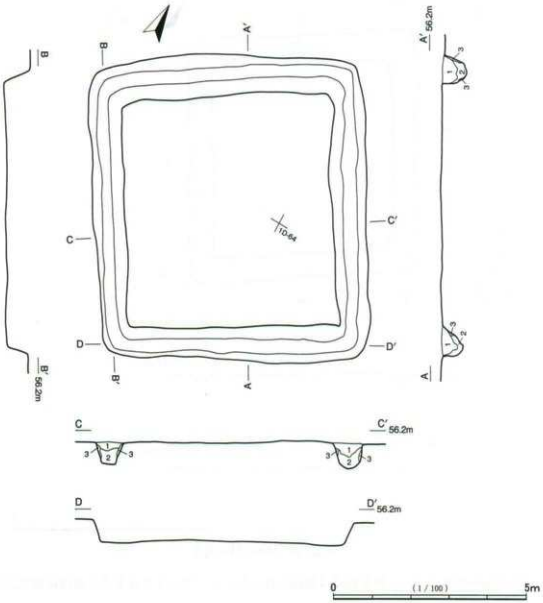
2　方形区画墓

方形区画墓は，北側台地上に4基，南側台地上に5基が散漫に位置する。その内2基（002・003）は隣接し，区画の周溝の一辺を共有している。同時期とおぼしき構築時期の想定が可能である。埋葬施設が検出されたのはその内の3基で，1基（065）は区画のほぼ中央に埋葬施設が存在し，ほかの2基（090・096）は周溝の一部から区画内に掘り込まれた地下式の横穴の埋葬施設を有するものである。

002・003（第119図，図版25）〈3G－33～65グリッド〉

北側台地平坦部の東縁に近いところに位置し，近隣には同様な遺構は無く，南西に約40m隔たったところに1基（038）所在するのみである。2基の区画墓が接する辺を共有して位置するもので，規模・形態はほぼ同様で，方向性も同様である。東側に位置するわずかに小規模なものを002，西側のわずかに大きめのものを003とした。

002は東側に位置し，方形に溝が4辺に廻らされ，その内西側の辺が隣接の003の東辺と共有している。形状はほぼ正方形に溝が廻り，南北方向長6.0m～6.2m，東西方向長6.0m～6.2mを測る。隣接する003の規



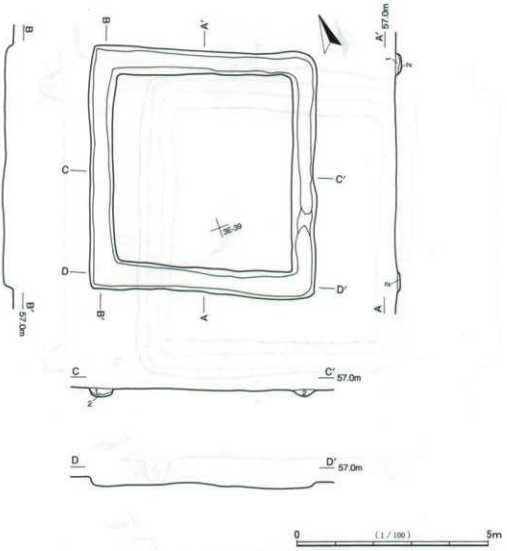
第120図　010方形区画墓

模がやや大きく，共有する辺は同じ辺長となっているので，西側にやや開き気味の正方形となる。共有する西辺の溝幅がやや広いほかは，ほぼ同規模の溝が掘り込まれ，幅0.5m，深さ約0.4m～0.5mの逆台形に掘り込まれている。底面はほぼ平坦で，覆土は自然堆積の状態を示す。区画内は平坦で埋葬施設・盛土などは確認されなかった。共有する溝の覆土状態の観察からは，差異が認められず同時期に埋没していったとみられる。構築も同時の可能性があるが，溝の掘り方の状態からはどちらかを先に構築したとは判断が付かない。図示できるような伴出遺物はない

003は，002の西側に位置し辺長は約6.8m～7.0mの正方形状に溝が廻る。溝幅は約0.7m～1.0mで，深さは0.6m～0.7mと002より規模がわずかに大きく，幅広で深く掘り込まれている。掘り込みの断面は逆台形状である。覆土は自然堆積の状態である。002同様に図示できるような伴出遺物はない。

０１０（第120図，図版25）〈1D－43～63グリッド〉

北側台地上の中央からやや北側に寄った所に単独で所在する方形区画墓である。形状はほぼ正方形状に間断なく溝が廻るもので，南北方向が7.8m，東西方向が7.2mを測り，掘り込みの深さは約0.7mである。



第121図　038方形区画墓

覆土は自然堆積の状態を示し，埋葬施設は検出されなかった。図示できるような遺物は検出されなかった。

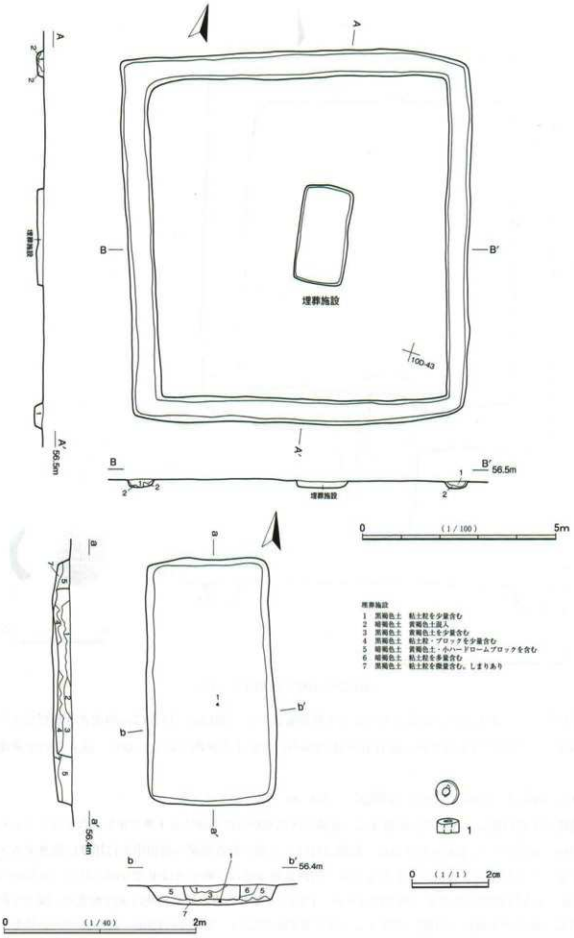
０３８（第121図，図版25）〈3E－18～39グリッド〉

北側台地の中央やや南寄りに単独で存在する方形区画墓である。形状はほぼ正方形に溝が廻り，南北方向6.2m，東西方向5.9mを測る。掘り込みは浅く，遺存は悪い。深さは約0.2mと浅いため，掘り込みも不良で，断面は浅い皿状断面となっている。覆土は自然堆積の状態を示し，南東辺中央からわずかに南に向かった部分の底面がわずかに高く（５cm程度）なっているが，意図的に高めに掘り残されとも言い難い。埋葬施設は検出されず，図示できるような遺物もなかった。

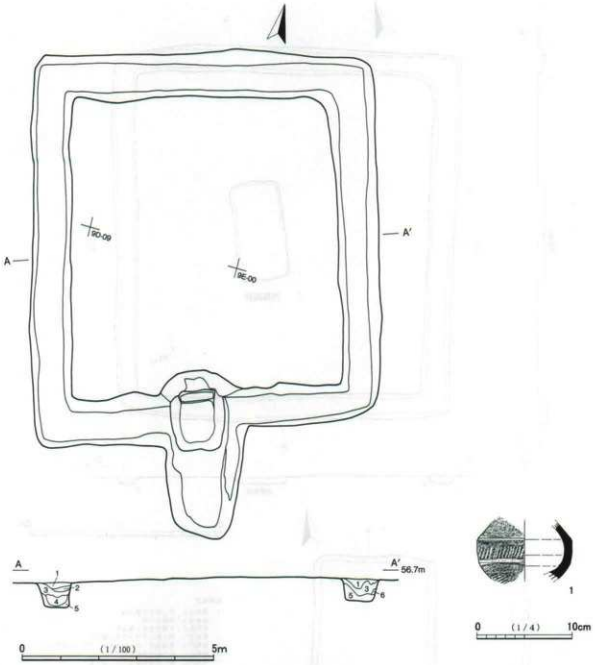
０６５（第122図，第７表，図版25・51）〈10D－20～43グリッド〉

遺跡の南側台地の南端に近い部分に位置している。遺跡の中ではやや規模が大きめな区画墓で，形状はほぼ正方形，南北長9.4m，東西長9.0mを測る。区画の溝の幅は，約0.6m～0.7m，掘り込みの深さは約0.2mと浅い。覆土は自然堆積の状態で区画溝の内側には盛土などの遺存は認められなかったが，ほぼ中央部に南北方向を軸に埋葬施設が１基検出された。

埋葬施設は区画のほぼ中央に溝とはやや主軸を異にして（ほぼ南北）１基所在し，長軸長2.5m，短軸長1.4mを測る。区画溝と同様に掘り込みの遺存はあまり良くなく，深さ0.2m～0.25mほどである。覆土の



第122図　065方形区画墓

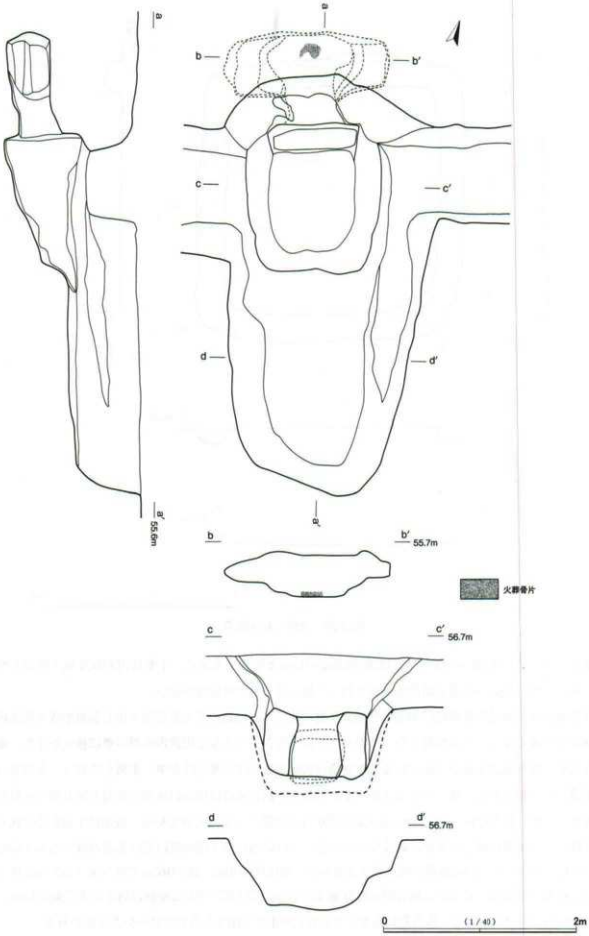


第123図 090方形区画墓（1）

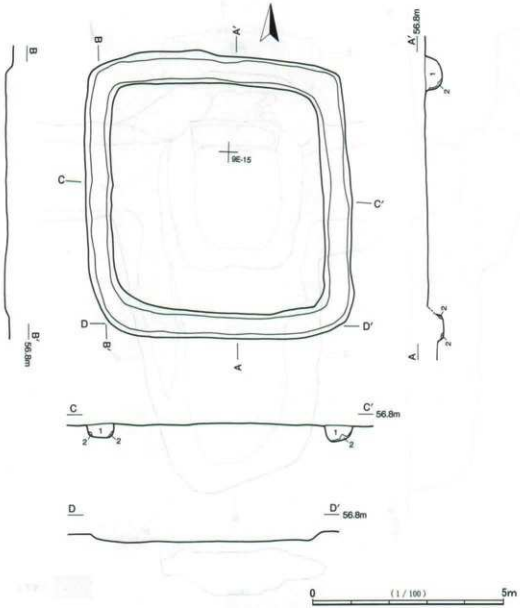
観察によると，中央部分に棺部とみられる土層が確認され，幅0.6m，長さ1.7mの大きさが想定される。ほぼ中央の棺底に当る深さから滑石製の径5.9㎜の白玉が1点検出されているが，混入品の可能性が高い。

０９０（第123・124図，第10表，図版26）〈8D－88～9E－10グリッド〉

遺跡の南側台地のほぼ中央に位置する。近隣に区画墓が東西方向に計4基存在し一群をなしているが，その中で西端に当たる区画墓である。形態はほぼ正方形に廻る周溝の南辺中央に埋葬に関連するとみられる掘り込まれた地下施設が存在している。周囲を廻る溝は主軸をほぼ南北方向に向け，南北長9.5m～10.0m，東西長約9.0mを測る。周溝幅は1.0m～1.3mで，掘り込みの断面形状は逆台形状で，深さは約0.7mである。南辺の中央には外側へ突出するように基部幅で2.3m，先端で約1.3m，長さ最大2.9mほど，深さ0.7m～0.8mの張り出しの掘り込みがみられ，そこから周溝内側の中心に向かって埋葬施設の掘り込みが



第124図　090方形区画墓（2）

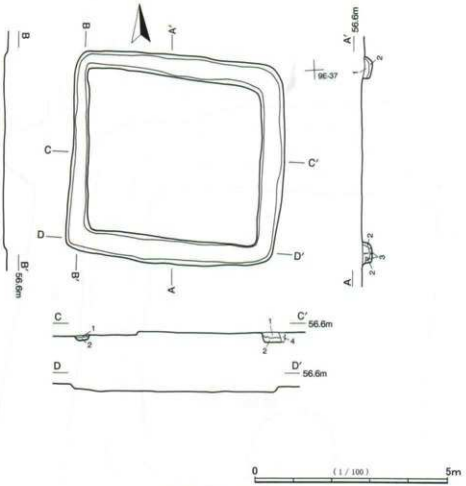


第125図　093方形区画墓

構築されている。外側への張り出しは深さ0.8m～0.9mと周溝より深く，不整楕円形状で底・壁はやや凹凸があり，埋葬施設への進入路的な機能を持って掘り込まれた可能性が強い。

埋葬施設は，南辺周溝のほぼ中央の底部より更に深く，約1.5mの正方形で張り出し部側が浅く周溝内側に向かって深くなるように傾斜を持って掘り込まれ，突き当りとなる周溝内面側の壁に横穴を穿ち，地下に長方形の埋葬施設を掘り込んでいる。埋葬施設底面中央には火葬骨片が少し集積しており，火葬墓の納骨施設として掘られた土坑であることがうかがわれる。納骨施設は周溝の南辺の方向と同方向で平行に長く掘り込まれ，長さ1.8m，幅0.65m，最大高さ約0.5mの空間として造られている。底面は中央がやや低く両側は段を持って２回ほどわずかに高くなっている。入口に当たる土坑の開口部は手前の掘り込み土坑底部から１段，高さにして約0.2m高い所に掘り込まれる。開口径横0.9m，高さ0.65mで奥へ深さ約0.4mを狭くなりながら掘り込まれ，そこから納骨用の埋葬施設に至る。開口部に当たる壁面は外からみて幅約1.0m，高さ0.8mにわたりほぼ平坦で，残存物はなかったが板状の用具で閉塞したのではないかと思われる。

出土遺物は，先述の地下式の埋葬施設から火葬人骨片が検出された。周溝覆土内から須恵器の甕の小破



第126図　094方形区画墓

片が検出されたが，集落からの混入品であろう。

０９３（第125図，図版26）〈9E－04～25グリッド〉

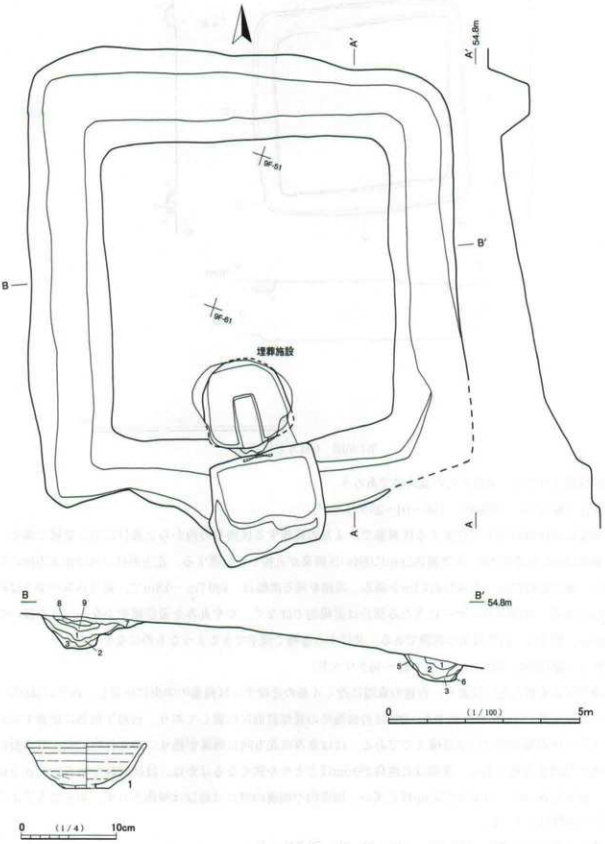
調査区の南側台地上に位置する区画墓で，４基の群集する区画墓の西から２基目に当る遺構である。西側約12mに先述の090，南東側約2.0mに094の区画墓が近接して位置する。正方形状でほぼ南北方向に位置し，南北長約7.3m，東西長約7.1mを測る。周囲を廻る溝幅は，約0.7m～0.8mで，掘り込みの深さは約0.5mである。四隅のコーナーに当たる部分は直線的ではなく，やや丸みを帯び緩やかなカーブを描いて曲がる。覆土は，自然堆積の状態である。共伴する遺物で図示できるようなものはなかった。

０９４（第126図，図版26）〈9E－25～46グリッド〉

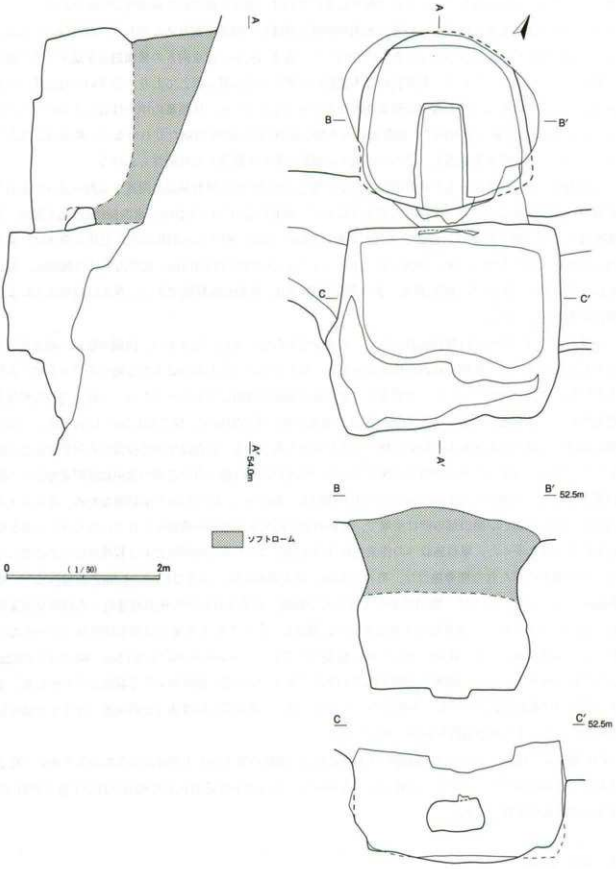
調査区の南側台地に位置し，台地の東端に近く４基の近接する区画墓の中央に位置し，西北には093，東にはやや隔てて096が所在する。096は台地端部の緩傾斜面に位置しており，台地平坦部に位置するのは４基の区画墓の内では本遺構までである。ほぼ東西南北方向に周溝が廻り，南北長約5.3m，東西長約5.6mのほぼ正方形である。溝幅は北西角が0.5mほどとやや狭くなるほかは，ほぼ同様な幅で約0.7mを測る。掘り込みの深さは最大で0.3m程と浅い。周溝内や周溝内側には施設は検出されず，図示できるような伴出遺物はなかった。

０９６（第127・128図，図版26）〈9E－49～9F－72グリッド〉

調査区の南側台地の東端，台地上の平坦面ではなく南東に下る緩傾斜面の途中に所在する区画墓で，南北方向の標高差は約3.0m，東西方向の標高差は約1.5mで，最高点の北西角と最低位の南東角では標高差が約4.0mもある。南向き緩斜面に位置している。周溝の掘り込み面ももちろん水平ではなく，周溝底面



第127図　096方形区画墓（1）



第128図　096方形区画墓（2）

も水平ではなく地山の傾斜に近い傾斜で掘り込まれており，周溝が最低位の南東端で外縁が消滅しているほかは，ほぼ正方形状に四周している。地山の傾斜を意識して周溝を掘り込んでおり，台地端部の浸食によって傾斜面に位置するようになったものではなく，構築当初から南東向きの緩傾斜面を選んでその端部に構築されたものとみられる。緩傾斜面は本遺構の位置から急傾斜に転じており，そういった意味では台地平坦面から連続する部分の端部に構築されたということはできる。区画墓の中では最も大規模で，古墳時代の063方墳に匹敵する規模で，位置的にも方墳の北東約30m程度の隔たりしかなく，構築時に既存の墳丘を持つ古墳の存在を意識し，それに匹敵する規模のものを構築した可能性もあろう。

平面形は，ほぼ周溝が正方形状に四周するが，南辺はほぼ中央に埋葬施設に関連する掘り込みがあるため外側へ少し突出している。突出した部分を除いて，南北長約11.5m～12.0m，東西長約11.5mを測る。周溝幅は広く深く掘り込まれ，確認できた上端幅は1.5m～3.0m，掘り込み形状は逆台形状で深さは，南東角では地山の下り勾配のため，外側では遺存していないが内側では約0.3m，北西角では内側0.6m，外側0.2m，北東角では内外共に0.7m程度，南西角は内側0.8m，外側0.2m程度である。覆土は自然流入による埋没状態を示している。

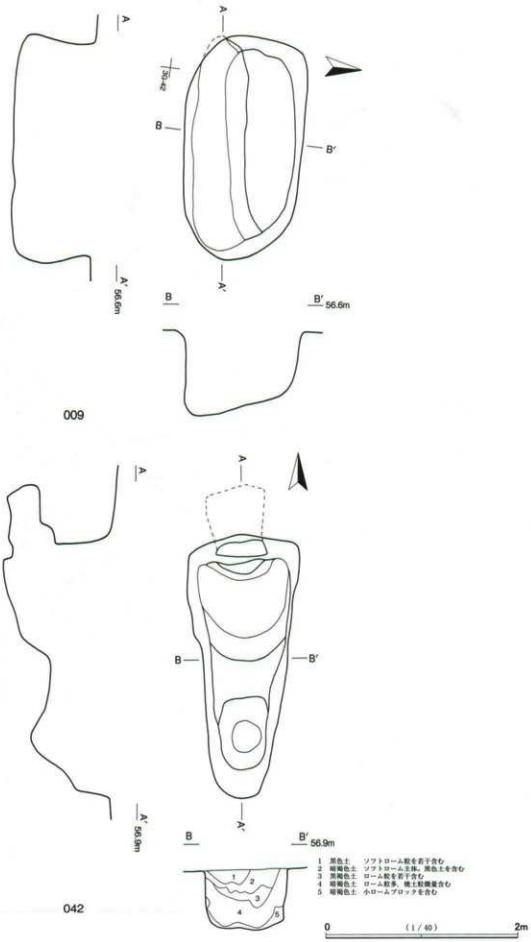
周溝南辺のほぼ中央には埋葬施設があり，周溝中央から更に方形に掘り下げ，内側の壁面に納骨施設とみられる地下式の横穴状掘り込みが検出されたが，地下式施設の天井部分にあたる地山のソフトローム層土が円形に崩落し埋没していた。空間として地下式の施設は検出できなかったため，一部は当初の形状を想定復元しての記述となる。方形の竪坑部は，南北2.5m，東西3.0mで，深さは1.2m～1.5mと深く，南西側に傾斜した段差があり進入のために掘り下げたものとみられる。底面は平坦で接続する埋葬用施設の前室として祭祀・作業のための空間を確保している。竪坑の周溝内側に当たる壁の途中には埋葬施設への開口部が穿たれ，底面から約0.5mの高さから上に開口し，幅0.75m，高さ0.4mと小規模なため，成人が入り込むには非常に狭い。開口部の壁は平端で，板状の物で閉塞するための構築がされていたとみられるが残存するものはなかった。埋葬施設への作業を行うには前室に当たる方形竪坑にある程度の広さが必要となる。開口部から穿たれた埋葬施設は，奥行き2.5m，最大横幅2.3m，高さは1.2m～1.3mと比較的広い。埋葬施設の内部の広さからは，開口部から入り込んで掘削・構築を行いその後の埋葬時にも同様な作業を行ったものとみられる。埋葬部は天井部が完全に崩落していたため天井部の詳細な状態はうかがえないが，底面は開口部から下に0.4m下がった所に構築されている。底面の中央は長さ1.5m，幅0.7mで約0.2mに1段低く掘り下げられ，周囲が逆凹字状に1段高くなり，横穴墓の棺座のような状況がうかがわれ，まさに遺体の埋葬施設にふさわしい形状がみてとれる。但し，調査時には遺体などの痕跡・骨片などは検出されなかった。また埋納遺物も検出されなかった。

出土遺物は，図示できたのは土師器の坏1点である。遺構の覆土内出土が確認できたが出土地点・高さは不明で遺構内出土ということしか確認できなかった。後述の本遺構墳丘下で検出された土坑（168）の坏とほぼ同様な遺物でである。

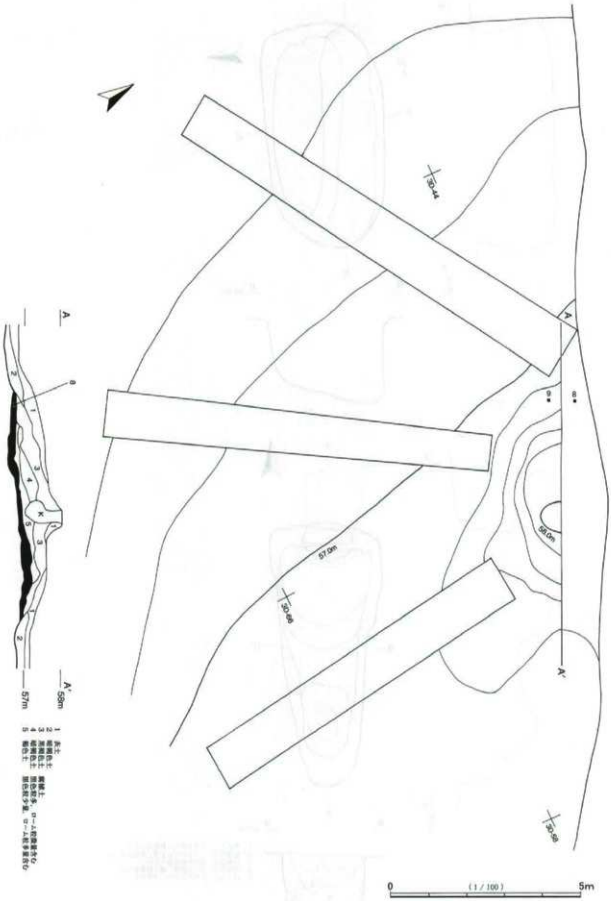
3　地下式土坑

009（第129図，第4表）〈3G－31・32グリッド〉

調査区の北側台地上の東側に位置する遺構で，東に隣接して同時期の先述の002・003方形区画墓が存在する。002・003は埋葬施設が検出されなかったが，本遺構は横口式の地下式土坑で古墳時代以来の埋葬用


A
A'
56.6m
B
B'
56.6m
30.4z
009
A
A'
56.9m
B
B'
56.9m
042
1 黒色土　ソフトローム粒を若干含む
2 暗褐色土　ソフトローム主体。黒色土を含む
3 黒褐色土　ローム粒を若干含む
4 暗褐色土　ローム粒多、焼土粒微量含む
5 暗褐色土　小ロームブロックを含む
0
(1/40)
2m

第129図　地下式土坑



第130図　草刈44号墳（塚）

の土坑の一類型であり，本台地上でも方形区画墓での埋葬のほか土坑による埋葬も行われたことがうかがえる。形状は長楕円形で，開口部径は東西方向に長く2.3m，南北は1.3mを測るが，天井部は本来オーバーハングしていたものが崩落しており，当初の開口規模を示しているとはいえない。覆土は開口部の北側から一気に埋没した状態を示している。本来の南側の壁はもう少し内側で狭く南北長は１m前後だったものと思われる。開口部の底径は東西1.85m，南北0.55mほどである。北側から南に向かって埋葬施設に入り込んで埋葬するように構築されており，開口部の深さは0.7m～0.85mで南にわずかに段を持ち埋葬部に至る。埋葬部は開口部よりわずかに規模が大きく，底面規模は東西方向2.2m，南北方向0.4mを測る。埋葬部に遺体を埋葬したとみられる。

出土遺物は遺体を含めてなかった。

０４２（第129図，第４表，図版27）〈3E－55・56グリッド〉

調査区の北側台地上のほぼ中心に単独で所在する埋葬遺構で，ほぼ南北方向に主軸をおいて構築されている。入り口部の長さは南北長2.7m，東西長1.2mの不整長楕円形で，底面は２段階に掘り込まれ南側と北側に分かれる。南側は深さ0.8mで底面は円形状で北側に一旦0.3mほど高くなり，再び深く1.1mの深さに掘り込まれ北端の壁に穿たれた小横穴の掘り込みに至る。小横穴は底面から上に0.1mの位置から上側に高さ0.5mに掘り込まれ，開口部幅0.55mである。小横穴の奥行きは約0.7mで四角いトンネル状に掘り込まれる。底面はほぼ平坦で開口部壁面は何らかの板材などで閉塞するために平坦に仕上げられていたようである。

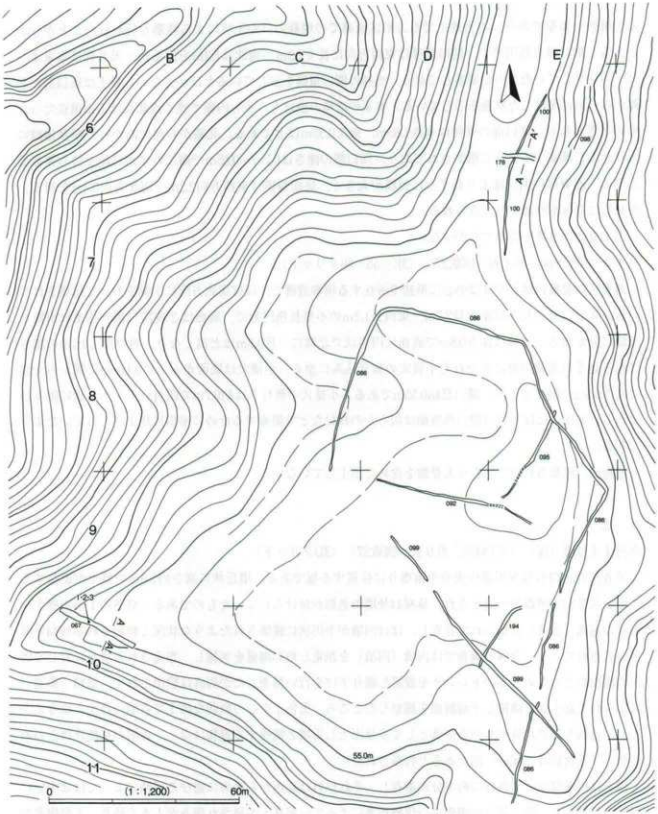
遺物は，埋葬されたであろう人骨類を含めて出土していない。

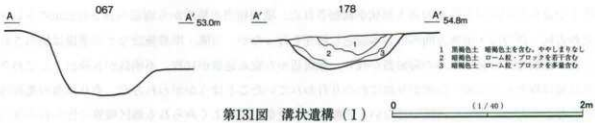
４　塚

草刈４４号墳（塚）（第130図，第９表，図版27）〈3Dグリッド〉

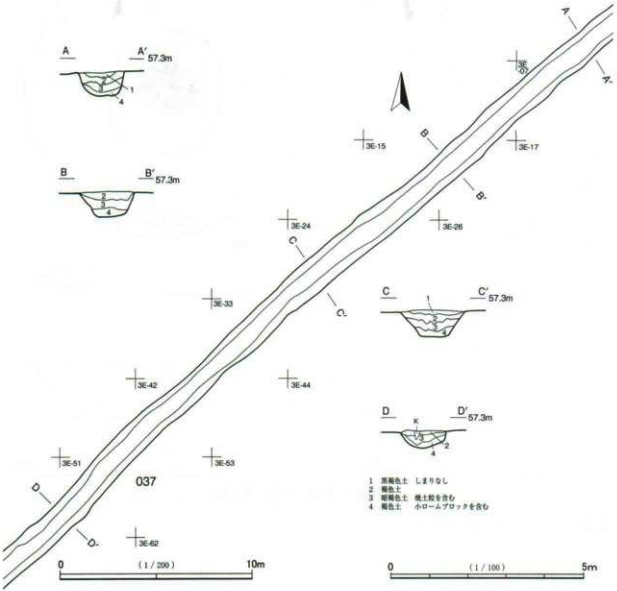
調査区の北側台地平坦部中央やや南寄りに位置する塚である。墳丘状に高さ約1.0mの盛土が遺存することから草刈古墳群の一部とされ，草刈44号墳の名称が付けられていたものである。高さ約１mの盛土が旧来の道路（農道）に切られて存在し，ほぼ円墳が半円状に破壊されたような状況と判断され草刈44号墳と命名されていた。今回の調査では古墳（円墳）を想定し地形測量を実施し，想定される墳丘に対して周溝の検出などのため３本のトレンチを設定し掘り下げを行い精査したが周溝は検出されず，道路（農道）に切られた盛土面を清掃し土層断面を観察したところ，黒色土中心の軟弱な盛土で古墳の盛土とは考えがたく，遺物も近世以降のものを主体として少量出土し古墳と関連する遺物はなく，古墳の可能性はきわめて低く，近世以降の塚の一部であると判断された。

盛土は円形部分の南西側の約半分が遺存し，それ以外は北西から南東に延びる道路によってほぼ半分に掘削されている。盛土頂には調査前の伐根作業によって一部盛土が崩され窪みが大きく残り，大型樹木の生育していたことがうかがわれた。最高点は標高約58mで周囲との比高差は約1.0mである。やや南西方向に盛土が流れるがほぼ半円形の盛土形状が観察された。墳頂相当の場所から周辺へ長さ約12mのトレンチを北西方向・西方向・南西方向への３本設定し精査を行ったが，周溝・埋葬施設などの遺構は検出されなかった。塚周辺には幕末以降の陶磁器が残り，塚周辺から寛永通寶が16枚，不明銭が５枚出土しており，近世以降は塚として信仰・祭祀が長期にわたり行われていたことはうかがわれるが，それ以前の遺物は検出されなかったことからも古墳ではないと判断した。近世以降によくみられる地区境界に作られる塚とし

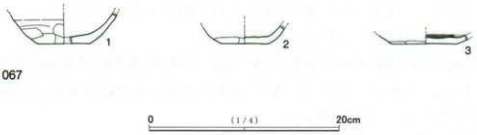

B
C
D
E
6
7
8
9
10
11
A
A'
100
178
096
095
092
099
194
067
55.0m
0
(1:1,200)
60m


A
A' 53.0m
067
A'
178
A' 54.8m
1
2
3
1 黒褐色土 暗褐色土を含む、ややしまりなし
2 暗褐色土 ローム粒・ブロックを若干含む
3 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多量含む
0
(1/40)
2m

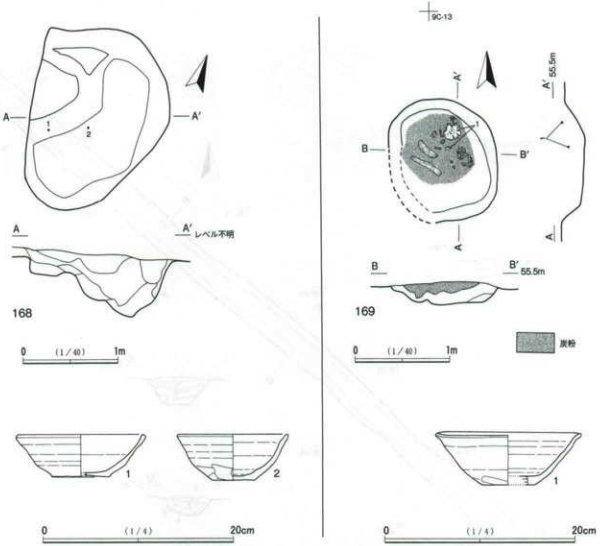
第131図 溝状遺構（1）



第132図 溝状遺構（2）



第133図 溝状遺構出土遺物



第134図　奈良・平安時代土坑

て機能したものとみられる。

5　溝状遺構

奈良・平安時代以降の溝状遺構を取り上げる。溝の中では明らかに時期の判明するものは各時期の項で取り上げたが（古墳時代066溝），時期不明のものもありここで奈良・平安時代の溝と共に一括して取り上げる。調査区北側では１条の検出にとどまり，南側台地では９条検出されている。南側台地では方形区画墓の存在と関連のありそうな分布の状況が086・092・095の一部でうかがわれ，方形区画墓を囲むような五角形の土地区画に関連するものとなりそうである。

全体図中に掲載することを原則とし，個々の溝としては掲載しないこととする。

０３７（第131・132図，図版27）〈2E－97～3E－60グリッド〉

調査区北側台地上の中央部に北東から南西に向かってほぼ直線的に延びる長さ約40mの溝である。両端は台地途中で浅くなり検出できなくなってしまう。溝幅は約1.5m，深さは約0.7mで，覆土は自然堆積状態である。遺物の出土はなく，時期不明である。

０６７（第131図）〈10A－06～10B－32グリッド〉

調査区の南側台地上西端に位置し，台地平坦部と斜面との境界となるような溝である。長さは約27mで，幅1.2m，深さ0.7m程である。覆土中より土師器の坏が３点検出され奈良・平安時代の溝とみられる。

０８６（第131図）〈8C－09～7D－81～7E－90～9E－98～10E－93グリッド〉

調査区の南側台地の一部を囲うように連続して延びる溝で，一定の区画を形成している。溝は台地平坦部南端から始まる。ほぼ北へ直線的に延び，途中一部断続しながら長さ68mほど延びる。そこからやや西に方向を転じ50m続く。その先はほぼ西に方向を変え約48m，続いてほぼ南に直角に向きを変え52mで台地西側端に近くまで延び，浅くなり消える。その近くから別の092溝が東方向に086の途中に近くまで延びる。092の東端近くから更に別の095溝が北行し32m延びて086の途中に交叉する。086としては総延長約250mで屈曲しながら土地を区画している。

以上のように，３本の溝で連続した一定の区画を構成するように囲繞している。囲まれた部分の形状は五角形で，東西最大65m，南北53mの範囲を囲い，その面積は3,000㎡強となる。上記の３本の溝は，時期を判断できる明瞭な遺物の出土がなく同一時期の溝である確証はないが，溝の廻る状況から土地の囲繞を目的として掘られたものと推察される。

０９２（第131図）〈8D－91～9D－29グリッド〉

調査区の南側台地上ほぼ中央を東西方向に延びる溝で，全長約52mを測る。先述の086溝と組み合わさり，五角形の土地を区画する溝を構成する一部となる。

０９５（第131図）〈8E－54～9E－21グリッド〉

調査区の南側台地上ほぼ東側に位置し，先述の086・092両溝と組み合わさり区画の溝を構成する。長さは約31mを測る。

０９８（第131図，図版24）〈6E－17～67グリッド〉

調査区の南北台地を分ける痩せ尾根の鞍部の東側斜面に位置する溝で，鞍部から東側の斜面にやや下った部分を鞍部と平行に約20m延びる溝である。

０９９（第131図）〈9D－42～11E－16グリッド〉

調査区の南側台地上，東南端から台地中央に向かって北西方向に延びる溝で，全長は約89mを測る。台地中央に近いところで一旦途切れ，再び出現し，台地のほぼ中央で消滅する。

１００（第131図）〈6E－24～7E－31グリッド〉

調査区の南北を分ける痩せ尾根の鞍部の東端を尾根上を平行に約50m延びる溝である。

１７８（第131図）〈6E－61～73グリッド〉

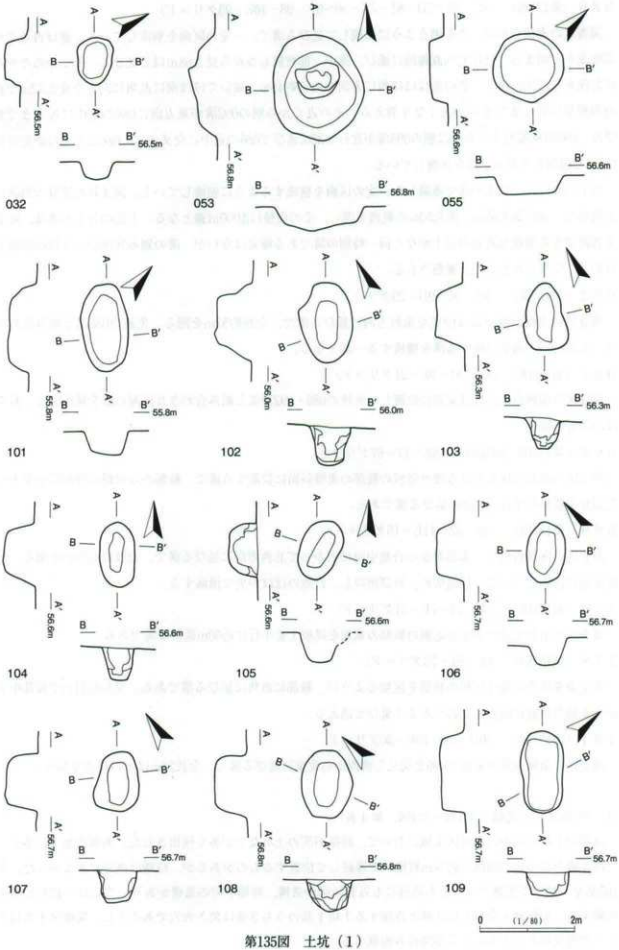
南北調査区間の痩せ尾根の鞍部を区切るように，鞍部に直角に延びる溝である。全長約11mで鞍部中央から東側の斜面に向かって落ちるよう延びて消える。

１９４（第131図）〈10D－29～10E－30グリッド〉

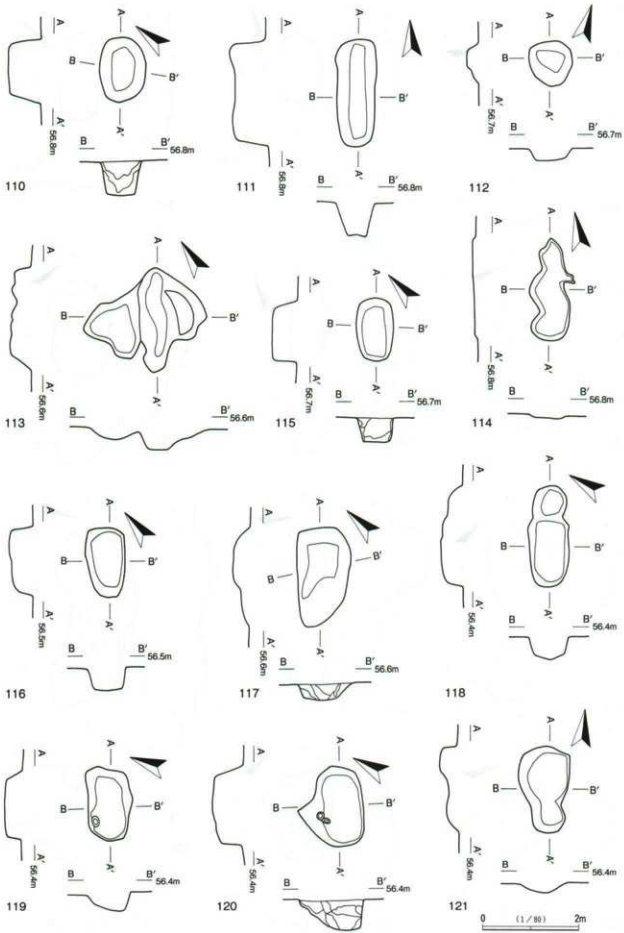
調査区の南側台地の東側で099と交叉し南西から北東に延びる溝で，全長24mほどの長さである。

６　そのほかの遺構（第134～144図，第４表）

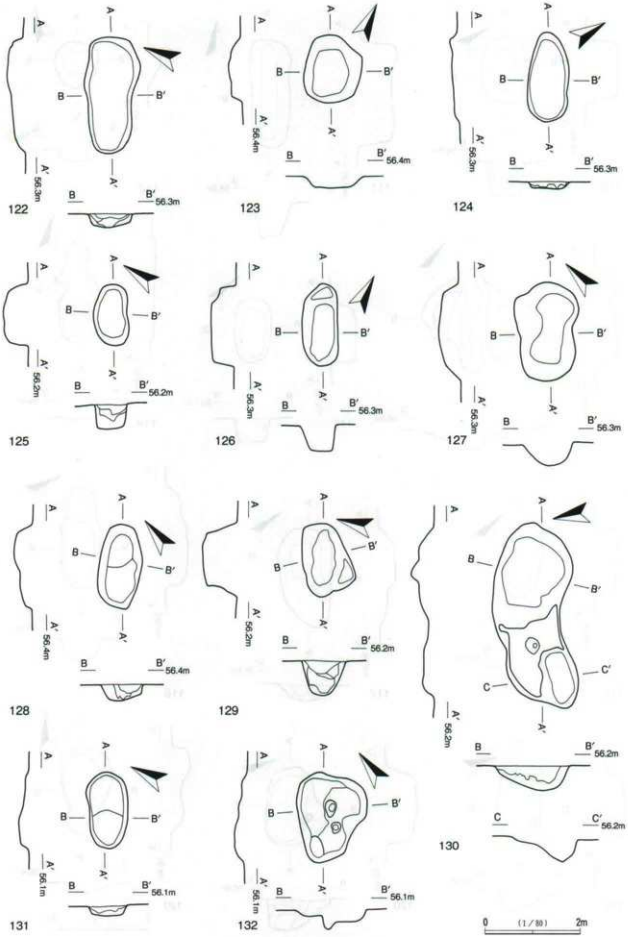
該期の土坑のほかに調査区全域において，時期不明の土坑などが多く検出された。南側台地上に多く，一部は線上に一定の間隔（約５m程度）で連続して位置するものがあるが，時期は決定できなかった。全105基を一括して掲載する。それ以外にも近世以降の遺構，時期不明の遺構があり，ここに一括して図を掲載する。炭化材を含む土坑３基と近接する土坑１基のうち３基は焚き火穴であろうし，炭焼窯１基は新しく近現代のものとみられるが図のみ掲載する。


032
A
A'
B
B'
56.5m
053
56.8m
055
56.6m
56.6m
101
55.8m
55.8m
102
56.0m
56.0m
103
56.3m
56.3m
104
56.6m
56.6m
105
56.6m
56.6m
106
56.7m
56.7m
107
56.7m
56.7m
108
56.8m
56.8m
109
56.7m
56.7m
0
(1/80)
2m

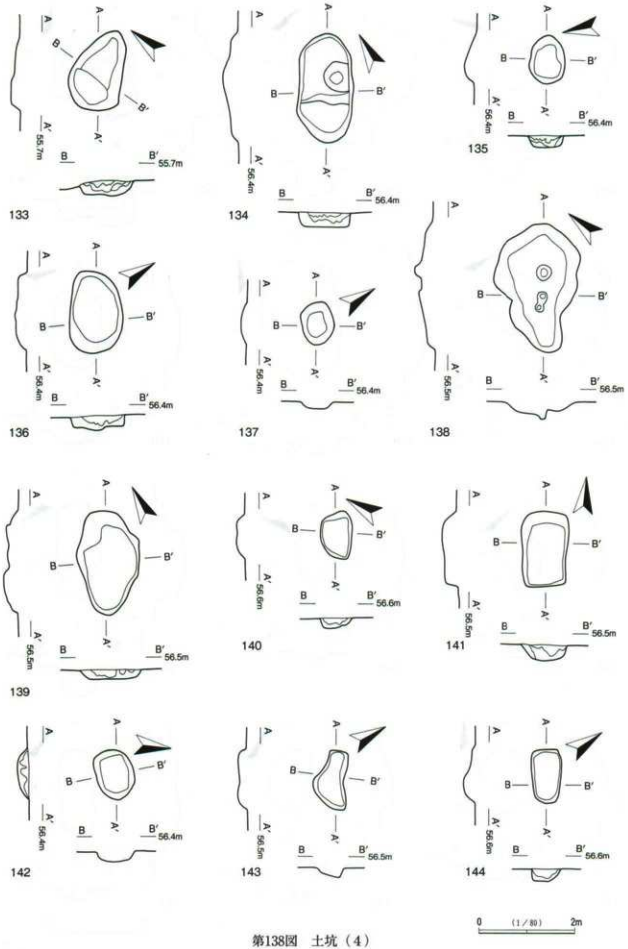
第135図　土坑（1）


110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
A
A′
B
B′
56.8m
56.7m
56.6m
56.5m
56.4m
0
(1/80)
2m

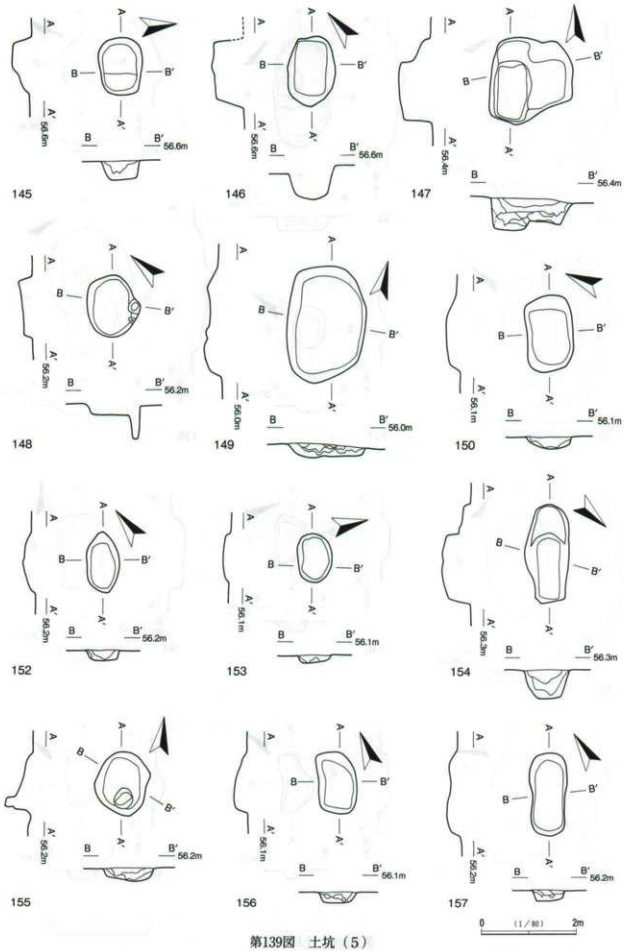
第136図　土坑（2）


122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
A
A′
B
B′
C
C′
56.3m
56.4m
56.2m
56.1m
0 (1/80) 2m

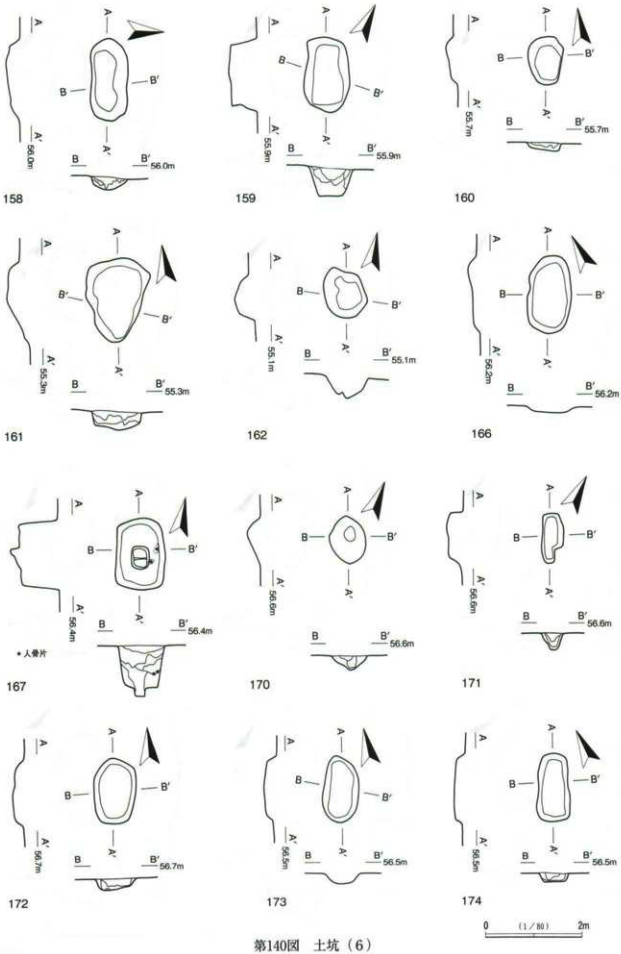
第137図　土坑（3）


133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
A
A′
B
B′
55.7m
56.4m
56.5m
56.6m
0
(1/80)
2m

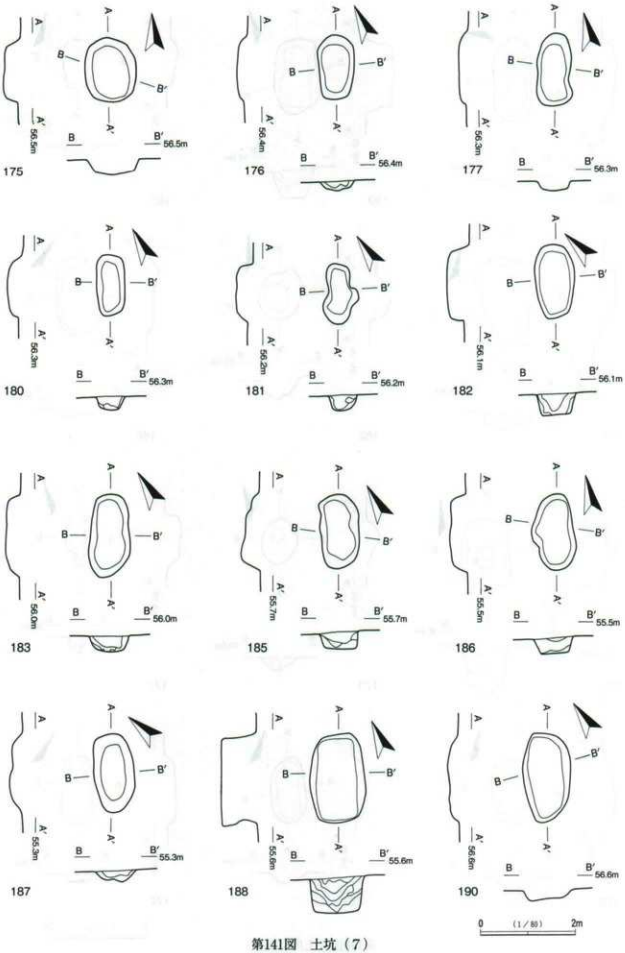
第138図　土坑（4）


145
146
147
148
149
150
152
153
154
155
156
157
A
A′
B
B′
56.6m
56.4m
56.2m
56.0m
56.1m
56.3m
0
(1/80)
2m

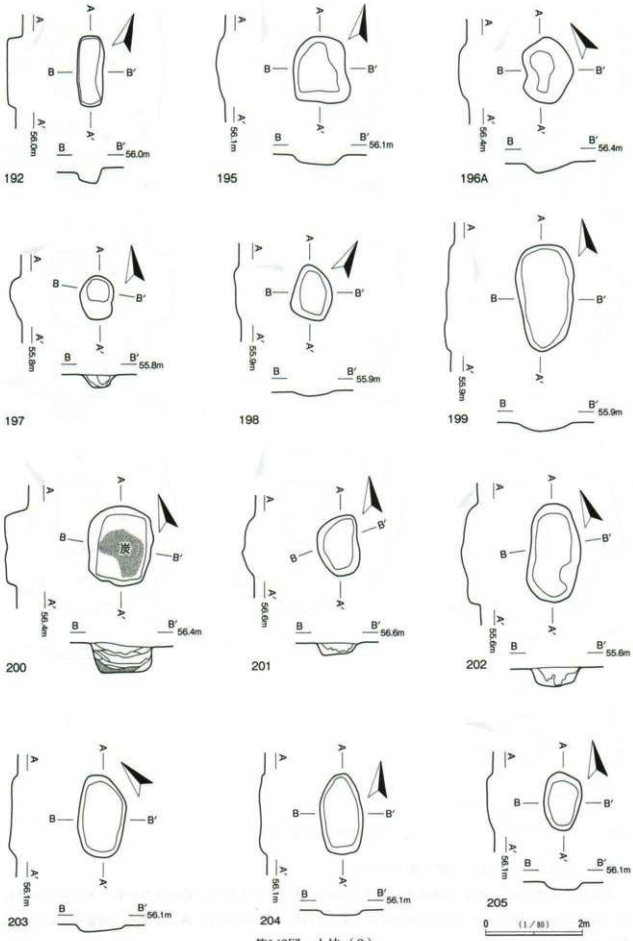
第139図　土坑（5）


158
159
160
161
162
166
167
170
171
172
173
174
A
A′
B
B′
56.0m
55.9m
55.7m
55.3m
55.1m
56.2m
56.4m
56.6m
56.7m
56.5m
* 人骨片
0
(1/80)
2m

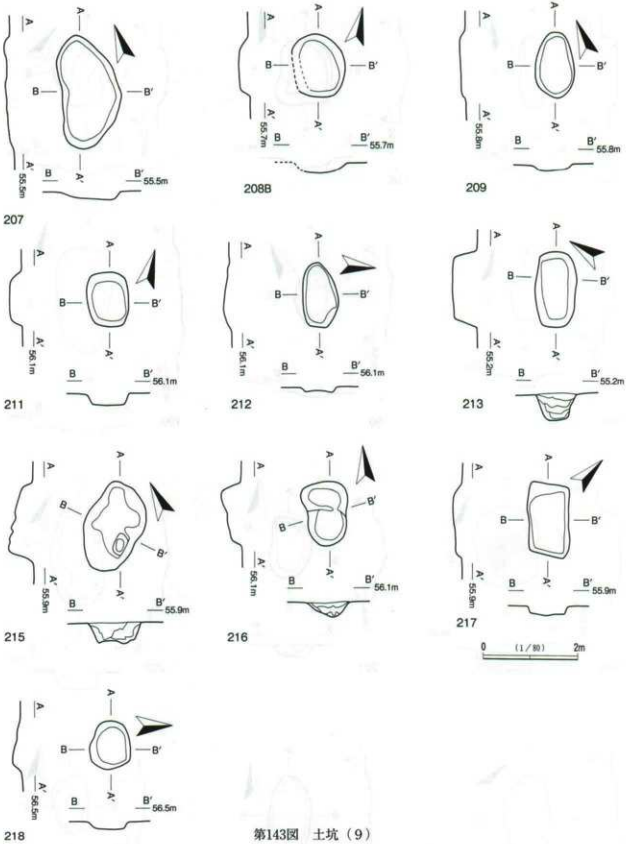
第140図　土坑（6）



第141図　土坑（7）


192
195
196A
197
198
199
200
201
202
203
204
205
A
A′
B
B′
56.0m
56.1m
56.4m
55.8m
55.9m
56.6m
炭
0
(1/80)
2m

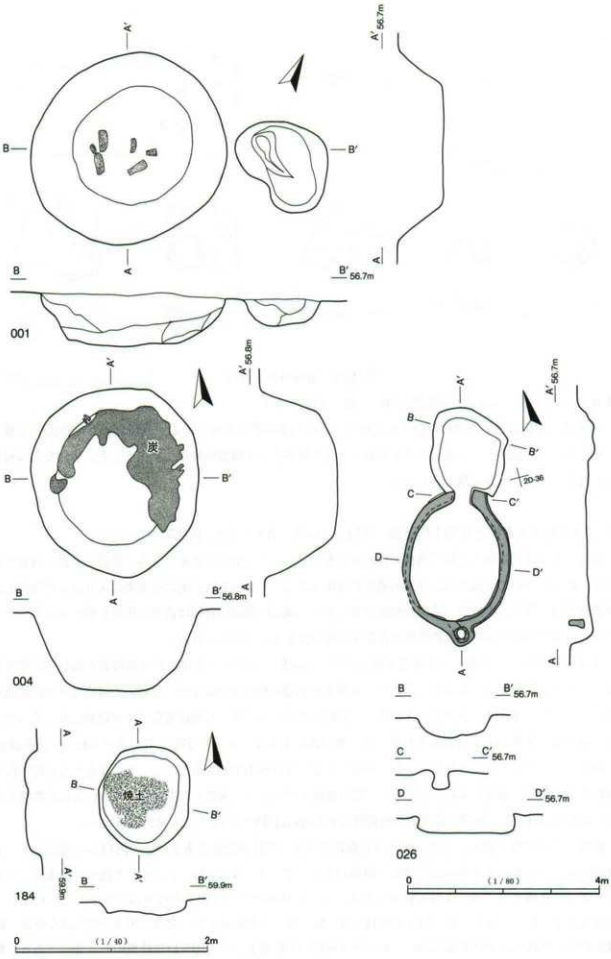
第142図　土坑（8）



第143図　土坑（9）

168（第134図，第4表）〈9F－50グリッド〉

調査区の南側の台地東端，096方形区画墓の周溝に囲まれた土坑で，形状は不整形。掘り方も不整形で，長径2.0m，短径1.5m，深さ0.7mを測る。覆土は自然堆積の状態で，覆土中から土師器の坏が2点出土した。



第144図　そのほかの遺構

第145図　遺構外出土遺物

169（第134図，第4表，図版27・50）〈9C－12グリッド〉

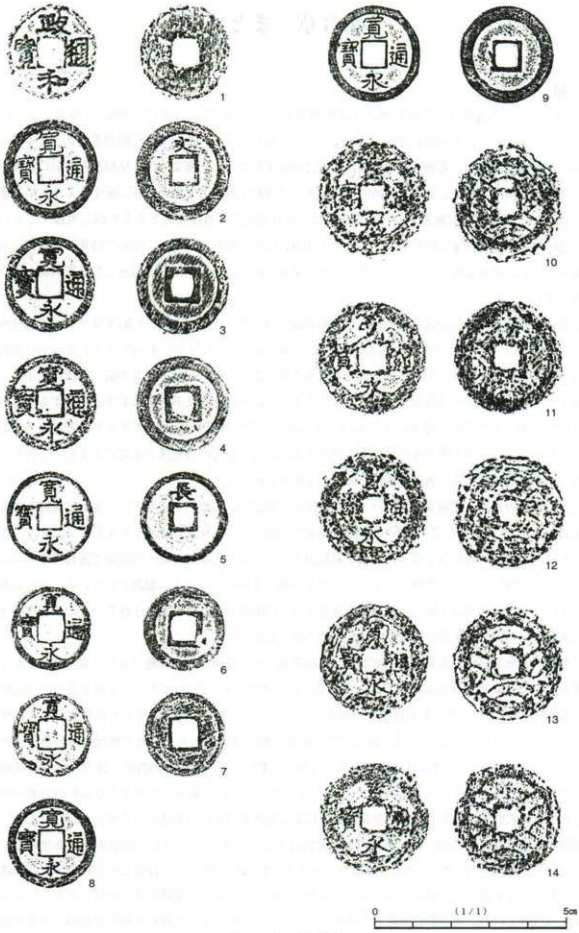
調査区の南側台地上西端に位置する土坑で，ほぼ円形形状の土坑である。直径1.3m，深さ0.2mで覆土上層に炭が多く散布し，炭化材も認められる。炭の層中から土師器の坏が1点出土した。骨片などは検出されなかったが，火葬遺構であろうか。

7　遺構外出土遺物と時期不明遺物（第145・146図，第8・9表，図版50・52）

奈良・平安時代以降の遺物で遺構に伴わないものを，ここで取り上げる。土器・鉄器・鉄滓・銭貨であるが，鉄滓については遺跡内には鍛冶遺構の検出はなく，千原台地区の更に台地奥に入り込んだ押沼大六天遺跡では，製鉄（小鍛冶）遺構が検出されており，調査区周辺の斜面は調査の機会が得られなかったことから，周辺地区に該期の製鉄遺構の存在する可能性も充分に考えられる。

1は1D－64グリッド出土の土師器の坏である。2は3G－53グリッド出土の灰釉陶器の椀の底部片である。3・4は鉄製品で，3は3E－37グリッド出土の小刀の柄部分の破片で，目釘穴がほぼ等間隔に3孔開けられている。4は9E－28グリッド出土で，鉄鏃の破片であろう。左側は刃部でやや鋭利に薄くなっている。固定用の穿孔が1か所認められる。5～9は鉄滓である。5～8は7C－37グリッド出土で，9は7C－38グリッド出土とほぼ近接しており，点数が少ないながら集中して出土している。5点とも破砕された椀形滓の破片で，破砕して鉄分を収集した際の破砕滓であろう。調査した竪穴住居の中には鍛冶遺構と認められるものはなく，隣接する北側か西側斜面下方向に精錬炉が存在した可能性は考えられる。

銭貨は全部で31点出土したが，そのうち銅銭が9点，鉄銭が22点である。その内14点を掲載する。1は8Cグリッド出土の北宋銭の政和通宝（初鋳1111年）で，2～4は10D－45グリッド出土の寛永通宝である。2は「文銭」で，3・4は古寛永である。5～7は8Eグリッド出土の寛永通宝である。「新寛永」で5は背文「長」である。8～14は草刈44号墳（塚）出土の寛永通宝で，全21点出土の内銅銭が2点，鉄銭が19点と鉄銭の比率が非常に高い。8・9は銅銭の「新寛永」で，10～14は鉄製の寛永通宝である。背文に波文が描かれ「新寛永」の四文銭である。



第146図　出土銭貨

第3章　まとめ

第1節　縄文時代

市原市ナキノ台遺跡は，千原台地区区画整理事業の『千原台ニュータウンⅩⅢ－市原市ナキノ台遺跡（下層）－』のなかで下層の遺構・遺物については報告がなされている。比較的まとまった4枚の文化層からなる旧石器時代の遺物・遺構の検出状況に呼応するように，縄文時代も早期から前期にかけての良好な包含層が検出されており，比較的内陸部にあたる台地平坦面上で周囲の谷に面するように集落遺構群を伴わない土器包含層が展開するという構図は，旧石器時代の遺跡構成とよく類似し重複するといわれる。遺構外出土遺物の項で時期別に土器の出土状況には少々触れているが，改めて時期（型式）別の出土状況の図と縄文時代遺構の分布状況とをみると（第10・23～28図），両者は関連した位置関係を持つことがうかがわれる。

早期の撚糸文期（稲荷台式－第23図）の分布状況をみると，2E・3E・3F・3Gグリッドに主に分布し，その中でも3F・3Gグリッドにかけて分布の中心がみられる。この分布の中心ブロックはほか時期の土器の出土は非常に少ない。このブロックに分布する遺構をみると005～008の4基の陥穴がほぼ同ブロックに位置する。005・006からは撚糸文系の土器片が出土しており，撚糸文系の土器集中と合致する。陥穴周辺での狩猟と関連した活動の結果によるものとみられる。やや西側の2E・3Eグリッド周辺の出土土器も周辺に所在する陥穴4基と関連を持った出土状況とみられる。遺跡南側地区の東側にも少しの土器分布がみられ，東側斜面に面する台地縁辺部からの出土と捉えられる。

同じく早期の貝殻・沈線文期（三戸・田戸下層式－第24図）には撚糸文期とは一変して遺跡北側の北端に近い1C・1Dグリッドにその分布を移しそれ以外の地区からの出土をほとんどなくしてしまう。このブロックでは遺構は陥穴のみとなり，それも遺物出土ブロックの北東縁辺に一定間隔で連続するグループのものがあり（014～022），遺物の出土ブロックと西側とを区画するように配置されている。それ以外にも出土ブロック内に10基ほど陥穴が存在し，関連を持った配置状況といわざるを得ない。これら撚糸文，貝殻・沈線文期は陥穴と非常に関連性の強い遺物の出土状況を示している。

早期末の条痕文期（茅山上層式－第25図）には遺物の出土範囲がやや広範になり，集中度もやや下がり分散されたような出土状況となる。1C・1D・2C・2Dグリッドと2E・3Eグリッドの大きく2つに分けられる北側部分と，7Cグリッドの散漫な南側部分となり，それまでの時期よりやや拡散するような状態で出土している。北側のブロックは，前の貝殻・沈線文期とほぼ変わらない分布状況の部分とその南側に2E・3Eグリッドの新たな分布域となる部分が広がる。遺跡南側の北西端の散漫な7Cグリッドは次期にかけてその分布密度が濃くなる様相を示す。2E・3Eグリッドには，集中して分布する該期の12基の炉穴群が存在し，炉穴群を中心とした生活空間の展開による遺物集中地点の形成がうかがえる。

前期の諸磯式期（第26図）は，遺跡南側の北西縁辺の7C・8Cグリッドに遺物集中地域を狭める。このブロックには縄文時代で唯一の085竪穴住居が存在し，住居の北側に続く台地上の平坦部にかけて該期の居住空間による土器の集中出土範囲がみられるが，それ以外の地区で遺物の出土がほとんどなくなり，住居近隣の台地上における活動の展開の方向性はうかがいにくくなる。本遺跡の範囲を超越した更に広い活動範囲での遺物の拡散を考えざるを得ないのかも知れない。前期の浮島式期（第27図）は，出土の絶対量

が減じ遺構も検出されず，居住拠点の移動による活動の低下が遺物量に反映されているとみられる。

中期の加曽利E式期（第28図）は，中期にみられる遺物絶対量の増加に伴いそれ以前の集中地区から遺物の拡散が強まり，全体的には遺跡南側の台地東側縁辺並びに過去に居住地区とされた北西側縁辺にやや分布の集中がみられるが，全体的には過去に生活空間として遺物の集中をみたブロック以外にも遺物の拡散が行われ，遺構は検出されないが台地上に比較的広範囲に遺物が分布するようになる。そして後期以降は遺跡全体にわたり遺物の検出が認められなくなり遺構も構築されなくなってしまう。

第2節　古墳時代

主要な遺構は，竪穴住居21軒（重複分を除く）と方墳が3基である。遺跡南側の台地上から検出され，北側の台地上から遺構の検出はない。唯一，北側と南側を結ぶ痩せ尾根状の鞍部からは東側斜面下方向に向かって方墳が1基検出されている。

古墳時代のナキノ台遺跡は中期前半の087竪穴住居の構築に始まる。遺跡南側の台地上のほぼ中央やや北寄りに竪穴住居が1軒建てられ遺跡内での居住が始まる。やや小振りな一辺約4mの正方形の地床炉を持つ住居である。覆土には多くの焼土・炭化材を含む火災住居である。中期後半には，集落としての形態を持つようになりほぼ中央のブロックに072A・073B・074・076・077・089・091の7軒と，東側に080の1軒，西側に068・069の2軒の3ブロックの小集落を構成する。住居の規模はやや大振りな一辺7mほどの068・072A・080の3軒を主として，一辺4m～5mのやや小振りな竪穴住居との組み合わせによる。大型の3軒はいずれもがカマドをもち，覆土中に焼土・炭化材を含む火災住居である。

中期末葉には特異な竪穴住居が営まれる。台地のほぼ中央に位置する076・077の小振りな（一辺約3.5m）住居で床面の中央に地床炉を持ち，同時に壁からはわずかに隔たるカマドをもつものである。両者の住居はカマドの向く方向が076は東向き，077は北西向きとかなり異なるものの，その平面形状や規模はほぼ同様である。柱穴・貯蔵穴がなく，壁からわずかに隔たり煙道が存在しないコの字形のカマド，そのカマドの焚き口の前面約1mに位置する地床炉の存在などからみて，本集落の竪穴住居の通常の形態とはかなり異なる形状で，通常の居住のための住居形態とは考えがたい。ほぼ同時期に通常のカマドを有する竪穴住居が周辺に所在しており，この特異な遺構は，本集落が継続するにもかかわらずこの時期以降にはみられなくなってしまう。この時期になって短期間の限定的な用途のために集落のほぼ中央に構築された小型の竪穴建物とみられる。特に2軒のうち南西に位置する076は，カマド周辺から滑石製の臼玉が80点近く検出され，またカマド・炉の北寄りの床面に複数の土器がカマド・炉の方向とほぼ平行に直線的に置かれていた。赤彩の坏・高坏・甕の組み合わせと，ほかの住居からは出土していない80点近い臼玉の出土と絡めて何らかの祭祀的要素がうかがわれる。臼玉に関してやや加工が粗い状況とはいえ，原石や工具類・未成品・削片などの出土はないことから，遺構の性格は玉類の工房とは異なるものであると判断される。もう1軒の077はカマドの左側の壁近くと，地床炉から土器類が出土している。両者の建物は通常の生活を継持するための竪穴住居とは異なった特殊で限定的な用途のために，この小集落に構築され，短時間存在したと考えられる。両遺構の性格の確定はできないものの，該期の集落内祭祀の一例を示しているものと思われる。

後期後半になると，本集落は縮小する。今度は北西の3軒からなる小集落へと，姿を変える。住居の規模は，最大の一辺8m弱の081と一辺4.5m～5.5mの小振りの082・084に分けられる。

古墳時代の方墳が３基検出されているが，出土遺物は少なく埋葬施設からの主要な遺物もほとんどないため出土遺物からの古墳の時期決定は難しい。次の時代の「方形区画墓」へ続く古墳時代終末期の方墳と捉えるのが妥当であろう。

古墳時代中期前半に始まった本遺跡の小集落は，この時期以降衰退し消滅してしまう。続く奈良・平安時代には，台地上にただ１軒の竪穴住居と方形区画墓・地下式土坑などの埋葬施設が台地上に分散するような状況に変容していく。

第３節　奈良・平安時代以降

該期の主要な遺構は，竪穴住居が１軒と方形区画墓が９基で，ほかに埋葬施設とみられる土坑が何基か検出されており，居住施設の存在しない閑散とした墳墓域という遺構分布である。なお，竪穴住居は奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられる。一部の遺跡南側の方形区画墓はある程度の企画性を持って配置しているように見受けられるが，北側の区画墓は全くの散漫な状態としかいいようがなく，002・003・010・038と４基所在するうちで002・003の２基が周溝を共有し，ほぼ同時期に２基並んで構築されたとみられるが，ほかの２基は占地もかなり隔たり（約120m），方向も異なり形態的にはほぼ同規模であることだけは確かであるが，埋葬施設の存在しないこと，出土遺物がほとんどないことからも時期や性格の判断はしにくい。規模の同一性と少数遺構のみが存在する台地であることをみると，特定家族（１～２家族程度）の墳墓地としての土地利用が考えられる。１軒存在する竪穴住居は，一時的な仮の住まいで，本拠となる本集落は別の遺跡に所在したものと考えられる。

遺跡南側の遺構は北側同様に墳墓が主体であるが，090・096の地下式構造の埋葬施設を持つ規模の大きい２基と，北側と同規模の区画墓２基（093・094）と直葬の埋葬施設の確認された１基（065）からなる。090・093・094・096の４基は，ほぼ直線的な配置で，埋葬施設を持つ大型の２基に挟まれた小型の近接する２基で，いかにも一群として構築された様な配置を示す。わずかに北西を向く主軸方向などからも，短時間に関係者の一連の墳墓として構築されたようである。大型の２基は埋葬施設の形態が平面的には異なるが，埋葬方法からみると区画の方形周溝の内側に地下式の横穴構造の埋葬施設を掘り込んで遺体を埋葬するという方法では共通のものがある。090の埋葬施設床面からは火葬人骨片が検出され，明らかに人間の埋葬施設であることが確認されたが，一方096の埋葬施設では人骨などは検出されず，その意味では確実に埋葬施設であるとも断定しがたいのだが，周溝内側から地下式構造の横穴を掘り込んでおり，その形状が長生・夷隅地区の横穴墓の棺座付きの玄室を小型化したものと形状は類似しており，やや小振りとはいえ，棺座部分の長さは1.5m，２m程度は確保されており，また一方，周溝内壁から埋葬施設へ続く開口部はほぼ長方形で，幅75cm，高さ40cmと木棺などを搬入するにも最小限の大きさは確保されており，遺体の収納のための空間として構築されたとみられる。火葬骨・遺物などは全く検出されていないため，棺の使用も遺体の埋葬も検出遺物からは確認されていないが，形状からは地下式横穴状の棺座付き埋葬施設とみてよかろう。

第1表　竪穴住居一覧

遺構番号	位置	平面形	規模(m) 長軸×短軸	床面面積(㎡)	主軸方向	壁高(cm)	炉・カマド位置	主柱穴	柱穴の深さ(cm)								入口施設	入口施設の規模(cm)	貯蔵穴	貯蔵穴の規模(cm)	時期	備考
									P1	P2	P3	P4	P6	P7	P8	P9	(PS)					
033	3E-00-01	方形	3.8×3.2	(10.67)	N-28°-W	0~4	北西壁	4	20.1	20.5	29.5	39.3					無		無		弥生・平安時代	
068	9B-58-68	方形	7.0×6.9	35.77	N-20°-W	18~50	北壁	4	75.9	54.4	69.9	72.0					無		南東壁(2基)	110×78×56	古墳時代中期	ピット6が中,炭化材,焼土
069	9C-61-71	方形	4.1×3.9	12.65	S-66°-W	6~24	西壁南寄り	4	59.2	46.4	46.4	49.7					無		カマド左	78×39×55	古墳時代中期	焼土,炭化材
070	9C-29-39	方形	3.8×3.8	21.43	N-44°-W	35~51	北西壁	4	76.3	91.4	79.7	41.0					カマド対面	28×27×29	南隅	71×70×66	古墳時代後期	焼土,炭化材,土手状施設
071	9D-13-23	方形	5.3×4.9	27.04	N-29°-W	43~61	北西壁	4	60.7	46.5	52.9	58.6					無		カマド右	68×64×40	古墳時代後期	ピット4が中,焼土
072A	9D-33-43	方形	7.1×6.9	37.41	S-71°-E	18~43	炉・中心から北かマド・東壁南寄り	4	84.0	108.8	101.5	84.1					炉対面	50×41×41	カマド右	114×76×20	古墳時代中期	ピット2が中,焼土,炭化材土手状施設周辺切り調査
072B	9D-33-43	(方形)	7.1×6.9	37.41	N-19°-E	A上9~50	炉・中心から北	4	48.0	50.0	40.0	53.0					無		無		古墳時代中期	
073A	9D-83-84	方形	7.4×7.4	43.77	N-41°-W	19~36	北西壁	7	91.3	114.1	109.9	99.0	37.9	31.4	55.7		カマド対面	22×22×34	カマド対面	100×60×39	古墳時代後期	焼土,炭化材,張り出し貯蔵穴,ピット3が中,土手状施設,ドブロック
073B	9D-83-84	(方形)	7.4×7.4+	—	N-41°-W	40	北西壁	4	69.0	77.0	89.0	56.0					無		カマド対面	106×74×48	古墳時代中期	焼化面,ピット3が中
074	10D-04-05	方形	3.7×3.4	5.75	N-23°-E	25~39	炉・ほぼ中心 カマド・北壁	無									無		南隅	76×55×40	古墳時代中期	焼土,炭化材,粘土
075	9D-88-89	方形	7.6×7.4	44.71	N-23°-E	0~63	北壁	6	69.0	92.0	93.0	81.0	86.0	43.0			中心から南寄り	48×42×45	カマド対面 南隅	190×102×49 92×83×45	古墳時代後期	ピット2が南,焼土,張り出し貯蔵穴
076	9D-54-55	方形	3.6×3.4	9.73	S-64°-E	12~29	炉・中心 カマド・東壁寄り	無									無		無		古墳時代中期	炭化材,焼土
077	9D-26-27	方形	3.8×3.4	10.19	N-48°-W	16~28	炉・北西壁 カマド・ほぼ中心	無									無		無		古墳時代中期	焼土,粘土
078	9E-72-82	方形	4.1×3.0	55.43	N-38°-E	13~35	北東壁	4	81.0	91.0	81.0	103.0					無		南西壁 南西壁	66×39×54 78×37×50	古墳時代後期	ピット2が南,焼土,炭化材,粘土,土手状施設
079	9E-47-77	(方形)	3.5×—	—	N-32°-E	0~62	北東壁	3+	79.0	—	63.7	71.8					無		—		古墳時代後期	
080	9E-77-78	(方形)	6.5×—	(34.76)	N-27°-E	0~27	北東壁	4	88.8	72.8	62.8	47.6					無		カマド対面	64×43×33	古墳時代中期	炭化材,焼土
081	8C-14-24	方形	7.7×7.3	47.08	N-42°-W	24~62	北西壁	4	84.8	80.0	98.8	100.6					カマド対面	26×25×7	カマド右	70×56×49	古墳時代中期	炭化材,焼土
082	8C-17-18	方形	4.5×4.5	15.29	N-28°-W	27~45	北西壁	4	58.0	70.0	90.0	74.0					無		カマド右	38×35×39	古墳時代後期	焼土,ピット3が中
083	8C-19-29	方形	6.5×6.5	(37.54)	N-62°-W	0~24	北西壁	4	69.0	62.0	58.0	54.0					無		カマド対面	120×73×42	古墳時代後期	炭化材,ピット3が中,北隅がやや拡大,周辺切り調,貯蔵穴の周りに土手状施設
084	7C-96,8C-06	方形	3.6×3.5	25.84	N-38°-W	14~16	北西壁	7	44.0	63.0	36.0	53.0	50.0	82.0	23.0		無		カマド右	58×52×33	古墳時代後期	炭化材,焼土
085	7C-93-94	円形	3.1×3.0	6.79	N-42°-W	—	炉・無	(3?	43.0	—	46.0	30.0	49.0	—	—		無		無		縄文時代前期	ピット11が南
087	8D-32-33	方形	4.0×3.8	11.47	N-21°-E	8~29	炉・中心から北東	4	52.0	56.0	56.0	49.0					無		無		古墳時代中期	焼土,炭化材,目ブロック
088	8D-43-64	方形	5.9×5.6	26.54	N-22°-E	24~45	北壁	4	76.0	78.0	96.0	109.0					無		南東隅	86×75×44	古墳時代後期	ピット2が中,焼土,炭化材,粘土
089	8D-85-95	方形	4.8×4.7	17.45	S-73°-E	31~42	東壁南寄り	4	53.0	68.0	60.0	68.0					無		南東隅	80×62×56	古墳時代中期	炭化材,焼土
091	8D-98-99	方形	5.2×5.2	(21.47)	N-22°-W	10~50	北壁	4	109.0	84.0	107.0	94.0					無		南隅	70×58×35	古墳時代中期	ピット1が南,炭化材,焼土,土手状施設

第2表　縄文時代炉穴一覧

遺構番号	遺構種類	時期	位置	規模(cm) 長軸×短軸	深さ(cm) 炉床a	炉床b	炉床c	炉床d	重複数 (炉床数)
027	炉穴	縄文早期	2D-55	288×125	32.00	40.00			2
031	炉穴	縄文早期	2E-60	264×98	40.00				1
034	炉穴	縄文早期	2E-74	336×300	15.40	20.00	40.30	18.00	4
036	炉穴	縄文早期	3E-15	192×150	59.00	502.00			2
039	炉穴	縄文早期	3E-34	254×58	36.20	38.00			2
041	炉穴	縄文早期	3E-73	166×80	16.50				1
046	炉穴	縄文早期	3E-73	336×66	26.00	26.00			2
047	炉穴	縄文早期	3E-54	200×198	18.00	31.00	28.00		3
048	炉穴	縄文早期	3E-71	400×51	36.00	26.00			2
049	炉穴	縄文早期	3E-23	(255)　×70	48.80				1
050	炉穴	縄文早期	3E-31・41	363×54	32.00	18.00			2
051	炉穴	縄文早期	3E-03・13	359×68	25.00	21.00	7.00		3

第3表　縄文時代陥穴一覧

遺構番号	時期	平面形	位置	規模（cm）長軸×短軸	深さ（cm）	主軸方位	底面の標高（m）	ピット（長径×深さ）（cm）1	2	3
005	縄文早期	長楕円形	3F－37	218×70	84	N－23°－W	55.68	34×57	36×52	
006	縄文早期	隅丸長方形	3F－38	82×67	96	N－30°－E	55.46			
007	縄文早期	隅丸長方形	3F－26・27	120×73	110	N－30°－E	55.32	19×16		
008	縄文早期	長楕円形	3G－23	158×44	117	N－55°－E	54.94	50×41	48×24	
011	縄文早期	楕円形	1D－86・87	186×（114）	139	N－11°－E	54.42	32×35		
012	縄文早期	不整楕円形	1C－82・83	136×111	83	N－45°－W	55.09			
013	縄文早期	楕円形	1C－84・94	192×69	61	N－14°－W	55.30	14×65		
014	縄文早期	長方形	1C－73	121×78	74	N－50°－W	55.07			
015	縄文早期	長楕円形	1C－54・55	135×79	81	N－58°－W	55.00			
016	縄文早期	長方形	1C－36・37	132×83	66	N－32°－W	55.08			
017	縄文早期	楕円形	1C－82・92	158×101	82	N－60°－W	55.14			
018	縄文早期	楕円形	1C－63・64	123×72	70	N－56°－W	55.18			
019	縄文早期	楕円形	1C－64	124×66	64	N－55°－W	55.23			
020	縄文早期	楕円形	1C－28・38	119×64	67	N－21°－W	55.01			
021A	縄文早期	長楕円形	1C－29	113×66	40	N－37°－W	レベル不明	12×14		
021B	縄文早期	長楕円形	1C－29	140×69	55	N－16°－W	レベル不明	20×10		
022	縄文早期	楕円形	1D－31	74×65	114	N－88°－E	54.64			
023	縄文早期	楕円形	1D－71	76×62	111	N	54.68			
024	縄文早期	長楕円形	2D－20	219×80	41	N－25°－E	55.34			
025	縄文早期	溝型	2D－31・41	334×58	138	N－16°－E	54.35			
028	縄文早期	長方形	2D－44・45	160×88	132	N－55°－E	54.62	20×10		
029	縄文早期	溝型	1D－75	356×49	65	N－7°－E	54.80			
035	縄文早期	長楕円形	2E－77・87	207×62	60	N－10°－E	55.85	34×30	40×28	24×14
040	縄文早期	楕円形	3E－51・61	（128×92）	130	－	（55.40）			
043	縄文早期	楕円形	3E－74	197×95	77	N－12°－E	55.60	20×58		
044	縄文早期	楕円形	3E－76・77	154×93	60	N－8°－W	55.88	34×54		
045	縄文早期	溝型	3E－06	411×34	63	N－41°－E	55.37			
052	縄文早期	隅丸長方形	2E－95・96	122×79	98	N－47°－E	55.57	28×22		
054	縄文早期	不整形	2E－65・75	160×93	55	N－69°－W	55.74			
056	縄文早期	不整楕円形	1C－69	116×46	100	N－77°－W	54.86	30×22	22×23	
057	縄文早期	長方形	3F－11	185×62	97	N－40°－E	55.65			
058	縄文早期	隅丸長方形	2D－04・05	150×52	36	N－54°－W	55.22	29×45	29×42	
059	縄文早期	楕円形	2D－04	160×77	56	N－28°－W	54.32	136×66		
060	縄文早期	長方形	2C－38・39	76×50	55	N－38°－W	54.87	29×30		
061	縄文早期	長方形	1C－96・97	（185×79）	54	N－18°－E	55.88			
151	縄文早期	楕円形	7E－90・91	185×82	98	N－4°－E	54.90			
163	縄文早期	隅丸長方形	7E－96,8E－06	167×126	110	N－50°－E	54.03			
165	縄文早期	（楕円形）	9D－76・77	（96）×121	84	N－6°－E	55.35			
179	縄文早期	楕円形	6E－64・74	（210）×84	156	N－30°－E	53.36			
189	縄文早期	不整楕円形	9B－88・89	120×86	124	N－70°－W	54.20	26×10		
191	縄文早期	楕円形	9C－89,9D－80	167×119	119	N－69°－W	54.82	28×156		
196B	縄文早期	楕円形	8C－86・87	―×126	88	N－15°－W	54.56			
206	縄文	（長楕円形）	8C－77・87	―×173	261	N－35°－E	52.80			
208A	縄文早期	溝型	7E－71・72	304×45	76	N－58°－E	54.82			
210	縄文早期	楕円形	6E－90,7D－09,7E－00	222×149	147	N－88°－W	55.06			
214	縄文早期	不整隅丸方形	7D－50・60	132×100	87	N－14°－E	54.68	35×16		
219	縄文早期	不整楕円形	7E－41・51	149×111	94	N－62°－W	54.24			
220	縄文早期	不整隅丸方形	6E－92,7E－02	133×71	64	N－5°－E	53.64			
221	縄文早期	溝型	6E－42・52	232×61	89	N－36°－E	54.12			

第4表　土坑類一覧

遺構番号	遺構種類	時期	平面形	位置	規模(cm) 長軸×短軸	深さ(cm)	主軸方位	底面の標高(m)	ピット（長径×深さ）cm 1	2	3	備考
009	有天井土坑	奈良・平安	楕円形	3G－31·32	226×127	87	N－85°－E					
042	地下式土坑	奈良・平安	長楕円形	3E－55·65	266×116	114	N					
168	土坑	奈良・平安	楕円形	9F－50	195×146	71	N					
169	土坑	奈良・平安	円形	9C－12	132×(90)	20	N	55.15				火葬墓?
032	土坑	時期不明	楕円形	2D－88	98×75	46	N－70°－W	55.80				
053	土坑	時期不明	不整円形	2E－86·96	218×190	44	N	56.03	90×15			
055	土坑	時期不明	円形	2E－83·84	150×142	36	N	56.04				
101	土坑	時期不明	楕円形	9E－39·9F－30	179×97	58	N－42°－W	54.91				
102	土坑	時期不明	楕円形	9E－29・39	182×111	77	N－25°－E	54.87				
103	土坑	時期不明	不整円形	9E－27・28	133×91	58	N－25°－E	55.42				
104	土坑	時期不明	楕円形	9E－26・27	130×74	71	N－3°－W	55.60				
105	土坑	時期不明	楕円形	9E－15	123×81	61	N－30°－E	55.74				
106	土坑	時期不明	楕円形	9E－04	122×82	58	N－40°－E	55.81				
107	土坑	時期不明	不整円形	8E－93·9E－03	120×98	69	N－40°－E	55.73				
108	土坑	時期不明	楕円形	8E－71	136×109	67	N－40°－E	55.82				
109	土坑	時期不明	楕円形	8E－60・61	167×90	53	N－55°－W	55.88				
110	土坑	時期不明	楕円形	8E－81・82	131×97	71	N－50°－E	55.82				
111	土坑	時期不明	楕円形	8E－72・82	214×85	78	N－3°－E	55.71				
112	土坑	時期不明	円形	8E－94	92×91	21	N－78°－W	56.18				
113	土坑	時期不明	不整形	9E－14·15	258×210	44	N－30°－E	56.06				
114	土坑	時期不明	不整形	8E－72·82	208×92	8	N－10°－E	56.40				
115	土坑	時期不明	隅丸長方形	8D－58・68	127×78	52	N－45°－E	56.00				
116	土坑	時期不明	隅丸長方形	8D－46・47	141×84	50	N－42°－E	55.78				
117	土坑	時期不明	不整形	8D－46	194×115	40	N－62°－E	55.98				
118	土坑	時期不明	不整形	8D－36	204×84	45	N－65°－E	55.74				
119	土坑	時期不明	不整形	8D－25·26	146×95	35	N－70°－E	55.76				
120	土坑	時期不明	不整形	8D－26·27	160×138	67	N－68°－E	55.53	16×44	17×47		
121	土坑	時期不明	不整形	8D－26	173×106	37	N－5°－W	55.76				
122	土坑	時期不明	楕円形	8D－15·25	235×111	39	N－65°－E	55.76				
123	土坑	時期不明	不整形	8D－24	136×120	27	N－27°－W	55.86				
124	土坑	時期不明	楕円形	8D－04	178×84	17	N－68°－W	55.88				
125	土坑	時期不明	楕円形	7D－94·8D－04	123×72	50	N－60°－E	55.60				
126	土坑	時期不明	楕円形	7D－85·95	165×76	53	N－30°－W	55.48				
127	土坑	時期不明	不整形	7D－96·8D－06	200×136	49	N－45°－E	55.56				
128	土坑	時期不明	楕円形	8D－07·17	168×89	39	N－40°－E	55.72				
129	土坑	時期不明	不整形	7D－73·74	143×100	73	N－75°－E	55.24				
130	土坑	時期不明	不整形	7D－63·64	380×142	55	N－83°－W	55.71				
131	土坑	時期不明	楕円形	7D－61·71	160×86	24	N－65°－E	55.60				
132	土坑	時期不明	不整形	7D－61·62	186×150	28	N－45°－E	55.62	34×28	23×13		
133	土坑	時期不明	不整形	7D－83	170×111	29	N－78°－E	55.04				
134	土坑	時期不明	楕円形	7D－97·8D－07	219×116	30	N－31°－E	55.80	60×15			
135	土坑	時期不明	楕円形	8D－08	98×74	24	N－80°－E	55.89				
136	土坑	時期不明	楕円形	8D－09	163×101	26	N－60°－W	55.90				
137	土坑	時期不明	不整円形	8D－19·29	84×68	15	N－58°－W	56.00				
138	土坑	時期不明	不整形	8D－29	259×173	23	N－53°－E	55.96	30×15	22×11	18×8	
139	土坑	時期不明	楕円形	8D－39·49	210×130	32	N－25°－E	55.94				
140	土坑	時期不明	隅丸長方形	8D－49·8E－40	98×67	18	N－60°－E	56.12				
141	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－31·41	152×99	35	N－5°－W	55.94				
142	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－20·21	102×78	24	N－65°－E	55.87				
143	土坑	時期不明	不整形	8E－31	120×68	19	N－60°－W	56.02				
144	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－41·42	110×62	24	N－50°－W	56.08				
145	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－41	117×90	44	N－85°－W	55.91				
146	土坑	時期不明	楕円形	8E－51·52	143×101	69	N－42°－E	55.70				
147	土坑	時期不明	不整形	8E－22·23	176×171	73	N－20°－W	55.43				
148	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－45	127×113	20	N－50°－E	55.64	29×68			
149	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－25·26	235×166	40	N－15°－W	55.32				
150	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－24·25	153×98	30	N－70°－E	55.52				
152	土坑	時期不明	楕円形	7E－90	122×119	24	N－40°－E	55.70				
153	土坑	時期不明	楕円形	7E－91	96×72	17	N－80°－W	55.69				
154	土坑	時期不明	長楕円形	8D－05·15	198×93	60	N－50°－E	55.45				
155	土坑	時期不明	不整円形	7D－73·83	130×115	40	N	55.81	42×20			
156	土坑	時期不明	隅丸長方形	7E－80·90	126×80	28	N－20°－E	55.47				
157	土坑	時期不明	楕円形	7D－89·7E－80	171×81	28	N－30°－E	55.64				
158	土坑	時期不明	楕円形	7E－80·81	164×79	32	W－E	55.46				
159	土坑	時期不明	隅丸長方形	7E－81	150×97	63	N－25°－W	55.04				
160	土坑	時期不明	楕円形	7E－82	98×74	25	N－8°－E	55.23				
161	土坑	時期不明	不整形	7E－83	164×132	45	N－6°－E	54.56				
162	土坑	時期不明	不整形	7E－86·96	108×84	46	N－9°－W	54.34				
164	土坑	縄文	楕円形	9E－02	73×50	14	W－E	56.28				
166	土坑	時期不明	楕円形	8E－23·24	159×92	25	N－29°－E	55.78				
167	土坑	時期不明	隅丸長方形	8E－11·21	142×102	83	N－15°－W	55.27	45×20			骨粉
170	土坑	時期不明	楕円形	10C－38	94×75	28	N－25°－W	56.08				
171	土坑	時期不明	不整形	10C－37·47	100×46	36	N－30°－W	56.04				
172	土坑	時期不明	楕円形	10C－36·46	134×89	24	N	56.18				
173	土坑	時期不明	楕円形	10C－35	138×75	27	N－10°－E	56.04				

遺構番号	遺構種類	時期	平面形	位置	規模(cm) 長軸×短軸	深さ(cm)	主軸方位	底面の標高(m)	ピット（長径×深さ）cm 1	2	3	備考
174	土坑	時期不明	隅丸長方形	10C－34	139×71	24	N－29°－E	56.04				
175	土坑	時期不明	楕円形	10C－33·34	130×107	36	N	55.88				
176	土坑	時期不明	楕円形	10C－23·33	127×76	23	N－23°－E	55.88				
177	土坑	時期不明	不整楕円形	10C－22	145×74	19	N－13°－E	55.88				
180	土坑	時期不明	楕円形	10C－11·21	125×60	31	N－30°－E	55.64				
181	土坑	時期不明	不整形	10C－10	122×64	35	N－35°－E	55.64				
182	土坑	時期不明	楕円形	10B－09	152×86	48	N－46°－E	55.42				
183	土坑	時期不明	楕円形	9B－98,10B－08	168×88	33	N－35°－E	55.37				
185	土坑	時期不明	楕円形	9B－87·97	149×82	41	N－35°－E	55.04				
186	土坑	時期不明	不整楕円形	9B－86	153×90	37	N－16°－E	54.87				
187	土坑	時期不明	楕円形	9B－76	157×84	25	N－51°－E	54.76				
188	土坑	時期不明	隅丸長方形	9B－86・96	179×118	76	N－25°－E	54.50				
190	土坑	時期不明	楕円形	10C－25	182×102	20	N－36°－E	56.10				
192	土坑	時期不明	隅丸長方形	9D－74·84	142×56	33	N－20°－W	55.46				
195	土坑	時期不明	隅丸方形	9C－77·87	134×115	22	N－10°－W	55.70				
196A	土坑	時期不明	不整円形	10D－00·01	137×98	22	N－31°－E	55.90				
197	土坑	時期不明	不整楕円形	9C－65·75	88×73	26	N－6°－E	55.39				
198	土坑	時期不明	不整隅丸方形	9C－56	110×83	11	N－28°－W	55.51				
199	土坑	時期不明	楕円形	9C－46·56	214×118	22	N－10°－E	55.53				
200	土坑	時期不明	不整隅丸方形	10D－12·22	160×137	50	N－15°－E	55.58				木炭片
201	土坑	時期不明	楕円形	8D－76·77	121×84	26	N－5°－E	56.14				
202	土坑	時期不明	楕円形	9C－16·26	196×104	35	N－22°－E	54.96				
203	土坑	時期不明	楕円形	9C－49	166×99	18	N－45°－E	55.72				
204	土坑	時期不明	楕円形	9D－30·40	164×89	14	N－9°－W	55.74				
205	土坑	時期不明	楕円形	9D－30	119×75	16	N－8°－E	55.71				
207	土坑	時期不明	不整楕円形	9B－77·87	232×124	20	N－19°－E	55.12				
208B	土坑	時期不明	楕円形	9C－41	130×(108)	25	N－10°－W	55.16				
209	土坑	時期不明	楕円形	9B－75·85	134×80	15	N－20°－E	55.42				
211	土坑	時期不明	隅丸方形	9C－39·9D－30	110×87	25	N－16°－W	55.62				
212	土坑	時期不明	楕円形	9C－48·49	130×74	18	N－80°－E	55.71				
213	土坑	時期不明	楕円形	9B－75	150×86	52	N－55°－E	54.41				
215	土坑	時期不明	不整形	7C－69·79	181×117	54	N－29°－E	55.24				
216	土坑	時期不明	不整形	8D－12	129×100	42	N－7°－E	55.42				
217	土坑	時期不明	長方形	7D－60	141×89	21	N－42°－W	55.50				
218	土坑	時期不明	楕円形	7D－60·61	97×88	17	N－88°－W	56.04				

第5表　土製品一覧

番号	挿図番号	遺構番号	遺物番号	名 称	欠損	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	最大径 (mm)	重量 (g)	孔径 (mm) 上面	下面	備 考
1	第56図1	2E－74	1	土器片錘	無	52.0	48.8	10.9		23.5			表裏条痕
2	第56図2	3E－96	10	土器片錘	有	50.8	45.3	13.1		31.2			縄文
3	第56図3	9E－29	15	土器片錘	無	56.4	50.2	12.7		33.2			縄文・沈線
4	第56図4	9E－36	5	土器片錘	無	38.2	35.2	15.1		16.8			条線
5	第56図5	10E－24	1	土器片錘	無	80.6	37.8	16.9		46.6			縄文
6	第56図6	10E－25	3	土器片錘	有	53.7	50.6	12.8		36.9			縄文
7	第56図7	10E－45	1	土器片錘	無	59.9	42.6	13.9		36.7			縄文
8	第56図8	10E－54	1	土器片錘	無	43.1	32.4	12.3		21.0			縄文
9	第56図9	3G－82	5	土器片錘	有	26.3	34.1	11.4		11.3			条線
10	第56図10	9F－71	－	土器片錘	無	47.4	33.9	12.9		18.0			縄文
11	第56図11	3G－63	2	土器片錘	無	51.7	41.9	13.5		25.9			縄文
12	第80図9	072A	130	土製小玉	無		9.6	8.6	8.1	0.7	2.2	3.3	
13		073A	－	土製小玉						0.2			
14	第85図18	075	88	スヤ入り土製品						12.5			
15		078	258	スヤ入り土製品						21.4			
16		078	261	スヤ入り土製品						21.5			
17	第95図6	079	34	スヤ入り土製品						29.7			
18	第97図17	080	－	勾玉？						0.8			
19		081	37	不明						53.3			
20		081	58	スヤ入り土製品						5.7			
21	第98図12	081	98	スヤ入り土製品						32.4			
22		081	26－1	スヤ入り土製品						52.5			
23		081	26－2	スヤ入り土製品						14.9			
24	第102図20	084	84	スヤ入り土製品						1.5			
25		088	77	不明						6.4			
26		089	46	不明						10.7			
27		089	47	不明						2.7			
28		089	48	不明						4.8			
29	第108図11	091	71	スヤ入り土製品						5.9			
30	第116図4	表採	－	土製小玉	無		8.0	8.2	8.1	0.6			
31		8E－62	9	瓦						54.4			
32		9E－67	46	不明						10.6			
33		3G－50/59?	1	不明						3.7			
34	第76図11	70	49	土製支脚	有	199.0	102.0						
35	第78図10	71	78	土製支脚	有	189.7	109.5						
36	第78図11	71	79	土製支脚	無	167.1	85.7						
37	第94図31	78	220	土製支脚	無	159.0	58.0						
38	第99図5	82	48	土製支脚	有	186.1	85.7						
39	第102図19	84	115	土製支脚	有	144.0	78.0						

第6表　石器一覧

挿図番号	掲載番号	遺構/グリッド番号	遺物番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	遺存度	接合	備考
第16図	034－1	034	1	二次加工剥片	57.9	34.3	10.5	20.1	ホルンフェルス			
第16図	049－1	049	4	磨石	44.2	74.3	38.8	133.3	流紋岩			
第22図	008－1	008	1	磨製石斧	68.4	42.3	12.7	95.6	流紋岩	完形		
第59図	1	1D－87	1	削器	108.1	35.2	20.6	59.6	頁岩			旧石器の可能性あり
第59図	2	不明	－	石刃	38.5	29.4	10.6	13.2	頁石			旧石器の可能性あり 注記なし
第59図	3	4F－06	－	二次加工剥片	32.6	15.7	8.0	3.7	凝灰岩			旧石器の可能性あり
第59図	4	1D－42	49	二次加工剥片	34.2	16.5	5.1	2.6	トロトロ石			旧石器の可能性あり
第59図	5	2C－01	1	石鏃	29.2	22.3	3.5	1.7	安山岩			
第59図	6	7C－75	24	石鏃	24.2	13.4	4.6	1.1	黒曜石			
第59図	7	9D－74	－	石鏃	26.7	16.7	3.5	1.2	黒曜石			073～69よりグリッドへ変更
第59図	8	9E－77	－	石鏃	22.4	16.5	4.6	1.2	黒曜石			079～21よりグリッドへ変更
第59図	9	2C－18	7	削器	41.2	30.8	8.8	8.6	黒曜石			
第59図	10	1D－41	31	石鏃	53.4	48.8	20.7	37.4	ホルンフェルス			
第59図	11	1C－27	7	楔形石器	26.5	11.8	7.9	2.1	黒曜石			
第59図	12	2E－90	1	楔形石器	20.6	24.9	8.2	4.0	ホルンフェルス			
第59図	13	1C－83	2	楔形石器	23.7	27.6	13.8	7.5	チャート			
第59図	14	1C－89	18	楔形石器	27.8	26.2	7.8	5.8	頁岩			
第59図	15	1C－63	2	楔形石器	33.2	30.4	14.8	18.3	安山岩			
第59図	16	2E－93	28	二次加工剥片	46.7	43.8	9.0	15.2	安山岩			
第60図	17	1D－76	5	二次加工剥片	29.7	42.3	14.2	17.1	黒曜石			
第60図	18	9D－99	－	剥片	15.8	12.4	4.3	0.5	黒曜石			075－91よりグリッドへ変更
第60図	19a	1C－78	13	石核	接合後49.6	接合後57.8	接合後48.2	接合後299.2	凝灰岩		c	1C－63－4と1C－78－13と2C－18－3接合
第60図	19b	2C－18	3	石核	接合後49.6	接合後57.8	接合後48.2	接合後299.2	凝灰岩		c	1C－63－4と1C－78－13と2C－18－3接合
第60図	19c	1C－63	4	石核	接合後49.6	接合後57.8	接合後48.2	接合後299.2	凝灰岩		c	1C－63－4と1C－78－13と2C－18－3接合
第60図	20	1C－34	5	石核	61.0	76.4	43.2	255.8	ホルンフェルス			
第61図	21	7C－84	9	石核	接合後78.2	接合後46.3	接合後28.9	接合後94.4	頁石		e	7C－84－9と7C－94－41接合
第61図	21	7C－94	41	石核	接合後78.2	接合後46.3	接合後28.9	接合後94.4	頁石		e	7C－84－9と7C－94－41接合
第61図	22	1C－59	35	石核	29.6	39.8	16.2	13.6	チャート			
第61図	23	2E－74	2	石核	61.2	69.1	46.4	187.5	ホルンフェルス			
第61図	24	1D－32	9	石核	83.4	99.7	48.6	422.0	ホルンフェルス			
第61図	25	1C－76	13	石核	49.2	78.1	32.4	101.9	安山岩			
第62図	26	3G－85	11	礫石斧	85.2	35.8	22.7	93.9	緑色凝灰岩	一部欠損		
第62図	27	3G－63	39	礫石斧	87.7	30.6	15.6	59.3	緑色凝灰岩	完形		
第62図	28	3F－30	3	礫石斧	66.8	25.4	11.7	30.5	砂岩	一部欠損		
第62図	29	7C－92	3	礫石斧	85.7	49.4	21.4	91.2	ホルンフェルス	一部欠損		
第62図	30	3G－44	17	礫石斧	91.8	40.7	15.8	86.3	ホルンフェルス	完形		
第62図	31	9E－17	9	礫石斧	接合後79.4	接合後34.7	接合後13.8	接合後46.4	砂岩		b	9E－27－13と9E－17－9接合
第62図	31	9E－27	13	礫石斧	接合後79.4	接合後34.7	接合後13.8	接合後46.4	砂岩	一部欠損	b	9E－27－13と9E－17－9接合
第62図	32	2E－65	10	礫石斧	69.6	40.7	20.6	78.0	緑色凝灰岩	完形		
第62図	33	3G－45	42	礫石斧	56.8	36.3	12.4	25.9	ホルンフェルス			
第62図	34	2E－61	9	礫石斧	39.6	54.8	22.1	50.1	ホルンフェルス	破片		
第62図	35	3G－73	7	礫石斧	92.2	43.8	21.3	123.2	緑色凝灰岩	完形		
第63図	36	3E－15	5	礫石斧	75.4	40.7	20.4	94.0	緑色凝灰岩	完形		
第63図	37	3F－28	1	礫石斧	75.2	45.4	19.8	111.0	緑色凝灰岩	完形		
第63図	38	1D－50	39	打製石斧	98.3	60.4	30.6	229.8	ホルンフェルス	完形		
第63図	39	2E－74	3	打製石斧	77.8	54.2	16.7	92.3	砂岩	一部欠損		
第63図	40	3E－31	6	打製石斧	73.8	54.1	19.4	79.2	緑色片岩	破片		
第63図	41	1C－68	7	打製石斧	63.8	33.9	15.6	47.1	緑色凝灰岩	完形		
第63図	42	1D－52	9	磨製石斧	63.7	42.5	15.8	75.7	緑色凝灰岩	完形		
第63図	43	9E－04	1	磨製石斧	103.2	47.2	24.9	190.4	砂岩	完形		
第64図	44	1C－66	10	磨石	85.3	66.4	44.1	317.6	砂岩			
第64図	45	7C－89	7	磨石	93.4	76.3	35.1	299.4	流紋岩			
第64図	46	1C－83	10	磨石	68.4	22.6	52.9	98.2	砂岩			
第64図	47	1D－40	19	磨石	60.4	52.8	42.3	192.0	流紋岩			
第64図	48	2C－17	8	磨石	80.2	68.1	33.4	247.9	砂岩			
第64図	49	2C－09	5	磨石	108.8	50.5	56.5	344.7	砂岩			
第64図	50	2E－65	2	磨石	104.0	64.2	45.7	436.1	砂岩			
第64図	51	2E－74	6	磨石	102.8	70.5	38.2	353.1	流紋岩			
第64図	52	1D－74	14	磨石	59.8	57.6	35.3	162.7	安山岩			
第64図	53	1D－64	－	磨石	80.4	65.3	45.4	325.8	砂岩			010－1よりグリッドへ変更
第64図	54	3G－74	46	磨石	71.4	54.0	36.1	197.9	流紋岩			

掲図番号	掲載番号	遺構/グリッド番号	遺物番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	遺存度	接合	備考
第64図	55	9E-42	28	磨石	108.6	82.4	38.2	531.8	流紋岩			
第64図	56	1D-85	38	磨石	51.8	49.6	41.9	137.1	安山岩			
第64図	57	9E-13	7	磨石	84.6	75.3	32.8	320.5	安山岩			
第64図	58	10E-24	1	磨石	82.8	67.2	43.2	319.1	砂岩			
第65図	59	1D-75	14	磨石	接合後120.2	接合後94.5	接合後24.8	接合後243.8	砂岩		a	1D-86と1D-75-14と1D-91-1接合
第65図	59	1D-86	−	磨石	接合後120.2	接合後94.5	接合後24.8	接合後243.8	砂岩		a	011-1よりグリッドへ変更 1D-86と1D-75-14と1D-91-1接合
第65図	59	1D-91	1	磨石	接合後120.2	接合後94.5	接合後24.8	接合後243.8	砂岩		a	1D-86と1D-75-14と1D-91-1接合
第65図	60	2E-83	4	敲石	182.9	101.7	71.5	1825.6	安山岩			
第65図	61	1C-28	5	敲石	74.2	39.5	25.8	123.5	砂岩			
第65図	62	1C-68	10	石皿	80.7	112.3	32.6	452.8	安山岩（トロトロ石）			
第65図	63	11E-23	1	石皿	104.5	118.9	52.4	394.0	凝灰岩			
第65図	64	2E-84	2	石皿	158.7	87.3	44.6	841.0	頁岩			
第66図	65	1D-85	33	台石	211.3	149.2	138.0	6000.0	流紋岩			
第66図	66	1D-45	47	凹石	76.5	53.4	30.2	138.1	凝灰岩			
第66図	67	不明	−	凹石	52.4	58.4	50.7	243.9	安山岩			
		1C-34	2	石核	1.4	3.1	1.5	3.1	黒曜石			
		1C-59	8	剥片	3.2	2.4	1.4	8.0	頁岩			
		1C-63	8	磨石	9.0	3.6	3.3	110.0	安山岩			
		2C-09	3	敲石	73.8	50.4	48.9	222.7	凝灰岩			
		011	1	剥片	44.7	20.3	11.5	11.1	砂岩			
第73図	12	068	9	敲石	52.8	24.8	25.4	42.8	メノウ			
第74図	3	069	4	磨石	41.2	78.2	57.8	230.4	流紋岩			
第87図	8	076	72	磨石	62.5	119.2	45.2	436.6	閃緑岩			
第94図	34	078	174	磨石	115.4	80.5	55.8	704.6	砂岩			
		1C-29	2	剥片	3.7	2.4	0.7	6.2	頁岩			
		1C-29	10	二次加工剥片	2.1	3.7	0.7	5.0	ホルンフェルス			
		1C-39	9	磨石	3.3	7.3	3.2	86.5	花崗岩			
		1C-71	2	磨石	6.5	6.1	5.4	193.4	安山岩			
		1D-71	8	磨石	接合後5.5	接合後6.5	接合後3.9	接合後181.8	流紋岩		d	1D-71-8と1C-79-16接合
		1C-74	12	磨石	4.9	6.0	4.3	180.1	流紋岩			
		1C-76	21	石皿	5.6	7.6	5.4	272.3	安山岩			
		1C-78	19	磨石	5.0	3.6	3.6	56.0	流紋岩			
		1C-79	2	敲石	89.2	54.8	47.5	283.3	ホルンフェルス			
		1C-79	16	磨石	接合後5.5	接合後6.5	接合後3.9	接合後181.8	流紋岩		d	1D-71-8と1C-79-16接合
		1C-83	9	楔形石器	3.8	1.9	1.0	8.1	チャート			
		1C-83	11	二次加工剥片	1.6	2.0	0.3	0.8	チャート			
		1C-84	2	二次加工剥片	2.0	2.4	0.5	2.0	チャート			
		1C-89	4	磨石	8.8	5.3	4.0	265.5	砂岩			同じ遺物番号のものが2点接合
		1C-95	7	楔形石器	3.5	1.7	1.3	6.7	ホルンフェルス			
		1C-95	8	剥片	2.7	2.1	1.4	7.7	チャート			
		2C-02	2	石核	3.2	3.1	1.9	15.5	砂石			
		2C-05	4	石核	1.5	3.4	0.9	3.8	頁岩			
		2C-05	10	二次加工剥片	2.3	2.4	0.7	2.4	チャート			
		2C-25	14	石皿	5.0	5.0	3.4	132.4	花崗岩			
		7C-54	1	剥片	2.9	2.0	0.7	2.9	流紋岩			
		7C-55	11	磨石	4.2	4.9	2.2	48.8	凝灰岩			
		7C-85	6	剥片	1.7	1.6	0.8	2.1	頁岩			
		8C-05	4	石核	4.7	5.8	3.9	106.6	流紋岩			
		8C-12	5	磨石	7.8	4.3	5.2	152.1	安山岩			
		1D-31	29	磨石	4.3	5.8	2.7	104.0	砂岩			
		1D-34	7	剥片	2.1	2.9	0.9	5.1	頁岩			
		1D-40	6	剥片	8.6	3.6	1.9	53.2	砂岩			
		1D-45	20	剥片	1.5	3.1	1.4	3.9	黒曜石			
		1D-55	19	剥片	1.6	2.4	0.6	1.9	黒曜石			
		1D-60	5	石皿	6.8	7.3	3.3	192.8	花崗岩			
		1D-60	15	二次加工剥片	5.7	3.1	1.3	13.8	頁岩			
		1D-67	8	磨石	4.1	6.1	5.3	162.7	流紋岩			
		1D-71	65	剥片	1.1	3.1	0.9	2.6	メノウ			
		1D-72	15	楔形石器	2.7	2.0	1.0	5.8	凝灰岩			
		1D-83	37	剥片	2.4	2.4	0.1	4.5	黒曜石			
		2D-10	6	剥片	2.9	3.0	0.8	6.0	黒曜石			
		2D-12	3	石核	7.0	3.4	1.8	65.6	メノウ			
		2D-17	9	剥片	4.5	4.6	1.6	34.4	安山岩			
		2D-41	2	剥片	2.9	2.6	0.9	4.6	頁岩			
		2D-44	1	剥片	7.3	8.5	1.5	99.3	ホルンフェルス			

掲図番号	掲載番号	遺構/グリッド番号	遺物番号	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	遺存度	接合	備考
		2D-89	43	剥片	3.0	2.5	0.8	5.8	ホルンフェルス			
		2D-98	7	剥片	3.0	2.0	0.4	2.9	粘板岩			
		2E-62	2	剥片	2.5	6.0	1.5	15.4	ホルンフェルス			
		2E-63	1	石核	4.3	6.5	2.1	59.4	安山岩			
		2E-71	2	石核	3.6	5.1	3.5	79.8	安山岩			
		2E-82	8	剥片	5.6	2.3	1.1	13.5	頁岩			
		2E-83	7	磨石	4.0	4.5	3.7	67.9	花崗岩			
		2E-99	4	石核	4.7	7.0	2.2	47.9	頁岩			
		3E-06	14	剥片	4.1	5.3	1.4	33.6	砂岩			
		3E-08	7	剥片	5.2	2.5	0.8	8.8	安山岩			
		3E-15	2	剥片	8.5	4.8	2.1	56.8	砂岩			
		3E-17	6	剥片	6.5	6.6	1.6	59.3	ホルンフェルス			
		3E-27	7	楔形石器	4.1	2.4	0.7	6.5	頁岩			
		3E-28	3	敲石	82.1	38.8	25.9	103.6	安山岩			
		3E-31	9	磨石	5.6	8.9	5.7	284.0	砂岩			
		3E-34	1	凹石	4.0	6.1	2.6	70.1	凝灰岩			
		3E-39	4	石皿	7.6	6.0	2.4	70.4	安山岩			
		3E-42	4	二次加工剥片	1.9	3.5	1.0	5.6	安山岩			
		3E-52	9	磨石	5.8	7.1	5.2	238.5	流紋岩			
		3E-53	8	剥片	3.1	6.5	1.1	33.7	片岩			
		3E-74	1	石核	3.2	3.9	1.4	7.7	安山岩（トロトロ石）			
		4E-64	1	二次加工剥片	2.7	1.8	0.6	2.0	頁岩			
		7E-?	1	剥片	2.7	3.0	1.1	6.3	黒曜石			
		8E-?	1	石核	1.2	1.5	0.9	2.3	黒曜石			
		8E-?	–	石核	1.9	3.9	1.4	7.4	黒曜石			
		8E-?	1	剥片	1.5	1.9	0.6	1.2	黒曜石			
		8E-?	1	剥片	1.2	1.6	0.3	0.4	黒曜石			
		8E-85	3	二次加工剥片	2.6	2.4	0.4	2.6	黒曜石			
		8E-97	3	二次加工剥片	3.3	5.3	1.2	18.4	黒曜石			
		8E-97	3	剥片	0.8	2.4	0.4	0.6	黒曜石			
		9E-03	3	石核	2.3	2.9	1.2	6.5	黒曜石			
		9E-17	9	剥片	3.7	1.8	1.7	8.0	黒曜石			
		9E-24	1	二次加工剥片	2.3	2.3	1.0	4.2	黒曜石			
		9E-26	1	磨石	6.7	6.8	4.9	258.4	流紋岩			
		10E-31	–	磨石	7.0	5.8	7.5	503.2	花崗岩			063-5よりグリッドへ変更
		3G-?	1	剥片	3.8	3.9	0.8	7.3	チャート			
		3G-33	4	二次加工剥片	2.7	2.5	0.9	3.9	チャート			
		3G-42	5	磨石	4.8	6.4	3.7	151.3	流紋岩			
		3G-53	4	石核	5.3	3.5	2.6	60.0	安山岩			
		3G-63	3	剥片	1.9	1.5	0.5	0.9	黒曜石			
		3G-73	9	磨石	5.3	5.4	3.8	106.0	砂岩			
		3G-73	10	礫?	58.9	33.1	23.8	41.5	凝灰岩			
		3G-73	96	石皿	4.5	5.8	2.7	76.3	凝灰岩			
		3G-73	125	磨石	3.9	5.1	3.8	94.1	砂岩			
		3G-74	77	磨石	4.0	9.2	4.2	180.1	砂岩			
		3G-85	9	磨石	5.0	6.7	3.6	183.0	砂岩			
		表採	8	剥片	1.8	2.5	0.4	1.4	黒曜石			
		不明	7	楔形石器?	3.1	1.9	0.9	3.5	?			
		不明	–	石核	4.3	4.0	2.7	70.8	安山岩			
		不明	–	剥片	2.5	1.7	0.7	1.5	頁岩			
		不明	–	剥片	1.9	1.1	0.2	0.5	頁岩			

第7表　石製品・玉類一覧

通し番号	挿図番号	掲載番号	遺構番号	遺物番号	種類	最大径(長)(mm)	最大厚(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm) 縦	孔径(mm) 横	重量(g)	石材	欠損	備考(遺構の種別等)
1	第122図	1	065	5	白玉	5.9	3.8	5.9	2.3	2.5	0.20	滑石	無	方形区画墓
2	第82図	19	073A	32	小玉	5.9	5.6	6.2	2.1	1.8	0.28	蛇紋岩？	無	竪穴住居
3	第88図	9	076	11	白玉	5.9	3.8	5.8	2.1	1.8	0.18	滑石	無	竪穴住居
4	第88図	10	076	12	白玉	5.8	3.5	5.7	1.6	1.8	0.18	滑石	無	竪穴住居
5	第88図	11	076	13	白玉	6.2	3.1	5.8	2.1	1.8	0.15	滑石	無	竪穴住居
6	第88図	12	076	14	白玉	5.8	2.7	5.7	1.8	1.7	0.10	滑石	有	竪穴住居
7	第88図	13	076	15	白玉	5.8	2.8	5.6	1.9	1.7	0.13	滑石	無	竪穴住居
8	第88図	14	076	16	白玉	6.4	3.4	6.1	2.2	1.7	0.21	滑石	無	竪穴住居
9	第88図	15	076	17	白玉	5.6	3.8	5.7	2.1	1.9	0.23	滑石	無	竪穴住居
10	第88図	16	076	18	白玉	6.1	3.6	5.8	1.5	1.3	0.19	滑石	無	竪穴住居
11	第88図	17	076	19	白玉	4.9	2.8	5.7	1.6	1.8	0.13	滑石	無	竪穴住居
12	第88図	18	076	20	白玉	6.1	4.3	5.8	2.1	2.0	0.24	滑石	無	竪穴住居
13	第88図	19	076	21	白玉	5.5	3.8	5.8	1.9	1.8	0.17	滑石	無	竪穴住居
14	第88図	20	076	22	白玉	5.7	4.1	5.8	1.9	1.8	0.19	滑石	有	竪穴住居
15	第88図	21	076	23	白玉	5.5	2.3	5.2	1.5	1.7	0.12	滑石	有	竪穴住居
16	第88図	22	076	24	白玉	6.2	1.8	5.9	1.9	1.8	0.12	滑石	無	竪穴住居
17	第88図	23	076	25	白玉	6.0	2.8	6.2	1.5	1.8	0.15	滑石	無	竪穴住居
18	第88図	24	076	26	白玉	6.2	3.4	5.8	1.9	1.2	0.20	滑石	無	竪穴住居
19	第88図	25	076	27	白玉	6.1	2.9	5.8	2.0	1.8	0.13	滑石	無	竪穴住居
20	第88図	26	076	28	白玉	6.1	3.0	5.9	1.9	1.5	0.18	滑石	無	竪穴住居
21	第88図	27	076	29	白玉	5.7	2.6	5.5	1.8	1.8	0.13	滑石	無	竪穴住居
22	第88図	28	076	30	白玉	6.1	3.8	5.9	1.8	1.6	0.23	滑石	無	竪穴住居
23	第88図	29	076	31	白玉	5.8	3.1	5.9	2.0	1.5	0.16	滑石	無	竪穴住居
24	第88図	30	076	32	白玉	5.9	2.8	5.7	1.9	1.8	0.15	滑石	無	竪穴住居
25	第88図	31	076	33	白玉	5.9	3.8	5.7	1.8	1.6	0.23	滑石	無	竪穴住居
26	第88図	32	076	34	白玉	5.9	3.0	5.7	2.1	1.8	0.13	滑石	有	竪穴住居
27	第88図	33	076	35	白玉	5.9	3.1	5.5	1.9	1.4	①0.16	滑石	無	竪穴住居
28	第88図	34	076	35	白玉	5.9	2.7	5.7	2.1	1.8	②0.19	滑石	無	竪穴住居
29	第88図	35	076	35	白玉	5.9	3.4	5.5	2.1	1.8	③0.21	滑石	無	竪穴住居
30	第88図	36	076	35	白玉	5.9	2.9	6.1	1.8	1.7	①0.16	滑石	無	竪穴住居
31	第88図	37	076	35	白玉	5.8	2.8	5.9	1.8	1.7	②0.13	滑石	無	竪穴住居
32	第88図	38	076	35	白玉	5.7	2.2	5.7	1.8	1.7	③0.14	滑石	無	竪穴住居
33	第88図	39	076	35	白玉	5.9	2.9	5.7	1.3	1.3	①0.13	滑石	無	竪穴住居
34	第88図	40	076	35	白玉	5.4	2.1	5.8	1.8	1.7	②0.11	滑石	無	竪穴住居
35	第88図	41	076	35	白玉	5.7	3.8	5.9	1.8	1.7	③0.21	滑石	有	竪穴住居
36	第88図	42	076	36	白玉	5.8	2.4	6.0	1.5	1.7	①0.31	滑石	無	竪穴住居
37	第88図	43	076	36	白玉	5.9	2.9	5.8	1.9	1.8	②0.20	滑石	無	竪穴住居
38	第88図	44	076	37	白玉	5.9	3.2	5.8	1.9	1.9	①0.21	滑石	有	竪穴住居
39	第88図	45	076	37	白玉	5.8	3.9	5.4	1.8	1.6	②0.22	滑石	無	竪穴住居
40	第88図	46	076	37	白玉	5.4	2.5	5.2	1.7	1.5	③0.15	滑石	無	竪穴住居
41	第88図	47	076	37	白玉	5.8	3.4	5.5	1.9	1.6	①0.22	滑石	無	竪穴住居
42	第88図	48	076	37	白玉	5.9	2.3	5.6	1.9	2.2	②0.11	滑石	無	竪穴住居
43	－		076	37	白玉	－	－	－	－	－	③0.06	不明	一部	竪穴住居
44	第88図	49	076	38	白玉	5.9	3.1	5.5	1.8	1.9	①0.20	滑石	無	竪穴住居
45	第88図	50	076	38	白玉	5.2	2.1	5.5	1.9	1.9	②0.14	滑石	無	竪穴住居
46	第88図	51	076	39	白玉	5.9	2.9	5.8	1.9	1.8	③0.15	滑石	無	竪穴住居
47	第88図	52	076	39	白玉	6.0	3.9	5.8	1.9	1.7	①0.22	滑石	無	竪穴住居
48	第88図	53	076	39	白玉	5.8	2.9	5.7	1.7	1.8	②0.16	滑石	無	竪穴住居
49	第88図	54	076	41	白玉	5.9	2.9	5.6	1.8	1.7	0.14	滑石	無	竪穴住居
50	第88図	55	076	42	白玉	5.6	3.2	5.7	1.9	1.8	0.19	滑石	無	竪穴住居
51	－		076	43	白玉	－	－	－	－	－	0.04	不明	一部	竪穴住居
52	第88図	56	076	44	白玉	5.8	3.2	5.4	1.5	1.9	0.17	滑石	無	竪穴住居
53	第88図	57	076	45	白玉	5.5	3.4	5.4	1.9	1.7	0.23	滑石	無	竪穴住居
54	第88図	58	076	46	白玉	5.7	2.9	5.6	1.8	1.9	0.15	滑石	無	竪穴住居
55	第88図	59	076	47	白玉	6.0	2.9	5.8	1.3	1.8	0.19	滑石	無	竪穴住居
56	第88図	60	076	48	白玉	5.3	2.9	5.2	1.8	1.7	0.11	滑石	無	竪穴住居
57	第88図	61	076	49	白玉	5.7	3.8	5.8	1.8	1.7	0.21	滑石	無	竪穴住居
58	第88図	62	076	50	白玉	5.1	2.9	5.4	1.6	1.8	0.17	滑石	有	竪穴住居
59	第88図	63	076	51	白玉	5.8	2.9	5.7	1.8	1.9	0.15	滑石	無	竪穴住居
60	第88図	64	076	52	白玉	5.8	2.4	5.6	1.9	1.9	0.13	滑石	無	竪穴住居
61	第88図	65	076	53	白玉	4.9	3.0	5.7	1.5	1.7	0.14	滑石	無	竪穴住居
62	第88図	66	076	54	白玉	5.8	2.3	4.9	1.8	1.6	0.10	滑石	無	竪穴住居
63	第88図	67	076	55	白玉	5.3	2.0	5.4	1.9	1.8	0.10	滑石	無	竪穴住居
64	第88図	68	076	56	白玉	6.0	3.4	5.8	2.1	1.9	0.23	滑石	無	竪穴住居
65	－		076	57	白玉	－	－	－	－	－	0.11	不明	一部	竪穴住居
66	第88図	69	076	58	白玉	5.2	1.6	5.7	1.9	1.8	0.10	滑石	無	竪穴住居
67	第88図	70	076	59	白玉	5.6	1.9	5.4	1.9	1.7	0.12	滑石	無	竪穴住居
68	－		076	60	白玉	－	－	－	－	－	0.14	滑石	無	竪穴住居
69	第88図	71	076	61	白玉	5.3	3.9	5.2	1.9	1.9	0.18	滑石	無	竪穴住居
70	第88図	72	076	62	白玉	5.6	3.8	5.8	1.9	1.8	0.21	滑石	一部	竪穴住居

通し番号	掲図番号	掲載番号	遺構番号	遺物番号	種類	最大径(長)(mm)	最大厚(mm)	最大幅(mm)	孔径(mm) 縦	孔径(mm) 横	重量(g)	石材	欠損	備考(遺構の種別等)
71	−		076	63	臼玉	−	−	−	−	−	0.07	不明	一部	竪穴住居
72	第88図	73	076	64	臼玉	5.1	2.1	4.8	1.9	1.8	0.08	滑石	無	竪穴住居
73	第88図	74	076	65	臼玉	5.8	3.1	5.6	1.9	1.8	0.21	滑石	無	竪穴住居
74	第88図	75	076	66	臼玉	5.9	2.9	5.3	1.9	1.7	0.14	滑石	有	竪穴住居
75	−		076	69	臼玉	−	−	−	−	−	0.11	不明	一部	竪穴住居
76	第88図	76	076	70	臼玉	5.5	2.9	5.3	1.8	2.1	0.16	滑石	無	竪穴住居
77	第88図	77	076	71	臼玉	5.6	2.4	4.7	1.8	1.4	0.09	滑石	無	竪穴住居
78	第88図	78	076	76	臼玉	5.4	3.3	5.6	1.8	1.7	0.21	滑石	無	竪穴住居
79	第88図	79	076	77	臼玉	5.3	2.9	4.9	1.5	1.7	0.11	滑石	無	竪穴住居
80	第88図	80	076	78	臼玉	5.7	2.9	5.8	1.6	1.9	0.13	滑石	無	竪穴住居
81	第88図	81	076	79	臼玉	5.5	3.2	5.7	1.9	1.8	0.14	滑石	無	竪穴住居
82	第88図	82	076	80	臼玉	5.0	3.9	5.8	1.4	1.8	0.17	滑石	無	竪穴住居
83	第88図	83	076	84	臼玉	5.2	3.2	5.5	1.8	1.6	0.18	滑石	無	竪穴住居
84	第88図	84	076	85	臼玉	5.9	2.9	5.8	1.8	1.7	0.19	滑石	無	竪穴住居
85	第88図	85	076	86	臼玉	5.8	2.9	6.0	1.8	1.9	0.18	滑石	無	竪穴住居
86	第88図	86	076	87	臼玉	5.1	2.7	5.3	1.7	1.8	0.12	滑石	無	竪穴住居
87	第88図	87	076	88	臼玉	5.9	2.5	5.1	1.9	1.6	0.10	滑石	無	竪穴住居
88	第108図	12	091	12	石製品	51.1	4.7	18.2	−	−	3.60	粘板岩	一部	竪穴住居
89	第116図	5	表採	−	有孔円板	20.9	2.8	23.8	−	1.7	2.80	滑石	無	
90	第94図	32	078	261	砥石	66.2	28.2	47.7	−	−	89.20	凝灰岩	一部	竪穴住居
91	第94図	33	078	242	砥石	48.6	12.5	46.2	−	−	32.50	砂岩	一部	竪穴住居
92	第114図	3	066	066	砥石	40.3	15.8	27.6	−	−	26.30	凝灰岩	一部	溝状遺構
93	第116図	6	2D−26	2	砥石	68.4	21.5	35.0	−	−	47.1	砂岩	一部	
94	第116図	7	2D−26	3	砥石	55.3	18.2	35.6	−	−	41.8	凝灰岩	一部	
95	第116図	8	2E−82	1	砥石	57.6	20.2	42.8	−	−	61.5	砂岩	一部	
96	第116図	9	3G−23	2	砥石	45.6	11.8	46.8	−	−	36.6	凝灰岩	一部	
97	第116図	10	9E−53	37	砥石	39.6	8.2	18.9	−	−	8.10	粘板岩	一部	

第8表　金属器一覧

掲図番号	掲載番号	遺構番号	遺物番号	種類	遺存状況	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	遺構種	遺構時期	検出位置	備考
第74図	4	069	17	鏃	折損	49.7	23.1	2.8	22.3	竪穴住居	古墳後期	南東壁際床直	
第94図	35	078	4	鉄鏃	折損	58.9	7.3	3.0	5.2	竪穴住居	古墳後期	北西壁際床直	
第97図	18	080	44	刀子	破損 (2点)	34.3 33.6	11.4 7.0	− 2.3	3.2 3.2	竪穴住居	古墳中期	西側壁寄り床直	
第102図	21	084	70	刀子	破損	68.9	16.8	13.3	9.2	竪穴住居	古墳後期	中央南西寄り下層	
第116図	11	9D−23	2	鉄斧	完形	62.9	48.2	12.0	72.1	遺構外グリッド	古墳時代		
第145図	3	3E−37	1	小刀	破損	84.8	23.6	3.5	21.4	遺構外グリッド	奈良・平安時代		目釘孔3
第145図	4	9E−28	14	鉄鏃	破損	34.8	25.5	−	3.5	遺構外グリッド	奈良・平安時代		
		7C−26	4	スラグ	破砕	26.7	16.9	18.3	6.3	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓
第145図	5	7C−37	4	スラグ	破砕	30.3	37.9	23.7	20.9	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓
第145図	6	7C−37	6	スラグ	破砕	21.8	32.1	15.8	12.4	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓
第145図	7	7C−37	11−1	スラグ	破砕	51.4	70.8	21.2	54.5	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓
第145図	8	7C−37	11−2	スラグ	破砕	54.8	61.2	29.5	142.9	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓
第145図	9	7C−38	4	スラグ	破砕	64.0	67.5	18.0	127.1	遺構外グリッド	奈良・平安時代		炉内滓

第9表　銭貨一覧

挿図番号		遺構・遺物番号		銭種	王朝名等	書体	初鋳年	縦銭径(mm)	横銭径(mm)	縦内径(mm)	横内径(mm)	外縁厚(mm)	外縁幅(mm)	背文	重量(g)	備考
第146図	1	8C表採		01	政和通寶	北宋	行書	1111	24.3	24.0	7.2	7.2	1.0	1.9	2.21	
第146図	2	10D－45		04－1	寛永通寶	新寛永		1668	25.4	25.4	5.9	5.9	1.2	2.4	「文」	3.20	
第146図	3	10D－45		04－2	寛永通寶	古寛永		1636	24.6	24.6	6.3	6.3	1.3	1.9		3.61	
第146図	4	10D－45		04－3	寛永通寶	古寛永		1636	24.8	24.7	6.9	6.9	1.2	2.2		3.44	
第146図	5	8E		02－1	寛永通寶	新寛永		1668	23.4	23.4	5.8	5.8	1.1	1.4	「長」	2.82	
第146図	6	8E		02－2	寛永通寶	新寛永		1668	21.6	21.6	7.1	7.0	1.0	1.6		1.94	
第146図	7	8E		02－3	寛永通寶	新寛永		1668	21.5	21.6	7.6	7.3	0.7	1.4		1.34	
第146図	8	44号墳（堀）		01－4	寛永通寶	新寛永		1668	23.3	23.2	6.3	6.2	0.6	2.2		2.51	背面鉄銹付着
第146図	9	44号墳（堀）		2	寛永通寶	新寛永		1668	28.1	28.4	7.3	7.3	1.1	3.4		4.43	
第146図	10	44号墳（堀）一括		1	寛永通寶	鉄四文銭		1861	28.3	28.3	6.5	6.5	1.9	4.3	11波	6.57	
第146図	11	44号墳（堀）一括	02	寛永通寶	鉄四文銭		1861	24.8	24.8	6.5	6.5	1.2	2.1	11波	3.25	
第146図	12	44号墳（堀）一括	3A	寛永通寶	鉄四文銭		1861	27.7	27.7	6.3	6.3	1.3	3.5	11波	5.69	
第146図	13	44号墳（堀）一括	8	寛永通寶	鉄四文銭		1861	28.9	28.8	6.7	6.7	1.5	4.2	11波	5.40	
第146図	14	44号墳（堀）一括	9	寛永通寶	鉄四文銭		1861	28.0	28.4	6.9	6.9	1.4	4.2	11波	4.39	
		10C－09		14	寛永通寶？	鉄一文銭？		1738	24.5	24.4	7.7	7.7	1.1	2.0		3.39	
		44号墳（堀）		01－1	不明	鉄銭			25.5	25.7	7.3	7.3	1.7	2.0		3.24	
		44号墳（堀）		01－2	寛永通寶	鉄一文銭？		1738	24.4	24.7	6.6	6.8	1.7	2.1		3.30	
		44号墳（堀）		01－3	寛永通寶	鉄一文銭		1738	21.3	23.4	7.0	7.0	1.6	2.0		3.55	
		44号墳（堀）		01－5	不明	鉄銭			23.8	23.9	6.8	6.8	1.7	2.3		3.59	
		44号墳（堀）		01－5	不明	鉄銭			24.6	24.5	7.2	7.2	1.4	2.3		3.53	
		44号墳（堀）		01－6	不明	鉄銭			23.7	24.2	6.4	6.8	1.4	1.8		2.75	
		44号墳（堀）一括		3B	寛永通寶？	鉄四文銭？			28.7	28.7	5.7	5.7	1.9	不明		6.31	第146図12と融着
		44号墳（堀）一括		4A	寛永通寶	鉄四文銭		1861	28.0	28.1	7.1	7.0	1.7	3.2	11波	4.73	
		44号墳（堀）一括		4B	寛永通寶	鉄四文銭		1861	28.4	28.3	7.7	7.8	1.2	3.1	11波	4.54	
		44号墳（堀）一括		5A	寛永通寶	鉄四文銭？			27.9	27.8	5.9	5.9	1.5	1.6		4.53	
		44号墳（堀）一括		5B	寛永通寶	鉄四文銭？			29.4	27.7	6.1	6.1	1.4	4.0		5.47	
		44号墳（堀）一括		6	寛永通寶	鉄四文銭		1861	25.8	26.0	7.6	7.6	1.8	2.4	11波	6.06	
		44号墳（堀）一括		7	寛永通寶	鉄四文銭？			28.9	28.7	6.7	6.7	2.0	3.5		6.07	
		44号墳（堀）一括		10	不明	鉄銭			－	－	－	－	－	－		2.01	小破片，計測不可

第10表　動・植物遺体一覧

新サンプルNo.	遺構No.	遺構種	遺構の時期	採取法		貝ブロック/骨					貝サンプル		遺物出土（●＝検出）				備考
				発掘	集計	数	垂直	平面	規模	厚	数	体積	サンプル篩別分	任意採集			
									cm				貝	貝	人骨	炭化植物	
073－a	073	竪穴住居	古墳時代後期			1	上層	壁端	15'15	?	1	1		●			
073－b	073	竪穴住居	古墳時代後期			1	下層	壁端	30'10	?	1	1		●			
073－c	073	竪穴住居	古墳時代後期			1	下層	壁端	5'5	?	1	1		●			
087－a	087	竪穴住居	古墳時代中期	全量	全量	1	上層	住居中央	20'10		1	1	●				
087－b	087	竪穴住居	古墳時代中期	全量	全量	1	上層	壁端	30'20		1	1	●				
087－c	087	竪穴住居	古墳時代中期	全量	全量	1	上層	壁端	30'30		1	1	●				
087－d	087	竪穴住居	古墳時代中期			1	下層	住居中央	－					●			土器の中の貝
087－e	087	竪穴住居	古墳時代中期			1	上層	住居中央	15'10		1	1		●			
	087	竪穴住居	古墳時代中期													●	
	090	方形区画墓	奈良・平安時代												●		焼骨と骨粉の混ざった土
	097	方墳	古墳時代後期？												●		図面に記載　採集せず
	167	土坑	時期不明				中層								●		骨粉

第11表　土器観察表

（縄文時代土器片除く）

遺構No	掲図No	時　期	種　別	器　形	遺存度 %	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胴部最大径 cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
027	第14図 1	縄文時代早期	炉穴	縄文　深鉢	30	(24.6)	(27.6)	–	–	繊維、白色粒子	良	褐色			茅山上層　条痕文
027	第14図 2	縄文時代早期	炉穴	縄文　深鉢	30	(21.5)	(20.4)	–	–	繊維、白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			茅山上層　条痕文
033	第118図 1	弥生・平安時代	竪穴住居	須恵器　坏	90	13.4	4.1	8.0	–	白色粒子（多）	良	灰色	手持ちヘラケズリ		
033	第118図 2	弥生・平安時代	竪穴住居	土師器　坏	95	12.9	4.3	7.6	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	橙褐色	回転糸切り		体部外面に墨書
033	第118図 3	弥生・平安時代	竪穴住居	土師器　坏	30	(7.8)	3.4	(3.6)	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	にぶい黄橙色			
033	第118図 4	弥生・平安時代	竪穴住居	土師器　坏	20	(7.8)	3.5	(4.0)	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	褐色			
033	第118図 5	弥生・平安時代	竪穴住居	土師器　甕	25	(20.4)	(14.2)	–	(19.8)	白色粒子（多）、赤色粒子	良	橙褐色			外面に山砂状の付着物あり
033	第118図 6	弥生・平安時代	竪穴住居	須恵器　甕	20	(37.0)	32.6	(15.0)	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			五孔の甕
036	第142図036－1	縄文時代早期	炉穴	縄文　深鉢	60	19.4	23.2	–	–	繊維、白色粒子、赤色粒子	良	暗褐色			茅山上層　条痕文　補修孔2ヶ
046・047	第144図 046・047－1	縄文時代早期	炉穴	縄文　深鉢	40	(27.6)	(26.3)	–	–	繊維、白色粒子、赤色粒子（大）	良	暗褐色			茅山上層　条痕文
051	第146図051－1	縄文時代早期	炉穴	縄文　深鉢	20	(38.0)	(27.6)	–	–	繊維、白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			茅山上層　条痕文
063	第110図 1	古墳時代	方墳	土師器　坏	10	–	(2.5)	6.4	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	橙褐色	内黒		
063	第110図 2	古墳時代	方墳	土師器　坏	5	–	(2.0)	(5.9)	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色	回転糸切り		
064	第111図 1	古墳時代	方墳	土師器　高坏	–	–	(4.0)	–	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		外赤	
064	第111図 2	古墳時代	方墳	土師器　高坏	10	–	(4.7)	–	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色		坏部内面・外赤	
066	第114図 1	古墳時代	溝状遺構	土師器　鉢	40	(12.6)	7.6	(5.6)	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	橙褐色		内・口縁一体部外赤	
066	第114図 2	古墳時代	溝状遺構	土師器　高坏	20	–	(5.8)	(9.0)	–	赤色粒子（大・多）、白色粒子	良	明赤褐色			
067	第133図 1	弥生・平安時代	溝状遺構	土師器　坏	10	–	(3.0)	(5.6)	–	白色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色	手持ちヘラケズリ		
067	第133図 2	弥生・平安時代	溝状遺構	土師器　坏	10	–	(2.0)	(5.0)	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色	手持ちヘラケズリ		
067	第133図 3	弥生・平安時代	溝状遺構	土師器　坏	10	–	(0.9)	6.7	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色	回転糸切り		
068	第72図 1	古墳時代	竪穴住居	須恵器　坏	100	11.2	4.9	–	–	白色粒子（大・多）、赤色粒子（大）、4mm前後の小石	良	青灰色	回転ヘラケズリ		
068	第72図 2	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	95	12.0	14.2	11.0	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	橙褐色			
068	第72図 3	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	95	(16.3)	9.3	10.3	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	明褐色		坏部内・外赤	
068	第72図 4	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	40	–	(4.2)	9.5	–	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		坏部内・外赤	
068	第72図 5	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	40	–	(5.0)	9.8	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		坏部内・外赤	
068	第72図 6	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	35	–	(4.6)	9.2	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内・外赤	
068	第72図 7	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	30	–	(5.5)	(9.8)	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		坏部内・外赤	
068	第72図 8	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	25	–	(5.0)	(10.6)	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	にぶい黄橙色		坏部内・外赤	
068	第72図 9	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	70	19.3	32.6	7.0	26.0	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
068	第72図10	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	65	(19.2)	28.3	7.4	28.7	白色粒子（多）、赤色粒子（大・多）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
068	第72図11	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	50	(17.8)	(23.0)	–	22.6	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
069	第74図 1	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	75	13.4	8.6	7.5	–	白色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内・口縁部外赤	
069	第74図 2	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	30	(21.8)	(97+157)	(7.8)	–	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色			接合しない同一個体
070	第75図 1	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	80	14.3	5.6	–	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大・多）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
070	第75図 2	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	10	(14.4)	(3.8)	–	–	白色粒子、赤色粒子（大・多）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内外赤	
070	第75図 3	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	75	14.7	10.2	10.4	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	明赤褐色		坏部内・外赤	
070	第75図 4	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	95	10.0	8.0	–	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
070	第75図 5	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	65	13.0	11.0	6.4	14.6	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
070	第75図 6	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	85	20.1	23.4	6.4	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗褐色			
070	第75図 7	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	90	15.2	32.0	9.1	27.5	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
070	第75図 8	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	40	15.6	(12.8)	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
070	第76図 9	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	50	(14.7)	(22.8)	–	(26.6)	白色粒子、赤色粒子	良	にぶい黄橙色			

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	掃除No.	時期	種別	器形	遺存度%	口径cm	器高cm	底径cm	胴部最大径cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
070	第76図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	60	15.4	(18.5)	－	20.9	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色			胴部外面に白っぽい付着物あり
071	第77図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	85	11.5	4.5	－	－	白色粒子（多）	良	内面 黄褐色 外面 暗褐色		内・口縁外黒	内面と口縁外面は黒っぽく変色した部分が斑に見られる
071	第77図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	40	(12.4)	4.5	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		内外赤（厚減）	
071	第77図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	40	(13.2)	4.5	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	にぶい黄橙色			
071	第77図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	25	(22.9)	21.0	(8.0)	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
071	第77図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	80	(21.6)	19.3	8.4	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
071	第78図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	90	18.8	30.3	6.8	21.2	白色粒子、赤色粒子、1～4mmの小石（多）	良	褐色			
071	第78図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	70	17.2	25.5	6.0	20.0	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			外面に山砂状の付着物が広範囲にあり
071	第78図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	70	17.6	24.2	5.8	19.4	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			胴部外面に山砂状の付着物あり
071	第78図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	25	(20.7)	(14.9)	－	(23.2)	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			外面に山砂状の付着物あり
072A	第80図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	11.1	5.3	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
072A	第80図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	60	(14.9)	4.5	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内外赤	
072A	第80図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	40	(12.8)	4.3	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内・口縁部外赤	
072A	第80図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	90	10.7	8.4	8.3	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		坏部内・外赤	底形の遺孔5ヶ
072A	第80図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	13.0	(5.8)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		赤彩の可能性あり	
072A	第80図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	30	－	(5.2)	9.6	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		外赤	
072A	第80図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	100	10.0	12.3	4.8	12.6	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
072A	第80図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	16.4	30.4	7.4	26.1	白色粒子（多）、赤色粒子（大・多）、白色針状粒子	良	赤褐色			外面胴部上位にスス付着
073A	第81図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	80	(12.2)	5.8	4.0	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色			
073A	第81図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	65	(12.8)	6.6	－	－	白色粒子（多）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内・口縁一体部外赤	
073A	第81図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	(13.3)	5.1	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内・口縁部外赤	
073A	第81図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	65	(14.0)	5.2	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	橙褐色		内・口縁一体部外赤	
073A	第82図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	35	(12.0)	(5.3)	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		内外赤か	
073A	第82図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	70	(13.4)	9.4	(9.4)	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
073A	第82図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	50	(14.8)	(9.8)	－	－	白色粒子（多）、5mm前後の小石（少）	良	赤褐色		坏部内・外赤	
073A	第82図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	55	13.5	(4.3)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		内外赤	
073A	第82図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	70	－	(10.3)	－	－	白色粒子（多）	良	赤褐色			
073A	第82図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	－	(6.5)	10.4	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
073A	第82図11	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	－	(5.4)	9.3	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	にぶい橙色		坏部内・外赤	
073A	第82図12	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	－	(6.5)	11.1	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	暗赤褐色			外面スス付着
073A	第82図13	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	25	－	(4.6)	(9.8)	－	白色粒子	良	赤褐色		外赤	
073A	第82図14	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	25	－	(5.4)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
073A	第82図15	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	10	－	(4.0)	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		外赤	
073A	第82図16	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	10	－	(5.5)	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
073A	第82図17	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	60	(20.6)	25.5	(7.7)	20.3	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
073A	第82図18	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	30	(14.0)	(13.4)	－	(16.2)	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗褐色			
074	第83図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	11.8	6.5	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	暗褐色			
074	第83図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	11.5	5.8	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	明赤褐色			
074	第83図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	12.5	5.2	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内・口縁～体部外赤	

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	挿図No.	時期	種別	器形	遺存度 %	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胴部最大径 cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
074	第83図4	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	30	(13.7)	5.9	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	明褐色		内・口縁～体部外赤
074	第83図5	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	20	(14.4)	(5.6)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	橙褐色		内・口縁～体部外赤
074	第83図6	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	95	13.7	8.9	9.9	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	暗褐色		
074	第83図7	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	95	13.3	10.3	8.6	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		外面スス付着
074	第83図8	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	75	(14.1)	9.7	10.5	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
074	第83図9	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	60	(14.2)	(9.2)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	坏部内・外赤	
074	第83図10	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	80	13.8	(14.6)	－	16.1	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		
074	第83図11	古墳時代	竪穴住居	土師器	甑	95	18.7	21.1	6.6	18.3	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		
074	第83図12	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	40	(15.1)	30.5	7.6	(25.5)	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内外面スス状の付着物あり
074	第83図13	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	90	15.2	28.9	6.8	24.6	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		
075	第84図1	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	70	(12.7)	5.7	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
075	第84図2	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	20	(14.0)	(4.0)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	黒褐色		
075	第84図3	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	15	(12.1)	(5.9)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色	内・口縁～体部外赤	
075	第84図4	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	25	(9.5)	(3.2)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色	内外赤	
075	第85図5	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	10	(11.9)	(3.0)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	内外赤	
075	第85図6	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	50	(12.8)	(6.3)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		
075	第85図7	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	30	－	(4.4)	9.4	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
075	第85図8	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	40	－	(4.9)	9.2	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色	外赤	
075	第85図9	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	25	－	(4.5)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
075	第85図10	古墳時代	竪穴住居	土師器	鉢	70	－	(9.5)	6.0	(13.1)	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		
075	第85図11	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	70	11.7	(18.7)	－	13.9	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
075	第85図12	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	50	(13.4)	(10.4)	－	15.4	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	にぶい橙色		外面スス付着
075	第85図13	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	25	15.0	(7.0)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	明赤褐色		
075	第85図14	古墳時代	竪穴住居	土師器ミニチュア	甕	100	2.8	3.4	2.0	－	白色粒子、赤色粒子（少）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		
075	第85図15	古墳時代	竪穴住居	土師器ミニチュア	甕	100	2.5	2.3	2.6	－	白色粒子、赤色粒子（少）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		
075	第85図16	古墳時代	竪穴住居	土師器ミニチュア	甕	60	(2.0)	3.3	－	－	白色粒子、赤色粒子、5mmの小石1ヶ	良	赤褐色		
075	第85図17	古墳時代	竪穴住居	土師器ね	手捏	50	(5.6)	2.6	2.6	－	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色		
076	第87図1	古墳時代	竪穴住居	土師器	坏	95	15.1	5.3	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色	口縁～体部内外赤	
076	第87図2	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	90	14.1	9.6	9.2	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	橙褐色	坏部内・外赤	
076	第87図3	古墳時代	竪穴住居	土師器	高坏	30	－	(5.1)	10.3	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色	外赤か	
076	第87図4	古墳時代	竪穴住居	土師器	壺	85	－	(21.6)	－	21.6	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	口縁内・外赤	
076	第87図5	古墳時代	竪穴住居	土師器	甑	90	22.1	22.2	(6.9)	21.9	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	内面 黒褐色 外面 褐色		
076	第87図6	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	75	16.1	28.7	(6.6)	23.9	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗赤褐色		
076	第87図7	古墳時代	竪穴住居	土師器	甕	50	－	(23.3)	6.8	(24.2)	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	挿図No.	時期	種別	器形	遺存度 %	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胴部最大径 cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
077	第89図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	75	14.0	5.6	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色		内・口縁～体部外赤	
077	第89図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	70	14.5	5.6	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内・口縁～体部外赤	
077	第89図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	80	14.5	9.3	9.5	–	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内・外赤	
077	第89図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	90	15.0	21.5	(5.9)	20.0	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
077	第89図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	15.8	28.0	7.0	25.3	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			外面屑部に山砂・粘土状の塊付着
077	第89図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	50	14.2	(17.4)	–	22.7	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	にぶい赤褐色			
078	第92図1	古墳時代	竪穴住居	須恵器 坏蓋	10	–	(2.5)	–	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	灰色			
078	第92図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	13.9	5.6	–	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		内外赤	
078	第92図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	50	15.7	5.1	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色			
078	第92図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	50	14.4	4.8	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白っぽい粘土塊（多）	良	にぶい黄橙色		内外赤	
078	第92図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	11.4	5.6	–	–	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内・口縁～体部外赤	
078	第92図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	35	(13.0)	4.9	–	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色			
078	第92図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	20	(13.0)	(4.5)	–	–	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		内・口縁部外赤	
078	第92図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	90	15.0	10.3	10.6	–	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内外赤	脚部内面も赤彩している
078	第92図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	95	15.0	11.1	9.2	–	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内・口縁外赤	
078	第92図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	60	(15.2)	9.5	9.0	–	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗褐色			
078	第92図11	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	50	(14.2)	10.2	9.0	–	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		坏部脚裾部内・外赤	
078	第92図12	古墳時代	竪穴住居	土師器 椀	75	12.8	6.8	–	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	褐色		内外赤	
078	第92図13	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	95	7.2	6.8	–	7.8	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色			
078	第92図14	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	60	–	(6.0)	3.4	–	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			
078	第92図15	古墳時代	竪穴住居	土師器 壺	95	9.7	13.0	4.5	11.7	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
078	第92図16	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	80	15.9	15.0	6.5	18.2	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
078	第92図17	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	85	15.7	13.5	5.6	15.5	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第92図18	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	11.1	9.8	–	11.7	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
078	第92図19	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	60	(17.6)	12.1	6.0	–	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			
078	第92図20	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	80	26.3	29.4	7.5	26.9	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第93図21	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	95	22.9	20.0	6.9	21.8	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	内面 黒褐色 外面 赤褐色			
078	第93図22	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	90	24.3	25.6	(6.7)	22.6	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第93図23	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	17.0	32.1	6.4	22.9	白色粒子（多）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第93図24	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	50	16.5	(26.1)	–	19.8	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第93図25	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	70	16.7	(21.1)	–	22.7	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
078	第93図26	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	45	19.3	(19.0)	–	(27.8)	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	褐色			外面スス付着
078	第93図27	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	50	13.4	(9.7)	–	13.9	白色粒子（多）	良	赤褐色			
078	第94図28	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	60	15.5	(16.5)	–	18.2	白色粒子、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
078	第94図29	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	70	14.5	(17.4)	–	16.0	白色粒子（多）、白色針状粒子	良	赤褐色			
078	第94図30	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕付甕	60	13.8	(18.1)	–	17.8	白色粒子（多）	良	暗褐色			胴部上半に縦7.0cm×横7.8cmの窓あり
079	第95図1	古墳時代	竪穴住居	須恵器 坏蓋	10	(12.4)	(4.5)	–	–	白色粒子、黒色粒子	良	灰色			
079	第95図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	15	(13.4)	(3.8)	–	–	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	橙褐色		内外赤	
079	第95図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	20	(9.6)	(8.7)	–	(11.8)	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子	良	赤褐色			

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	神図No.	時　期	種　別	器　形	遺存度 %	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胴部最大径 cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
079	第95図4	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	10	(13.0)	(7.8)	－	(15.2)	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
079	第95図5	古墳時代	竪穴住居	土師器　ミニチュア	70	－	(3.3)	3.3	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
080	第96図1	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	90	(14.1)	9.1	(9.2)	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色		坏部内・外赤	
080	第96図2	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	80	13.5	(9.1)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			坏部内外面粘土状の付着物あり
080	第96図3	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	50	12.4	(7.0)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
080	第96図4	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	40	10.8	(6.4)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		坏部口縁～体部内・外赤	
080	第96図5	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	30	13.6	(4.2)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	橙褐色		内外赤	
080	第96図6	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	25	(14.5)	(4.8)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	明褐色		内外赤	
080	第96図7	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	100	11.8	7.1	4.9	－	白色粒子（多）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内外赤	
080	第96図8	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	50	(11.8)	6.0	4.6	－	白色粒子（多）	良	赤褐色		口縁～体部内外赤	
080	第96図9	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	95	11.4	7.6	－	13.8	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		口縁～体部内外赤	
080	第96図10	古墳時代	竪穴住居	土師器　壺	90	8.4	11.0	－	11.0	白色粒子（多）、白色針状粒子（少）	良	暗赤褐色			
080	第96図11	古墳時代	竪穴住居	土師器　壺	95	(8.5)	13.9	3.9	12.4	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	暗褐色		口縁内・口縁～胴部上位外赤	
080	第97図12	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	80	17.8	(21.0)	－	23.8	白色粒子（多）	良	暗赤褐色			
080	第97図13	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	40	16.6	(14.8)	－	25.2	白色粒子（多）、白色針状粒子（少）	良	暗赤褐色			
080	第97図14	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	40	14.6	(16.5)	－	18.0	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗赤褐色			
080	第97図15	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	50	－	(32.4)	(7.4)	(32.4)	白色粒子（多）、赤色粒子（大・多）	良	赤褐色			
080	第97図16	古墳時代	竪穴住居	土師器　ミニチュア	25	－	(2.9)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
081	第98図1	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	75	(13.6)	5.6	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内・口縁部外黒	
081	第98図2	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	75	13.7	4.7	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内外黒	
081	第98図3	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	70	－	(5.3)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	赤褐色			
081	第98図4	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	75	12.4	(3.9)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	にぶい黄橙色		内外黒（淡か）	
081	第98図5	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	50	(12.8)	(3.5)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	にぶい黄橙色		内外黒（淡か）	
081	第98図6	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	30	(13.8)	4.0	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色		内外黒（淡か）	
081	第98図7	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	15	(17.8)	(6.4)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	内面　暗褐色 外面　赤褐色		坏部内黒	
081	第98図8	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	70	16.5	14.9	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内黒	
081	第98図9	古墳時代	竪穴住居	土師器　甕	95	18.0	30.0	8.0	20.2	白色粒子、赤色粒子（大）	良	赤褐色			胴部外面に山砂状の付着物あり
081	第98図10	古墳時代	竪穴住居	土師器　ミニチュア	100	5.5	5.4	－	5.6	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			
081	第98図11	古墳時代	竪穴住居	土師器　手捏ね	70	－	(3.4)	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			
082	第99図1	古墳時代	竪穴住居	須恵器　坏	30	－	(4.3)	－	－	白色粒子（多）	良	灰色			
082	第99図2	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	95	10.3	5.4	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	にぶい黄橙色		内外黒（淡か）	
082	第99図3	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	40	(13.7)	4.5	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		内外赤	
082	第99図4	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	20	(11.8)	(8.4)	－	(13.7)	白色粒子（多）、白色針状粒子	良	赤褐色		内外赤	外面スス付着
083	第100図1	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	90	14.9	5.2	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色		口縁～体部内外赤	底部内面「十」字形の赤彩
083	第100図2	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	95	12.3	4.7	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		内外赤	
083	第100図3	古墳時代	竪穴住居	土師器　坏	30	12.6	6.1	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		口縁～体部内外赤	
083	第100図4	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	95	(15.5)	8.3	9.6	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
083	第100図5	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	50	13.2	(4.7)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		内外赤	
083	第100図6	古墳時代	竪穴住居	土師器　高坏	30	－	(5.2)	9.0	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	明赤褐色		外赤	
083	第100図7	古墳時代	竪穴住居	土師器　鉢	70	14.8	7.9	6.4	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
083	第100図8	古墳時代	竪穴住居	土師器　壺	95	6.1	6.8	4.6	7.6	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	挿図No.	時期	種別	器形	遺存度%	口径cm	器高cm	底径cm	胴部最大径cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
083	第100図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 壺	95	9.3	11.4	－	12.5	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	暗褐色		口縁内・口縁～胴部外赤	胴部外面にスス付着
083	第100図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	100	11.0	12.3	5.9	12.4	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			胴部外面にスス付着
083	第100図11	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	65	15.3	25.9	(8.4)	22.8	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			外面胴部上半に白っぽい粘土状の付着物あり
084	第101図1	古墳時代	竪穴住居	須恵器 坏	95	10.4	4.9	－	－	白色粒子、黒色粒子	良	灰色			
084	第101図2	古墳時代	竪穴住居	須恵器 坏	60	(10.7)	4.4	－	－	白色粒子、黒色粒子	良	灰色			
084	第101図3	古墳時代	竪穴住居	須恵器 鉢	20	(7.5)	(6.5)	－	－	白色粒子	良	灰色			
084	第101図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	12.4	4.2	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内外黒	底部外面線刻あり
084	第101図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	90	12.0	3.7	－	－	白色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色		内外黒（途か）	口縁部欠損後研磨
084	第101図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	75	13.5	4.6	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			
084	第101図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	80	11.8	3.5	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗褐色		内外黒	
084	第101図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	50	(10.0)	3.3	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	暗褐色		内黒	
084	第101図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	30	(14.0)	4.8	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色		内・口縁部外黒	
084	第101図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	35	(12.6)	(3.4)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい赤褐色			
084	第101図11	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	25	(13.1)	4.3	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
084	第101図12	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	30	14.4	(4.5)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		内外黒	
084	第101図13	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	45	17.5	(4.8)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	褐色		内黒	
084	第101図14	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	30	－	(11.1)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色			
084	第102図15	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	14.8	24.2	7.6	16.8	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗赤褐色			
084	第101図16	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	13.2	13.0	6.4	13.8	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
084	第101図17	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	30	－	(20.6)	6.8	21.1	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	暗赤褐色			外面に山砂状の付着物あり
084	第102図18	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	65	(25.7)	(23.5)	(8.0)	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	赤褐色			
087	第103図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	20	(13.0)	(4.7)	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		坏部内・外赤	
087	第103図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	－	(6.5)	(9.1)	－	赤色粒子（多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内・外赤	
087	第103図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	35	－	(4.3)	(8.0)	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	明赤褐色		坏部内・外赤	
087	第103図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	50	11.4	(9.2)	－	13.1	白色粒子（多）	良	赤褐色		内・口縁～体部外赤	外面体部下半スス付着
087	第103図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	15.3	26.2	6.8	22.9	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
087	第103図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	20	15.8	(10.4)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
087	第103図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 手捏ね	95	5.3	3.4	3.4	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
087	第103図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 手捏ね	90	－	(3.4)	2.8	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	黒褐色			
087	第103図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 手捏ね	75	6.0	3.8	4.5	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
088	第104図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	15.0	4.6	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	橙褐色		内・口縁～体部外赤	
088	第104図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	90	15.6	11.8	10.0	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
088	第104図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	40	－	(6.7)	7.9	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色		坏部内・外赤	
088	第104図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	30	－	(4.2)	8.9	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子	良	橙褐色		外赤	
088	第104図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	80	17.2	14.1	7.8	17.3	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
088	第104図6	古墳時代	竪穴住居	須恵器 甕	破片	－	(6.9)	－	－	白色粒子	良	灰色			
088	第104図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	75	13.4	(25.8)	－	22.3	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
089	第105図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	13.8	6.0	7.4	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
089	第105図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	12.8	4.8	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内・口縁～体部外赤	
089	第105図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	90	14.9	10.6	10.6	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子	良	橙褐色		坏部内・外赤	内外面所々にスス付着
089	第105図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	35	－	(7.3)	10.2	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		坏部内・外赤	外面に山砂状の付着物あり

（縄文時代土器片除く）

遺構No.	掲図No.	時期	種別	器形	遺存度%	口径cm	器高cm	底径cm	胴部最大径cm	胎土	焼成	色調	底部処理	彩色処理	備考
089	第105図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	80	23.7	15.3	7.6	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	赤褐色			外面体部上位 帯状にスス付着
089	第105図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	30	14.2	(9.2)	－	17.7	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色			
089	第105図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	16.2	27.2	8.8	23.2	白色粒子、赤色粒子	良	暗褐色			
089	第106図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	17.6	27.0	6.2	23.3	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	褐色			口縁内・胴部内外面に山砂、口縁内外面にスス付着
089	第106図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	95	18.9	19.7	6.5	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	暗褐色			
089	第106図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	95	15.5	16.2	6.0	17.1	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
090	第123図1	奈良・平安時代	方形区画墓	須恵器 瓶	10	－	(5.6)	－	(10.0)	白色粒子	良	灰色			
091	第107図1	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	95	12.7	5.0	－	－	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子	良	暗褐色		内・口縁～体部外赤	
091	第107図2	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	30	(15.2)	4.9	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	暗褐色		内・口縁外赤	
091	第107図3	古墳時代	竪穴住居	土師器 坏	80	11.3	5.3	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内・口縁～体部外赤	
091	第107図4	古墳時代	竪穴住居	土師器 高坏	90	13.6	10.1	9.7	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	赤褐色		坏部内・外赤	
091	第107図5	古墳時代	竪穴住居	土師器 鉢	95	14.2	10.8	7.2	13.1	白色粒子、赤色粒子	良	赤褐色			内外面スス付着
091	第107図6	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	90	13.5	24.0	6.8	22.8	白色粒子（多）、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	にぶい黄橙色			外面スス付着
091	第107図7	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	16.0	9.3	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色		内・口縁～体部外赤	
091	第107図8	古墳時代	竪穴住居	土師器 甕	95	(15.2)	14.5	5.2	14.7	白色粒子（多）、赤色粒子	良	暗赤褐色	底部木葉痕		
091	第108図9	古墳時代	竪穴住居	土師器 甑	95	20.0	19.7	7.2	18.6	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			内外面スス付着
091	第108図10	古墳時代	竪穴住居	土師器 手捏ね	90	4.0	3.2	3.9	－	白色粒子（多）	良	暗褐色			
096	第127図1	奈良・平安時代	方形区画墓	土師器 坏	25	(12.5)	4.4	(4.8)	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	橙褐色	回転糸切り後手持ちヘラケズリ		
168	第134図168－1	奈良・平安時代	土坑	土師器 坏	20	(13.2)	0.3	(6.0)	－	白色粒子（多）、赤色粒子	良	にぶい黄橙色	回転糸切り		
168	第134図168－2	奈良・平安時代	土坑	土師器 坏	25	11.6	4.7	4.4	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	手持ちヘラケズリ		
169	第134図169－1	奈良・平安時代	土坑	土師器 坏	70	15.1	5.4	(5.6)	－	白色粒子、赤色粒子（大）、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	手持ちヘラケズリ		
遺物集中地点	第115図1	古墳時代	遺物集中地点	土師器 坏	95	13.4	5.2	－	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		内・口縁～体部外赤	
遺物集中地点	第115図2	古墳時代	遺物集中地点	土師器 高坏	35	15.2	(4.3)	－	－	白色粒子、赤色粒子（大）	良	赤褐色		内外赤か	
遺物集中地点	第115図3	古墳時代	遺物集中地点	土師器 高坏	65	15.6	9.2	10.8	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子	良	橙褐色		坏部内・外赤	
遺物集中地点	第115図4	古墳時代	遺物集中地点	土師器 高坏	40	－	(5.2)	10.4	－	赤色粒子（大・多）、白色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色		外赤	
遺物集中地点	第115図5	古墳時代	遺物集中地点	土師器 小型甕	80	(10.7)	10.9	5.8	13.2	白色粒子、赤色粒子（大）	良	橙褐色			
遺物集中地点	第115図6	古墳時代	遺物集中地点	土師器 椀	60	(8.5)	6.2	4.0	－	白色粒子（多）	良	赤褐色			
遺物集中地点	第115図7	古墳時代	遺物集中地点	土師器 甕	40	(14.2)	20.6	(7.0)	(22.1)	白色粒子（多）、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
9F－61	第52図641	縄文時代	遺構外	縄文 深鉢	75	22.2	(25.6)	－	－	白色粒子、赤色粒子	良	褐色			加曽利E 単節LR 外面スス付着
8E－50	第116図1	古墳時代	遺構外	土師器 高坏	95	15.8	11.8	9.6	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	赤褐色			
10H－79	第116図2	古墳時代	遺構外	土師器 坏	20	(14.2)	(4.4)	－	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子	良	にぶい黄橙色		内外赤	
表採	第116図3	古墳時代	遺構外	土師器 高坏	35	－	(4.9)	(9.0)	－	白色粒子、赤色粒子、白色針状粒子（少）	良	橙褐色	回転糸切り後手持ちヘラケズリ	外赤	
1D－64	第145図1	奈良・平安時代	遺構外	土師器 坏	90	13.6	4.2	6.8	－	白色粒子（多）、赤色粒子（大）	良	橙褐色	回転糸切り後手持ちヘラケズリ		
3G－53	第145図2	奈良・平安時代	遺構外	灰釉 椀	5	－	(1.3)	(6.6)	－	黒色粒子（少）	良	灰白色			

第Ⅲ部　補　遺

第１章　押沼第２・大六天遺跡

第１節　押沼第２・大六天遺跡

１　押沼第２・大六天遺跡について

押沼第２遺跡と押沼大六天遺跡は，千原台地区区画整理事業のうちで『千原台ニュータウンⅨ－市原市押沼第１・第２遺跡（上層）－』，『千原台ニュータウンⅫ－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』と『千原台ニュータウンⅩⅤ－市原市押沼大六天遺跡（下層）－』として既に報告済みである。押沼大六天遺跡は，広大な台地平坦部をなす押沼遺跡群の西側の一部で，旧石器時代の立川ローム層中から４枚の文化層とそれに伴う石刃石器群を含む大規模な集中地点の検出，縄文時代早期・前期の土器の良好な包含層と炉穴・陥穴群，奈良・平安時代の製鉄関連の精錬炉・鍛冶遺構の検出などがあげられる。

報告書の刊行に伴い，出土遺物をはじめとする諸資料について報告後の移管替えに備えて収納整理を実施していく中で，報告書刊行の際に何らかの手違いで掲載漏れになった遺物が見受けられたのでそれらについて，資料を提示して万全を尽くしたいとの願いから，ここに一部資料を補遺として，千原台の事業地内では最も近接するナキノ台遺跡の報告の場を借りて追加報告をする。

２　出土遺物補遺（第147図，図版53）

１は遺構に伴わない25S－56グリッド出土の土師器の坏で，復元口径11.4cm，器高3.4cmを測る。外面はヘラケズリがなされ，内面はナデ後ミガキが施される。底部の一部に墨痕が認められるが文字としては判読できなかった。２は２号住居（1B-35）出土の布目平瓦の破片である。全長8.0cmを測る。３は１号土坑出土の須恵器の長頸壺で遺存状態は良好で約90％ほどである。器高22.9cm，底径8.6cmを測り，底部には焼成後に外面から穿孔がされている。口縁内面と肩部に自然釉が付着する。

４・５は鉄製品で，４は６号住居出土の鎌の先端を欠くものである。遺存長20.1cm，刃部が明瞭に認められ基部が着柄用に折り曲げられ，先端を僅かに欠損する。基部の厚みは2.9mmを測る。５は11号住居出土の鉄製棒状品で遺存長31.0cmを測る。断面は長方形で，刃部はないが先端に向かい緩やかに細くなっている。最大1.34cm×0.7cmを測る。一方が茎状に細く長方形断面に仕上げられ，着柄されたものとみられる。何らかの木質の容器に収納されていたとみられ，長軸方向に木質の木目が残り，その内側に斜め方向に巻かれた繊維が確認できる。

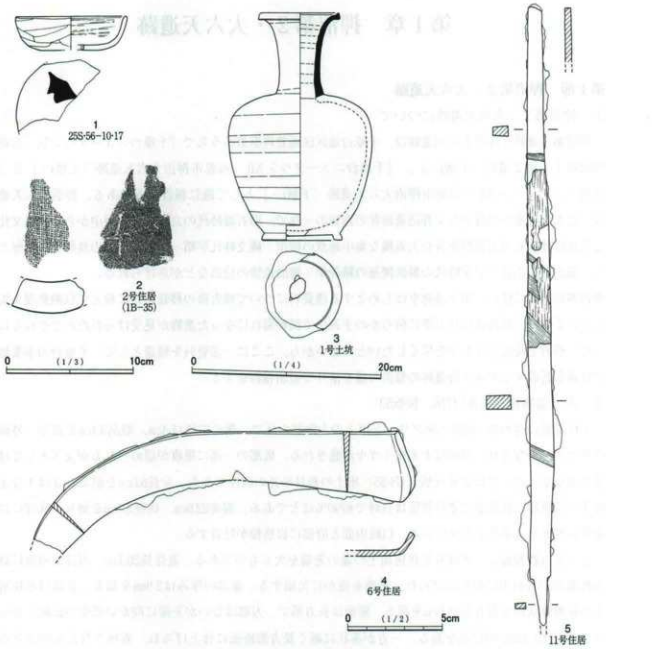
１は押沼第２遺跡，その他は押沼大六天遺跡の遺物である。

参考文献）

黒沢　崇　2003『千原台ニュータウンⅨ　－市原市押沼第１・第２遺跡（上層）－』(財)千葉県文化財センター

黒沢　崇ほか　2004『千原台ニュータウンⅫ　－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』(財)千葉県文化財センター

田島　新　2006『千原台ニュータウンⅩⅤ－市原市押沼大六天遺跡（下層）－』(財)千葉県教育振興財団



第147図　押沼第２・大六天遺跡出土遺物

写真図版

野馬堀遺跡
ナキノ台遺跡
野馬堀遺（ナキノ台）遺跡周辺航空写真
（昭和45年撮影）

図版２　野馬堀遺跡

遺跡風景

１号竪穴住居（005）遺物出土

１号竪穴住居（005）土層断面

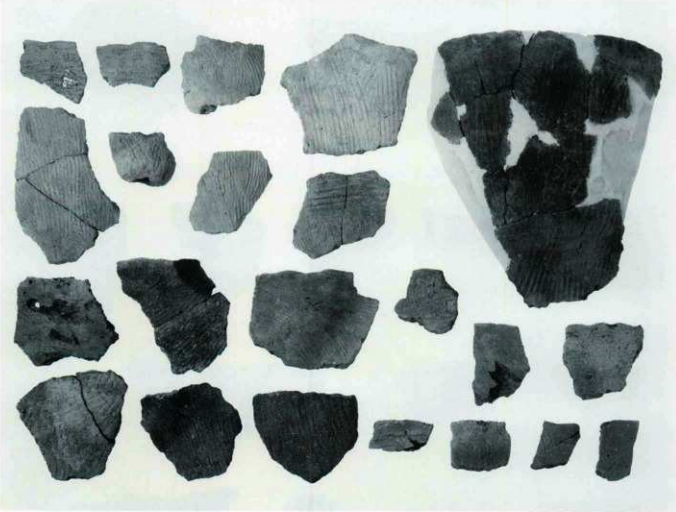
001全景

002（左）003（右）全景

010（右）011B（左）全景

遺跡風景・１号竪穴住居・001～003・010・011B

遺構等出土土器



縄文土器（1）

縄文土器（2）

縄文土器（3）

縄文土器（2）・縄文土器（3）

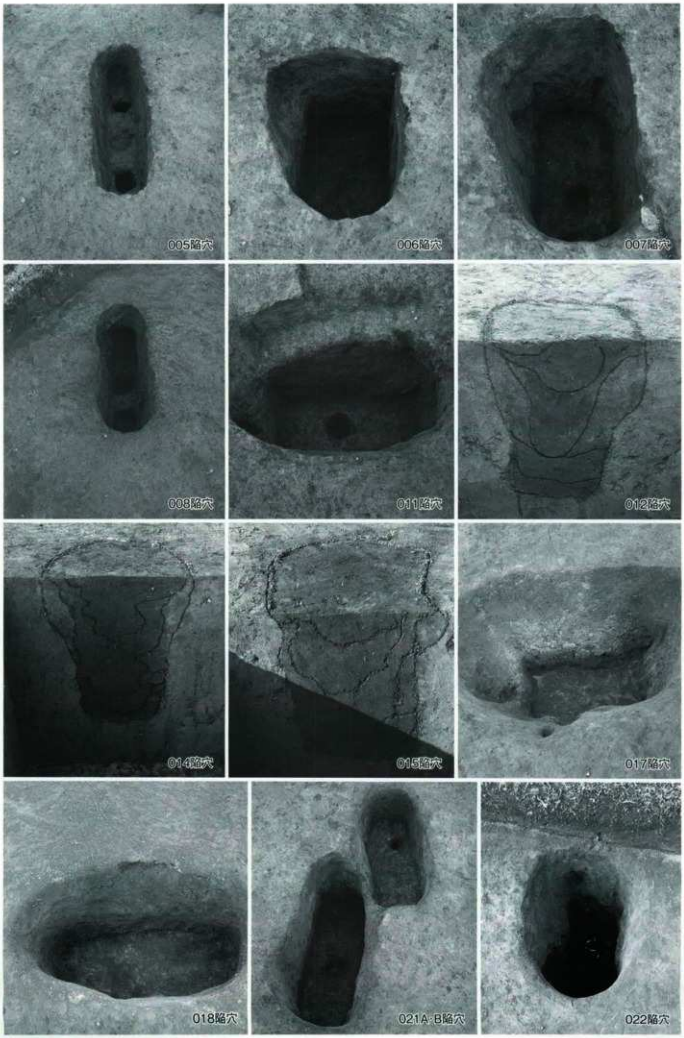
遠景（航空写真）

図版6　ナキノ台遺跡

第1次（台地北側）・第2次調査区（台地南側）

085竪穴住居・炉穴（1）

炉穴（2）


005陥穴
006陥穴
007陥穴
008陥穴
011陥穴
012陥穴
014陥穴
015陥穴
017陥穴
018陥穴
021A・B陥穴
022陥穴

陥穴（1）

023陥穴

024陥穴

025陥穴

028陥穴

029陥穴

035陥穴

043陥穴

044陥穴

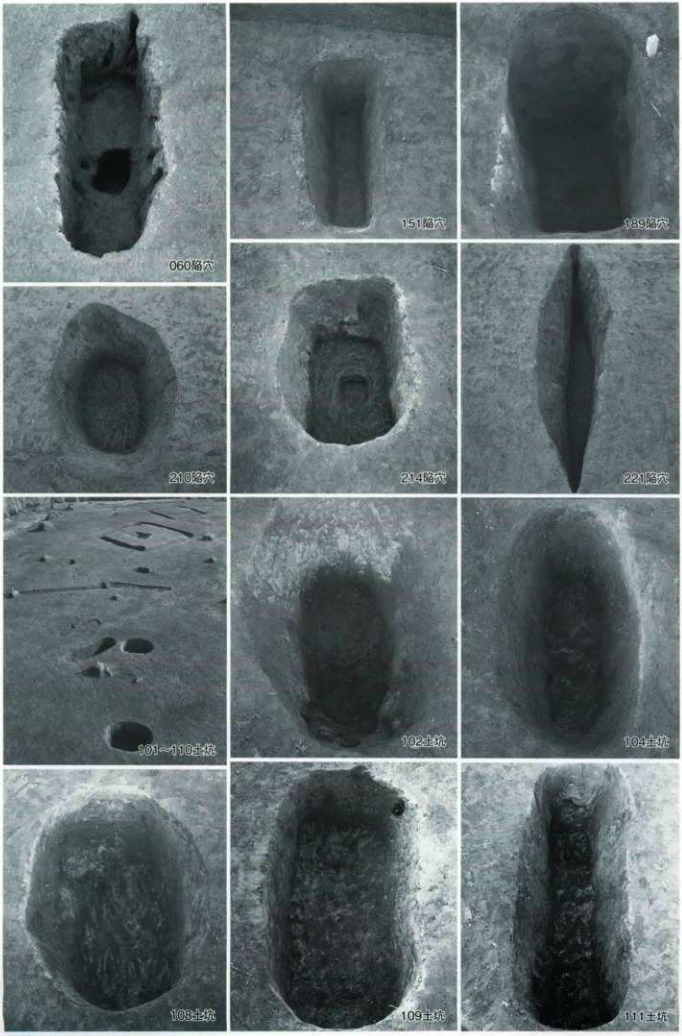
045陥穴

052陥穴

056陥穴

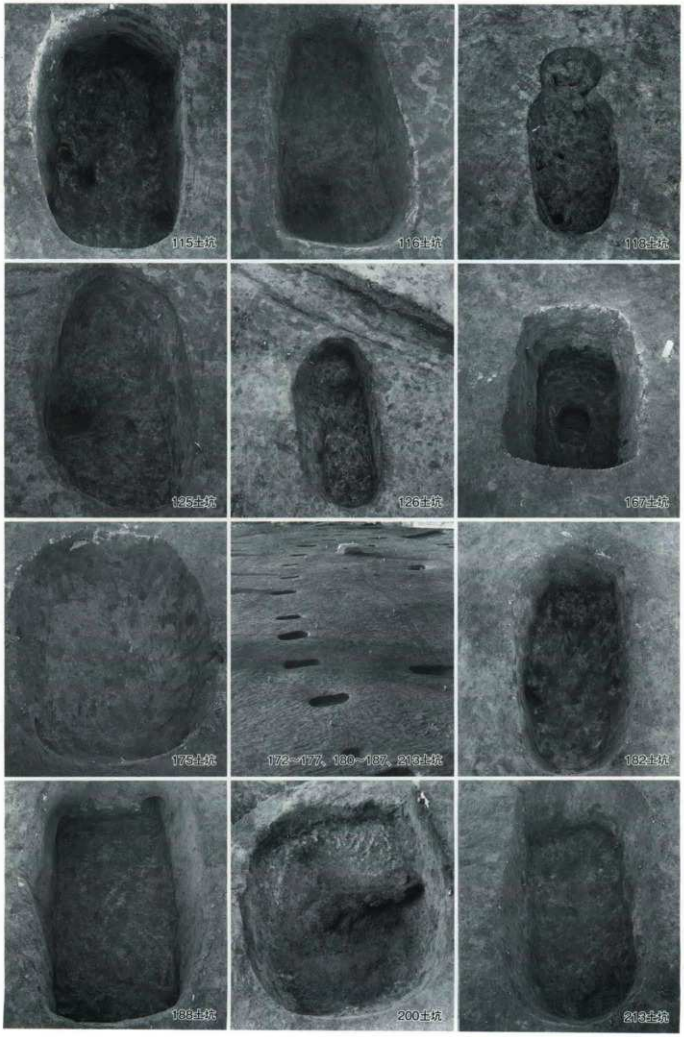
057陥穴

陥穴（2）


060陥穴
151陥穴
189陥穴
210陥穴
214陥穴
221陥穴
101～110土坑
102土坑
104土坑
108土坑
109土坑
111土坑

陥穴（3）・土坑（1）

図版12


115土坑
116土坑
118土坑
125土坑
126土坑
157土坑
175土坑
172～177、180～187、213土坑
182土坑
188土坑
200土坑
213土坑

土坑（2）

縄文時代包含層遺物出土状況

068竪穴住居

068竪穴住居遺物出土

068竪穴住居遺物出土

068竪穴住居カマド

069竪穴住居

069竪穴住居遺物出土

070竪穴住居

070竪穴住居遺物出土

古墳時代竪穴住居（1）

070竪穴住居カマド

071竪穴住居

071竪穴住居遺物出土

071竪穴住居カマド

072A竪穴住居

072A竪穴住居遺物出土

072A竪穴住居遺物出土

072A竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（2）

073A竪穴住居

073A竪穴住居遺物出土

073A竪穴住居カマド

074竪穴住居

074竪穴住居遺物出土

075竪穴住居

075竪穴住居遺物出土

075竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（3）

076竪穴住居

076竪穴住居遺物出土

076竪穴住居カマド

077竪穴住居

077竪穴住居遺物出土

077竪穴住居遺物出土

077竪穴住居遺物出土

077竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（4）

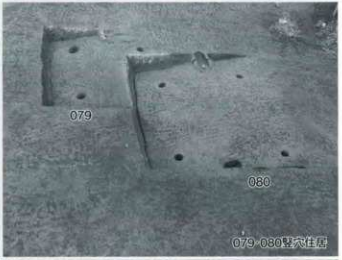
078竪穴住居

078竪穴住居遺物出土

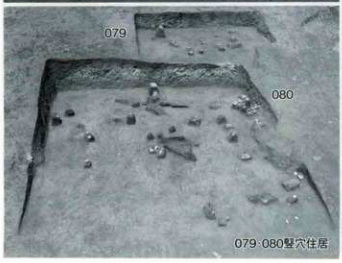
078竪穴住居遺物出土

078竪穴住居遺物出土

078竪穴住居カマド



079・080竪穴住居



079・080竪穴住居

079竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（5）

080竪穴住居カマド

080竪穴住居遺物出土

081竪穴住居

081竪穴住居遺物出土

081竪穴住居カマド

082竪穴住居

082竪穴住居遺物出土

082竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（6）

082・083竪穴住居

083竪穴住居カマド

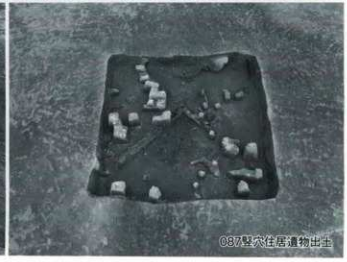
083竪穴住居遺物出土

084竪穴住居

084竪穴住居遺物出土

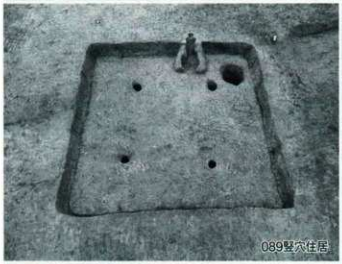
084竪穴住居遺物出土

084竪穴住居カマド


087竪穴住居遺物出土

088竪穴住居

088竪穴住居遺物出土


089竪穴住居

089竪穴住居遺物出土

089竪穴住居カマド

091竪穴住居

091竪穴住居遺物出土

091竪穴住居カマド

古墳時代竪穴住居（8）

063方墳

063方墳

063方墳

063方墳

063方墳埋葬施設

063方墳埋葬施設

063方墳埋葬施設

063方墳埋葬施設

063方墳

063方墳

063方墳周溝土層断面

063方墳周溝土層断面

063方墳周溝土層断面

064方墳

064方墳周溝土層断面

067方墳調査前

097方墳調査前

098
097
097方墳-098溝

097
097方墳-098溝

097方墳墳丘西面

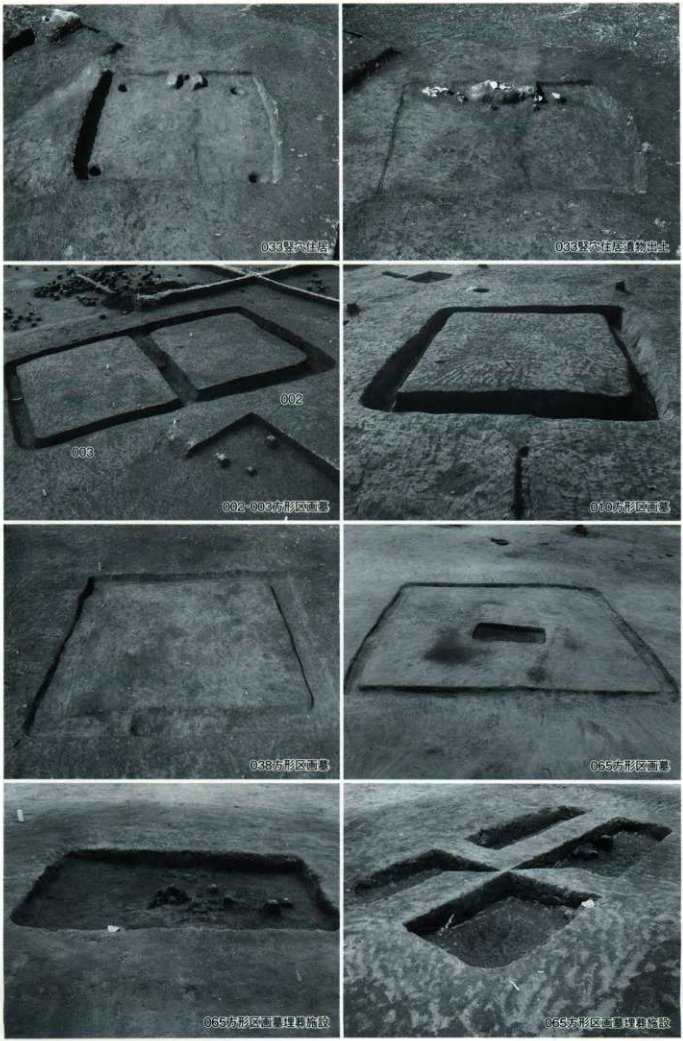
097方墳墳丘西面

097方墳溝-北西面

066溝状遺構

066溝状遺構

方墳（3）・溝状遺構



奈良・平安時代竪穴住居・方形区画墓（1）

090方形区画墓

090方形区画墓埋葬施設

090方形区画墓埋葬施設

093方形区画墓

094方形区画墓

096方形区画墓

096方形区画墓埋葬施設

096方形区画墓埋葬施設

方形区画墓（2）

042地下式土坑

169土坑

草刈44号墳（塚）調査前

草刈44号墳（塚）

037溝状遺構（2Eグリッド）

草刈44号墳（塚）古墳出土

地下式土坑・塚・溝状遺構

027-1

表

046·047-1

027-2

裏

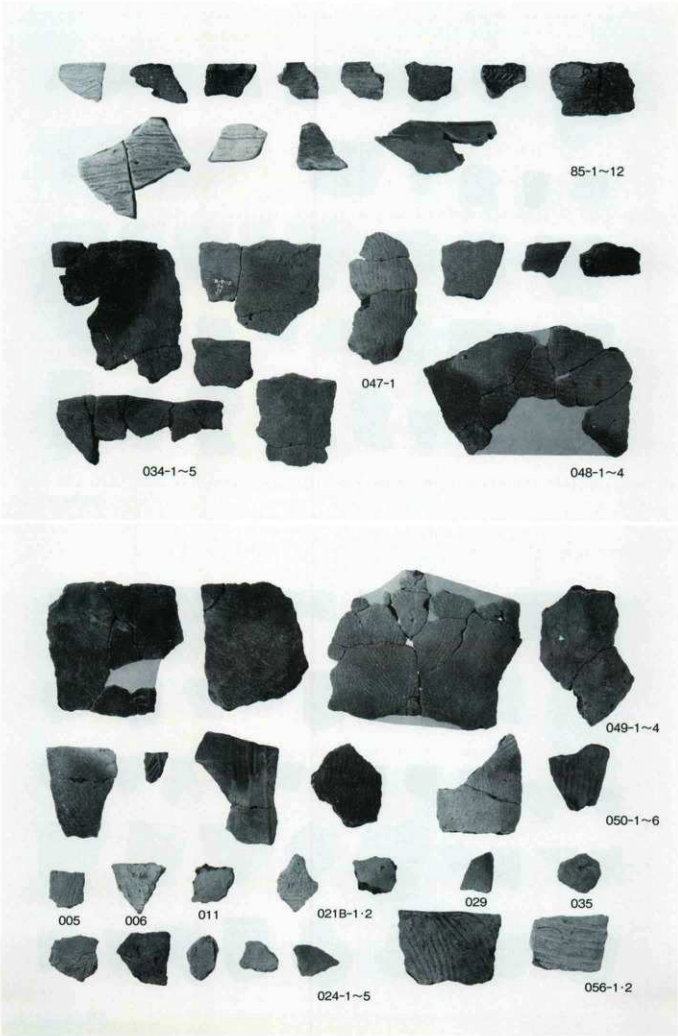
036-1

第52図-640（9F-61）

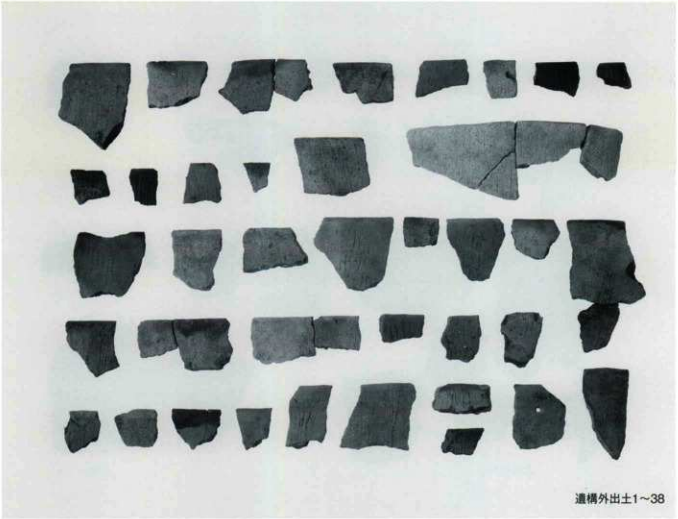
051-1

第53図-666（7Cグリッド）

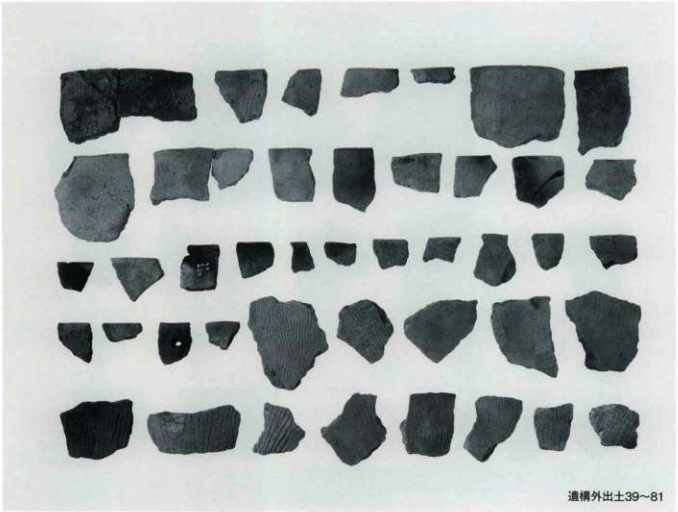
縄文土器（1）


85-1～12
047-1
034-1～5
048-1～4
049-1～4
050-1～6
005
006
011
021B-1·2
029
035
024-1～5
056-1·2

縄文土器（2）

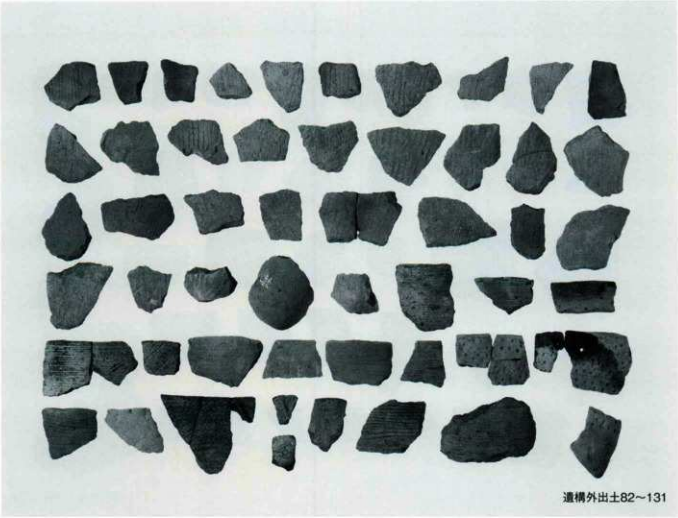


遺構外出土1～38

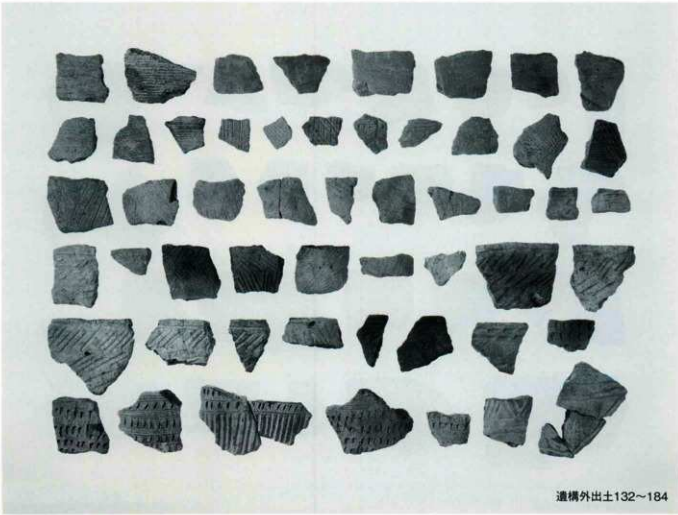


遺構外出土39～81

縄文土器（3）



遺構外出土82～131



遺構外出土132～184

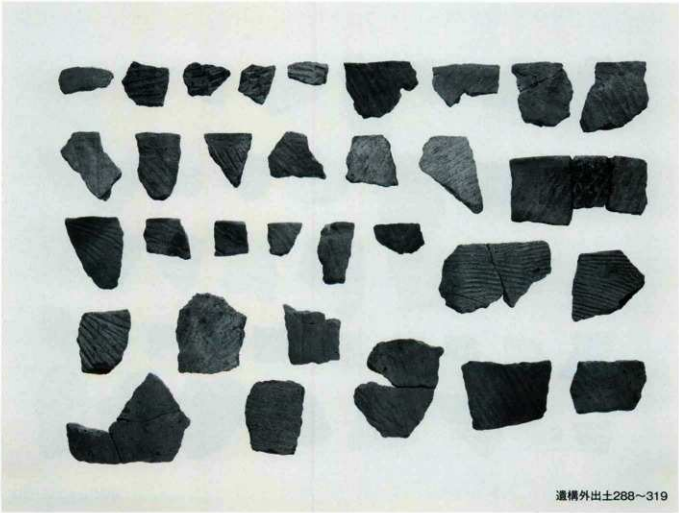
縄文土器（4）

遺構外出土185～223

遺構外出土224～250

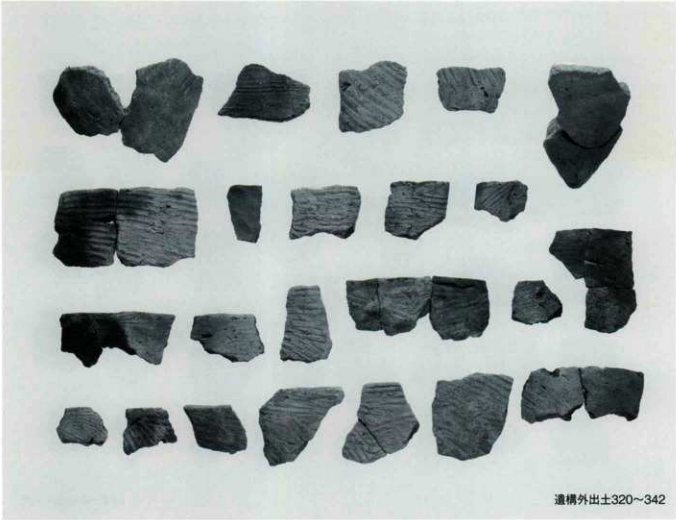
縄文土器（5）

遺構外出土251～287

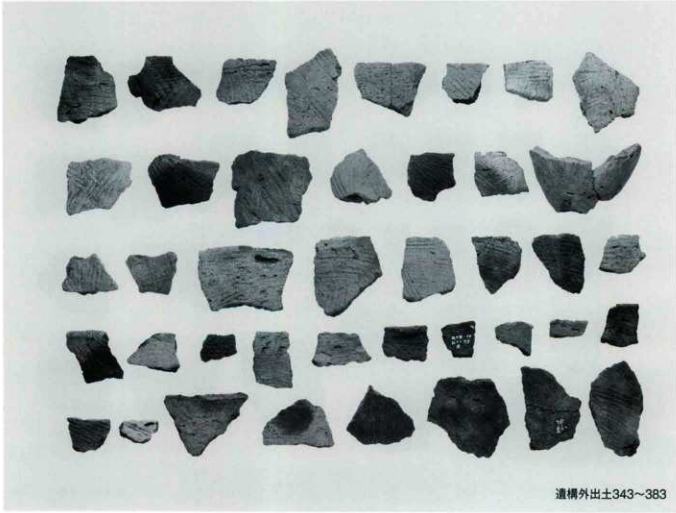


遺構外出土288～319

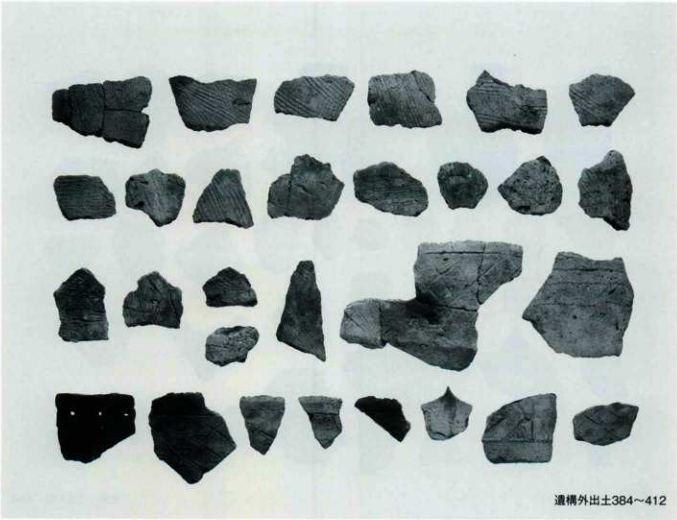
縄文土器（6）



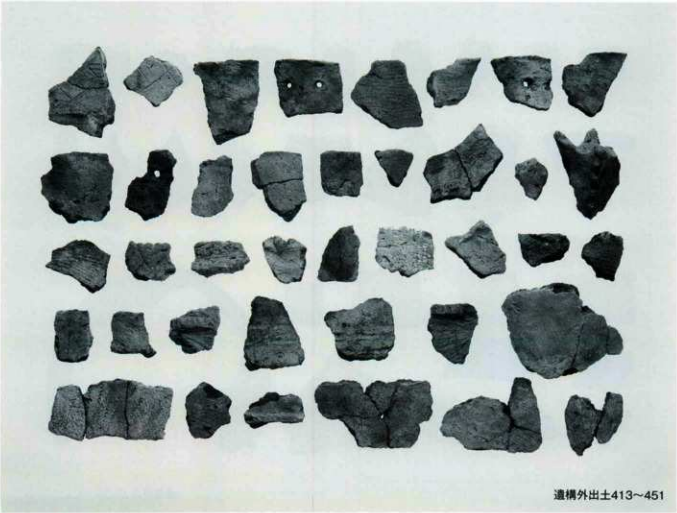
遺構外出土320～342



遺構外出土343～383

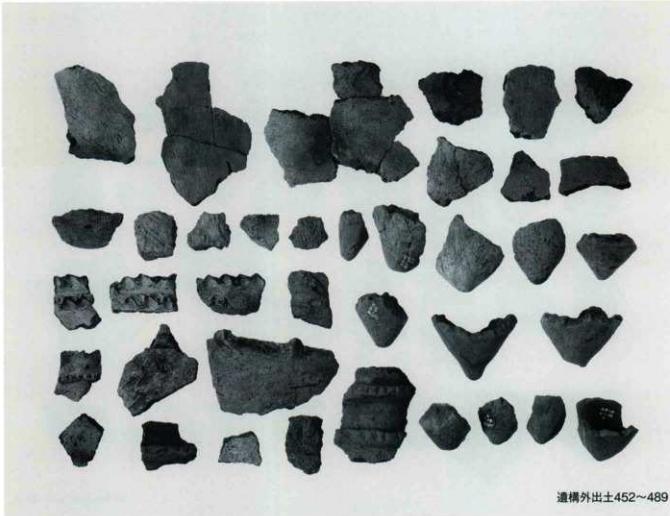


遺構外出土384～412



遺構外出土413～451

縄文土器（8）

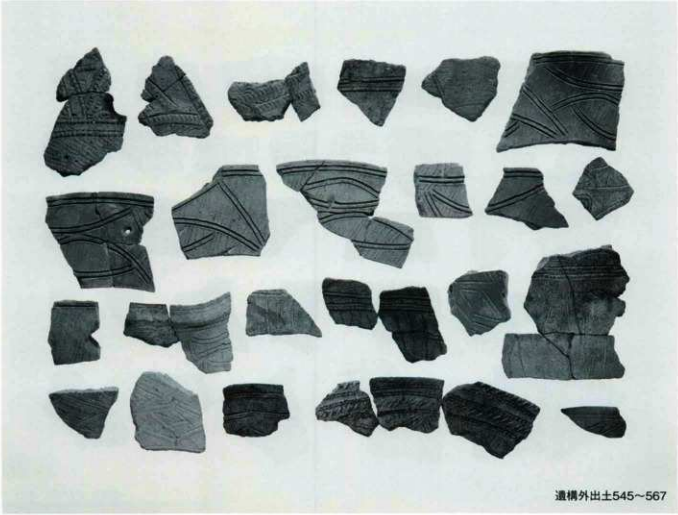


遺構外出土452～489

遺構外出土490～505

遺構外出土506～513·516·517

遺構外出土514·515·518～544



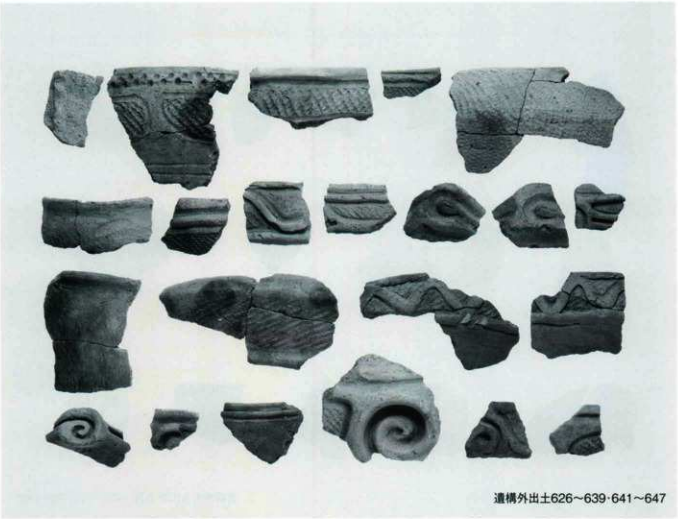
遺構外出土545～567

縄文土器（10）

遺構外出土568～595

遺構外出土596～625

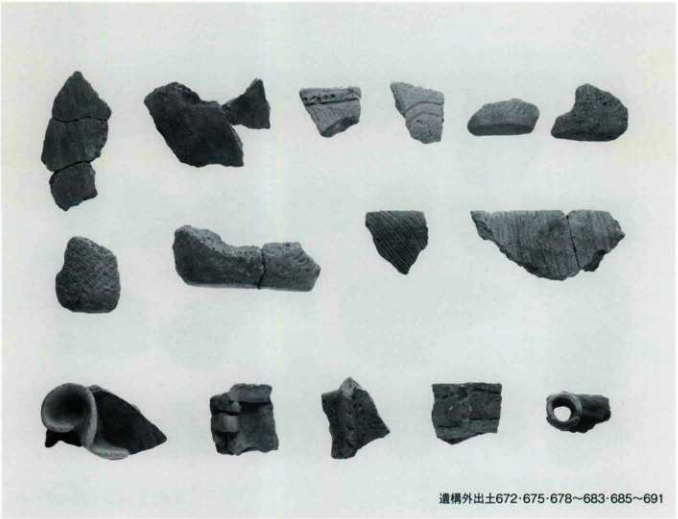
縄文土器（11）



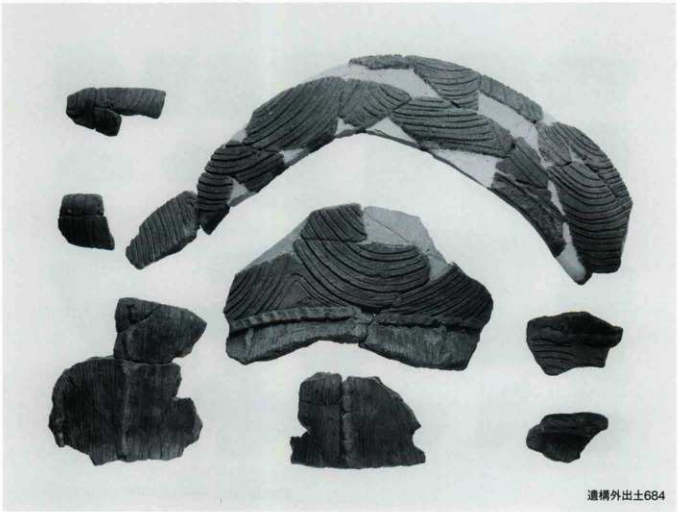
遺構外出土626～639·641～647

遺構外出土648～665·667～671·673·674·676·677

縄文土器（12）

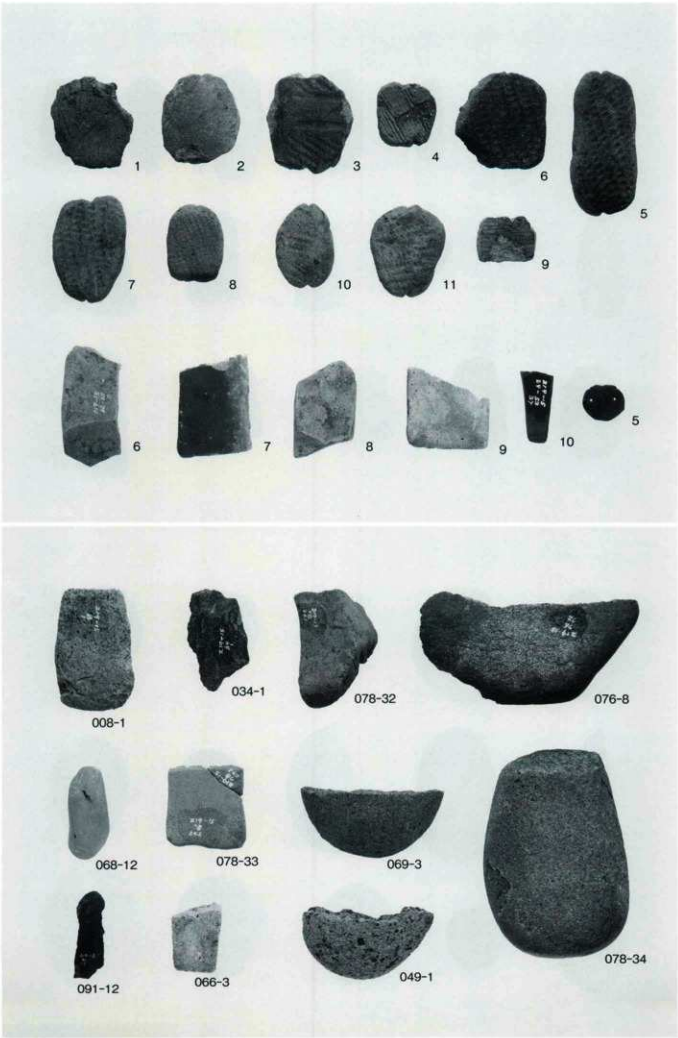


遺構外出土672·675·678~683·685~691

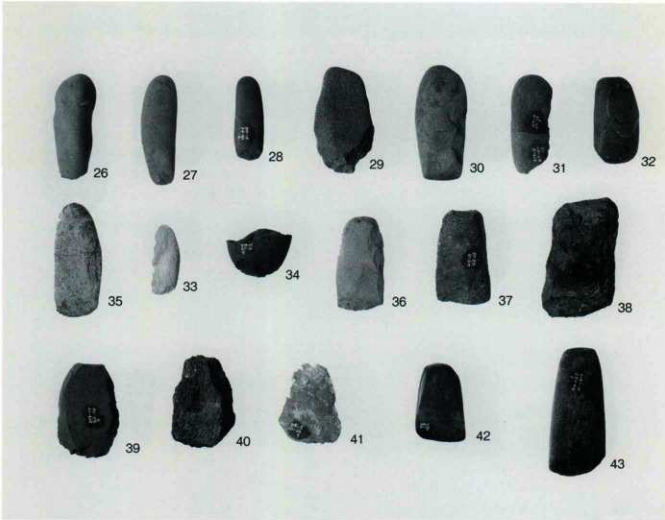


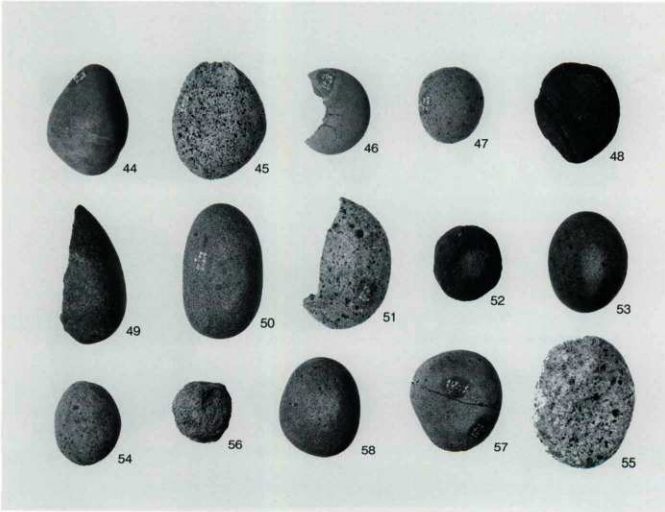
遺構外出土684

縄文土器（13）

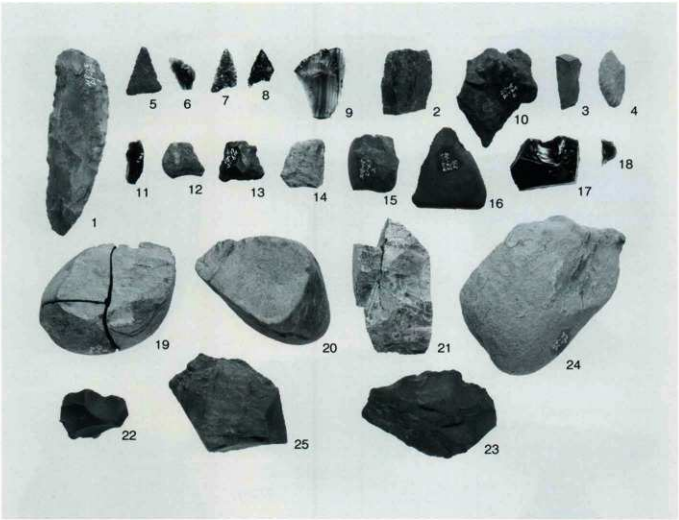

1
2
3
4
6
5
7
8
10
11
9
6
7
8
9
10
5
008-1
034-1
078-32
076-8
068-12
078-33
069-3
078-34
091-12
066-3
049-1

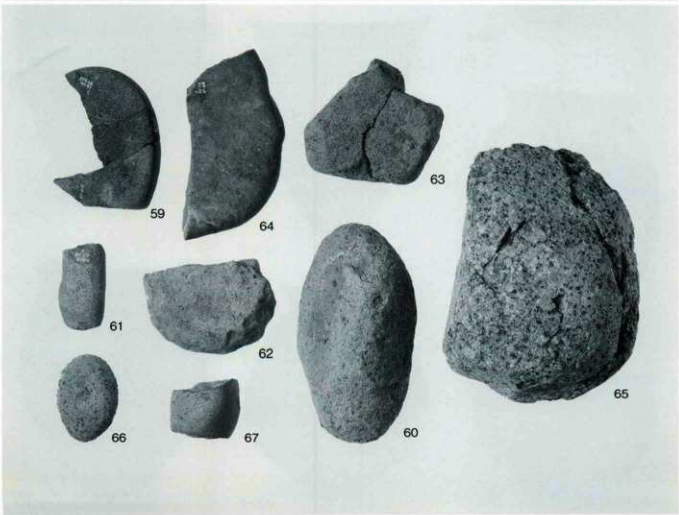
土製品（1）・石製品，石器（1）


26
27
28
29
30
31
32
35
33
34
36
37
38
39
40
41
42
43


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
56
58
57
55

石器（2）


1
5
6
7
8
9
2
10
3
4
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
24
22
25
23


59
64
63
61
62
65
66
67
60

石器（3）

068-1

068-2

068-3

068-10

069-1

070-1

070-3

070-4

070-6

070-7

071-1

071-5

071-6

071-7

古墳時代土器（1）

071-8

072A-1

072A-4

072A-7

072A-8

073A-1

073A-3

073A-6

074-1

074-2

074-3

074-6

074-7

074-8

074-11

074-13

076-1

古墳時代土器（2）

076-2

076-5

076-6

077-1

077-3

077-4

077-5

078-2

078-5

078-8

078-13

078-15

078-16

078-17

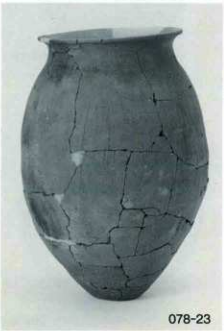
078-18

古墳時代土器（3）

078-19

078-21

078-22


078-23

078-30

080-1

080-7

080-9

080-10

080-11

081-2

081-4

081-8

081-9

古墳時代土器（4）

081-10

082-2

083-1

083-2

083-4

083-7

083-8

083-9

083-10

084-1

084-4

084-5

084-6

084-7

084-15

084-16

087-5

古墳時代土器（5）

087-7

088-1

088-2

088-5

089-1

089-2

089-3

089-5

089-7

089-8

089-9

089-10

091-1

091-3

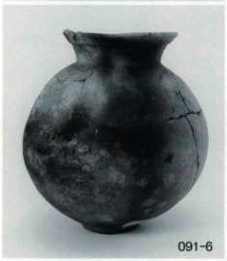
091-4

古墳時代土器（6）

091-5

033-1

遺物集中地点-5


091-6

033-2

遺物集中地点-6

091-7

169-1

遺物集中地点-7

091-9

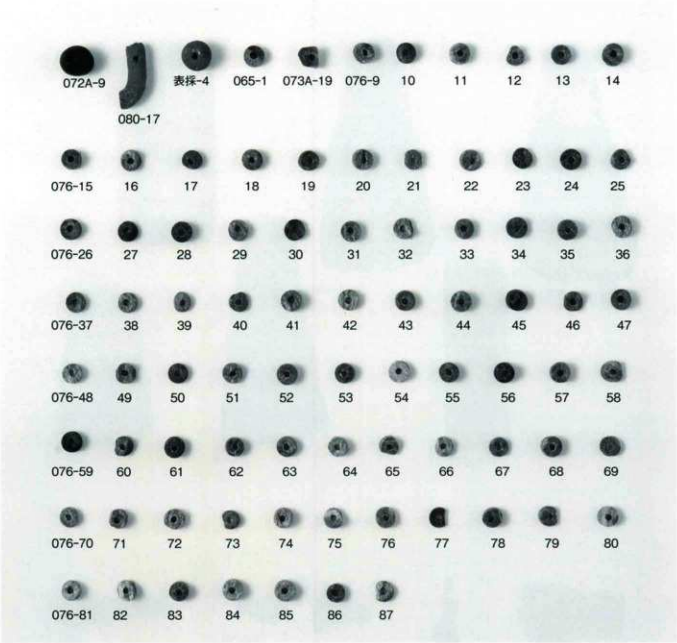
遺物集中地点-1

ID-64

遺物集中地点-3

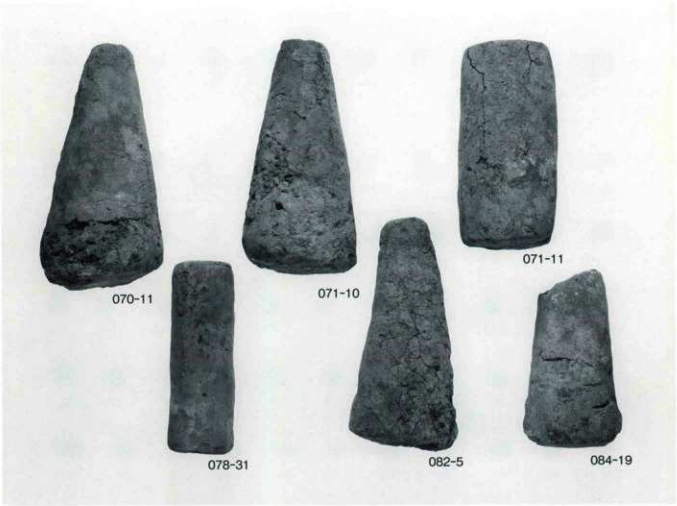
8E-50

古墳時代土器（7）

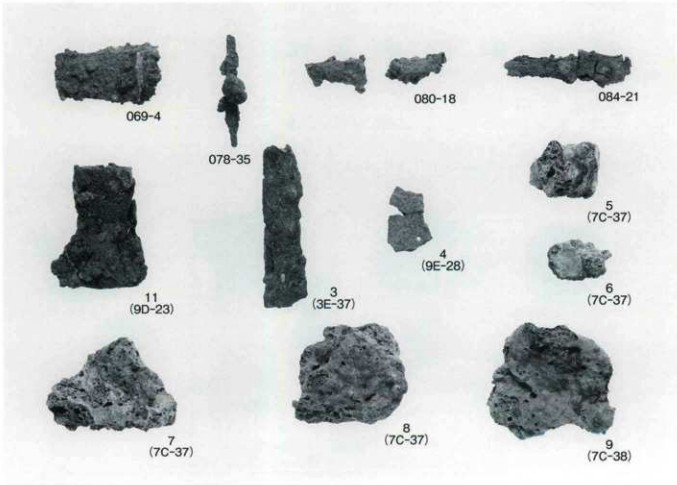


土製品・石製品（玉類）

手捏ね土器類


070-11
071-10
071-11
078-31
082-5
084-19

土製支脚


069-4
078-35
080-18
084-21
5
(7C-37)
4
(9E-28)
11
(9D-23)
3
(3E-37)
6
(7C-37)
7
(7C-37)
8
(7C-37)
9
(7C-38)

鉄製品ほか

3（1号土坑）

1（25S・56-10・17）

4（6号住居）

5
（11号住居）

1は押沼第2遺跡，その他は押沼大六天遺跡の遺物

押沼遺跡群出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちはらだいにゅーたうん
書名	千原台ニュータウン
副書名	市原市野馬堀遺跡（2）・ナキノ台遺跡（上層）
巻次	28
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第658集
編著者名	小林清隆・田島 新・加藤正信
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL043－424－4848
発行年月日	西暦2011年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野馬堀遺跡(2)	市原市ちはら台 東1丁目ほか	12219	001	35度 32分 20秒	140度 11分 10秒	19850301 ～ 19850331	2,000㎡	千原台地区土地区画整理事業に伴う事前調査
ナキノ台遺跡 （上層）	市原市ちはら台 南4丁目13番地ほか	12219	015	35度 31分 33秒	140度 11分 42秒	19820701 ～ 19840330	41,000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野馬堀遺跡(2)	包蔵地	縄文時代	土坑　5基 炉穴　3基	縄文土器（早期～中期）	
		奈良・平安時代	竪穴住居　1軒	土師器（坏・甕） 須恵器（甑）	
ナキノ台遺跡 （上層）	集落跡 古墳群 包蔵地	縄文時代	竪穴住居　1軒 炉穴　12基 陥穴　49基 土坑　1基	縄文土器（早期～中期） 石器（削器・石鏃・石刃・剥片・石斧・礫石器），土製品（土錘）	早期から中期にかけての包含層と早期の炉穴群，前期の竪穴住居の検出
		古墳時代	竪穴住居　23軒 方墳　3基 溝状遺構　1条 遺物集中地点　1地点	土師器（甕・坏・鉢・甑・高坏），須恵器（坏）石製品　（臼玉・有孔円板），鉄製品（鉄斧・鎌）	古墳時代中期から後期に掛けての小規模な集落跡，3基の後期方墳群
		奈良・平安時代	竪穴住居　1軒 方形区画墓　9基 地下式土坑　2基 土坑　2基	土師器（坏・甕），須恵器　（坏・甑）石製品（臼玉・砥石），鉄製品（鉄鏃・小刀・スラグ）	平安時代竪穴住居と地下式横穴埋葬施設を持つ2基を含む計9基の方形区画墓群の検出
		中・近世 時期不明	塚　1基 溝状遺構　10条 土坑　105基	銭貨（政和通宝・寛永通宝）	

要約

野馬堀遺跡は，村田川河岸より台地内部へ入った遺跡で縄文時代の土坑５基，炉穴３基と奈良・平安時代の竪穴住居１軒が調査され，早期から中期にかけての縄文土器が検出された。

ナキノ台遺跡は台地上で大きく南北地区に分かれ，北側地区は縄文時代早期から中期を主体とする土器の包含層と早期の炉穴・陥穴群が検出された。土器の包含層は，早期は北側地区を中心とし，前期・中期は南側を中心とするが，時期毎にブロック状に集中する傾向があり，活動の中心となる区域が時期毎に異なる状況が観察された。古墳時代の集落は，南側地区に集中し台地平坦部の小規模な集落として中期から後期にかけて営まれたとみられる。集落が縮小された頃から方墳が営まれ，奈良時代以降は方形区画墓が，台地上に散漫な状態で計９基構築され，地下式横穴埋葬施設をもつものが２基あった。

千葉県教育振興財団調査報告第658集

千原台ニュータウンXXVIII

－市原市野馬堀遺跡（2）・ナキノ台遺跡（上層）－

平成23年3月25日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1－3

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　弘文社
市川市市川南2丁目7番2号